

- 1. 灰色粘質土
- 2. 黑色土(灰層)
- 3. 黄色粘質土
- 4. 黑灰色混礫土(灰層)
- 5. 黄色混礫土

插图101 古城5号寨跡 灰原土層堆積狀況圖

この場所は細長い形に広がるもので、縦2.0m、幅1.1mの範囲で広がっていた。この部分が窯本体の痕跡と考えられる（挿図100）。幅は窯の幅の規模に近いと考えられるが、長軸方向は、やや短い。縦方向にさらに長く存在したと考えられるが、上方は痕跡すら止めていなかった。おそらく、池の縁近くは大きく削平され、地形が改変されて完全に破壊されたものと思われる。

（3）灰原（挿図100）灰原は窯体の焚口と考えられる部分を起点にして南下の谷に広がり、下端は池中の方向に伸びている。埋土は黒色土が堆積し、炭・土器を大量に含み、窯体片や焼土も見られた。このことから窯体の焚口に近い灰原と考えられた。灰原の範囲は長さ7.0m、最大幅7.0m前後である。但し、前述のように末端の一部については未調査である。厚さは起点部分が最も厚く0.4m前後であった。

灰原の状態は、池の水量の増減によって何度も洗われており、起点は残りが良いが、下端になると流失が著しい。特に灰層の南前面には北東方向から池を挟って流れる小谷があり、この影響が大きい。断面観察から西端で粘土層が間に挟まれる部分があったため、大きく2層に分層できたが、上の層は残りが悪い。そして、上層には中に粘土質の土や砂粒を含むため2次堆積の可能性がある。従って、窯からの投棄の単位なども明確にはならなかった。しかし、遺物には大きな時期差が見られないため窯跡の操業期間は長くないと思われる。

灰原から下方には流失した遺物がさらに広い範囲で出土した。特に灰原を挟る前述の谷によって古城池の中程まで遺物が採取できた。出土遺物はコンテナ数にして62箱を数えた。しかし、池中に流失した遺物量が不明のため全体の量を正確に知ることは出来なかった。

### 3. 遺物（図版57～62、挿図102～108）

（1）概要 古城5号窯跡出土の遺物は量的にやや少なく、全体の様相を述べるには若干の疑問も残る。このことを前提にして遺物について報告する。出土した器種には、杯・碗・耳皿・壺・甕・羽釜があり、杯蓋・皿（耳皿を除く）・鉢などは出土していない。実測に際しては口縁部の1/4以上残存する個体を選んだ。実測個体数は108個体である。このうち、歪みの大きいものを省いたため、掲載した個体は99個体となった。ただし、実測点数のうち重焼きは1個体として数えた。

図化した遺物の中では、碗Aが最も多く26個体を数え、続いて杯Aの19個体、碗Bの18個体が多い。他に、壺、甕などが豊富に出土した。

製品はすべてヘラによって切り離すもので、糸切りは認められない。色調は暗灰色や暗褐色のものが多く、自然釉がかかるものも大型品に多く認められた。また、生焼けの製品は少なく、胎土は小型品がやや緻密であるが、大型品は粗い感じである。杯や碗類などには離れ砂を内外面に観察できるものが少なくない。色調・焼成の具合などは全体に古城1号窯跡に良く似た感じである。

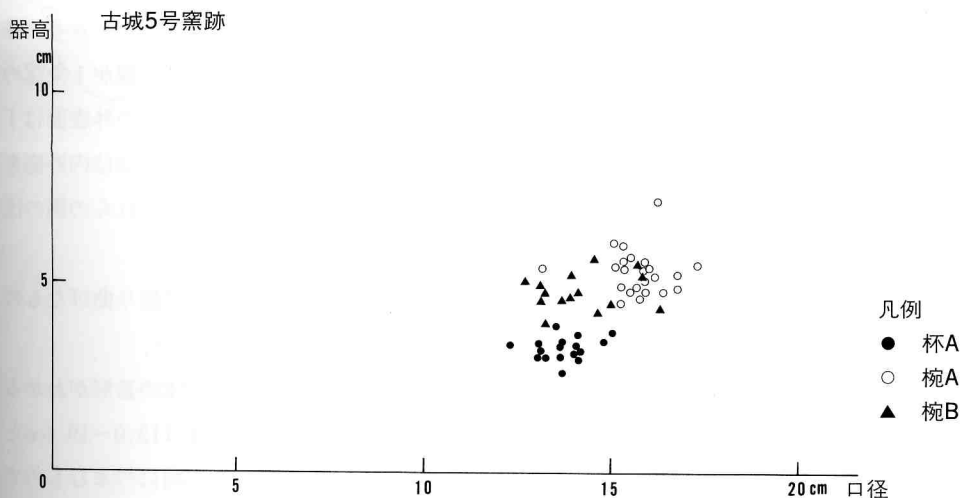
## (2) 遺物

杯A (挿図103 1~18・21) 19個体を実測した。体部が直線的に立ち上がり口縁端部が外反するものや、すんなり終わるものなどさまざまである。口縁端部が外反するものには、口縁の端部から屈曲して外反するものと、体部の中程から彎曲するものがある。法量は口径13.0~14.0cm、器高3.0cm前後に集中するようである。

すべて同一技法で製作しており、法量も集中する範囲内に纏まっているので、1つのタイプと考えられる。底部はヘラによる切り離しを行うが、切り離した後、底部周辺をナデによって仕上げをするものも見られた。9は底部際にヘラのあたりが見られる。ヘラ切り時に誤ってヘラ先があたったものと思われ、沈線ではない。また、製作過程で製品をすのこ状の板の上に置いた痕跡(板状圧痕)が残るものも多く観察できた。色調は灰色・暗灰色・暗褐色を呈し、生焼けの製品は見られない。ヘラ記号については観察できた個体はなかった。21は重焼きで、4枚の杯Aが重なったものである。この他にもいくつか重焼きのまま粘着した遺物が見られたが、数枚以上が重なったものは見られなかった。

杯B (挿図103 19) 1個体のみが出土した。口径15.8cm、底径8.4cm、器高5.2cmを測る。口径に比べ器高のやや低いものである。体部はやや開きぎみで斜め上方に立ち上がる。高台は低く台形を呈するもので、底部の端に付けられている。体部に暗文状のヘラ書が認められる。

椀A (挿図103・113 22・24~48) 26個体を実測した。口径15.0~16.0cm、器高5.0~5.5cm前後のものが多いが、口径の最も大きいものは16.6cmである。体部の開きが大きいが、口縁端部で外反するものと、そうでないものとの差があることを考慮に入れると、技法的には同一であるため、1つのタイプの中に収まると思われる。高台は「ハ」の字に開くものが多く、少数



挿図102 古城5号窯跡須恵器法量グラフ

ではあるが直立するものも見られる。但し、高い高台は見られない。高台の断面形状は台形のものや「く」の字に踏ん張るものなどがある。外面にはロクロの痕跡が残るものが多い。高台周辺や外底面は丁寧にナデてヘラ切りの痕跡を消しているものもあるが、概して高台の内外面を1周するだけのものが多い。椀Aの外反するもののうち、41・42・45～47は丁寧なナデを施し、器面を平滑に仕上げている。高台もやや丁寧な作りである。45は底径の割に口径が大きく、46は口縁の端部が外反するもので所謂椀形を呈しているのが特徴である。48は器高が低く皿に近い器形で、口径13.1cm、器高3.5cmときわだって小型の製品である。22は重焼きした製品が釉着したものである。重なった上の個体は口縁部を欠いている。

椀B（挿図103・105 20・49～65）18個体を実測した。口径13.0～14.0cm、底径6.0cm、器高4.0～5.0cm前後のものが多い。椀Aに比べると、口径・器高とも一回り小型になる。成形・調整はすべて同一技法で仕上げるもので、法量も口縁部の外反の影響を除けば、概ねまとまっているといえよう。器形は体部が直線的に立ち上がるもの、湾曲するもの、口縁端部が外反するものなどさまざまである。65は口縁が大きく外反する。53は底部から湾曲しながら立ち上がるもので所謂、椀形態になるものである。内面底部に段が付くものは49、51、52、55、61～65などが顕著である。

底部はヘラによる切り離しを行うが、ナデによる最終仕上げを行うものは少ない。また、製作過程で製品をすのこや板の上に置いた痕跡（板状圧痕）が残るものも多く、12個体で認められた。色調は灰色・暗灰色・暗褐色を呈し、生焼けの製品はほとんど見られない。また、ヘラ記号も認められない。20は重焼きした製品が釉着したまま残ったものである。但し、焼成時に上の個体が倒れたためか、上に載せた個体がずれている。

椀C（挿図105 66～68）3個体がある。66は椀C 1に分類されるもので、体部は直線的に立ち上がる。内面底部の段は痕跡程度に見られるのみである。67・68は椀C 3に分類できる。体部がカーブを描いて立ち上がるもので、口縁端部を外反させる。体部の中位に沈線が1条認められた。高台は「ハ」の字に広がりやや外方に踏ん張るような形態である。高台の外底面は丁寧にナデてヘラ切りの痕跡を消している。67はロクロのナデ痕跡が明瞭に残り、68は内外面を平滑に仕上げている。椀C 1・椀C 3ともそれぞれ椀B・椀Aと同じ形態で、これらの椀の法量より大型になるものはなかった。

皿C（挿図103 23）耳皿である。口径8.7cm前後の皿の口縁の両端を内側に折り曲げたものである。平高台が付くもので底部はヘラによって切り離している。

壺B（挿図106・107 69～85）壺の破片は多く出土したが、残念ながら全体の器形がわかるものはない。しかし、大半が壺B 4aに分類されると思われる。そして、口径は13.0～19.4cmとばらつきが見られ法量に大小が存在する。器高は不明である。口縁部は上方向につまむもので外面に面をもつ。肩は張るものが多いが76・77は撫肩になる。一方、突帯は2条のものが多い

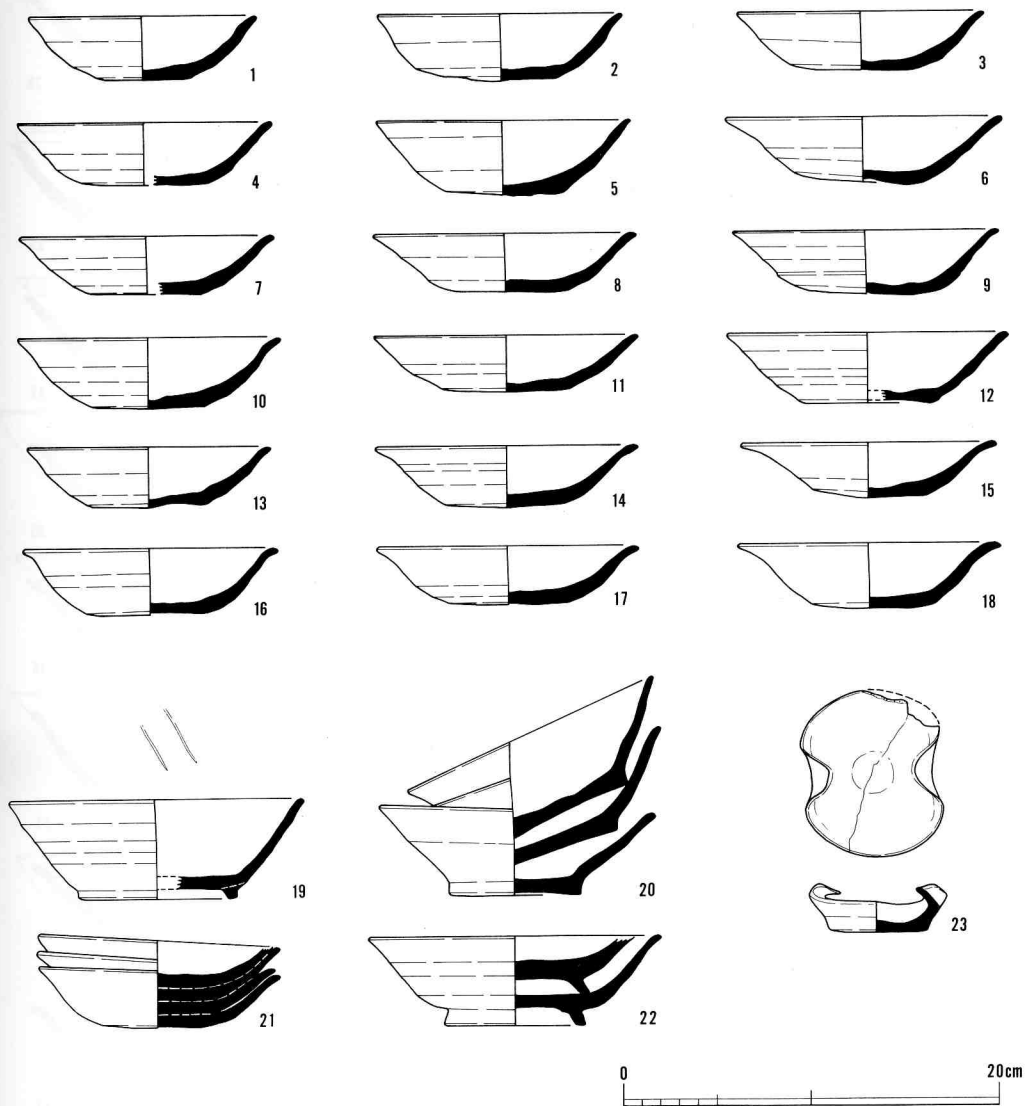
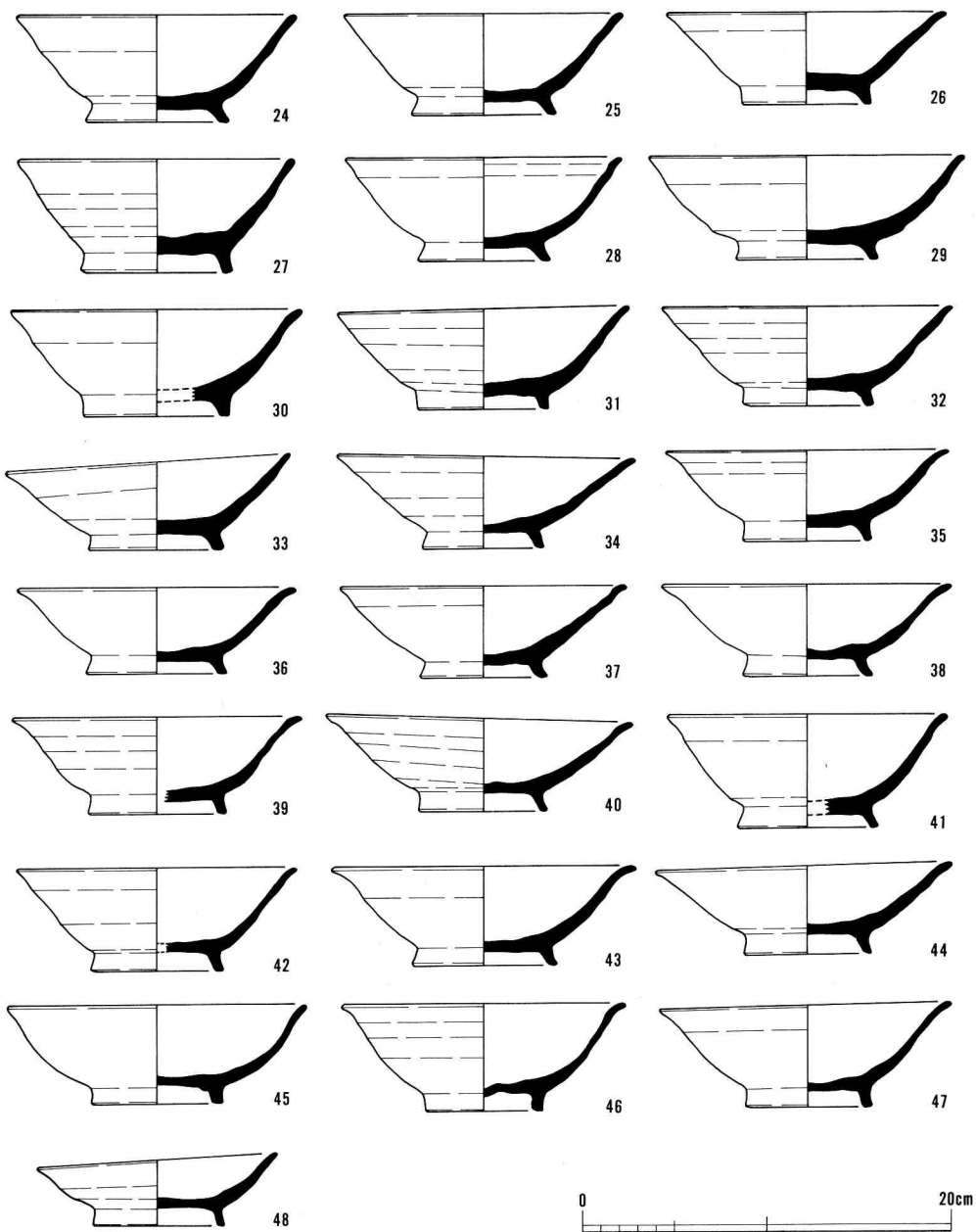


插图103 古城5号窯跡 灰原出土須惠器(1)



挿図104 古城5号窯跡 灰原出土須恵器(2)

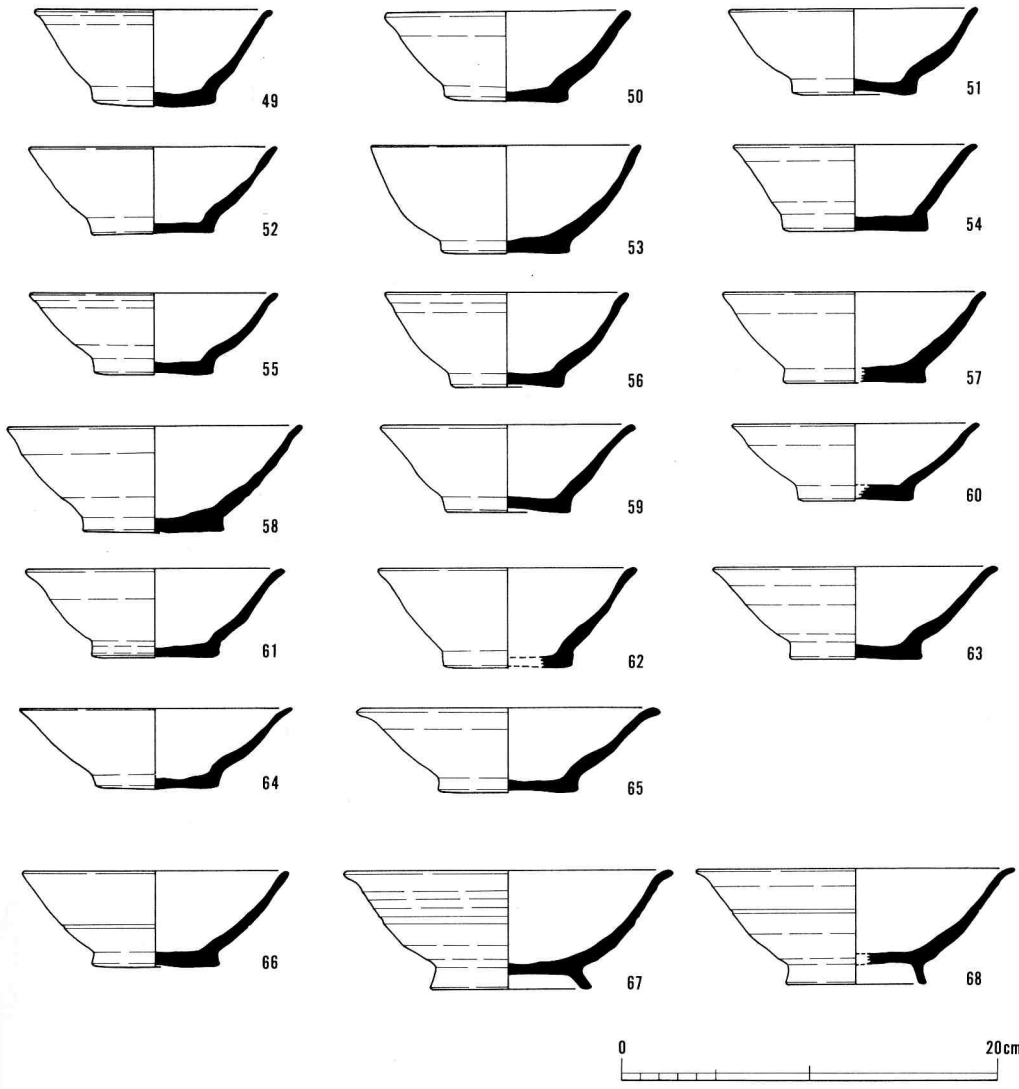


插图105 古城5号窯跡 灰原出土須恵器(3)

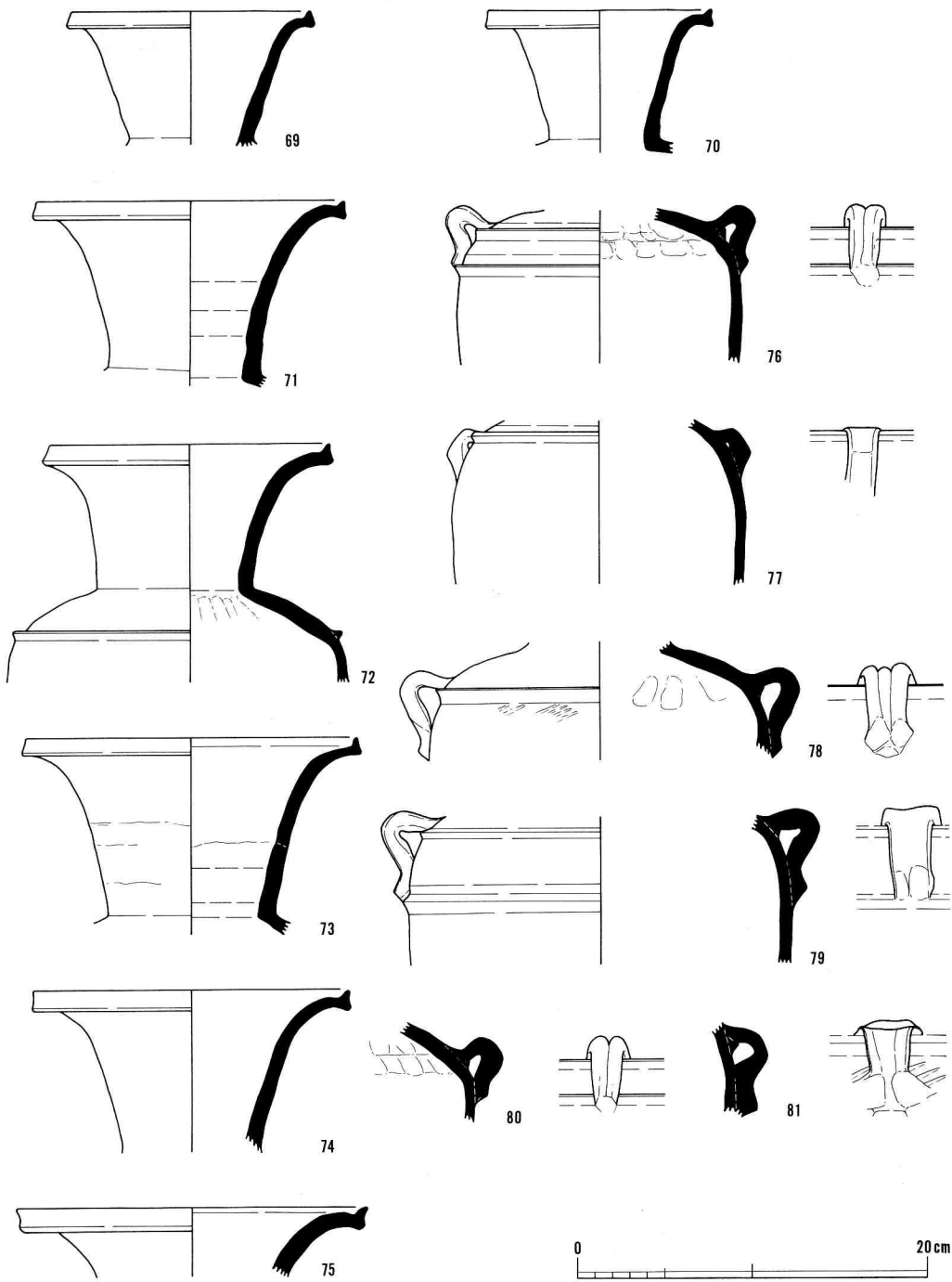


插图106 古城5号窑迹 灰原出土须惠器(4)



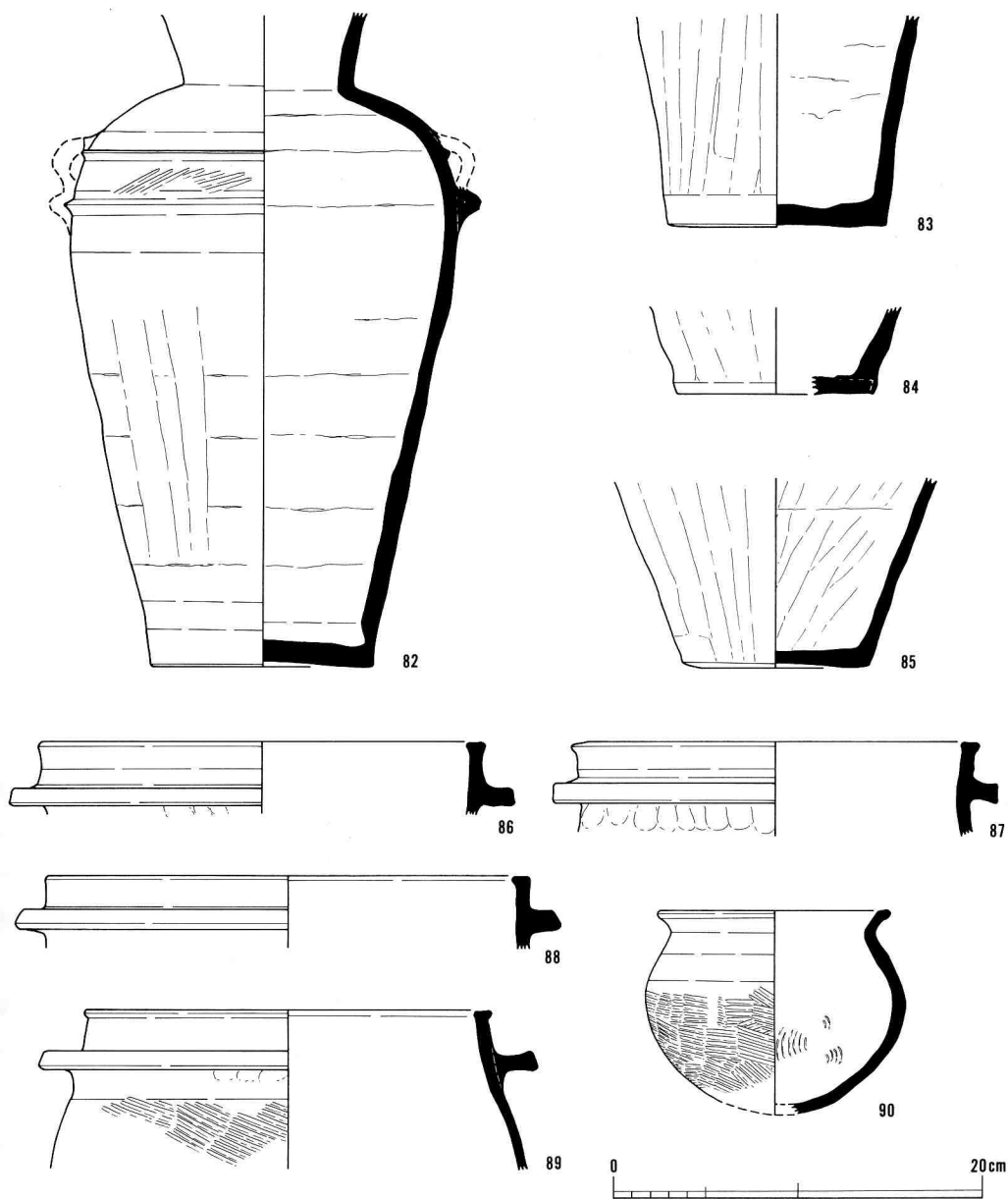


插图107 古城5号窑迹 灰原出土须惠器(5)

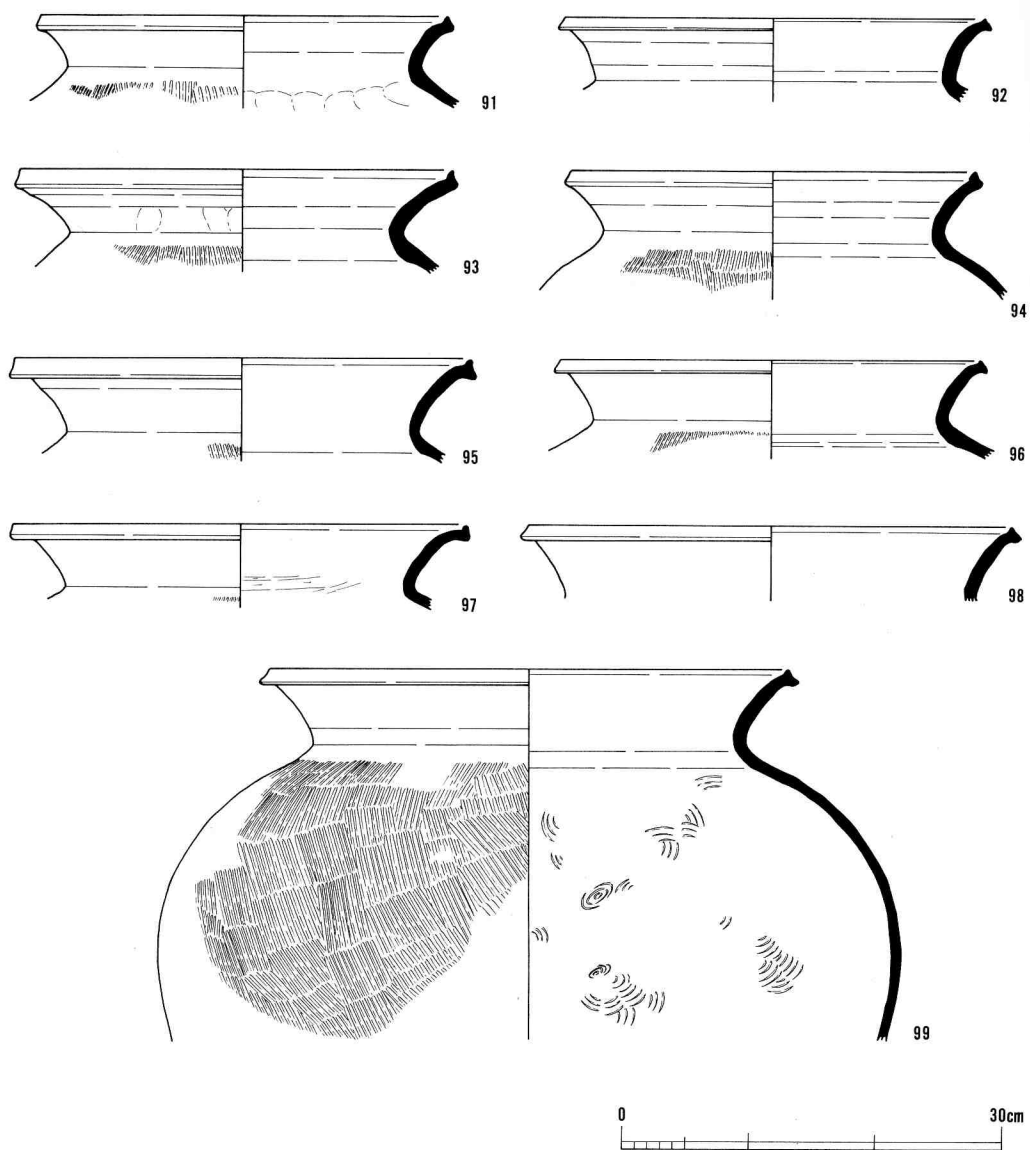


插图108 古城5号窠迹 灰原出土须惠器(6)

が、72・77・78のように1条突帯のものも少なからず存在する。耳は帯状の粘土を貼り付けるものと(77・79・81・82)、紐状のものを複数本重ねたものがある。2本を重ねるものは76・80、3本をかさねるものは78がある。ただし、77の耳は肩部に貼り付くもので紐通しの穴が塞がっている。外面のタタキは平行タタキであるが、大半のものがナデによって消されていた。わずかに78・81・82などの突帯の間に若干のタタキ痕跡を観察することができた。また、82~85の体部は縦方向の板ナデによって器面調整の仕上げを行うもので、この調整技法は中池ノ内1号窯跡と古城5号窯跡のみで観察できた。

甕(挿図108 91~99) 9個体を実測した。99のみ胴部の上半部まで残っているが、他はすべて口縁部の破片である。口径は32.5~40.0cmである。全体の器形は不明であるがすべて丸底になるタイプと考えられる。甕の口縁部は基本的に上方につまむもので端部の外面は面をなし、斜め上方に向いている。92・95・96・98は上方のみではなく下方にも口縁端部を拡張する。

頸部から口縁部にかけては大きく外反しながら立ち上がる。外面は平行タタキ、内面は同心円文の当て具痕跡が残る。頸部から上はナデ消している。99は胴部の半分が残るものであるが、内面も粗く不定方向のナデで仕上げている。甕の中には自然釉の掛かるものも見られ、色調は暗灰色から灰色のものが多い。胎土は杯・椀類などの小型品に比べると粗く、大きめの砂粒を多く含む。

小型甕(挿図107 90) 小型の甕で土師器の模倣と思われる。1個体のみ出土したもので、ほぼ完形品である。口縁部は上方に面を持つもので、端部は肥厚する。外面は平行タタキ、内面は同心円文の当て具痕跡が残る。外面は肩部まで丁寧にナデを施す。内面は全体に不定方向のナデを施すが粗いもので、同心円の当て具痕跡が僅かに残る。色調は灰色である。胎土は杯・椀類などの小型品に比べると粗い。

羽釜(挿図107 86~89) 89がかりうじて胴部の上半部までが遺存する個体で、残りは口縁部の破片である。口径は22.0~24.2cmで、器高は不明である。体部は直立するもの(86~88)と、89のようにやや下半が膨らむものがある。口縁部は内外面をつまんで、上端に面を作る。外面は平行タタキ、内面はナデ消されて不明である。鐔は短いもので、口縁の直下に貼り付ける。鐔の上下には指おさえの痕跡が明瞭に残るものが多く、特に87が顕著である。

法量的には古城1号窯のものと大差がない。しかし、1号窯跡で見られた体部が外方に広がるものや、内面に面を持つものなどは見られない。

表10 古城5号窯跡 出土土器観察表

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
1	杯A	12.2	3.4	5.1	2/12	底部ヘラ切り後ナデ	板状圧痕
2	杯A	13.0	3.5	6.1	3/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
3	杯A	13.2	3.1	6.1	11/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
4	杯A	13.6	3.3	6.8	4/12	底部ヘラ切り後ナデ	板状圧痕
5	杯A	13.4	3.9	6.3	9/12	底部ヘラ切り	
6	杯A	14.7	3.5	6.9	9/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
7	杯A	13.6	3.1	6.3	4/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
8	杯A	14.0	3.1	6.6	6/12	底部ヘラ切り	
9	杯A	14.0	3.2	8.1	4/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
10	杯A	14.0	3.7	5.9	3/12	底部ヘラ切り	
11	杯A	14.0	3.0	6.8	2/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
12	杯A	15.0	3.7	6.6	4/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
13	杯A	13.0	3.2	6.4	4/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
14	杯A	14.0	3.2	6.3	6/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
15	杯A	13.6	2.7	6.0	4/12	底部ヘラ切り	
16	杯A	13.6	3.5	5.4	4/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
17	杯A	14.0	3.1	6.2	4/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
18	杯A	14.0	3.4	6.6	4/12	底部ヘラ切り	
19	杯B	15.8	5.2	8.4	1/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
20	椀B	14.9	4.5	7.2	10/12	底部ヘラ切り	重焼き
21	杯A	13.0	3.1	5.0	9/12	底部ヘラ切り	重焼き・板状圧痕
22	椀A	15.7	4.7	7.7	8/12	ヘラ切り後高台貼り付け	重焼き
23	皿C	8.7	2.6	5.2	11/12	底部ヘラ切り	
24	椀A	15.2	5.7	7.8	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
25	椀A	15.2	5.5	7.9	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
26	椀A	15.2	5.0	7.0	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
27	椀A	15.0	6.2	8.2	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
28	椀A	15.0	5.5	7.2	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
29	椀A	17.2	5.6	7.7	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
30	椀A	15.8	5.7	7.9	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
31	椀A	15.9	5.4	7.2	11/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
32	椀A	15.8	5.4	7.1	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
33	椀A	15.5	4.8	7.4	11/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
34	椀A	16.3	4.9	6.1	11/12	ヘラ切り後高台貼り付け	

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
35	椀A	15.4	4.9	7.0	6/12	へら切り後高台貼り付け	
36	椀A	15.2	4.6	7.6	2/12	へら切り後高台貼り付け	
37	椀A	15.6	5.0	6.9	9/12	へら切り後高台貼り付け	
38	椀A	15.8	4.9	7.1	2/12	へら切り後高台貼り付け	
39	椀A	15.8	5.2	7.5	4/12	へら切り後高台貼り付け	
40	椀A	16.7	5.0	7.1	10/12	へら切り後高台貼り付け	焼け歪
41	椀A	15.2	6.1	7.6	3/12	へら切り後高台貼り付け	
42	椀A	15.2	5.5	7.2	4/12	へら切り後高台貼り付け	
43	椀A	16.6	5.3	7.8	8/12	へら切り後高台貼り付け	
44	椀A	16.1	7.3	6.9	11/12	へら切り後高台貼り付け	
45	椀A	16.1	5.3	7.1	4/12	へら切り後高台貼り付け	
46	椀A	15.4	5.8	6.4	3/12	へら切り後高台貼り付け	
47	椀A	15.9	5.5	6.9	11/12	へら切り後高台貼り付け	
48	椀A	13.1	3.5	7.1	12/12	へら切り後高台貼り付け	
49	椀B	12.6	5.1	6.5	2/12	底部へら切り	板状圧痕
50	椀B	13.1	4.8	6.6	6/12	底部へら切り	板状圧痕
51	椀B	13.2	4.5	6.6	4/12	底部へら切り	板状圧痕
52	椀B	13.2	4.6	6.5	4/12	底部へら切り	
53	椀B	14.4	5.7	6.8	1/12	底部へら切り	板状圧痕
54	椀B	13.0	4.6	7.7	1/12	底部へら切り	板状圧痕
55	椀B	13.2	4.3	6.3	3/12	底部へら切り	
56	椀B	13.0	5.7	6.0	1/12	底部へら切り	板状圧痕
57	椀B	14.0	4.8	7.6	1/12	底部へら切り	
58	椀B	15.6	5.6	7.4	6/12	底部へら切り	板状圧痕
59	椀B	13.6	4.6	6.6	4/12	底部へら切り	板状圧痕
60	椀B	13.2	4.0	6.1	1/12	底部へら切り	板状圧痕
61	椀B	13.8	4.7	6.8	1/12	底部へら切り	板状圧痕
62	椀B	13.8	5.3	6.8	3/12	底部へら切り	
63	椀B	15.2	4.9	7.1	1/12	底部へら切り	
64	椀B	14.5	4.3	6.5	6/12	底部へら切り	板状圧痕
65	椀B	16.2	4.4	7.4	2/12	底部へら切り	板状圧痕
66	椀C	14.2	5.0	6.8	1/12	底部へら切り・一条沈線	
67	椀C	17.6	6.2	8.5	1/12	底部へら切り後高台貼り付け・一条沈線	
68	椀C	17.0	6.1	7.5	2/12	底部へら切り後高台貼り付け・一条沈線	
69	壺	14.2	7.6	—	4/12		

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
70	壺	13.0	<u>7.6</u>	—	8/12		
71	壺	18.0	<u>10.0</u>	—	3/12		
72	壺B	16.6	<u>13.5</u>	—	4/12	一条突帯 (残存部)	
73	壺	19.4	<u>10.5</u>	—	3/12		
74	壺	18.2	<u>9.1</u>	—	4/12		
75	壺	20.1	<u>4.0</u>	—	3/12		
76	壺B	—	<u>8.7</u>	—	2/12	二条突帯・耳貼り付け	
77	壺B	—	<u>9.3</u>	—	1/12	一条突帯・耳貼り付け	
78	壺B	—	<u>6.6</u>	—	1/12	一条突帯・耳貼り付け	
79	壺B	—	<u>8.4</u>	—	2/12	二条突帯・耳貼り付け	
80	壺B	—	—	—	1/12	二条突帯・耳貼り付け	
81	壺B	—	—	—	1/12	二条突帯・耳貼り付け	
82	壺B	—	<u>35.0</u>	12.0	9/12	二条突帯・耳貼り付け	
83	壺	—	<u>11.2</u>	11.8	6/12		底部の破片
84	壺	—	<u>4.6</u>	10.8	3/12		底部の破片
85	壺	—	<u>10.0</u>	10.1	12/12		底部の破片
86	羽釜	24.2	<u>3.9</u>	—	2/12	鐳貼り付け	
87	羽釜	24.2	<u>3.9</u>	—	2/12	鐳貼り付け	
88	羽釜	24.2	<u>3.9</u>	—	4/12	鐳貼り付け	
89	羽釜	22.0	<u>8.5</u>	—	2/12	鐳貼り付け	
90	甕	12.5	<u>10.9</u>	—	10/12	外面平行タタキ・内面同心円あて具痕	
91	甕	32.5	<u>6.7</u>	—	3/12	外面平行タタキ	
92	甕	33.8	<u>5.6</u>	—	2/12		
93	甕	35.8	<u>7.6</u>	—	2/12	外面平行タタキ	
94	甕	32.9	<u>9.4</u>	—	2/12	外面平行タタキ	
95	甕	36.6	<u>7.5</u>	—	2/12	外面平行タタキ	
96	甕	34.1	<u>7.1</u>	—	2/12	外面平行タタキ	
97	甕	36.2	<u>5.8</u>	—	3/12	外面平行タタキ	
98	甕	36.8	<u>5.7</u>	—	1/12		
99	甕	40.0	<u>27.5</u>	—	9/12	外面平行タタキ・内面同心円あて具痕	

## 第6節 小 結

古城窯跡群については現在のところ5基の存在が知られ、各窯跡が谷の支谷等に広く分布していることが分かった。この5基の内、遺物の詳細を分析できる程度に調査が行えたのは、1・5号窯である。1号窯については灰原の大半を調査し、投棄された遺物の大部分を回収した。灰原は厚く堆積するもので、残存状況は良好であった。従って今回の遺物群は同窯の様相を掴むのに十分な資料と考えられる。5号窯跡については窯体の痕跡、及び灰原を調査した。しかし、なお多くの遺物が池底に残っており、詳細な分析を行う資料としては若干の疑問の余地もある。2・3・4号窯については部分的なものに止まった。

1号窯跡 1号窯から出土した遺物は杯A・杯B・椀A・椀B・椀C1・椀C3・椀D2・壺・壺B2・壺B3・壺B4・壺B5・壺C1・鉢・鉢B・甕・小型甕・羽釜・硯がある。さらに椀B・甕には大・小があり、壺Bにも大・中・小がある可能性が見られた。

量的には実測した遺物からの判断であるが、杯Aが多く、椀A・椀Bがこれに次いでいる。これに次ぐ器種は壺B・甕・羽釜などが豊富である。全体の個体数は多くないが、椀C・Dについても他の窯に比べ多いといえよう。これに対して、皿・杯B・蓋などは欠落している。すべての器種を通じて底部の切り離し技法は、ヘラによって切り離している。

焼成時には離れ砂を使用しており、藁を緩衝材に入れているものは少ない。色調は灰色・灰白色のものが多く、生焼けのものも少ない。

ヘラ記号は多くの個体に見られた。杯Aは「一」が3点、「e」が1点、椀Aは暗文状の平行線が1点、椀Bは「一」が8点、「A」が1点、「士」が1点、文字が1点である。椀C3は「一」が4点、椀C1は「一」が3点、「ノ」が1点である。また、壺B5の胴部には「ス」のヘラ書が刻まれたものも認められた。

5号窯跡 前述のように、灰原内の遺物が多く池底に流失しているため、全体の正確な様相を示しているかどうか疑問である。

5号窯の遺物には杯A・杯B・椀A・椀B・椀C・皿C・壺B・甕・小型甕・羽釜がある。実測点数が正しい様相を反映していると仮定すると、個体数は椀Aが多く、杯A・椀Bがこれに次いでいる。壺は破片が多く個体数を測りきれないが、古城1号窯に比べやや少ない感がある。壺にどのような器種があるかについては推測できない。これに対して、杯蓋は欠落し、皿・杯Bは1点ずつしか出土していない。これらの器種は当窯では消滅寸前の段階と考えられる。1号窯同様すべての器種を通じて糸切りはなく、底部はヘラによって切り離している。

焼成時にはやはり離れ砂を使用しており、藁を緩衝材に入れているものは様である。色調は灰色・灰白色のものが多く、生焼けのものは少ない。

ヘラ記号はないが杯Bの内面に暗文状の平行線が入る。

2・3・4号窯跡 これらの窯については詳細な様相は不明である。限られた遺物から観察すると、全体の色調・焼成は1・5号窯跡と大差はなく、器種についても3号窯跡で杯Bが1点ある以外は特殊なものは見られない。

1～5号窯跡全体を観察すると色調は灰色・暗灰色が多く、焼成は生焼けのものが少ない。器種・技法的には大差がないと考えられる。但し、杯蓋は見られないものの杯Bをわずかに残す窯が見られ、椀C・Dが量的に増えているのが目立つ。杯Aは法量的には変化がないものの底径が小さく、皿に近い形態となっている。椀Cは椀A・Bに比べ法量的に大きめのものも含まれるが、同形態のものに沈線を施すものが多い。

ヘラ記号は「一」が多くバリエーションが余りない。杯A・椀B・椀Cに多く施されていた。

隣接する古城山窯跡、向上・古城窯跡では古城山1号窯跡に杯Bが比較的多く存在し、向上・古城窯跡では杯Bの身および蓋、そして皿が存在する。このため、両窯跡群がより古い時期と考えられる。これに対して、古城窯跡群は少量の杯Bを生産するものの、皿はなく生産される器種が限定されはじめている。椀C・Dは古城山と同じぐらいの個体数を持つものの、古城1号窯跡では法量が大型化したものが目立ち、特殊な器種として意識され始めている。

立地的に古城窯跡群には遠いが、中池ノ内1号窯跡では、杯Aが他の椀A・Bを凌駕し、壺・甕は豊富であるが、羽釜は他の相野の窯同様余り多くないが近い様相である。

これらのことから推定すると、各窯跡群は向上・古城窯跡群→古城山窯跡群→古城窯跡群→中池ノ内1号窯跡群の順になると思われる。但し、古城窯跡の中での順序を明らかにするには1号窯以外はやや資料不足のため詳細は今後の検討に待ちたい。



## 第7章 向上・古城窯跡の調査

### 第1節 調査の方法

#### 1. 位置 (図版63~65、挿図109・110)

向上・古城窯跡 (図版63~65、挿図109・110) は三田市上相野字古城にある。当初の分布調査では確認されていなかった窯跡である。隣接する南側の尾根上にあるNo.11地点で須恵器片が発見され、確認調査を実施したのだが、遺構・遺物ともに検出されなかったため、周辺の未確認の窯跡からもたらされたものと考えた。そこで周辺の精密な分布調査を実施したところ、すぐ北側の谷部で須恵器片の散布が認められ、窯跡が発見されたのである。

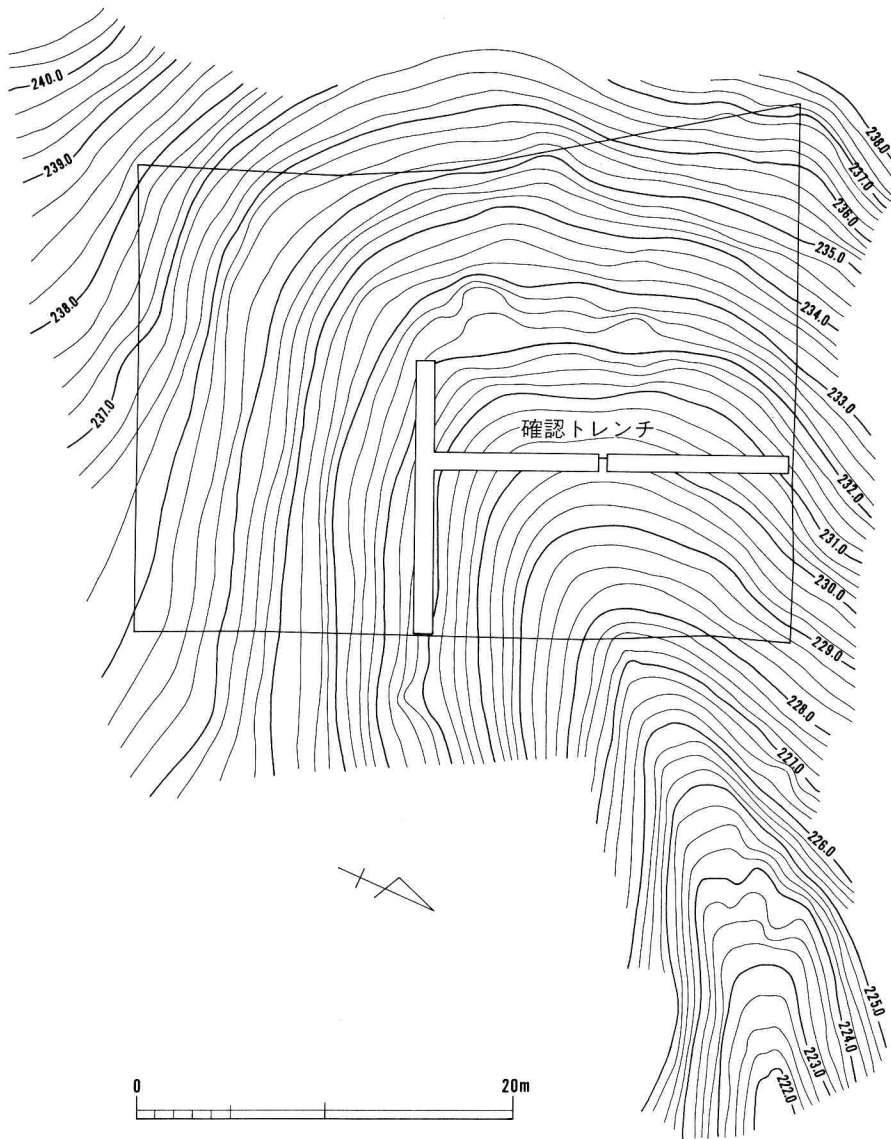
窯跡は、北側に広がる大きな谷の周縁部に分布する古城窯跡 (図版63~65、挿図109・110) や古城山窯跡 (図版63~65、挿図109・110) とはまとまりが異なるため、あえてこれらとは別の名称を与え、向上・古城窯跡 (図版63~65、挿図109・110) と名付けた。

窯跡は、丘陵を刻んだ小さな谷の最奥部に立地しており、焚口部での標高は、1・2号窯跡ともに233m付近にあって、相野窯跡群中では中池ノ内窯に次いで高所に立地している。窯跡は2基からなり、谷底からみて正面やや右よりの東向き斜面に位置するのが、相野窯跡群中最古の窯と考えられる1号窯跡、左手の北向き斜面に位置するのが2号窯跡である。両者はちょうど直交する方向に向いており、灰原の末端部が谷底部で重なりあっている。斜面の傾斜角は、1号窯跡が20°、2号窯が19°である。現況では、周辺の至近距離には窯跡が確認されていないので、この2基の窯が一単位となっているのだろう。

#### 2. 方法

調査地は、須恵器片を発見した時点では、伐採された樹木が横倒しになった状態で、窯跡の位置や基数が全くわからなかった。そこで、樹木の除去後に、あらためて土器片の分布と地形観察を行った結果、2基の窯跡が存在することが予想された。そこで、窯跡の位置を確かめるために確認調査を実施することにした。確認調査では、斜面の傾斜方向に合わせて、幅1mで長さが20mと15mの2本のトレンチをT字形に配し、遺構確認に努めた。その結果、両方のトレンチでそれぞれ須恵器を多量に含んだ灰層が確認でき、それぞれの灰層が別々の窯跡に伴う灰原であることがわかったので、主軸を直交方向に向けた2基の窯跡が存在することが明らかとなった。

全面調査では、このトレンチに主軸を合わせた25m×35mの範囲に5m方眼の地区割りを行い、調査対象範囲とした。表土を除去した後、窯跡の位置が確認された段階で、向かって右側



挿図109 向上・古城窯跡群調査地区位置図

の規模の大きな方を1号窯跡、左手の小さな方を2号窯跡とし、それぞれの窯体を基準にした地区割りを行って、以下の調査の基準線とした。

発掘調査終了後、富山大学の広岡公夫教授の御協力にて熱残留磁気の測定を実施した。その結果については付載で報告する。

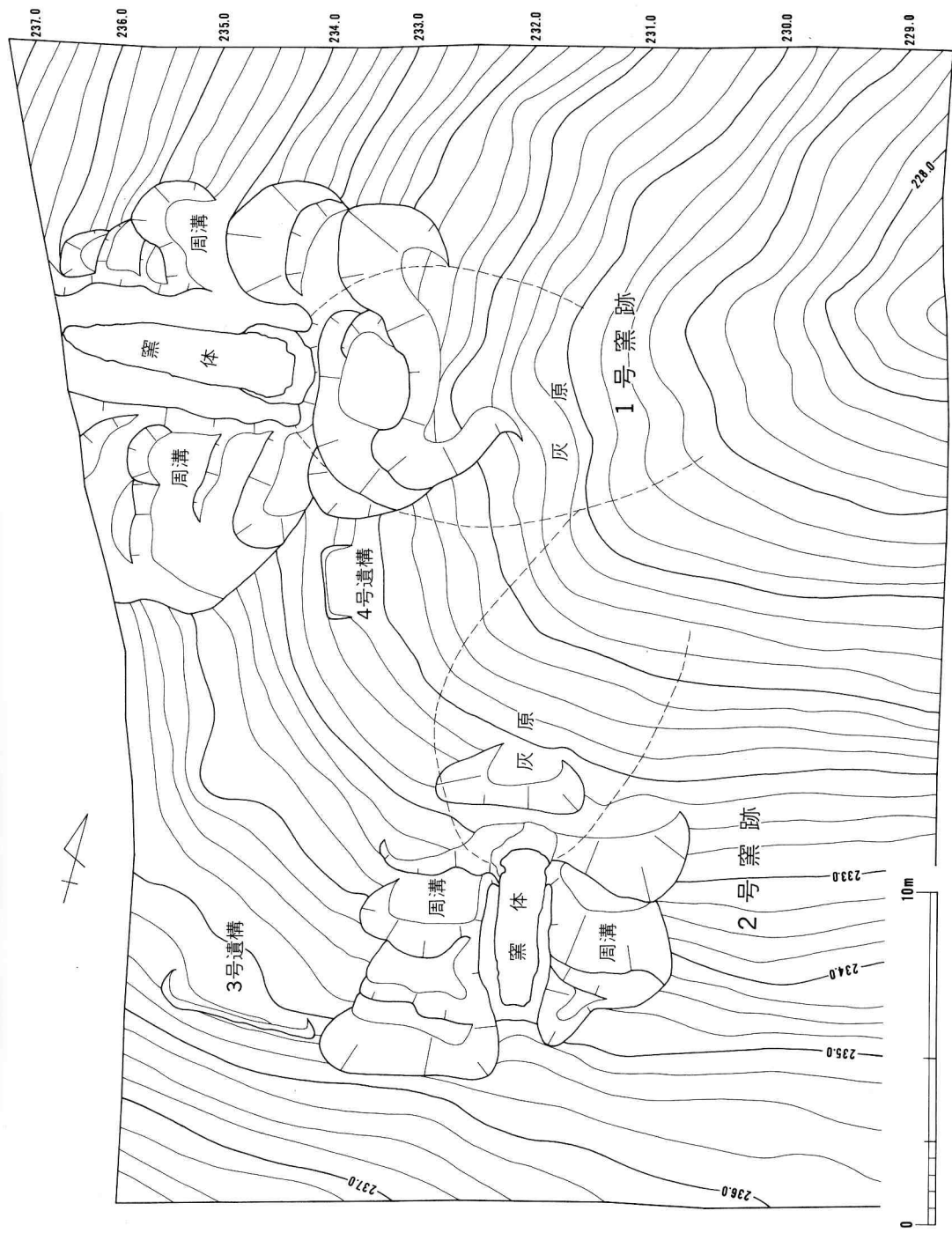


插图110 向上・古城窯跡群遺構全体図

## 第2節 向上・古城1号窯跡の調査

### 1. 概要 (図版66~70、挿図111~113)

1号窯跡は谷の最奥部右手の東向き斜面に位置しており、焚き口をN84°Eに向けている。窯体の構造は、地山を掘り込んだ、半地下式の窖窯である。窯体の全長は7.2mで、相野窯跡群中では最大の窯跡であると同時に、残存状態も群中では最も良好なものであった。焚き口付近の標高は233m、窯体先端部での標高は236mである。窯跡に伴う灰原の灰層は厚く、遺物量も多かった。また、窯体の両側方を囲んで周溝が築かれているのだが、斜面上方は調査範囲外となっているので全周囲を周溝が取り囲んでいるかどうかは不明である。

遺物からみると現在のところ、相野窯跡群中では最古の窯と考えられる。

### 2. 窯体 (挿図114)

#### 規模

残存部での上端部から焚き口部までの窯体の全長は、水平長で7.3m、斜面長で7.7mと、相野窯跡群中で現在確認されている窯跡の中では最も規模が大きいものである。

#### 燃焼部

燃焼部は、焼成部と比べると極端に幅を増し、大きく膨らんでいる。最も広い部分での幅は1.8m、長さは1.3mである。床面の傾斜角は約15~17°と緩やかである。

焼成部に比べると、燃焼部床面の焼けは甘く、赤褐色を呈している。

灰層は、燃焼部の床面に50cmほど堆積しており、前庭部から灰原にかけて切れ目なく続いている。

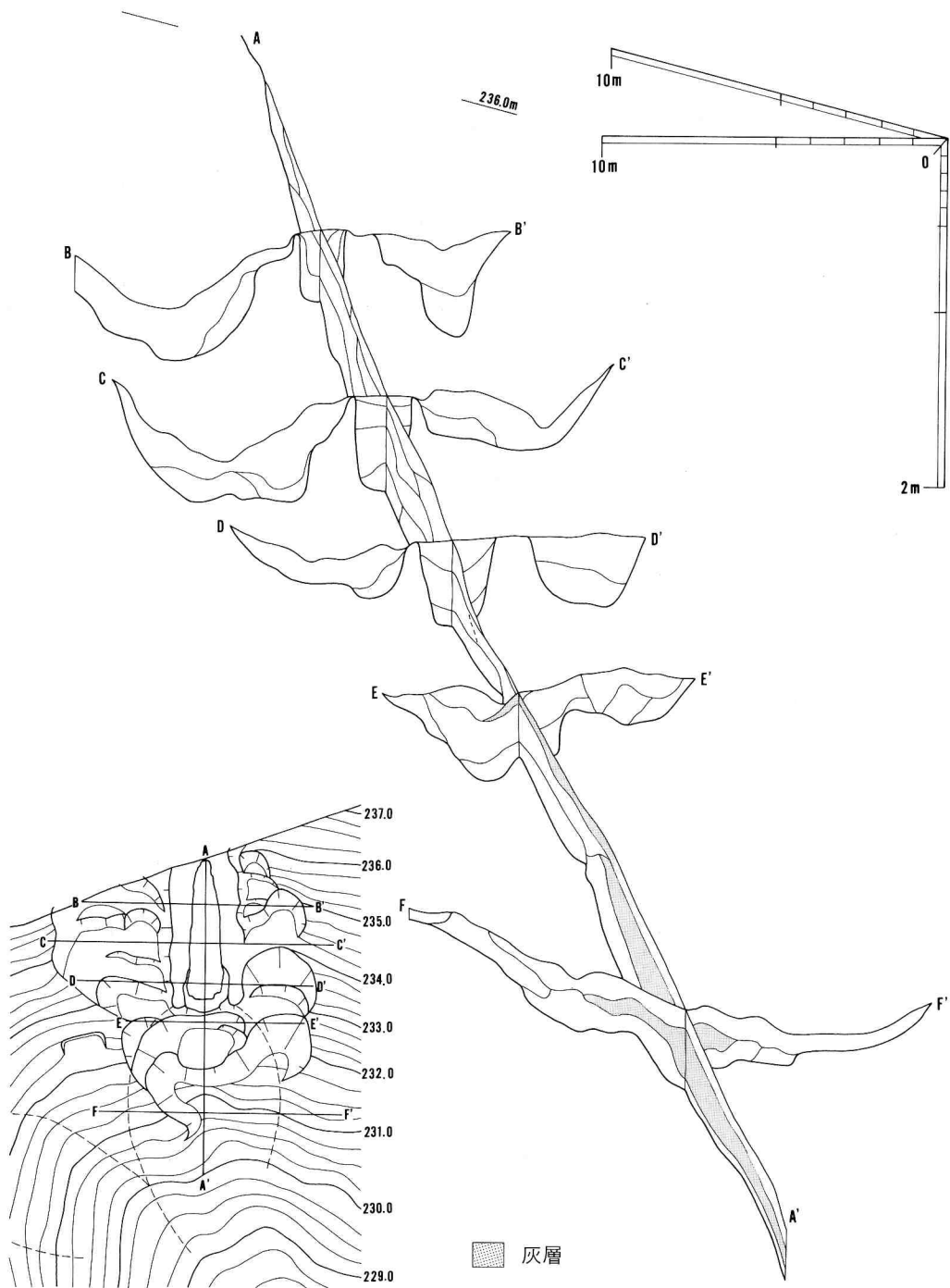


插图111 向上·古城1号窰迹 窰体·周溝·灰原土层堆積狀況图

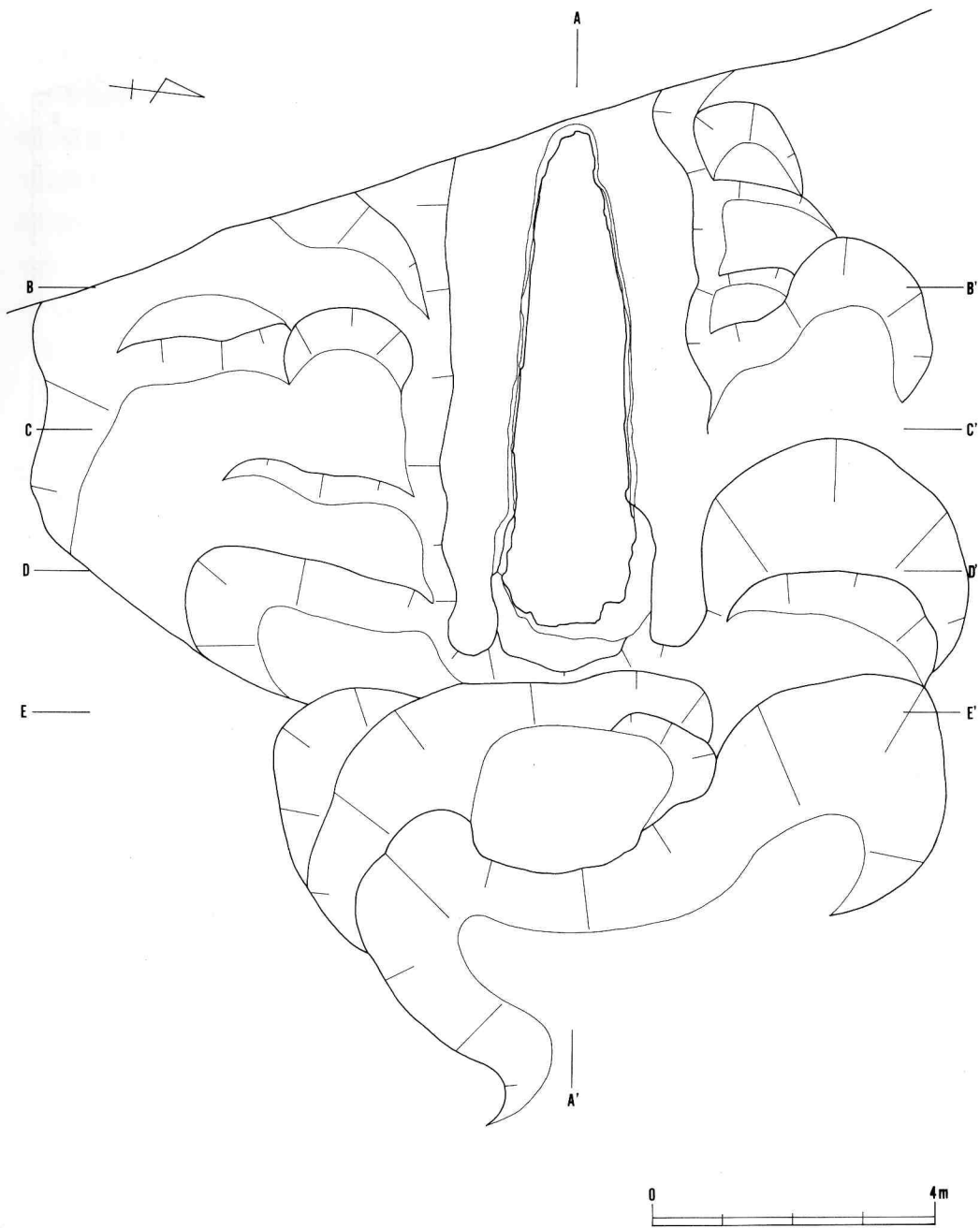
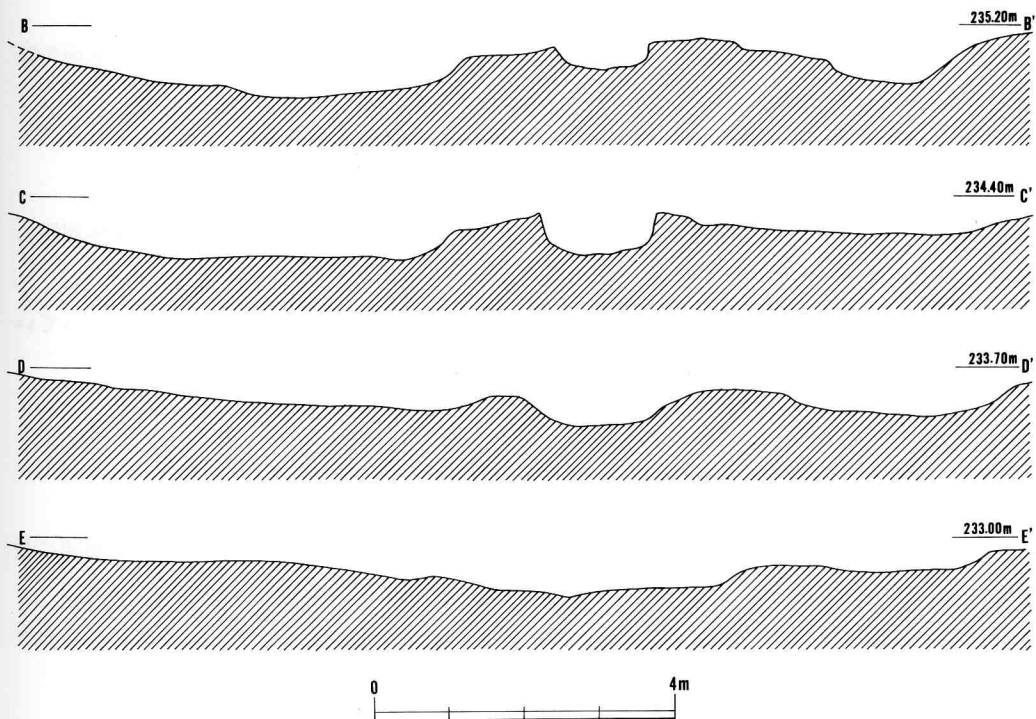


插图112 向上·古城1号寨迹 寨体·周沟平面图



挿図113 向上・古城1号窯跡 窯体・周溝断面図

焼成部

焼成部床面の最も広がった部分での幅は1.3mあり、最も残りの良い部位での壁面の残存高は42cmである。残っている部分はすべて地山掘り込みによっており、この掘り込みの深さが残存部の深さにつながっているといえる。

床面は横断方向にはほぼ平らで、壁との境界部は明瞭な角をなしており、断面の形状は箱形となる。床面と壁面はともに硬く焼け締まっている。床面の傾斜角度は、中央部付近で約26°、上方部で約32°である。

焼成部の特徴として、床面の窪みがあげられる。この窪みの大きさは直径60cm程の円形で、床面のちょうど中程に縦に3か所の窪みが並んでおり、階段状を呈している。この窪みは、大型の土器を据えるためのものと考えられる。この部分では床面の補修痕が認められるため、少なくとも2時期は作業が行われたことが推定される。

焼成部内は、窯壁や焼土の混じった土で埋まっており、床面に遺存していた遺物は少なかった。

## 煙出し

煙出し部は削平されて残存していないために構造等は不明であるが、焼成部上端で床面の幅が狭まり、傾斜角を増しているところから、ほぼ煙出し部に近いことが予想される。

## 3. 周溝

窯体から上方は調査範囲外であったために周溝の全容は不明であるが、おそらく窯体周囲に馬蹄形に巡らされているのだろう。

周溝は窯体両側方では地山を掘削しており、最大幅は6m、最大深さ70cmの規模となっている。溝底は、窯体北側では5ないし6段、南側では5段の段状に整形されている。

窯体の規模の大きさに比例して、周溝の規模も大きくなっている。

## 4. 灰原

灰原は純灰層が最大35cmの厚さに堆積しており、その広がり幅は7.5m、長さ12mの範囲に及んでいる。灰原の末端部は谷筋に及んでいて、2号窯跡の灰原の末端部と重なっている。

土層断面観察では、前庭部直下で灰層が地山混じり土を挟んで上下2層に分かれていることがわかり、操業年代差を示すものと考えられたが、遺物の判別はできなかった。

## 5. その他

焚口の前面には幅2.8m、長さ2.1mの前庭部がある、灰層は燃焼部から続き前庭部をも覆っている。周溝はこの前庭部の下側まで回り込んでいる。



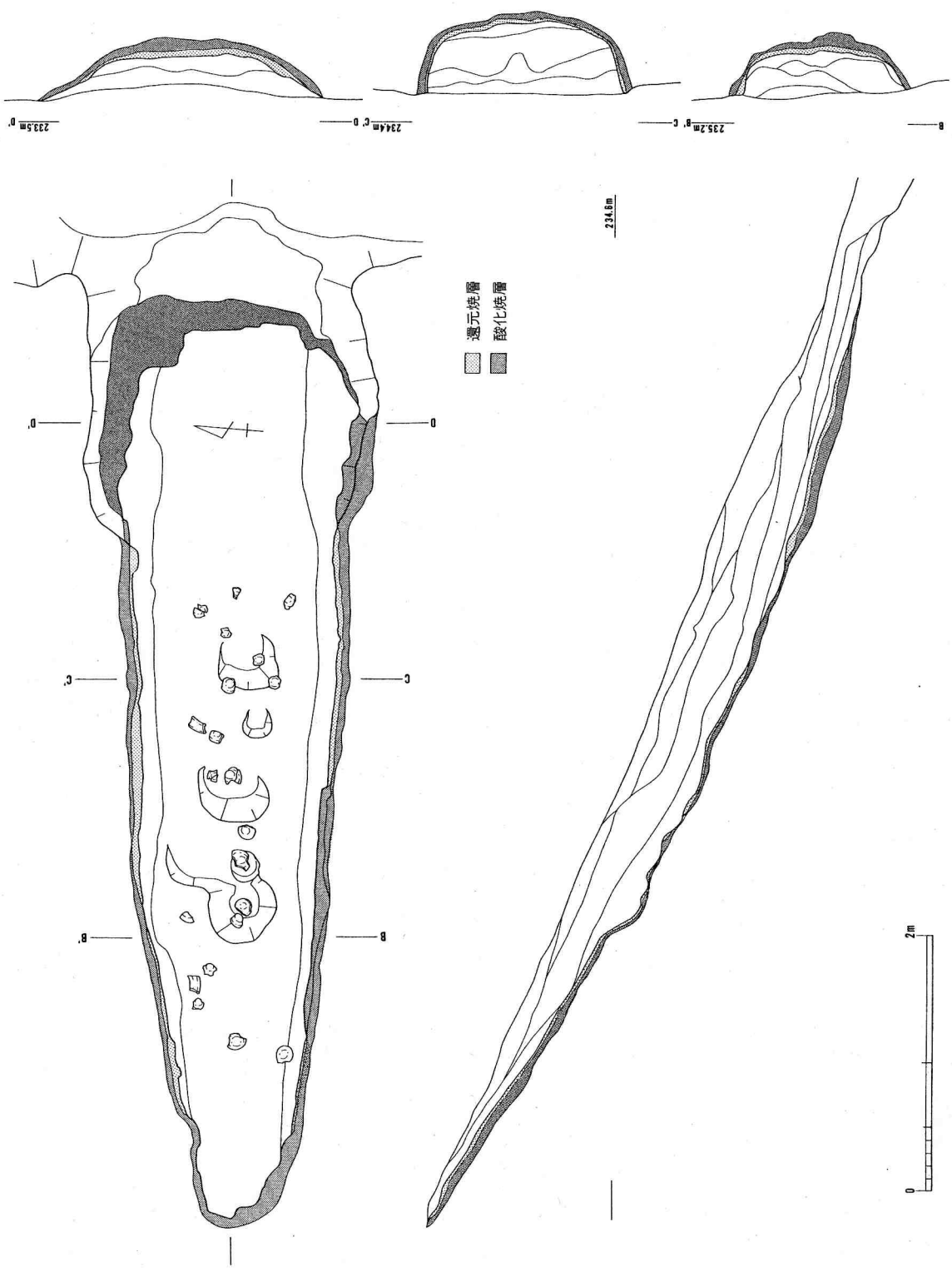
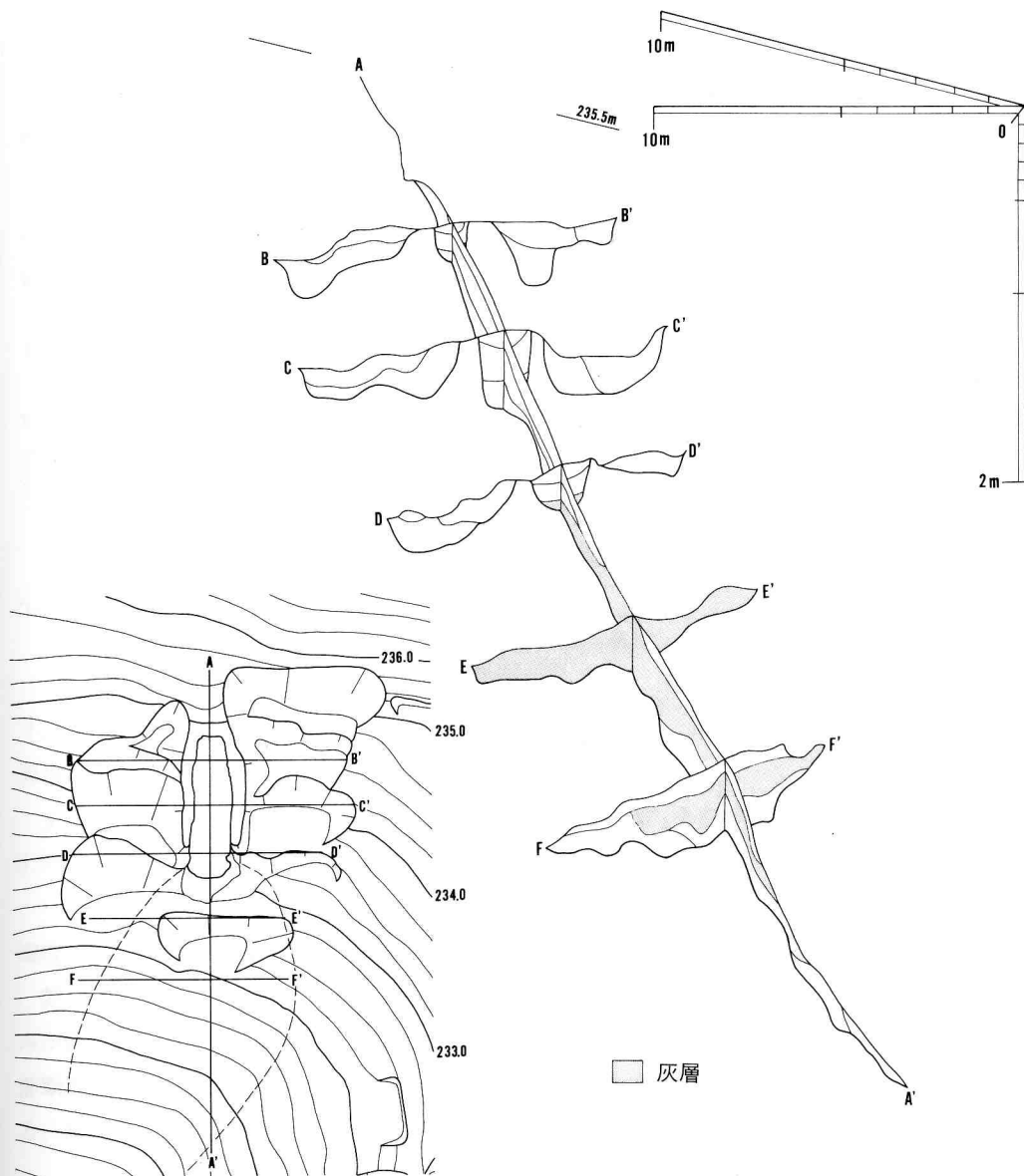
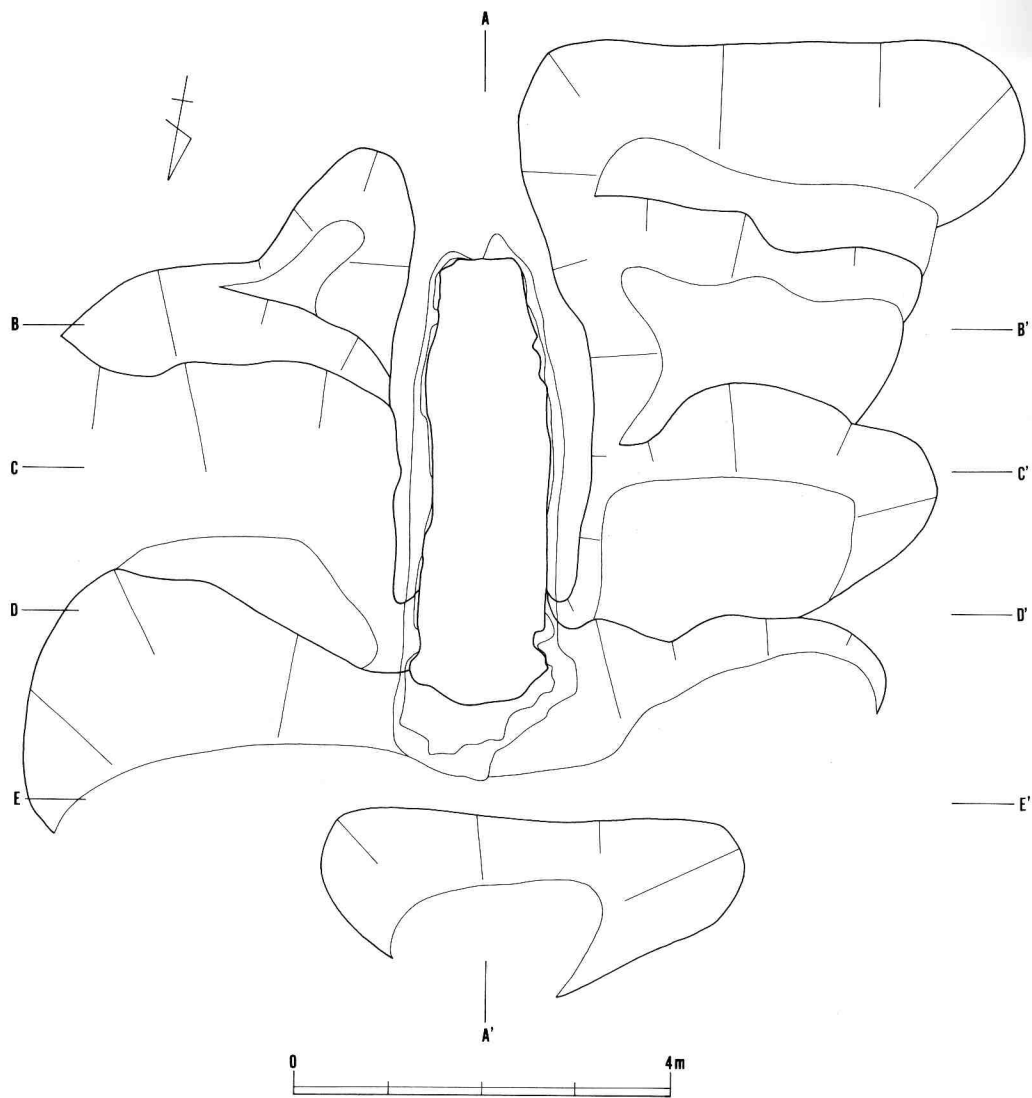


插图114 向上·古城1号窯跡 窯体遺構図

### 第3節 向上・古城2号窯跡の調査



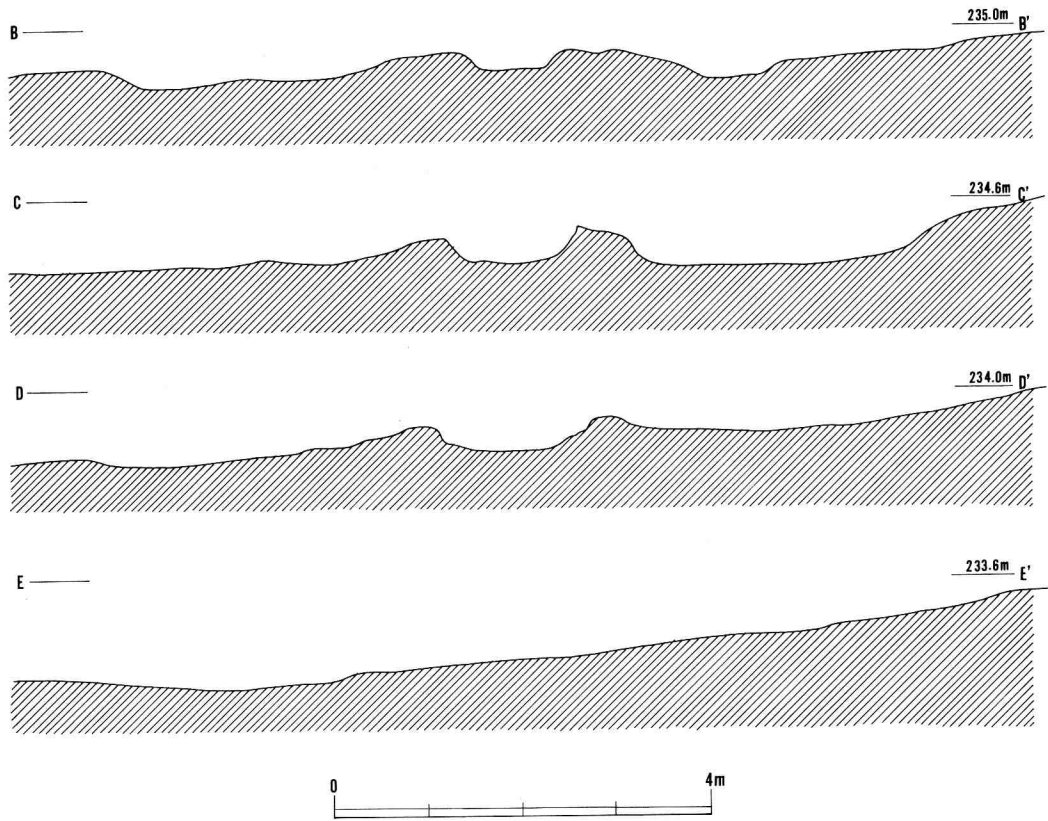
挿図115 向上・古城2号窯跡 窯体・周溝・灰原土層堆積状況図



挿図116 向上・古城2号窯跡 窯体・周溝平面図

1. 概要 (図版72~77、挿図115~117)

1号窯跡の向かって左側、谷奥の北向き斜面に位置する窯跡である。主軸はN11°Wでほぼ北に向いている。1号窯に比べて規模が小さく、年代的にも後続すると考えられる。



挿図117 向上・古城2号窯跡 窯体・周溝断面図

## 2. 窯体 (挿図118)

### 規模

上端部と焚口部付近とを欠いているが、残存部での窯体の全長は、水平長で5.5m、斜面長で5.7mと小型である。

### 燃焼部

焚口部付近が削平されているが、最大幅は1mで、1号窯跡と比べると規模が小さく、膨らみが弱い。床面は燃成部に比べ焼けが甘く、ごく表面が還元状態になっているだけで、赤変層が厚くなっている。また、床面には真っ黒な灰層が堆積しており、そのまま灰原へと続いている。床面の傾斜角は11°である。

## 焼成部

上端部が削平されているため、全長は水平長で4.7m、斜面長で5.1mが遺存している。最大幅は1.2m、残存高は32cmである。床面の傾斜角度は中央部付近で約21°、上半部で26°と1号窯跡に比べて傾斜が緩くなっている。床面は硬く焼き締まっており、青灰色の還元層は厚く7cmに及ぶ。これに伴って赤変層の厚さも5cmと厚くなっている。

## 煙出し

上端部が削平されているため、全く残存していない。

## 3. 周溝

周溝は窯体のほぼ全周を囲んでいるのだが、全体に浅く、斜面上方では溝自体を掘削していたかどうか曖昧である。

両側方での最大幅は5.2mと広いが、深さは最大でも50cmしかない。溝底は向かって右側の西側で5段、東側で4段の段をなしているが、溝自体が浅いため、一段一段の高さは低い。また、前庭部の直下まで周溝が回り込んでいるのが特徴である。

## 4. 灰原

焚口から斜面下方に向かって、最大幅6.5m、長さ11mにわたって広がっている。斜面の傾斜のため、2号窯の主軸に比べると、東に振れ、谷底に向かっていく。層厚は最大40cmで、真黒な純灰層からなっており、1号窯跡よりは少ないが、たくさんの遺物を含んでいる。

## 5. その他

1号窯跡ほどの規模ではないが、2号窯跡でも焚口の前面に平坦面を造っている。幅は2m、長さは40cmである。

# 第4節 その他の遺構

## 1. 3号遺構（図版78、挿図119）

2号窯跡の西側の周溝の最高部に隣接して長さ5m、幅1.3mにわたって斜面を25cmほど削り出した平坦地が検出された。この平坦地は、斜面下方側がかなり流出しているが、上方側には炭が堆積し、周囲の地面や壁面は赤く焼けていた。

柱穴や溝などを伴っていないが、工房跡的な性格を持った遺構かもしれない。

埋土からは挿図145の須恵器が出土しており、年代的には窯と同時期のものと考えたい。

め、全長は水平長で4.7m、斜面長で5.1mが遺存している。最大  
る。床面の傾斜角度は中央部付近で約21°、上半部で26°と1号窯  
いる。床面は硬く焼き締まっており、青灰色の還元層は厚く7cm  
の厚さも5cmと厚くなっている。

め、全く残存していない。

んでいるのだが、全体に浅く、斜面上方では溝自体を掘削してい  
と広いが、深さは最大でも50cmしかない。溝底は向かって右側の西  
なしているが、溝自体が浅いため、一段一段の高さは低い。また、  
込んでいるのが特徴である。

て、最大幅6.5m、長さ11mにわたって掘がっている。斜面の傾斜  
ると、東に振れ、谷底に向かっている。層厚は最大40cmで、真黒  
号窯跡よりは少ないが、たくさん遺物を含んでいる。

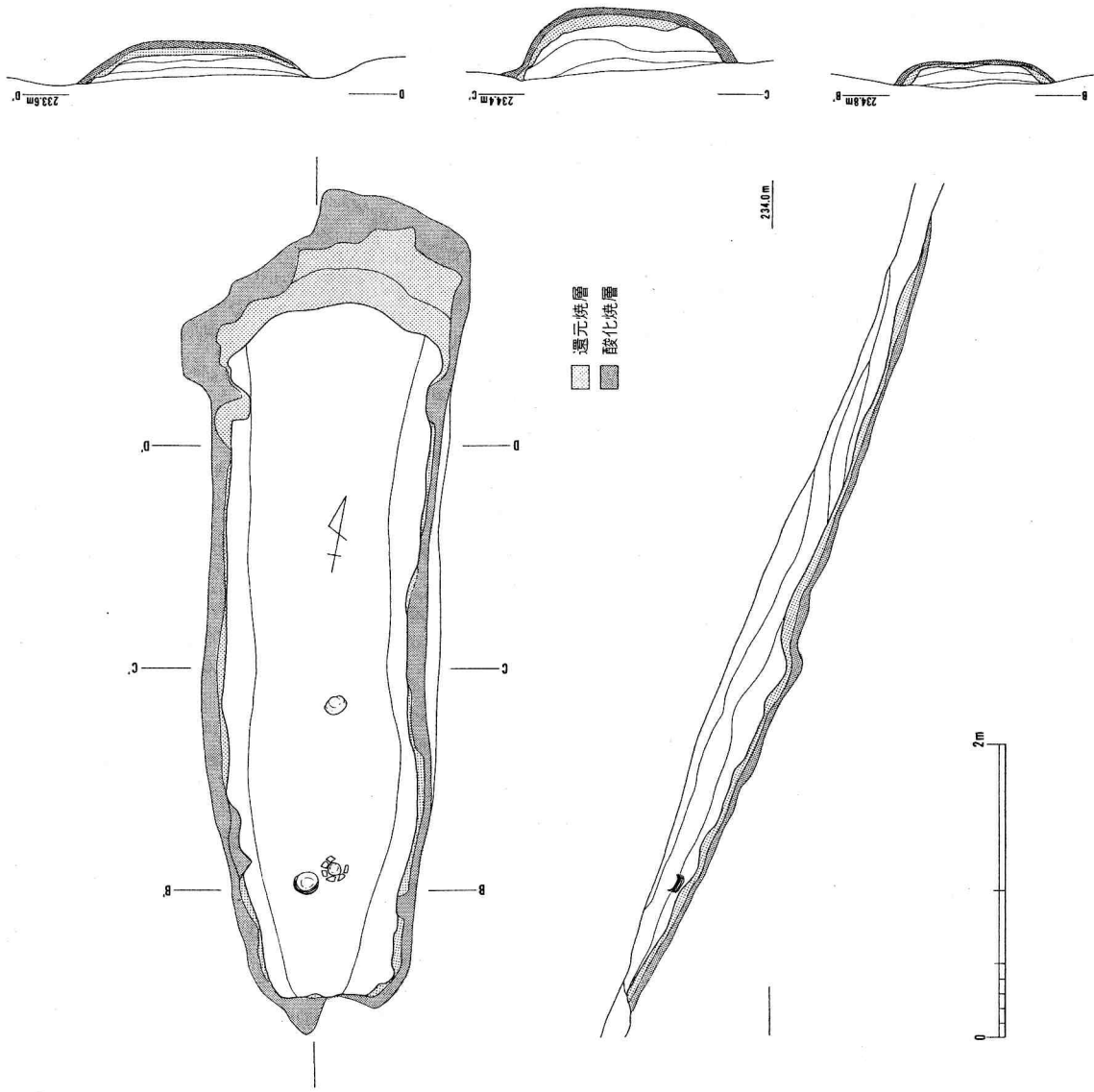
いが、2号窯跡でも焚口の前面に平坦面を造っている。幅は2m、

### の遺構

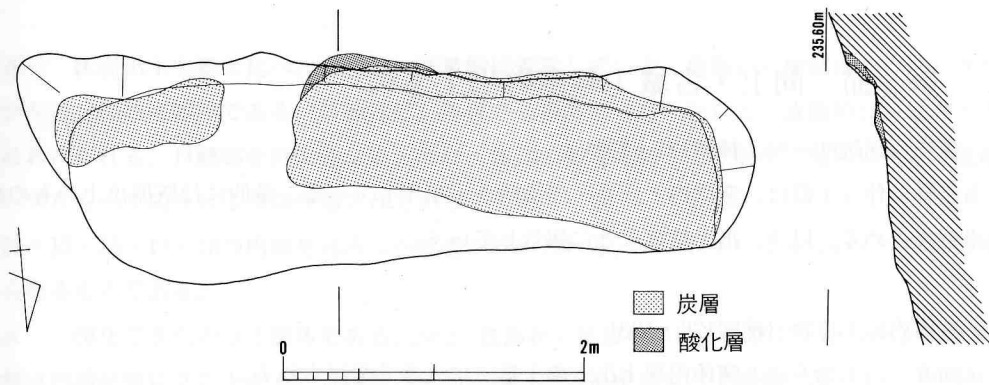
4119)

と高部に隣接して長さ5m、幅1.3mにわたって斜面を25cmほど削り  
この平坦地は、斜面下方側がかなり流出しているが、上方側には  
面は赤く焼けていた。

いが、工房跡的な性格を持った遺構かもしれない。  
器が出土しており、年代的には窯と同時期のものと考えたい。



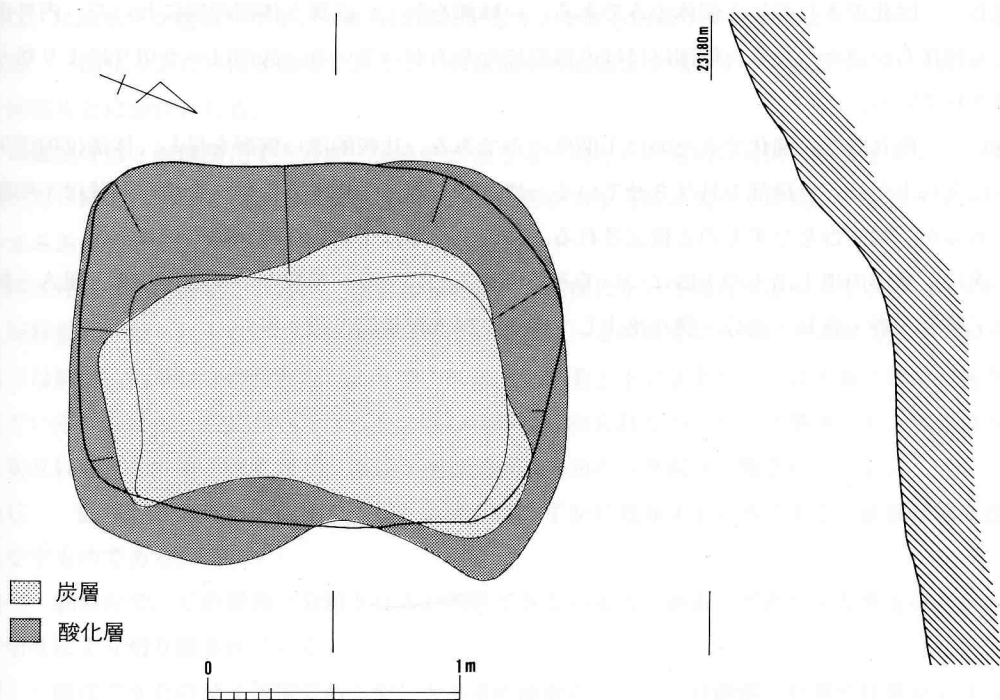
挿図118 向上・古城2号窯跡 窯体遺構図



挿図119 向上・古城窯跡群 3号遺構図

2. 4号遺構 (図版77、挿図120)

1号窯跡の前庭部から周溝を越えた南側で検出された焼土壙である。平面が2.6m×2.1mの隅丸長方形で、深さ30cmほど掘り込まれている。壙底、壁面ともに赤く焼け、内部には炭がつまっていた。土壙内からは遺物は出土していないが、斜面下方側に重なって窪みがあり、須恵器が出土している。遺物の年代は窯と同時期のものであるが、焼土壙はこの窪みを切っているところから、年代的には下るものであることは疑いない。形状から判断すると、炭窯の可能性が考えられる。



挿図120 向上・古城窯跡群 4号遺構図

## 第5節 向上・古城1号窯跡出土遺物

### 1. 概要 (図版80~93、挿図121~138)

当窯跡に伴う土器は、窯体内・灰原・周溝内から出土している。量的には灰原出土のものが過半数を占める。以下、出土位置ごとに報告していく。

### 2. 窯体内出土遺物 (挿図122・123)

床面直上出土のものと同窯体内埋土出土の土器とに大きく分けられる。

まず床面直上出土の土器からみていくことにする。確実に床面直上出土と判断できた土器はわずかで、図化できたのは9個体に限られる。器種としては、杯A・椀B・椀Cが出土している。

杯A 図化できたのは7個体である。形態的・法量的に個体差が目立つ。特に4は、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁端部をわずかに外反させながら薄くおさめる。他は、底部から体部にかけては内湾気味に立ち上がり、口縁部を外反させ、端部を肥厚気味におさめる。底部はいずれもへら切りにより切り離されている。

また、7の内面見込みには、わずかにへら書きが認められる。

椀B 図化できたのは1個体のみである。口縁部を欠く。底部と体部の境において、内外面とも段落ちが認められる。体部はほぼ直線的にたちあがっている。底部はへら切りにより切り離されている。

椀C 椀B同様、図化できたのは1個体のみである。比較的深い椀形を呈し、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部を外反させている。底部は一部を欠損するため、全体の形状は不明確であるが、輪高台をなすものと推定される。体部上半部に1条の沈線が認められる。

次に、窯体内埋土出土の土器についてみていくことにする。器種としては、杯A・皿A・椀B・蓋B・壺・壺B・壺C・甕が出土している。杯Aが量的に最も多い。



杯A 床面出土土器と比べ、形態的・法量的に安定している。底部から体部にかけての立ち上がりは比較的直線的である。口縁部は、外反させるもの(13・14)と、直線的にのばすもの  
とにわけられる。口縁部を外反させるものは、体部の器壁に対して肥厚する傾向にある。底部  
はいずれもへら切りにより切り離されている。

11・13・15・17・18の内面見込みにへら書が認められる。いずれも、1本ないし2本の直線  
からなるものである。

皿A 図化できたのは2個体である。20は、底部から体部にかけての立ち上がりが不明瞭で、  
体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部と体部の境は他の器壁に対して極端に薄くなり、口縁部  
は肥厚する。底部はへら切りにより切り離されている。

21は残存状況がよくないため詳細に観察することはできないが、20に近い形態的特徴をなす  
ものと推定される。

椀B 図化できたのは2個体である。このうち22は図化により完形に復元されるものである。  
体部は底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部はへら切り  
により切り離され、明瞭な平高台をなす。

23についても、口縁部を欠くものであるが、22とほぼ同じ特徴を有するものと考えられる。

蓋B 図化できたのは1個体である。天井部に対して口縁部がほぼ直角に取りつく。口縁端  
部は、ほぼ水平な端面をなす。つまみは環状をなす。全体を回転ナデ調整により仕上げている。

壺B 図化できたのは5個体であるが、口縁部から底部まで残存するものはない。口縁部片  
と体部片とに分けられる。

口縁部片は2個体図化できたが、大きさが異なる。ただし形態的には同じ特徴を有する。頸  
部から口縁部にかけて斜上方に立ち上がり、口縁部が水平方向に大きく屈曲し、端部を上方に  
つまみあげている。

体部片は3個体図化できたが、いずれも肩部から底部にかけて残存するものである。いずれ  
も双耳壺に分類されるもので、肩部に耳が認められた。この耳を貼り付けるにあたって、30と  
31では肩部に割り付けが行われたようで、30は上に1条と下に2条の、31は1条の沈線が施さ  
れている。ただし、29においてはこのような沈線は認められなかった。3個体とも、底部はへ  
ら切りにより切り離されており、体部下半は弱い横方向のへら削りが施されている。

壺C 図化できたのは1個体で、しかも底部がわずかに残存するのみである。底部は輪高台  
をなすものである。

壺 底部片で、どの器種に分類されるか判断できないものである。平高台をなすもので、へ  
ら切りにより切り離されている。

甕 図化できたのは4個体であるが、大きさの点から2つに、口縁部の形態的特徴から3つ  
に分けられる。

口縁部の形態的特徴としては、①端部を口縁部の立ち上がり方向に対して直角に押しえ肥厚させるとともに端面を形成し、肥厚部分を外方につまみ出すもの、②端部を内側に折り返し、斜上方につまみ出すもの、③端部を口縁部の立ち上がり方向に対して直角方向に押しえ、わずかに肥厚させるとともに端面をなすもの、とに分けられる。

27においては、体部から口縁部にかけてタタキ技法により形成した後、ナデ調整により仕上げていることが観察できた。

### 3. 灰原出土遺物（挿図124～135）

向上・古城1号窯跡に伴う遺物の大半は、この灰原から出土している。先述したように、当窯跡の灰原は何層かに分層でき、層ごとに土器を取り上げたが、ここでは灰原出土として一括して報告することにする。出土した層についてはそのつど考慮していくことにする。

器種としては、杯A・蓋A・杯B・椀A・椀B・椀C・椀D・皿A・皿B・壺A・壺B・蓋B・壺C・壺・鉢A・鉢B・甕・羽釜・平瓶が出土している。以下、各器種ごとにみていくことにする。

杯A 量的に最も多く出土しており、図化した点数も最も多い。

主に口縁部の形態から、大きく3タイプに分類できる。①体部から口縁部まで直線的に立ち上がり、端部を丸くあるいは薄くおさめるもの、②体部から口縁部にかけてわずかに内湾気味に立ち上がり、体部と口縁部の境の器壁を薄くし口縁端部を内側に肥厚させるもの、③体部から口縁部にかけてわずかに内湾気味に立ち上がり、端部をわずかに外反させるものである。ただし、各タイプ内においても多くの個体差を内包している。底部はいずれもヘラ切りである。ヘラ切り後、ナデ調整を施すものと施さないものがある。

なお47～52では図化したようにヘラ書が認められたが、これら以外にも1・3・39・21・39・43・46の内面見込みにヘラ書が認められる。50・52のような直線的なものが多く、他は47～49のような螺旋状のものである。51のような井桁状のものは、この1個体のみである。

蓋A 杯Aについて量的にまとまって出土している。焼け歪みを考慮に入れなければならないが、天井部が山形をなし器高が高いものと、天井部が平坦で器高が低いものとに分けられる。天井部はいずれもヘラ切りにより切り離されている。ただし、ヘラ切り後、ナデ調整を施すものと施さないものがある。量的には前者のほうが多い。

なお、57の天井部外面にはわずかにヘラ書が認められる。

杯B 蓋Aと対応する器種であることもあり、蓋Aとほぼ同じ量が出土している。

底部から体部がほぼ直線的に斜上方に立ち上がり、口縁部を外反させ端部を薄くおさめている。ただし、体部の立ち上がりにおいて、わずかに内湾気味のものも認められる。また、口縁部の外反についてもその度合いに個体差が認められるが、どの個体も外反を意識した強いナデ

調整が施されている。体部・口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。

底部と体部の境に、外方に踏ん張る断面逆台形の高台がつく。高台は全体的に低く、3 mmから6 mm程度で、4 mm以下のものが最も多い。高台は、底部をへら切りにより切り離した後貼り付けられている。また94においては、底部外面の高台の内側に高台を貼り付けた際の爪先の圧痕が観察される。

98と99で内面見込みにへら書が認められ図化したのが、この図化した個体以外に、88・90・91においても内面見込みにへら書が認められる。この他95においては、体部外面にへら書が認められる。

椀A 1個体のみ出土である。しかも体部上半から口縁部を欠く。

底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がる。この境に、断面長方形を呈し外方に踏ん張る高台が付く。高台高は杯Bに比べて高く、その高さは1 cmである。高台は、底部をへら切りにより切り離した後、貼り付けられている。

椀B 椀形態のなかでは最も多く出土した器種で、24個体図化できた。

当型式については、底部の切り離し方法において大きく2つに分けることができる。ひとつは底部をへら切りにより切り離すもの（Ba-83・101~118）であり、もうひとつは底部を回転糸切りにより切り離すもの（Bb-119・121~123）である。

まず椀Baについてであるが、法量的・形態的に個体差が目立つが、以下の2タイプに大別できる。①体部がほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部をわずかに外反させるものと、②体部がわずかに内湾気味に立ち上がり口縁端部をわずかに外反させるもの、である。①については、内面見込みの段落ちが認められないか、わずかであるのに対して、②には比較的顕著に認められるものがある。

椀Bbについては量的に少なく、完形に復元される個体も少ない。完形に復元される個体は2個体であるが、形態的・技法的特徴はほぼ同じである。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部を強いナデ調整により外反させ、端部を薄くおさめている。底部をへら切りにより切り離すものより、相対的に体部の立ち上がり角が急である。内面見込みには明瞭な段落ちは認められない。

椀Bbは、椀Baとは胎土が異なり、相対的に精良である。また、椀Bbと確認できた個体は全て良好な焼成状態である。

椀Ba・椀Bbの違いに限らず、内面見込みにへら書が認められる。螺旋状に施すものと、直線をクロスさせるものがある。この他、118の「用」と判読できるへら書は注目される。図化した個体の他に、102・119・122においてもへら書が認められる。いずれも1条の直線からなるものである。

椀C 図化できたのは2個体のみである。2個体とも底部を回転糸切りにより切り離す点が共通している。

120は、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、口縁部を強いヨコナテ調整により薄くおさめている。体部中位外面に沈線が施され、2周半している。

底部を観察すると、糸切りを試みているが一度失敗したようで、一部補修している。しかし、焼成時には補修部分が剥がれたようである。

124は体部中位までしか残存しないため、1条の沈線がかりうじて確認することができるのみである。

椀D 量的には少なく、図化できたのは4個体である。いずれも口縁部から体部にかけての破片で、底部まで残存するものは確認できなかった。

体部中位に断面方形ないし台形の凸帯が貼り付けられている。口縁端部を外方へつまみ出し、端部を薄くおさめるタイプと、体部から口縁端部まで直線的にのぼし端部を薄くおさめるタイプに大別できる。特に後者は、器壁が全体的に薄く仕上げられている。

皿A 比較的まとまって出土している。体部から口縁部にかけての形態から2タイプに分類できる。

ひとつは、口縁部にかけてわずかに内湾気味に立ち上がり、口縁部を水平方向に外反させ端部を薄くおさめるものである。後者に対して口径が大きい傾向にある。

もうひとつは、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめるもの(132・134・135・137・138・139)である。

両タイプとも、底部はヘラ切りにより切り離されている。一部の土器では、ヘラ切り後ナテ調整による仕上げが認められる。また、底部以外は回転ナテ調整により仕上げられている。

また142では、内面見込みに螺旋状のヘラ書が認められる。この他図化できなかったが、133の内面見込みにも、ヘラ書の一部が残存している。

皿B 出土量は少なく、図化できたのは2個体に限られる。

2個体とも、形態的・技法的にほぼ同じ特徴を有するものである。皿Aの前者のタイプに輪高台がつくものである。ただし、法量的には皿Aより口径が小さく、皿Aの后者のタイプに近い。高台は、断面逆台形のもので、わずかに外方に踏ん張るように貼り付けられている。

壺A 口縁部から底部まで復元できるものは出土していない。このため壺Bと類似するものが多く、明確に壺Bと区別できるものは少ない。口縁部に関しては口径が小さいもの、底部に関しては底径が小さいものを、壺Aに分類した。また体部片については、肩部に耳のないものを本型式に分類した。

口縁部は全て同じ特徴を有するものである。直立する頸部から口縁部が大きく外反し、端部を上方へつまみ上げ、薄くおさめている。端部は非常にシャープである。内外面とも回転ナテ

調整により仕上げられている。

体部は長胴タイプ (156~159) と、丸胴タイプ (148・149) とが出土している。長胴タイプは壺Bと同じ特徴を有するものである。丸胴タイプについても、整形技法は長胴タイプと同じである。なお149の肩部には2条の沈線が施されている。

壺B 当器種についても口縁部から底部まで復元できるものは出土していない。大きく口縁部片と体部片とに分けられる。口縁部については、壺Aと同じ特徴を有する。

体部については、肩部の特徴から、①耳が両側につくもの、②凸帯を巡らすもの、③凸帯と沈線を巡らすものの3タイプに分類できる。

②については、凸帯が1条のもの、2条のものがある。1条のものについては、凸帯の断面形は三角形を呈し、2条のものについては方形を呈する。

②と③の凸帯の貼り付け部をみると、沈線を施した後、沈線をトレースするように凸帯を貼り付けているものが認められる。沈線が凸帯を貼り付けるための割り付けの役割をはたしていたようである。

蓋B 4個体図化できたが、つまみの形態より2タイプに分けられる。つまみが宝珠形をなすものと、環状をなすものである。

前者は天井部に対して口縁部がほぼ直角に屈曲し、口縁端部に内傾する端面をもつ。これに対して後者は、天井部から口縁部にかけて丸味をもつ。口縁端部の形態は前者と同じである。

壺C 大型と小型に分類でき、前者が大半を占める。

大型のものについても口径などに若干の個体差が認められるが、形態的・技法の特徴はほぼ同じものである。底部は、高い高台が付くものと、低い高台が付くものがある。高い高台については、端部が内側に肥厚する。低い高台については、断面方形を呈し外方に踏ん張る。

小型のものは図化した2個体のみであるが、互いにタイプを異にする。143は肩部と頸部の屈曲がゆるやかで、口縁端部を外方につまみ出すようなナデを施し、外傾する端面をもつ。144は、体部中位が直線的である点が特徴的である。

鉢B 図化できたのは3個体である。内傾する口縁部に強いナデ調整を施すとともに、端部をわずかに肥厚させ、ほぼ水平な端面をなす。198については、口縁部を欠くため196・197と同じタイプに分類されるものなのかどうかは判断できない。底部は丸底をなすが、底部から体部への変換部外面を弱いヘラ削り調整により仕上げている。

鉢A 図化できたのは1個体である。直線的に立ち上がる体部から口縁部が外方に大きく屈曲し、端部を外方へつまみ出し外端面をなす。胎土中に2mm大の砂粒を多く含む。土師器を還元焼成したものと考えられる。

甕 図化できた土器は、いずれも口縁部から頸部にかけての破片のため、細かな型式分類は困難である。体部外面をタキ整形により仕上げている。

甕D 図化できたのは1個体のみである。立ち上がりのきつい肩部から「く」字形に屈曲し口縁端部を内側上方につまみあげ端部を薄くおさめている。外面は縦方向のハケ調整、内面はナデ調整により仕上げられている。胎土中に2mm大の砂粒が多く含まれており、鉢A同様土師器を還元焼成したものと考えられる。

羽釜 4個体図化できたが、底部まで残存するものはない。口縁端部の形態により2タイプに分類できる。①端部を外方につまみ出すようなナデを施し上端面をなすものと、②内側上方につまみ出すようなナデを施し、外傾する端面をなすものである。

他の特徴は同じである。内外面ともナデ調整を主体に仕上げられている。また、先の甕D同様、胎土中に2mm大の砂粒を多量に含んでいる。

平瓶 把手が2個体分出土している。本体については確認できなかった。

#### 4. 周溝出土遺物 (挿図136~138)

比較的多くの土器が出土している。器種としては、杯A・蓋A・杯B・椀B・皿A・皿B・壺A・壺B・蓋B・壺C・鉢A・甕D・羽釜・火舎が出土しており、灰原同様多器種に及ぶ。

杯A 窯体内および灰原では高い比率で出土していたが、周溝内出土のものは比較的少ない。基本的には同じタイプに分類されるもので、体部が内湾気味に立ち上がり口縁部を強く外反させている。体部と口縁部との境に強いナデ調整を施し口縁部を肥厚気味にするものと、体部から口縁部までほぼ同じ厚さに仕上げるものとに分けられる。底部はいずれもヘラ切りによっている。

なお251は底部のみの残存であるが、内面見込みにヘラ書による絵画のようなものが認められる。その内容は解読できない。また、図化できなかったが、241の内面見込みにヘラ書が認められる。

蓋A 図化できたのはいずれも天井部が平坦で器高の低いタイプである。天井部中央まで残存するものはなかったが、つまみはないものと推定される。

杯B 図化できたのは1個体のみで、しかも底部のみの残存である。底部をヘラ切りにより切り離れた後、高台を貼り付けている。底部の高台内側には、貼り付けの際の爪先の圧痕が認められる。

椀B 全体を復元できる個体は少ないが、体部から口縁部にかけての形態から2タイプに分類できる。①体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がるものと、②体部から口縁部にかけて大きく内湾しながら立ち上がるものとである。いずれも口縁部を外反させ、端部を薄くおさめている。また、内面見込みの落ち込みも不明瞭で、底部はヘラ切りにより切り離されわずかに平高台をなす。これらのなかで、225の内面見込みには、「用」と記したヘラ書が認められる。

皿A 本器種についても体部から口縁部にかけての形態から2タイプに分類できる。①体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり端部を丸くおさめるものと、②体部から口縁部にかけてわずかに内湾気味に立ち上がり、口縁部を大きく外反させ端部をうすくおさめるものである。両タイプとも底部はへら切りにより切り離されている。

皿B 図化できたのは1個体のみである。皿Aの②のタイプに輪高台が付くものである。高台は、底部をへら切りにより切り離した後貼り付けられている。

壺B 全体を復元できるものは出土していないが、口縁部片と体部片が出土している。口縁部は、窯体内・灰原から出土したものと同一特徴をもつ。

体部は、肩部に4条の沈線を施した後耳を貼り付けるものと、沈線・凸帯を施さずに耳のみを貼り付けるものがある。底部はいずれもへら切りにより切り離されている。

蓋B 宝珠形をなすつまみが1個体分出土しているのみである。

壺C 灰原出土の壺C同様、大型と小型の2種が出土している。小型のものは、肩部から底部にかけて残存するもので、底部は平底をなす。

大型のものは完形に復元できるものである。図化できた2個体とも底部は輪高台を貼り付けている。243は、体部を縦方向を主体としたタタキ整形により仕上げている。口頸部は内外面とも回転ナデ調整により、底部内面は強いユビナデ調整により仕上げられている。

口縁端部の形態は、243は内側上方につまみ上げ外傾する端面をなす。これに対して244は、端部を上方から押さえるようなナデ調整を施し、平坦面をなす。

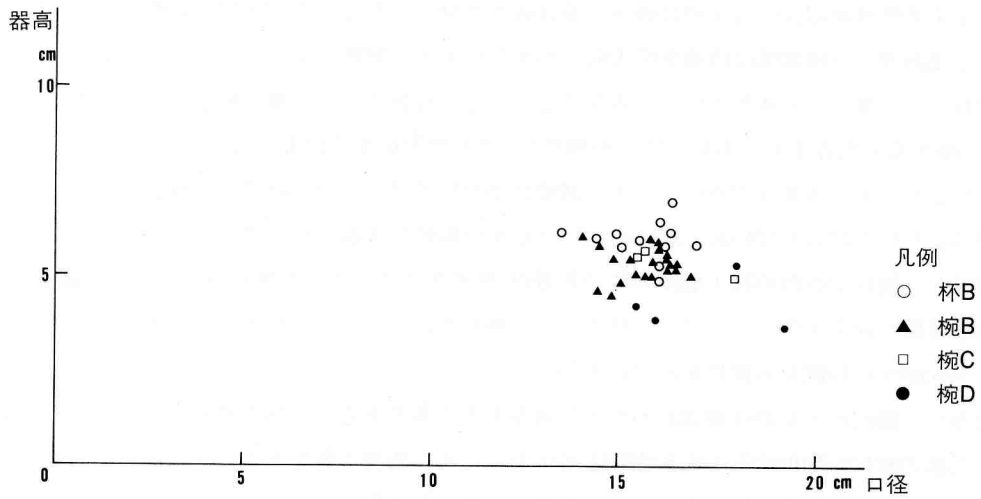
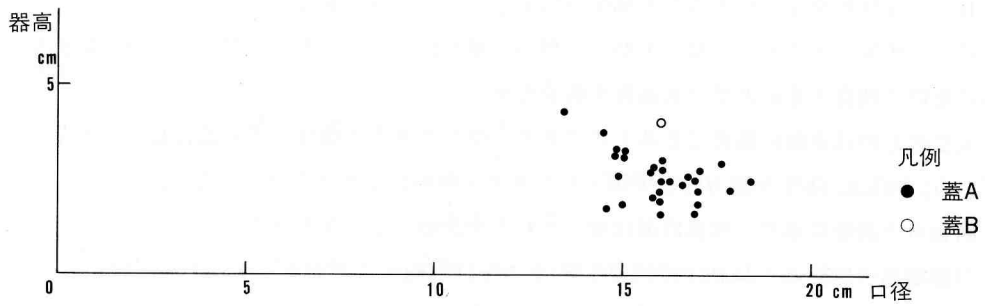
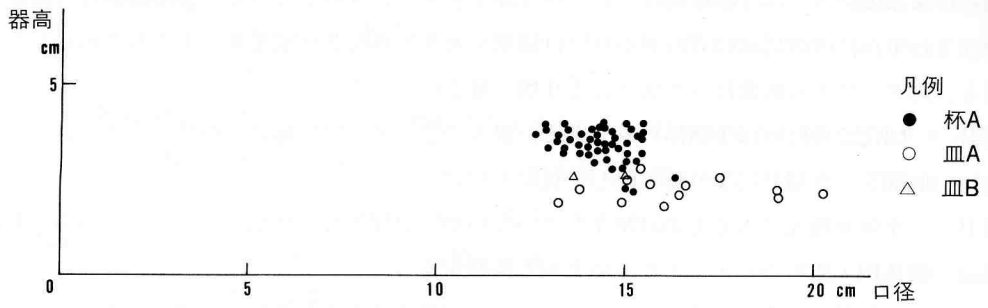
鉢A 完形に復元できるもの(245)と、口縁部片が出土している。245は、壺Cに近い形態を呈する体部から、「く」字形に外反する口縁部が付くものである。体部の調整技法についても同じである。口縁端部は内側水平方向につまみ出すナデ調整により、平坦面をなす。

甕D 口縁部から体部中位まで残存するもので、長胴タイプの甕と推定される。体部中位には、水平ないし左上がり方向の叩きが残存し、これに対応する内面には同心円文が認められる。これより上半の体部は内外面ともナデ調整により仕上げられ、口縁部は内外面ともヨコナデ調整により仕上げられている。胎土中に、2mm大の砂粒を多量に含んでいる。

羽釜 図化できたのは1個体のみであるが、灰原出土のものより整形方法が良好に観察でき、体部は縦方向を主体としたタタキ技法により整形されている。灰原出土の羽釜同様、胎土中に2~5mm大の砂礫を多量に含んでいる。

火舎 輪高台と窓の下端部がわずかに残存するのみである。全体を復元することができず、また他の窯にも類似するものが出土していないため、器種を特定することは困難である。長岡京出土のものに類似することから、本書では火舎として報告しておく。

向上・古城1号窯跡



挿図121 向上・古城1号窯跡須恵器法量グラフ



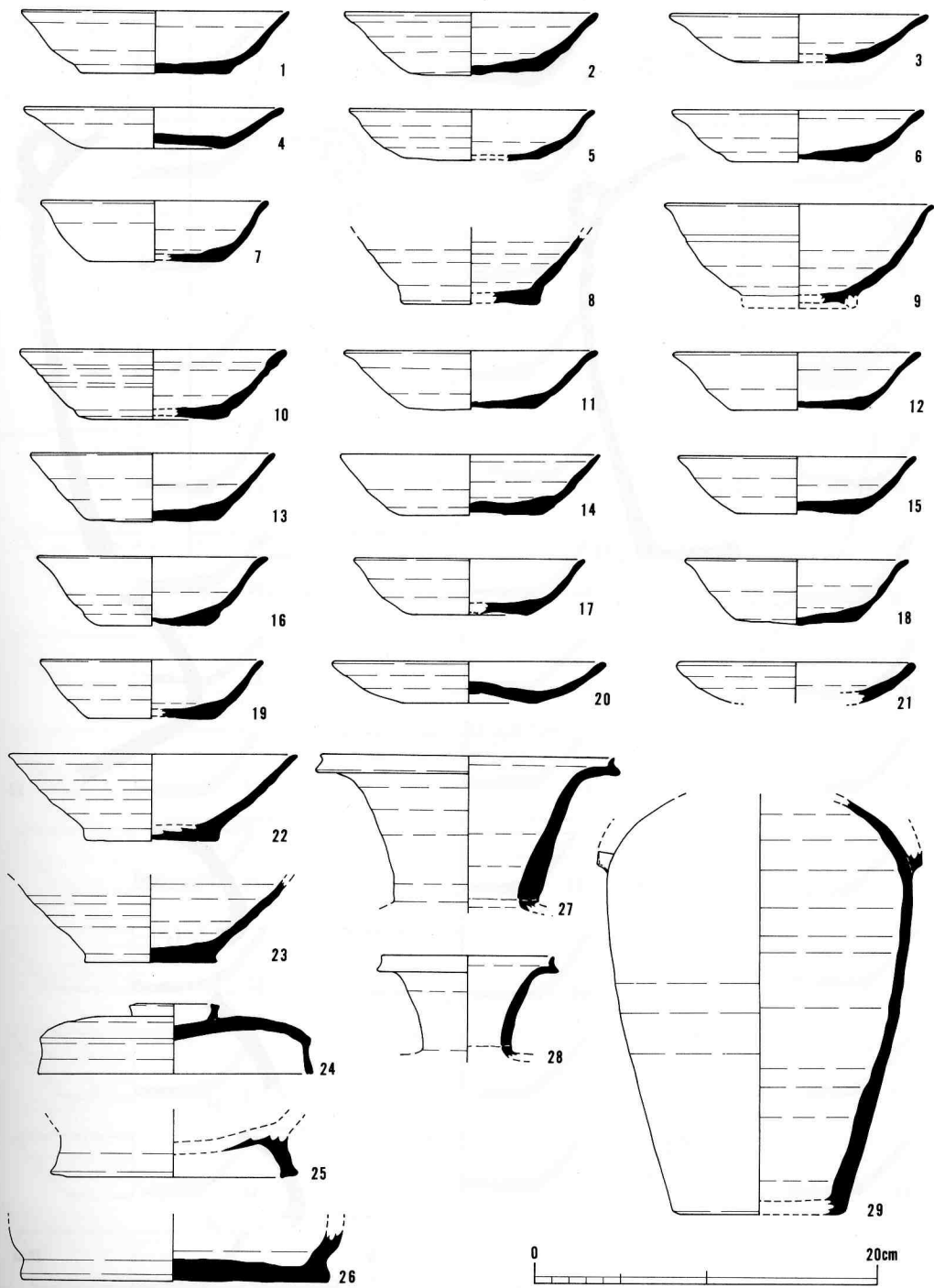


插图122 向上·古城1号窯跡窯体内出土須惠器(1)

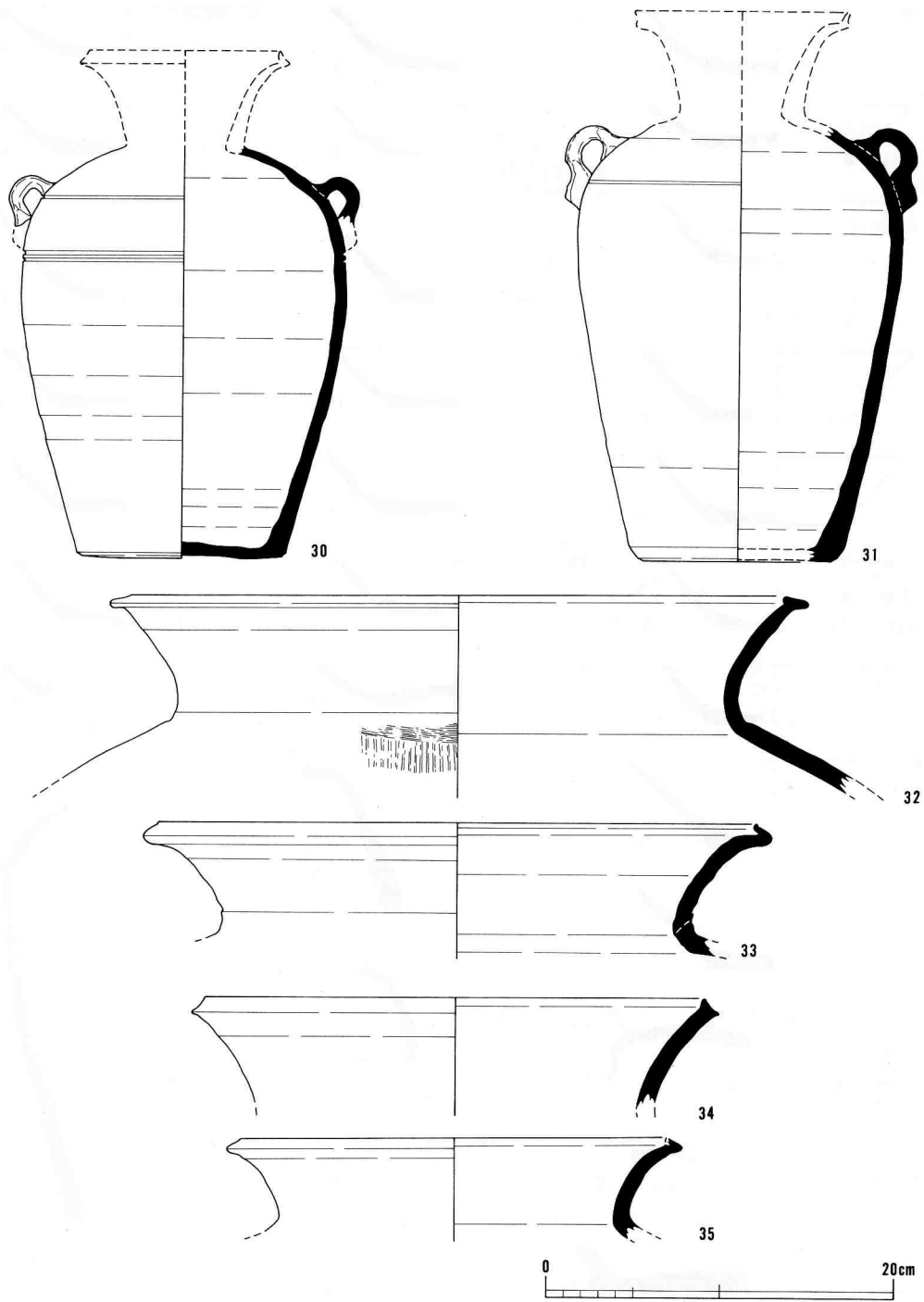


插图123 向上·古城1号窯跡窯体内出土須恵器(2)

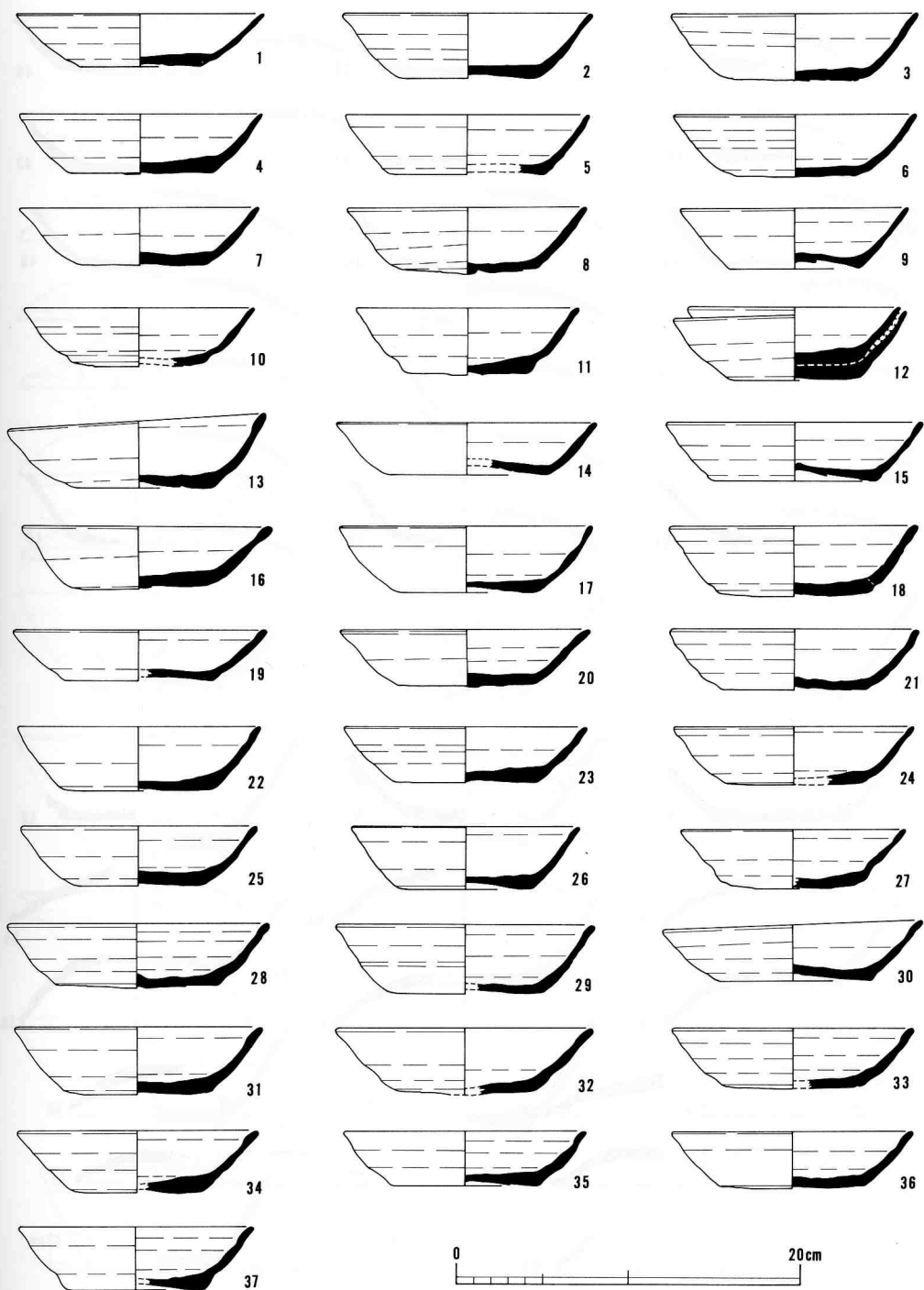


插图124 向上·古城1号窯跡灰原出土須惠器(1)

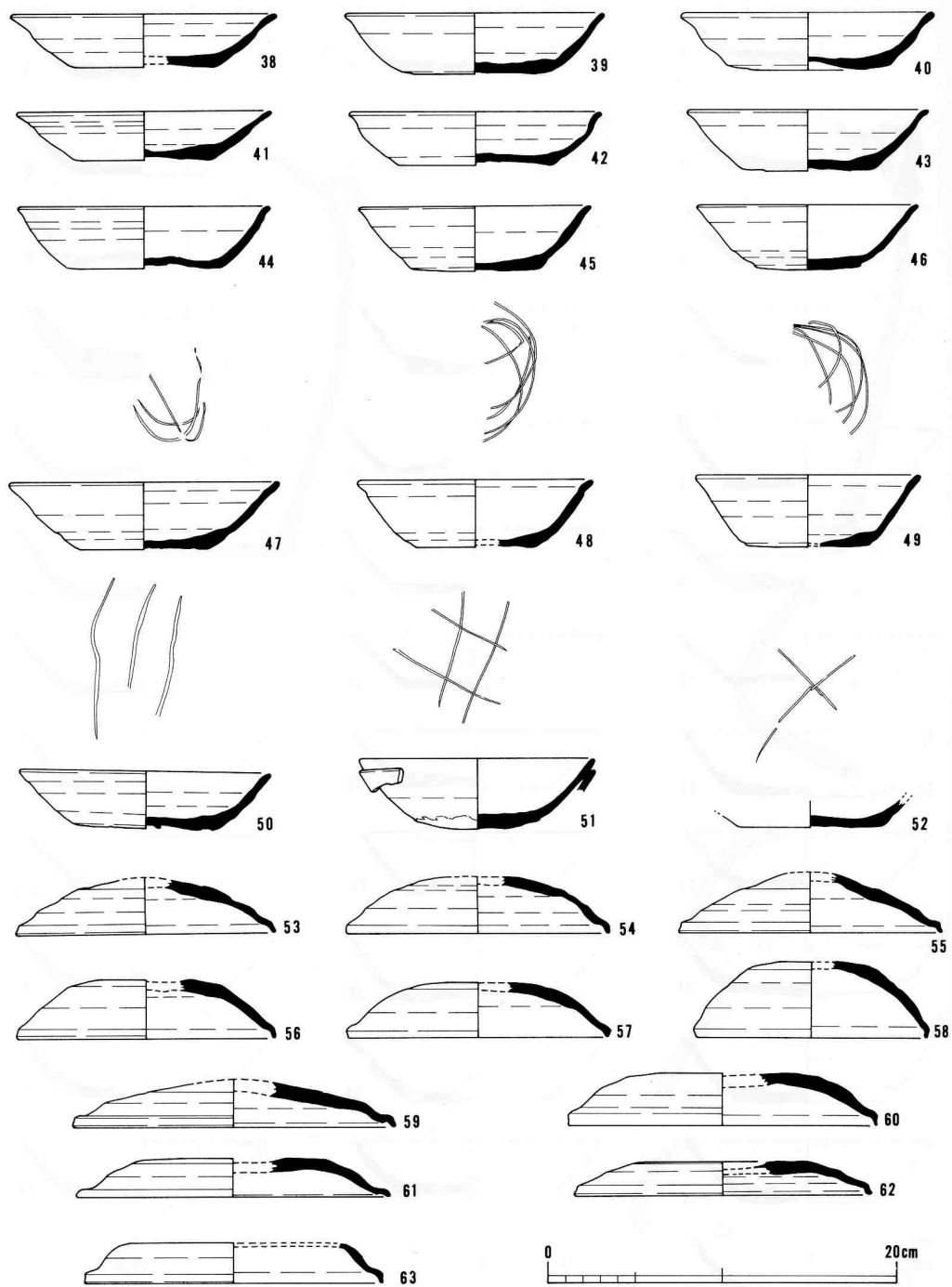


插图125 向上·古城1号窯跡灰原出土須惠器(2)

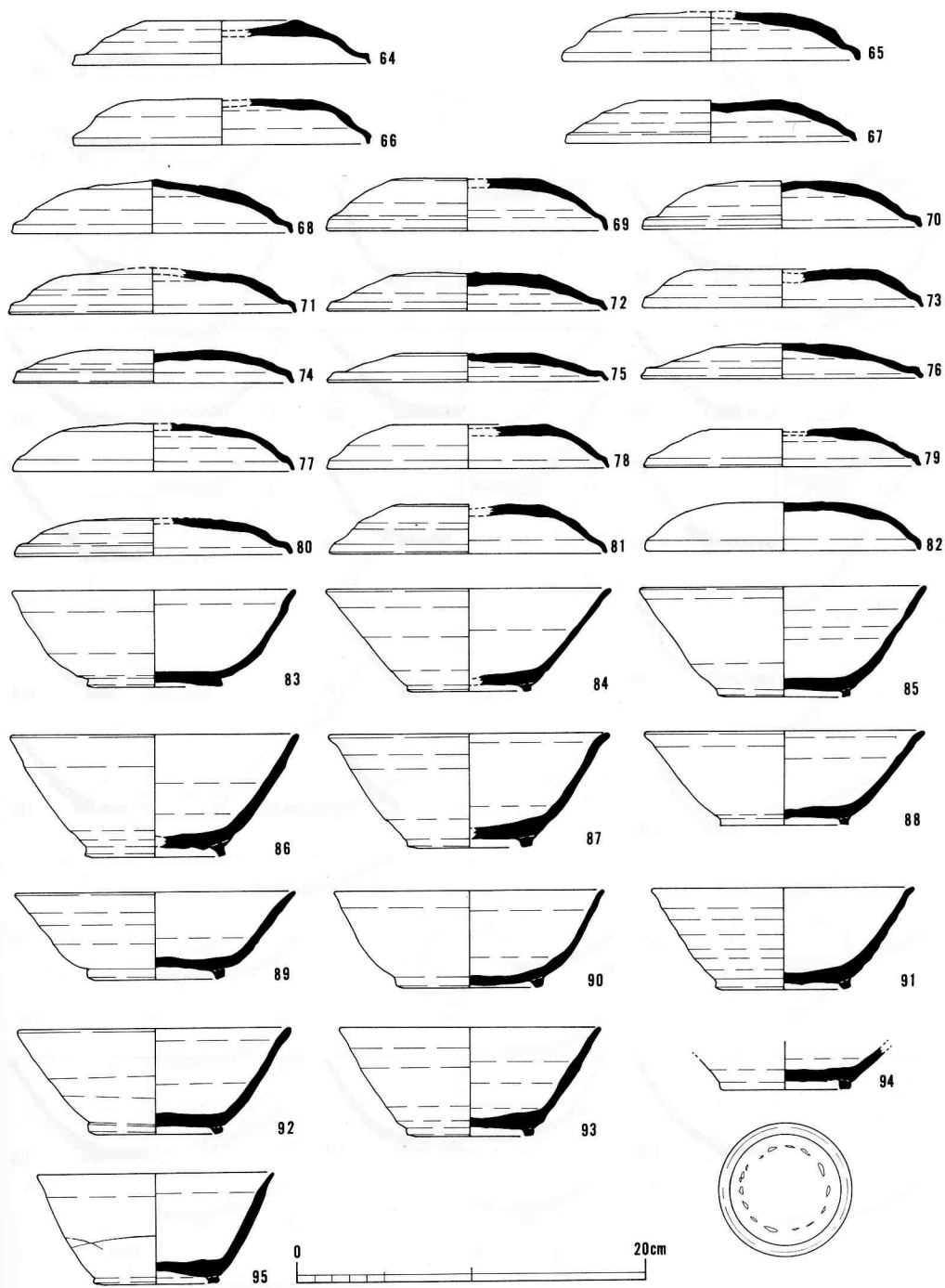


插图126 向上·古城1号窑迹灰原出土须惠器(3)

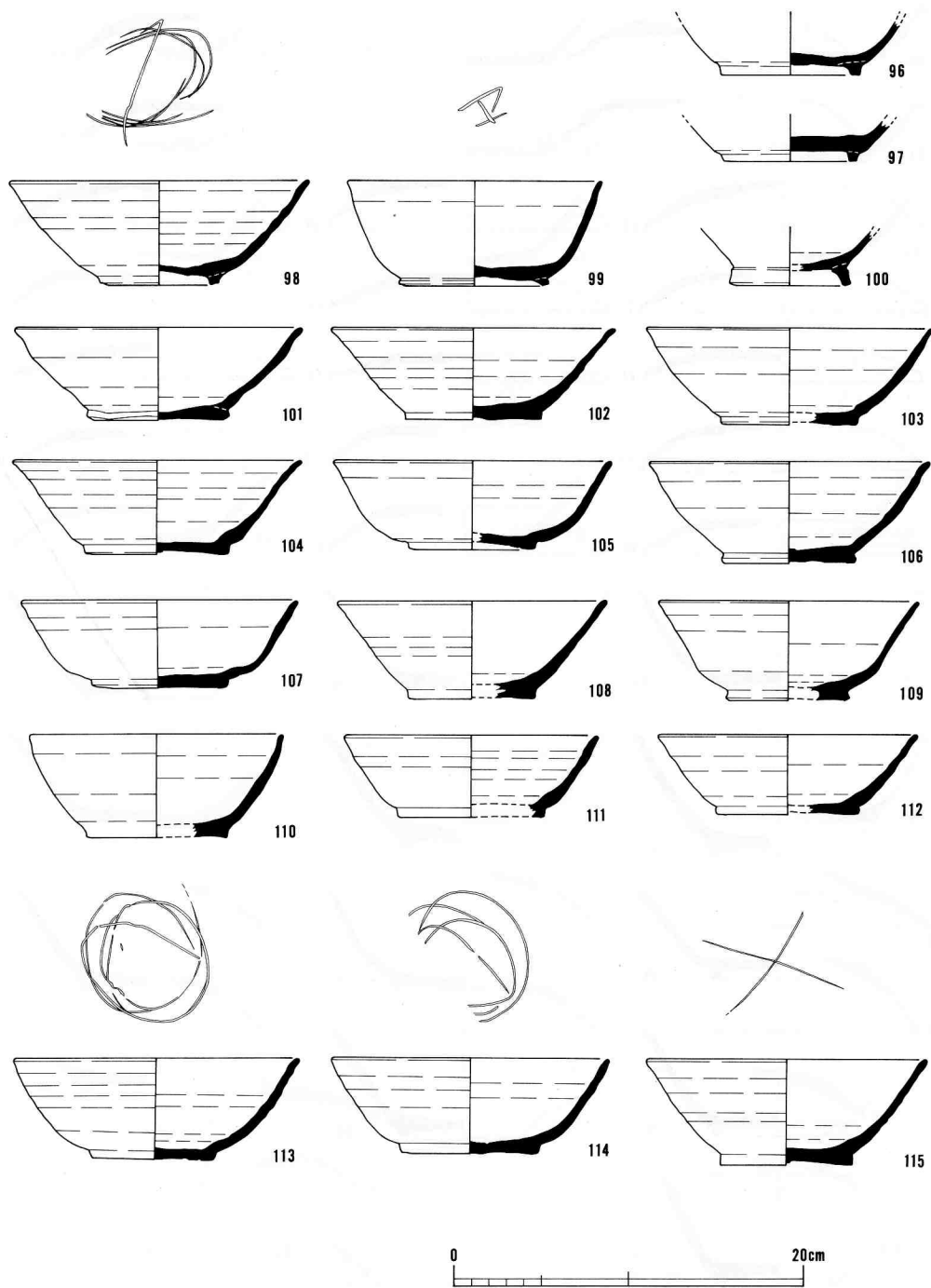


插图127 向上・古城1号窯跡灰原出土須恵器(4)

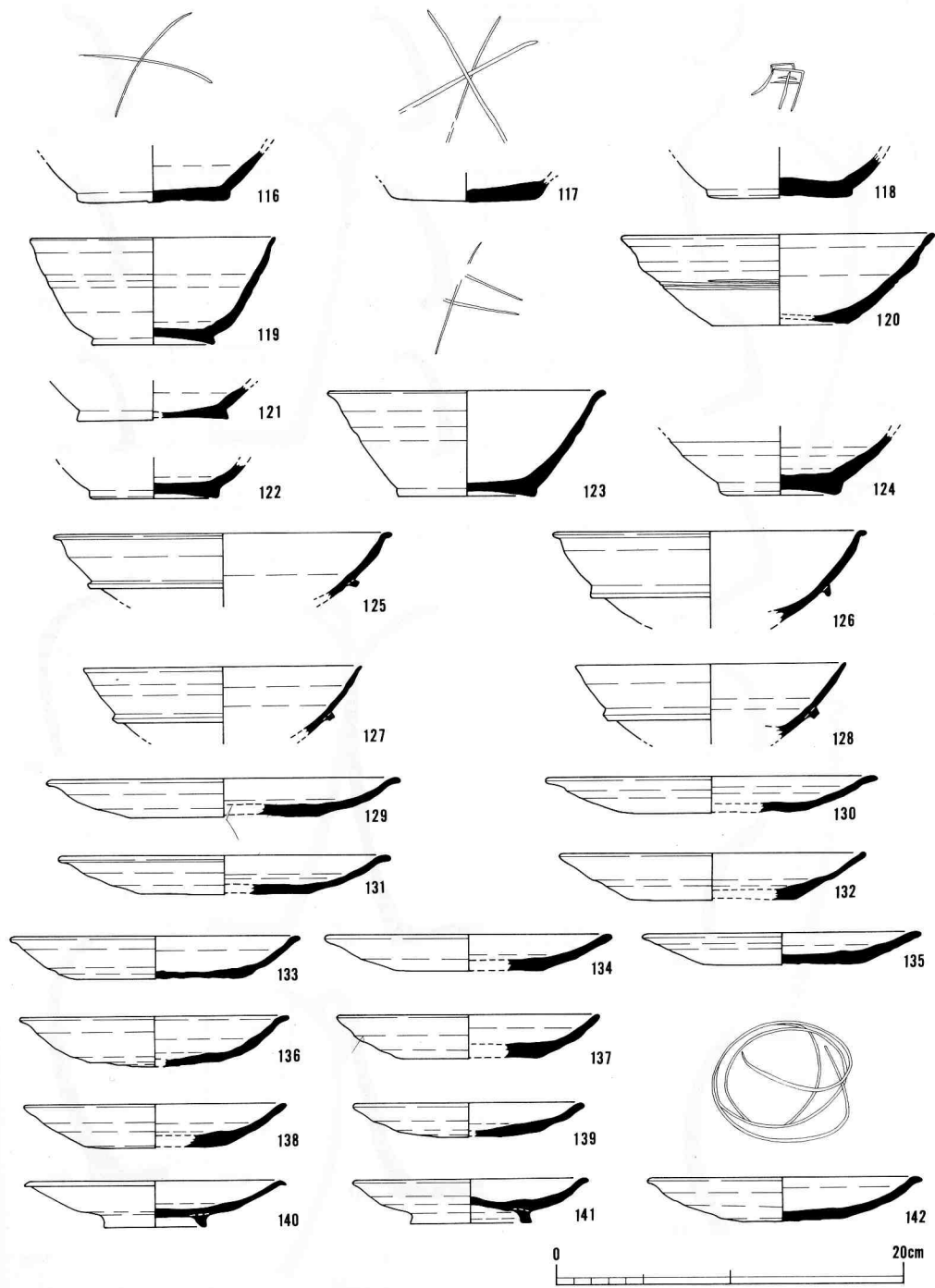


插图128 向上·古城1号窯跡灰原出土須惠器(5)

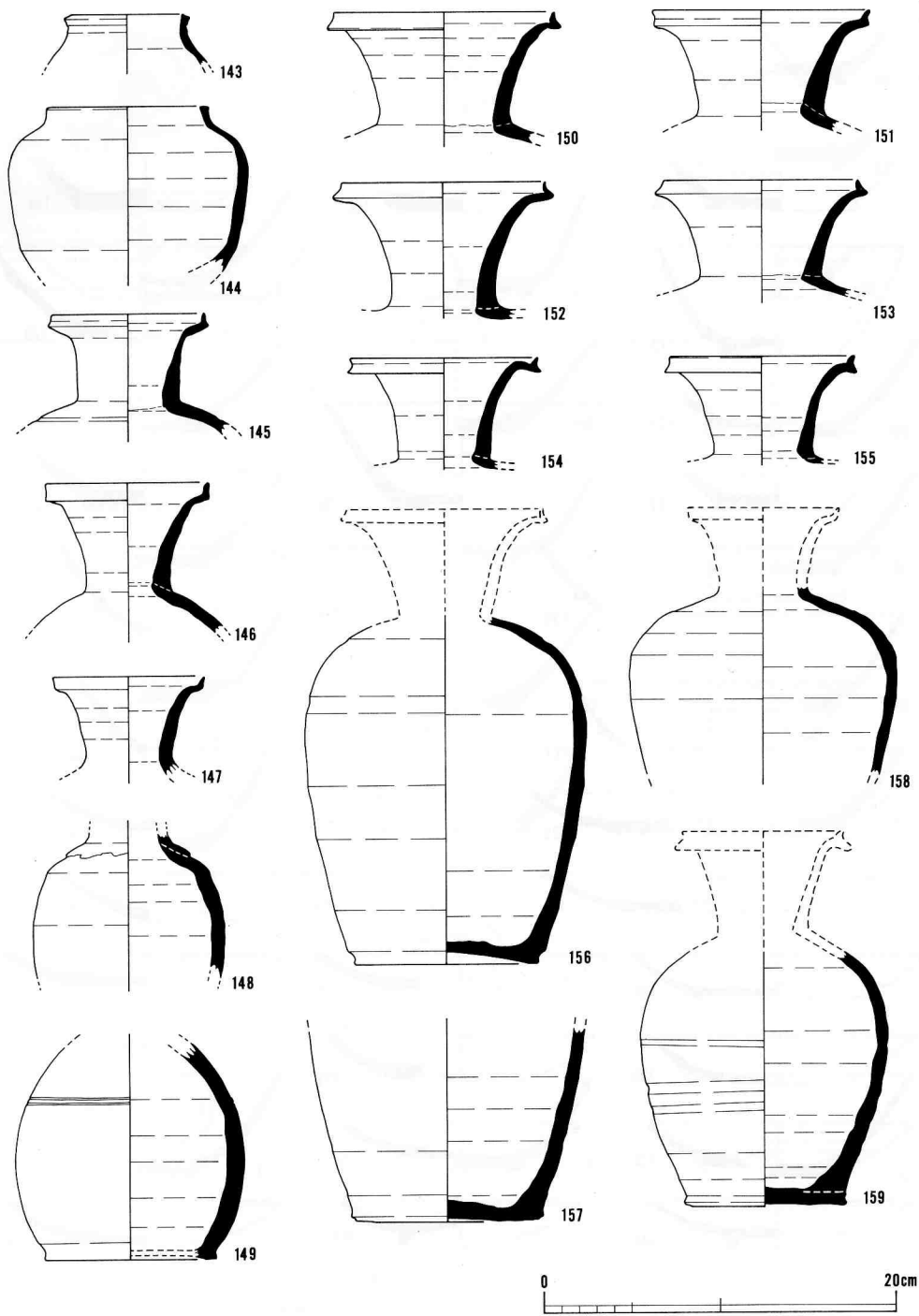


插图129 向上·古城1号窯跡灰原出土須惠器(6)



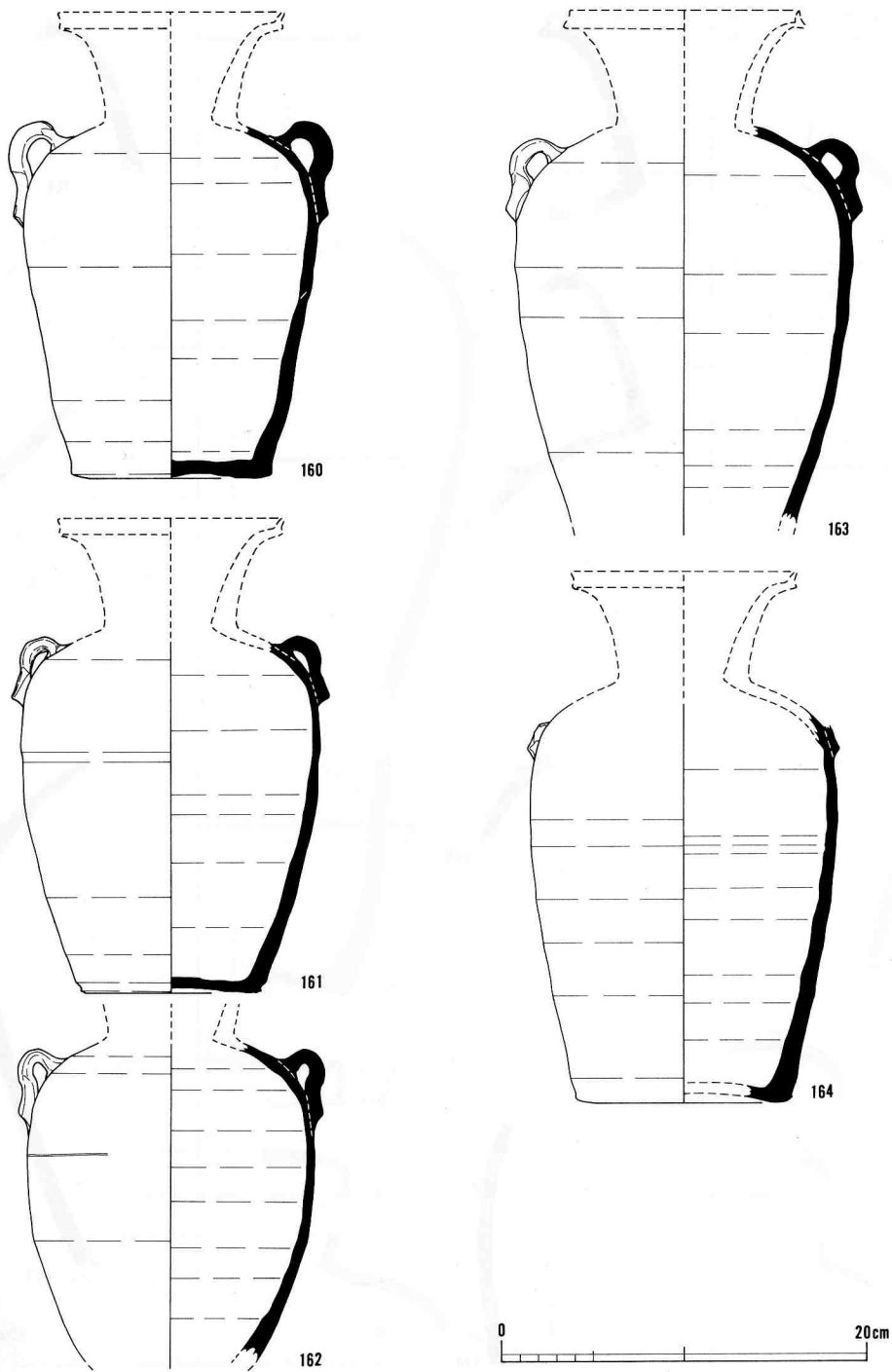


插图130 向上·古城1号窯跡灰原出土須惠器(7)

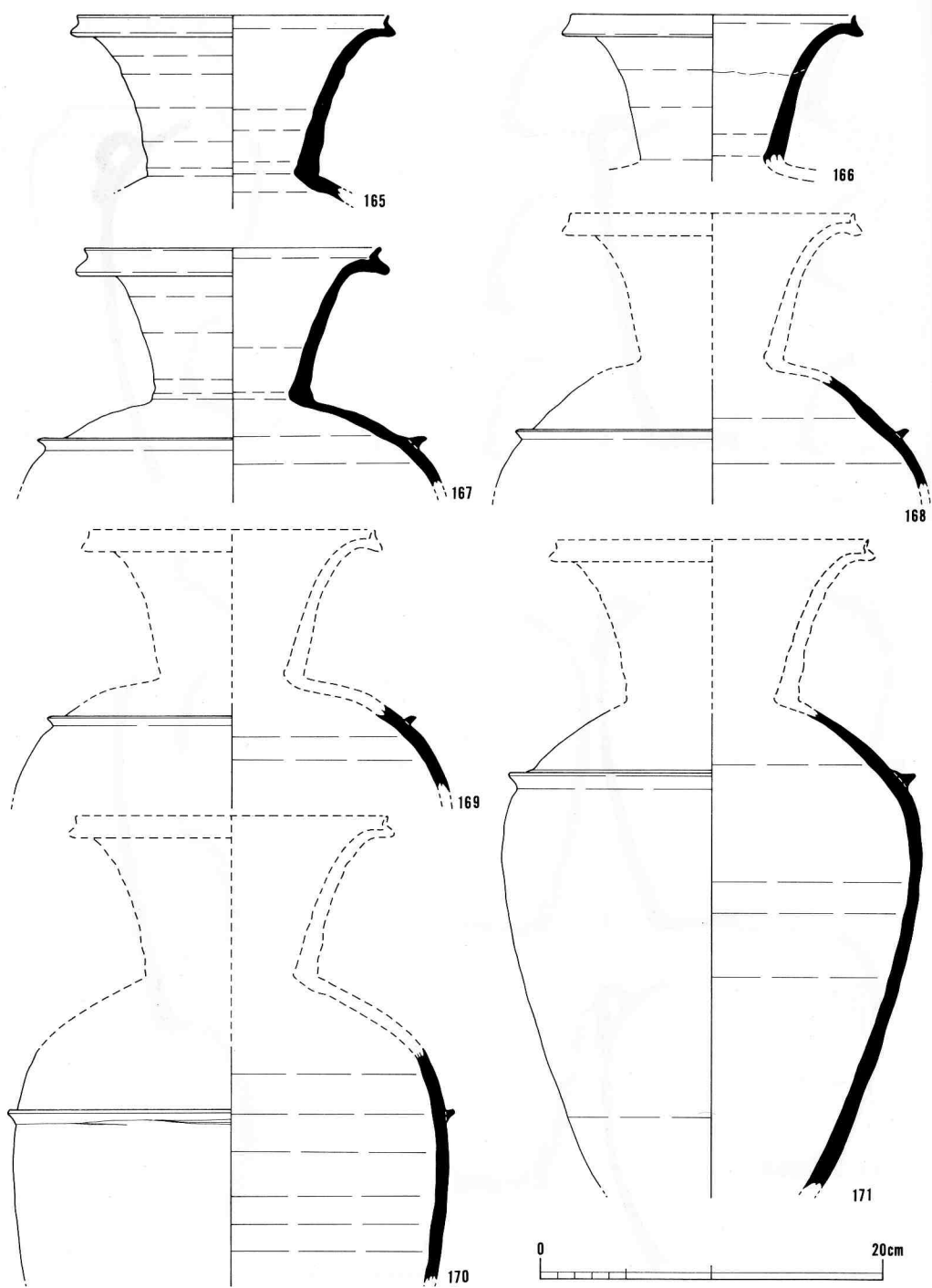


插图131 向上·古城1号窯跡灰原出土須惠器(8)

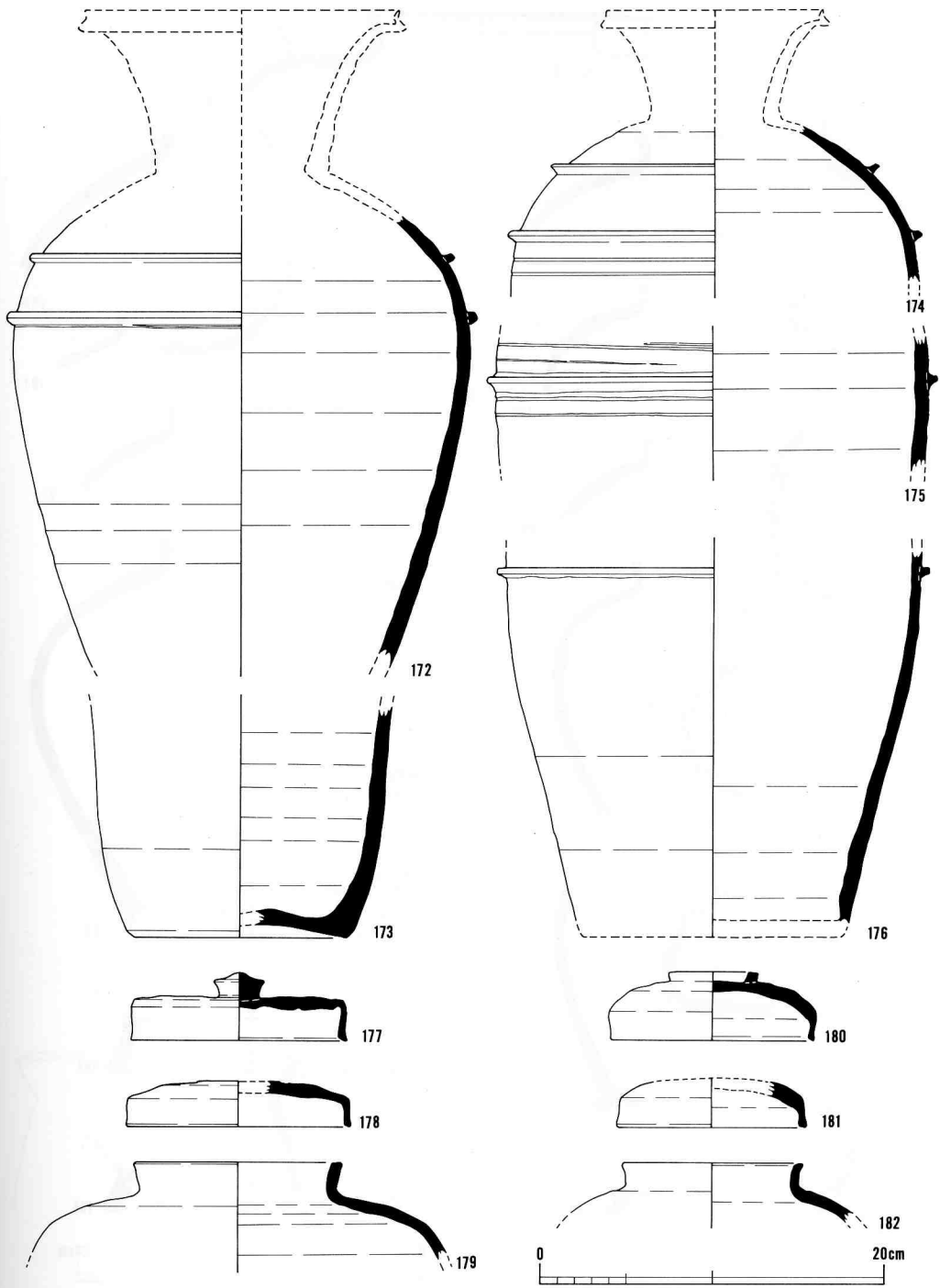


插图132 向上·古城1号窯跡灰原出土須惠器(9)

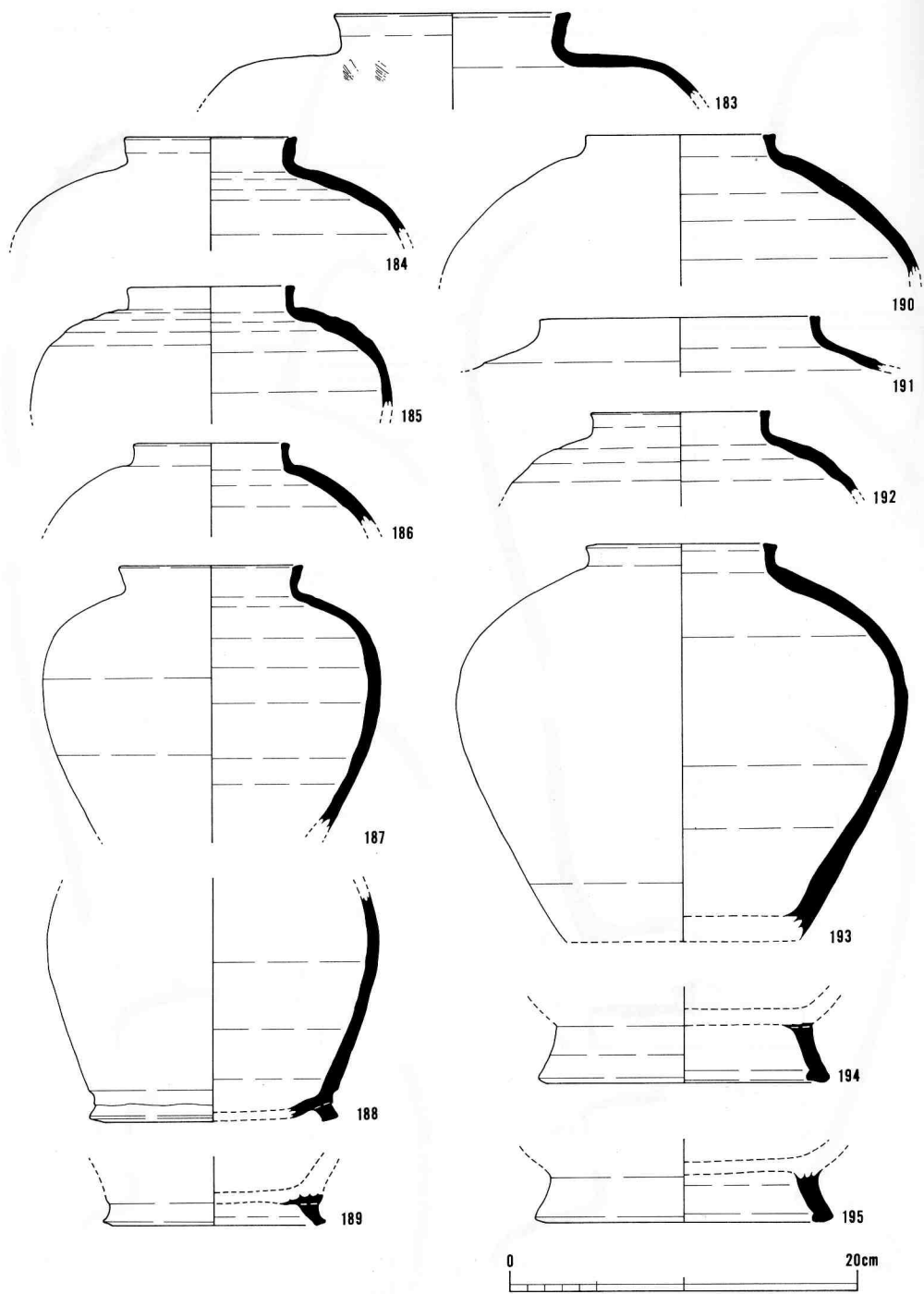


插图133 向上·古城1号窯跡灰原出土須惠器(10)

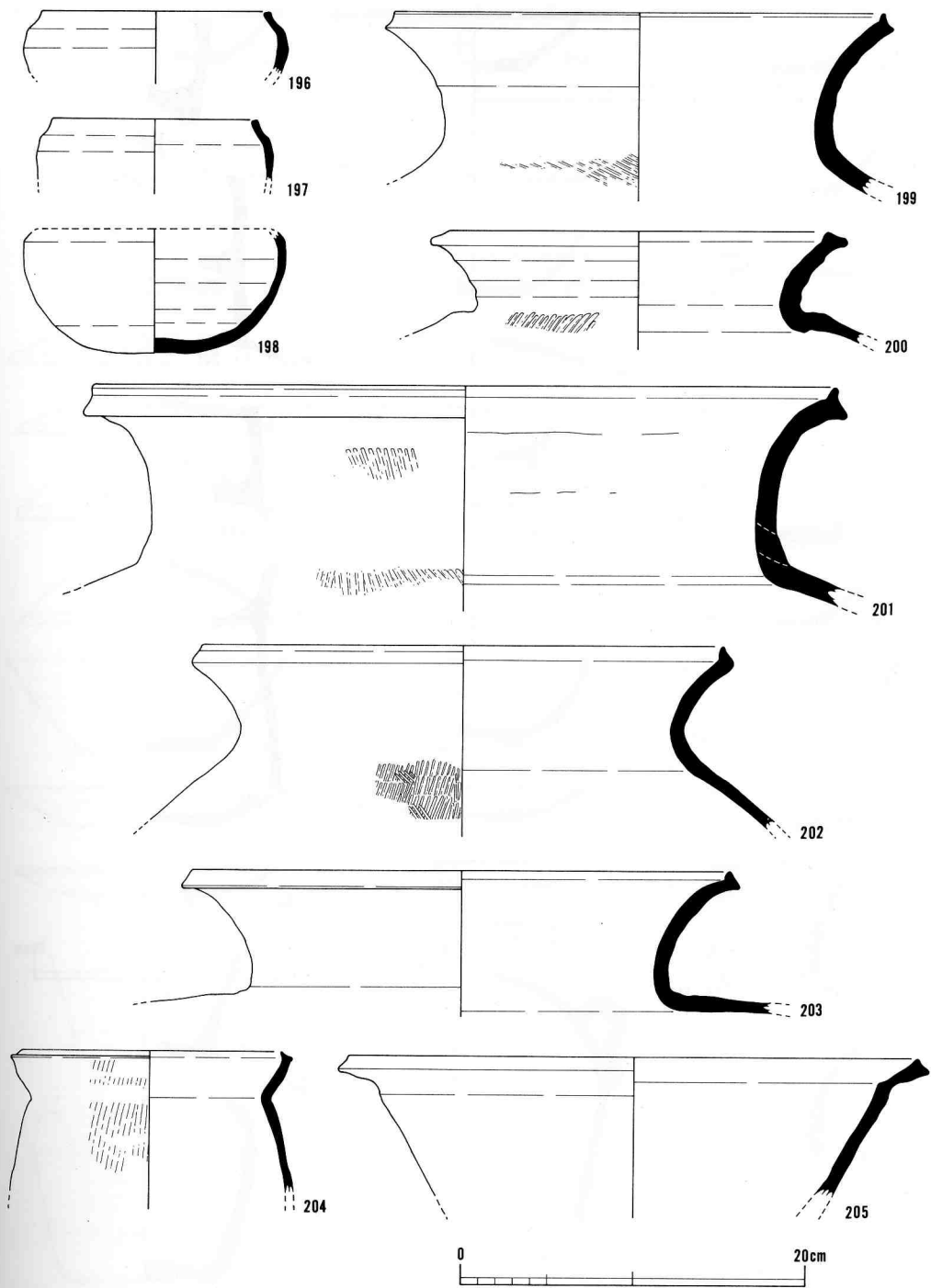


插图134 向上・古城1号窯跡灰原出土須惠器(11)

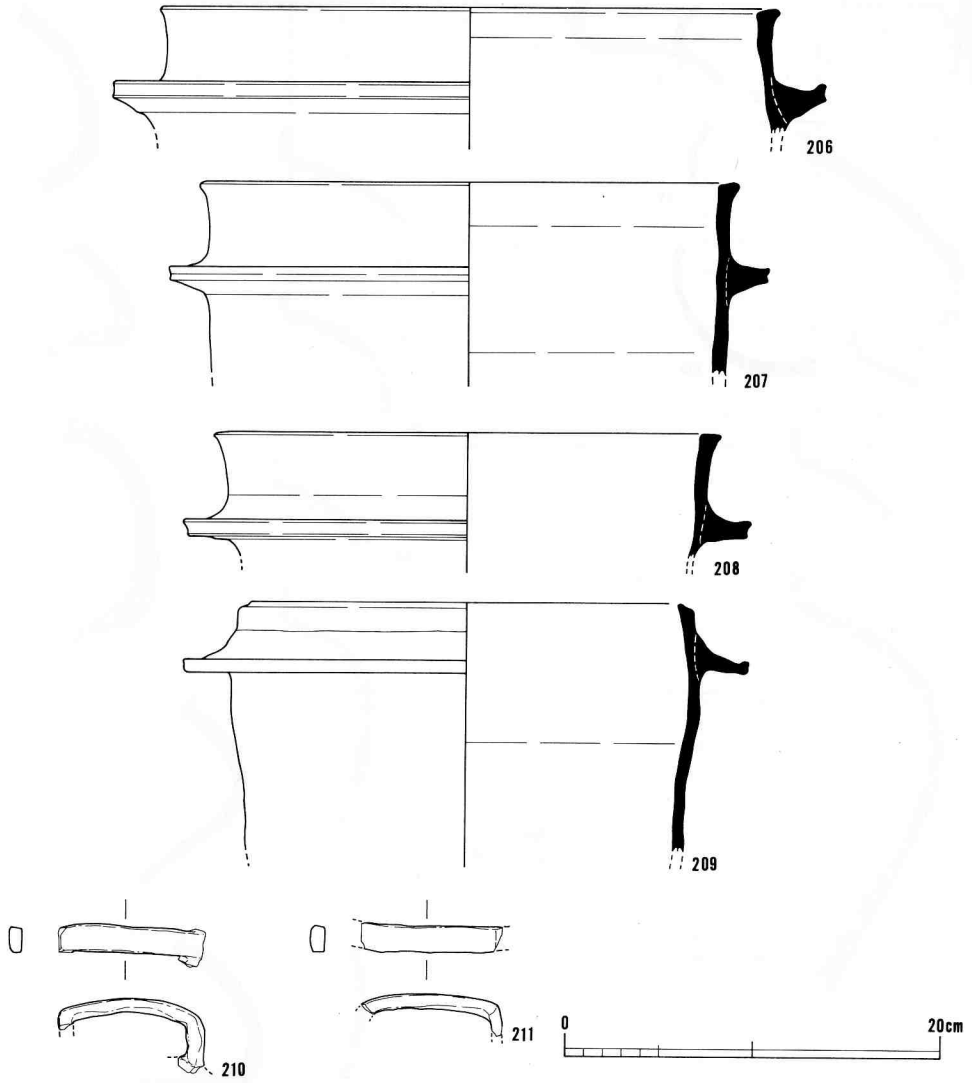
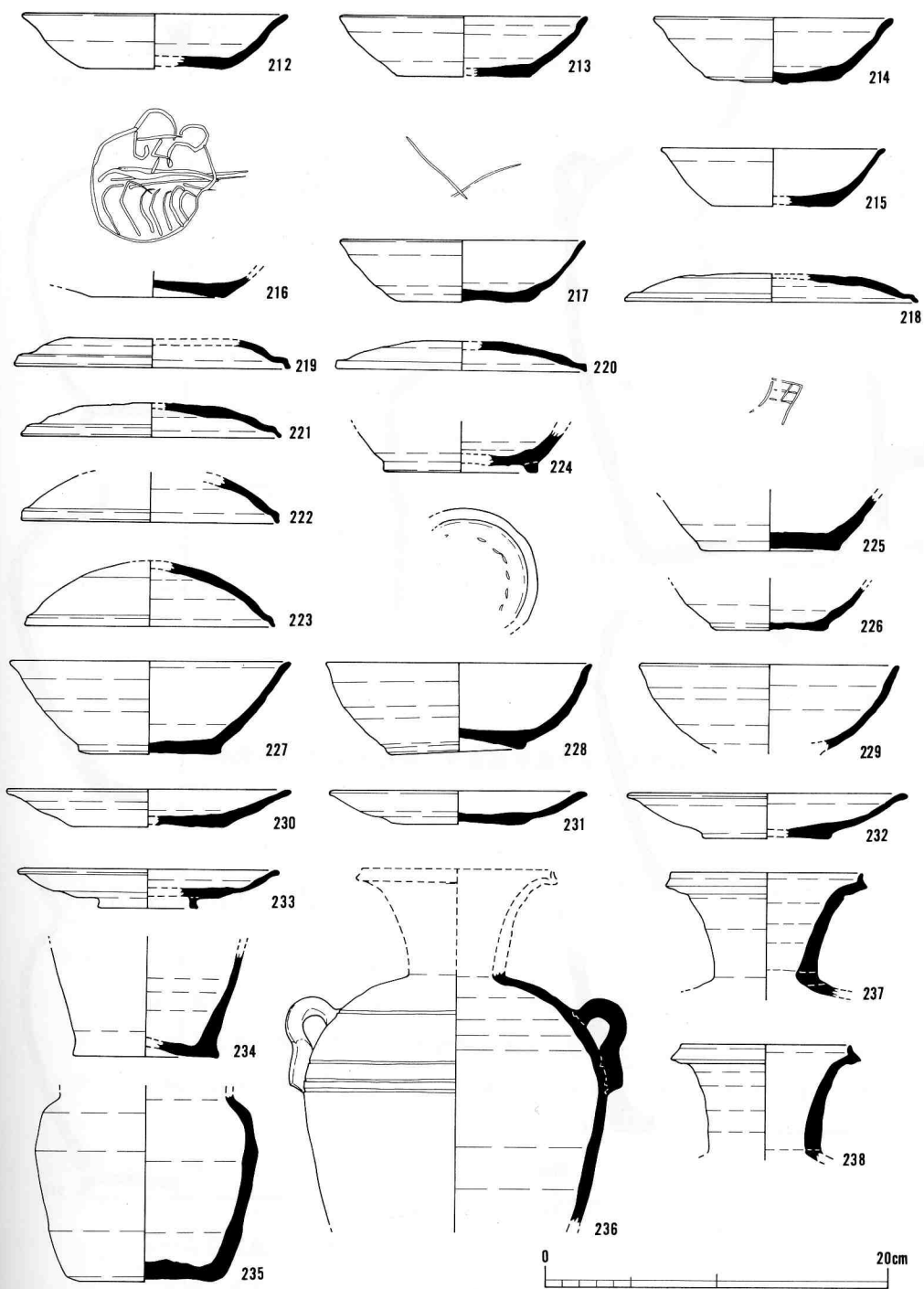


插图135 向上·古城1号窯跡灰原出土須惠器(12)



挿図136 向上・古城1号窠跡周溝内出土須恵器(1)

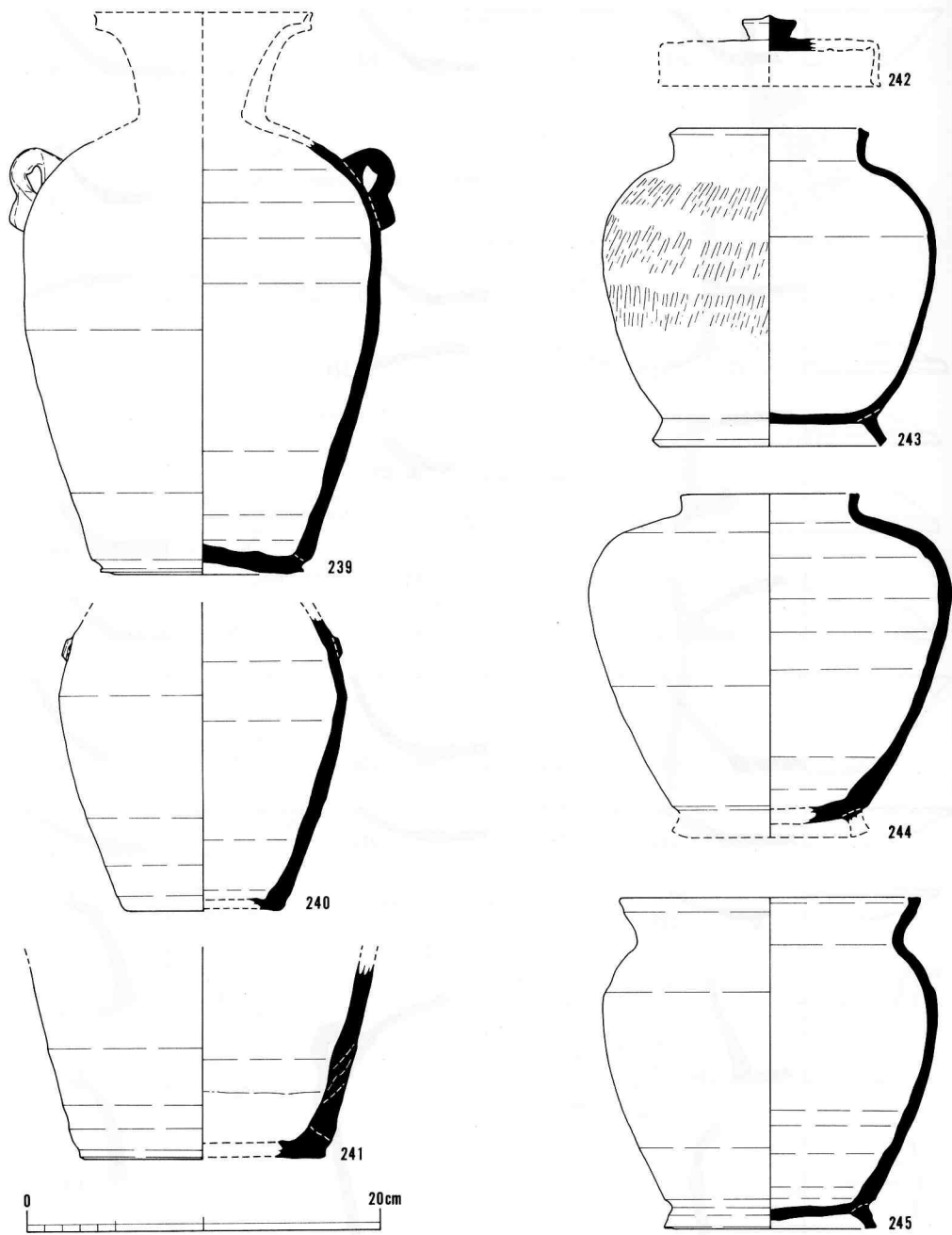
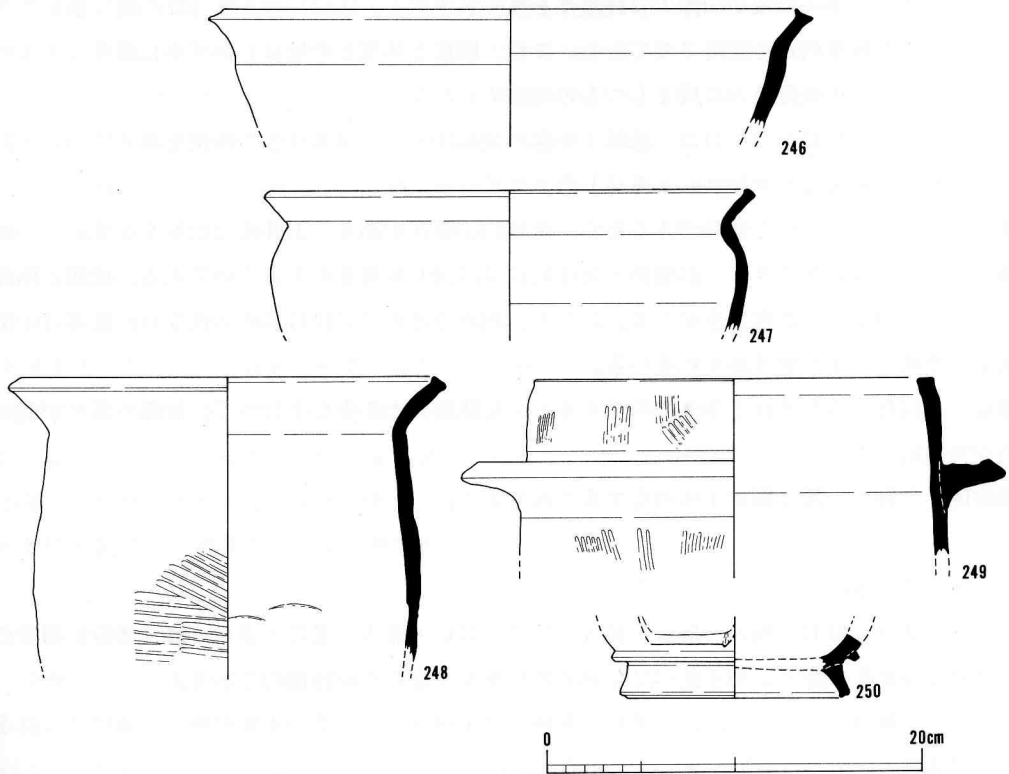


插图137 向上·古城1号窰跡周溝内出土須惠器(2)





挿図138 向上・古城1号窯跡周溝内出土須恵器（3）

## 第6節 向上・古城2号窯跡出土遺物

### 1. 概要（図版94～98、挿図139～143）

1号窯跡同様、窯体内・灰原・周溝内より出土している。出土量は1号窯に比べてかなり少ない。特に灰原出土土器に関してはこれが顕著である。器種としては杯A・蓋A・杯B・椀B・皿A・皿B・耳皿・壺A・壺B・蓋B・壺C・甕・甕D・羽釜・風字硯の各器種が出土している。

### 2. 窯体内出土遺物

杯A・蓋A・椀B・壺C・風字硯が出土している。杯Aが大半を占める。

杯A ①体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるもの（13・14）と、②内湾気味に立ち上がるものにと大別できる。さらに両者の中間形態をとるもの（11）も認められる。

①は、底部と体部の境が明瞭で口縁端部を丸くおさめる。②は口縁部と体部の境に強いナデ調整を施し口縁部内面を肥厚させている。また、底部と体部との境は、わずかに段をなすものが多い。ただし内面見込みに段をもつものは認められない。

①と②の中間形態をなす11は、底部と体部の境は①の、口縁部は②の特徴を備えている。

いずれも、底部はヘラ切りにより切り離されている。

蓋 図化できたのは1個体のみである。全体的に器高が高く、天井部は山形をなす。

椀B 2個体図化できた。形態的・技法的にほぼ同じ特徴を有するものである。底部と体部の境に段がつき、平高台状を呈する。ただし、内面見込みに段は認められない。底部はいずれもヘラ切りにより切り離されている。

壺C 図化できたのは1個体のみである。1号窯跡出土の壺Cと比べて、肩部の張りが弱い点が特徴的である。

風字硯 陸の一部と脚が1脚残存するのみである。

### 3. 灰原出土遺物

杯A・蓋A・杯B・椀B・椀C・皿A・皿B・皿C・壺A・蓋B・壺C・甕・甕D・羽釜の各器種が出土している。他と比べて、杯Aの比率が少ない点が特徴的である。

杯A 2個体図化できたが、いずれも窯体内出土杯Aの①と②の中間形態に位置付けられるものである。

蓋A 灰原出土土器のなかで最も多く出土している器種である。天井部が丸みをもち器高が高いものと、天井部が平坦で器高の低いものとに分けられる。

杯B 図化できたのは37の1個体のみである。体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、端部を薄くおさめる。体部と口縁部の境に強いヨコナデ調整を施し、外面はわずかに凹みをなす。口径・器高とも大型で、椀形態に近いものである。これに対して底部は、底部と体部の境に輪高台が貼り付けられている。高台高3mmと規模は小さい。

椀B 口縁部の形態から、直線的に立ち上がり端部を丸くおさめるものと、内湾気味に立ち上がり口縁部を外反させるものとに2分できる。

椀C 38の1個体のみである。口縁部まで残存しないが、体部上半部に1条の沈線が認められる。この土器は他の土器と異なり、底部を回転糸切りにより切り離している。胎土も他の土器と異なり精良である。また見込みに螺旋状のヘラ書が認められる。

皿A 図化できたのは2個体であるが、それぞれ異なるタイプに分類される。42は口縁部を外反させるのに対して、44は底部から口縁部が直線的にのびそのまま端部をおさめている。底部をヘラ切りにより切り離す点は共通している。

皿B 図化できた2個体とも同じタイプに分類され、皿Aの前者のタイプに輪高台が付くも

のである。高台は、底部をへら切りにより切り離した後、貼り付けられている。

皿C 耳部のみ残存する。底部はへら切りにより切り離され、突出した平底をなす。

壺A 口縁部と体部片が出土している。1号窯跡出土のものと同じ特徴を有する。

蓋B つまみが残存しないが、形態的特徴から蓋Bに分類した。

壺C 体部下半から底部にかけて残存するものである。鉢の可能性も考えられる。

甕 頸部から大きく外反し、端部を内側斜上方につまみ上げ端部をうすくおさめている。体部外面は縦方向を主体としたタタキ整形により仕上げられている。

甕D 基本的には口縁部を「く」字形に屈曲させ、端部をつまむようなナデ調整を施す点で共通する。ただし、口縁部の形態・端部につまみ上げ方法に個体差が認められる。調整方法が観察できたのは56のみで、外面を頸部から体部にかけて縦方向のハケ調整を施している。いずれも胎土中に2～5mm大の砂粒を多く含んでいる。

羽釜 図化できたのは1個体である。1号窯跡出土の羽釜とほぼ同じ特徴を有する。口縁部の肥厚が顕著で、端部を上方から押さえ端面をなす。

#### 4. 周溝内出土遺物

全体的に出土量は少ない。杯A・蓋A・皿A・皿B・壺A・壺B・鉢・甕・羽釜が出土している。

杯A 図化したものは全て、窯体内出土の杯Aの①と②の中間タイプのものである。

蓋A 図化した3個体とも天井部が丸味をもち、器高の高いタイプのものである。口縁部の屈曲に個体差が認められる。

皿A 67は形態的には杯Aに近いものであるが、器高に対して口径が大きいため皿に分類した。68についても、底部が不安定なため蓋の可能性も考えられるが、口縁部の屈曲がないため皿に分類した。両者とも底部をへら切りにより切り離している。

皿B 灰原出土のものとはほぼ同じタイプである。

壺A 体部上半部のみが残存である。

壺B 肩部に耳のみが付くタイプである。

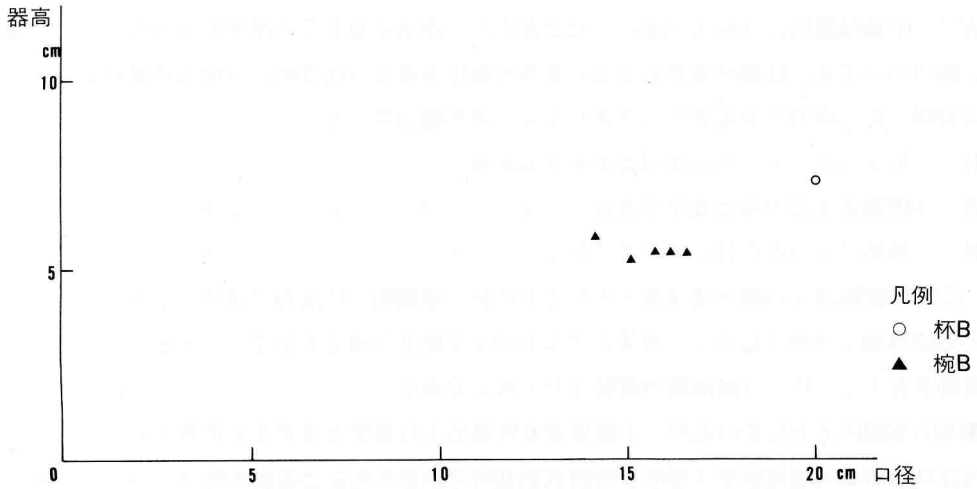
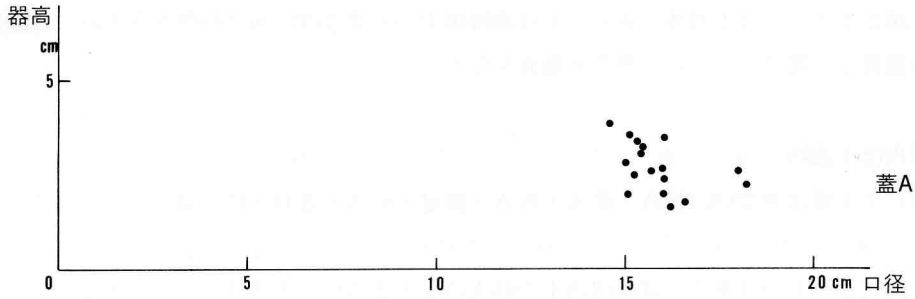
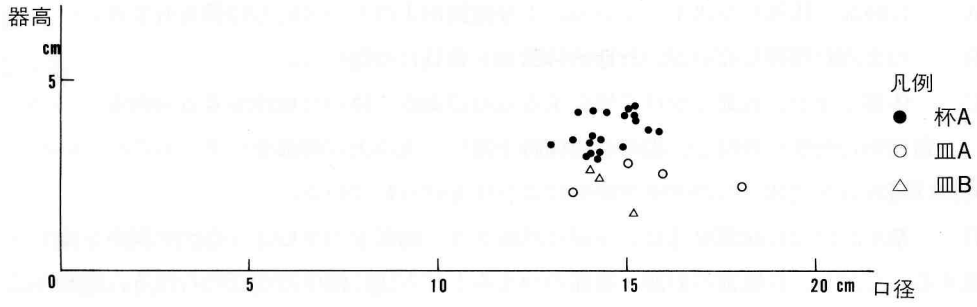
鉢 1号窯跡出土の鉢と比べると小型であるが、形態的・技法的には同じである。

甕 灰原出土の甕と比べて、頸部の立ち上がり直立気味で大型である点を除いてはほぼ同じ特徴を有する。特に口縁端部の形態は全く同じである。

羽釜 2個体出土しているが、2個体とも灰原出土の羽釜とはタイプを異にする。

74は口縁部が内傾気味で、端部を内側水平方向につまみ出し上端面を持つ。75は、口縁部は直立気味であるが、端部を内側水平方向につまみ出し上端面を持つ。

向上・古城2号窯跡



挿図139 向上・古城2号窯跡須恵器法量グラフ

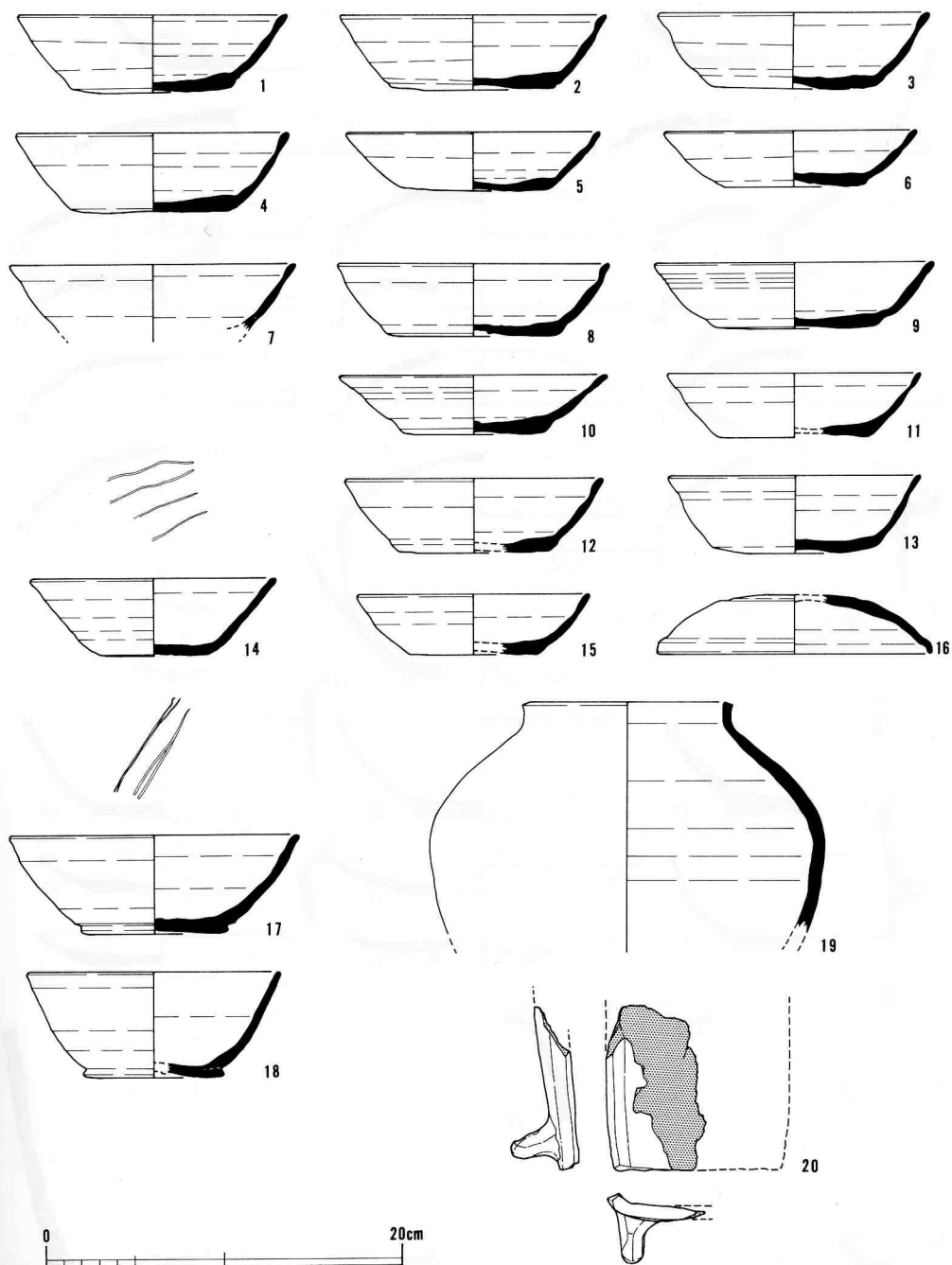


插图140 向上・古城2号窯跡窯体内出土須恵器

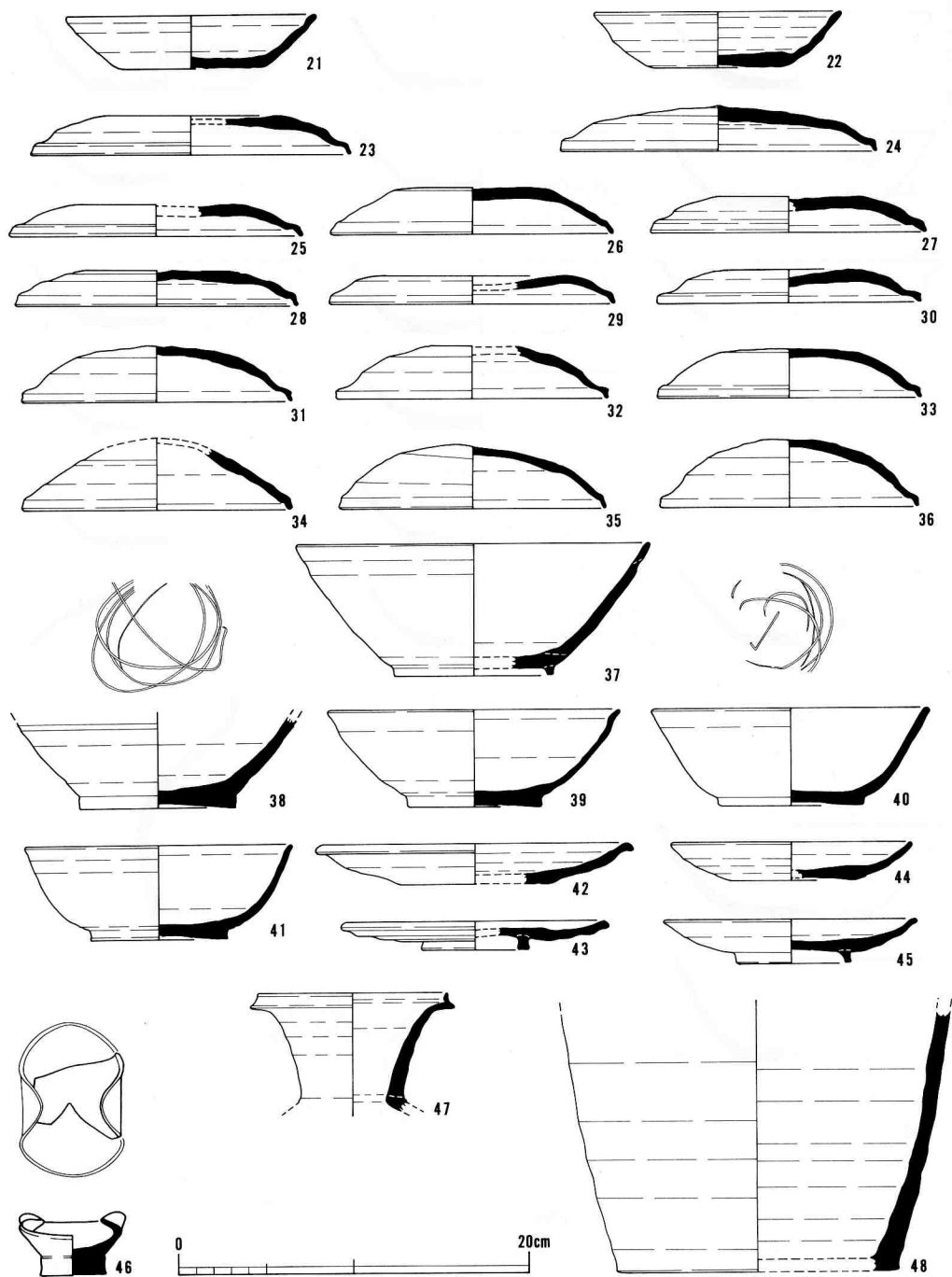


插图141 向上·古城2号窯跡灰原出土須恵器(1)

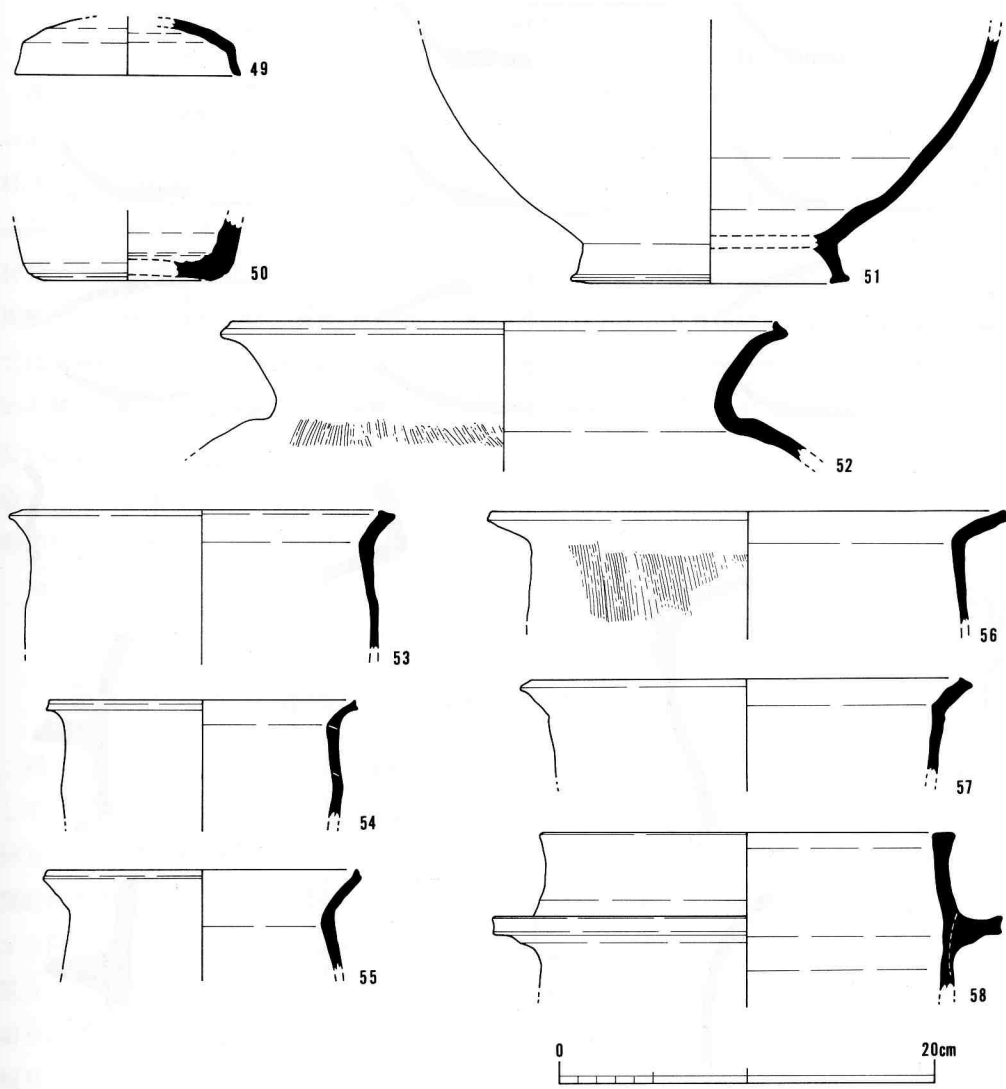


插图142 向上·古城2号窠迹灰原出土須惠器(2)

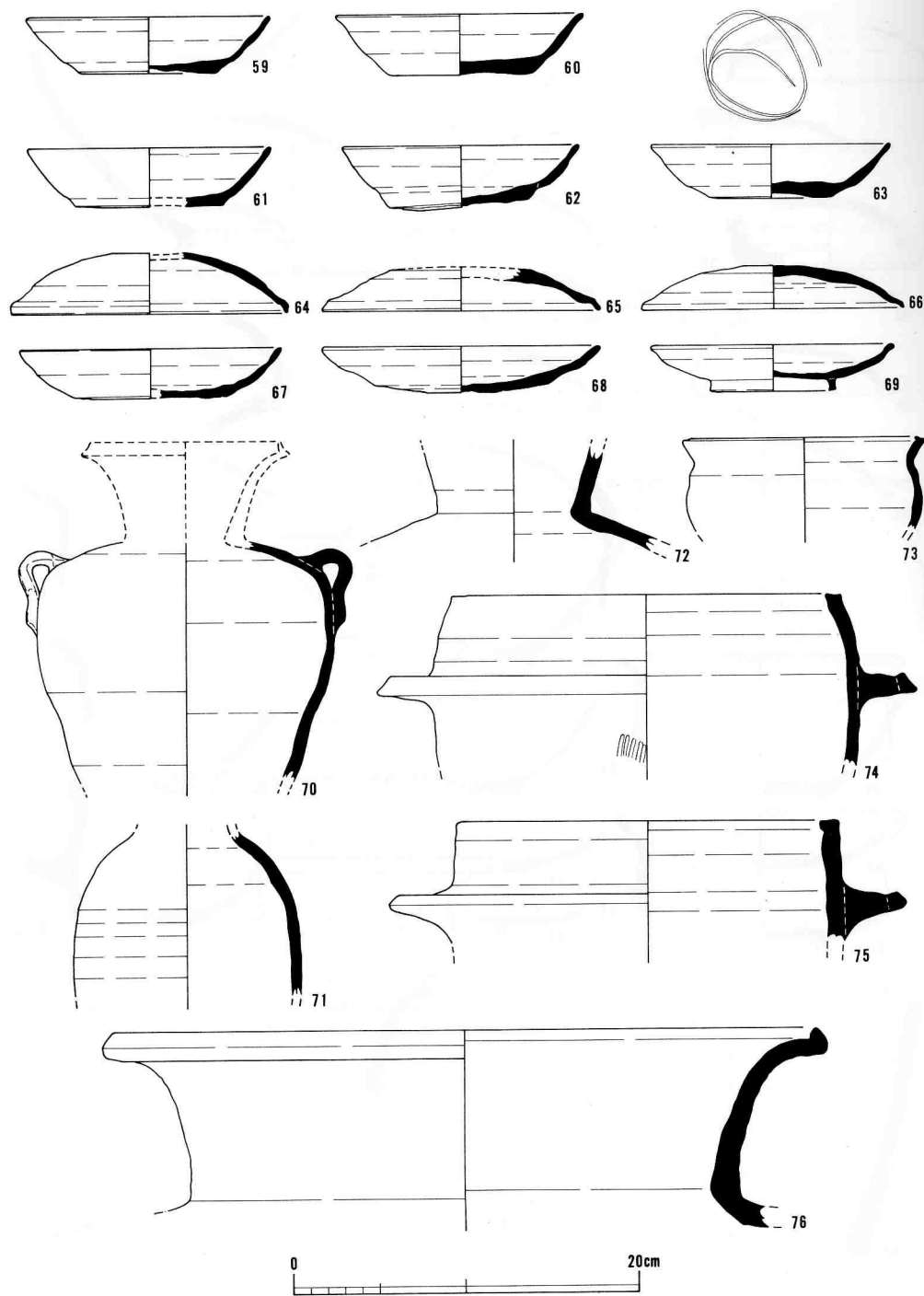


插图143 向上·古城2号窠迹周沟内出土须惠器



### 第7節 3号遺構出土遺物 (挿図145)

覆土中より数点の土器が出土している。器種としては、杯A・杯B・椀B・壺Cが出土している。

杯A 底部片を2個体図化している。このうち93については、図化できなかったが、内面見込みにへら書が認められる。

杯B 当器種も底部のみである。底部の大きさに比べて小型の高台が貼り付けられている。

椀B 図化できたのは1点であるが、完形に復元することができた。体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は外反を意識した強いナデ調整を施され、端部は丸くおさめられている。底部外面には明瞭な段が認められ平高台状を呈するが、内面には段は認められない。

壺C 当器種としては小型に分類されるものである。2号窯跡窯体内出土の壺C同様、1号窯跡出土の壺Cに比べて肩の張りが弱い点が共通している。

### 第8節 4号遺構出土遺物 (挿図144)

覆土中より出土している。3号遺構と比べると、比較的多くの土器が出土している。器種としては、杯A・皿A・椀B・壺A・壺B・壺Cが出土している。

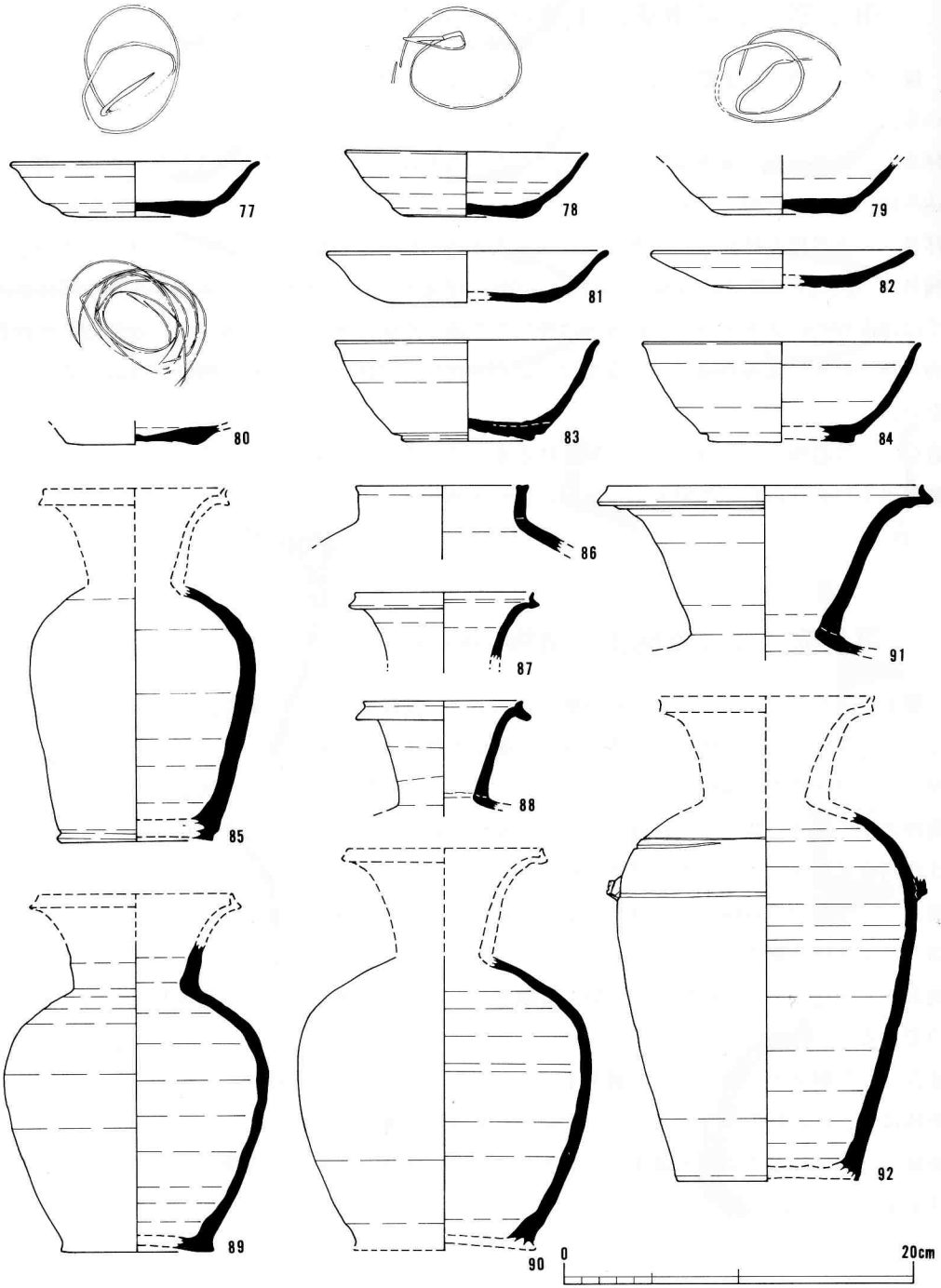
杯A 図化できた個体についてはほぼ同じタイプに分類されるものである。1号窯跡・2号窯跡出土の杯Aと比べて、口径に対して器高が低い傾向にある。なお、図化できなかったが、5の内面見込みにへら書が認められる。

皿A 体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部はへら切りにより切り離されている。

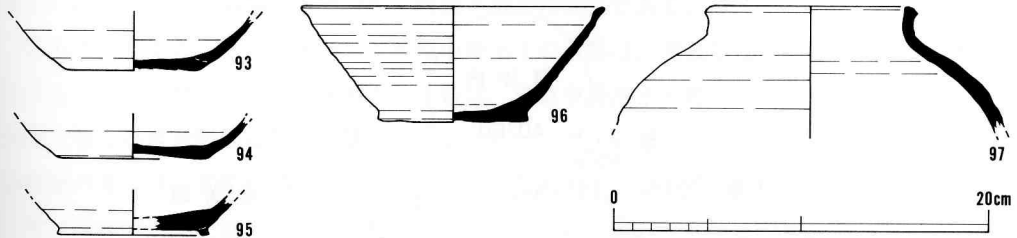
椀B 図化できた2個体はほぼ同じ特徴を有する。2号窯跡灰原出土の椀Bとも共通するものである。

壺A 長胴タイプのもものと丸胴タイプのもものが出土している。両タイプとも回転ナデ調整を主体に仕上げられており、底部はへら切りにより切り離されている。

壺B 口縁部と体部が1個体ずつ出土している。体部は、肩部に3条の沈線を施し、その後耳を貼りつけている。



挿図144 4号遺構出土須恵器



挿図145 3号遺構出土須恵器

## 第9節 小 結

1号窯跡と2号窯跡について、別々に報告してきたが、両窯跡は位置的に近接しており、有機的な関係にあるものと考えられる。そこで、以上の前提をもとに、相野窯跡群における向上・古城窯跡群の年代的な位置付けを検討してみたい。

ところで、年代的な位置付けを行う考古学的方法としては、大きく、各器種それぞれの形態および法量の特徴から検討する方法と、生産された器種構成から検討する方法との2通りが考えられる。前者の方法については、第13章で行うので、ここでは後者の方法を用いて行うことにする。

### 1. 器種構成の検討

#### (1) 1号窯跡

当窯跡における焼製器種については、前節で報告したとおりである。ところで、当窯跡については、数次におよぶ操業が明らかとなっている。そこで、この点を考慮に入れ、検討を加えていくことにする。

1号窯跡に伴う遺物は、窯体内・灰原・周溝内から出土している。一般に、窯体内と周溝内とは、窯体内出土の遺物の方が新しいものと考えられる。また、灰原については、1号窯跡については比較的厚い堆積が認められ、幾つかの層に分層することができた。灰原の堆積状況を観察すると、細かくは約20層に分層できるのであるが、大きな単位で捉えると3層に分けられる。上から、表土層および灰層、純灰層、それ以下の層の3層である。それぞれ便宜的に、灰原上層・灰原中層・灰原下層と呼称する。

そこでまず、以上の分層の有効性について検討してみたい。この検討にあたって、窯体内・周溝内および3号遺構・4号遺構出土遺物も加えておこなうことにする。ここで、挿図146を参照していただきたい。実測図を掲載した土器について、その接合関係を数字であらわしたもの



数中の63%で、次が窯体内との21%、灰原下層との12%である。

以上のことから、灰原上層出土と灰原中層出土の土器は、密接な接合関係にあることが理解できる。これに対して灰原下層出土の土器は、灰原中層出土土器の接合関係が40%と高いが、灰原上層との接合関係は32%と低くなっている。この、灰原下層と灰原上層・灰原中層との接合関係の多くは、実際の調査の際の取上げ方に起因するものと考えられる。

次に窯体内出土土器について分析してみたい。総数61点のうち他との接合関係が認められる土器は40点ある。接合関係の最も多いのは灰原上層とで、接合資料40点中18点あり、45%に及ぶ。次に多いのは灰原中層とで18%である。灰原上層出土土器との接合関係については、窯体内の土器が灰原へ流れ込んだ結果と考えたい。

最後に周溝内出土土器について分析してみたい。周溝は、西側周溝と東側周溝とに分けられるが、当然の結果として両者間には接合関係は認められない。それぞれ、灰原上層および灰原中層との接合関係が目立つ。灰原上層・中層との接合関係は、西側周溝で67%、東側周溝で84%を占める。したがって、周溝内出土土器と灰原上層・中層出土土器との接合関係については、両周溝から灰原へ流れ込んだ結果と考えたい。

以上のことから、灰原下層出土の土器と、灰原中層・上層出土の土器とを明確に分離することが可能で、1号窯跡出土の土器のなかでは最も古く位置付けることができる。この次に位置付けられるのが、灰原中層・上層出土土器である。これらの土器は、窯体内出土土器と比較的多くの接合関係が認められることから、ほぼ同時期とみるか、若干古いものと考えられる。周溝内出土土器との関係については、窯体内出土土器と同様、ほぼ同時期あるいは若干古いものと考えられる。

なお、窯体内出土土器と周溝内出土土器との関係については、接合関係からは明確にすることはできないが、窯体内出土土器の方が新しいようである。

以上のことを「古<新」でまとめると、以下のようになる。

灰原下層出土土器<灰原中層・上層出土土器≤周溝内出土土器≤窯体内出土土器

そしてこれらの出土単位ごとの出土器種をまとめると、表11のようになる。この図から、以下のことが指摘できる。

- ①灰原中層・上層出土土器に最も多くの器種が認められる。これは、出土量が最も多いことによるものと考えられる。そして、1号窯跡の焼成器種の基本的なバリエーションを示しているものと考えられる。
- ②さきに、灰原下層出土土器と灰原中・上層出土土器との間に時期差が認められることを指摘した。このような点から両者の焼成器種を比較すると、灰原下層出土土器には椀形態の器種が全く認められない点が注目される。このことについては後述するが、杯形態の器種が発展して椀形態になるものと考えられていることから、1号窯跡の位置付けを検討する

表11 向上・古城1号窯跡 出土器種一覧表

器種 出土位置	杯		蓋		皿				椀					壺					平瓶	鉢		甕	小型甕	羽釜	硯	塑像				
	A	B	A	B	A	B1	B2	C	A	B	C1	C2	C3	D	A	B1	B2	B3	B4	B5	C	瓶	A	B						
灰原下層																														
灰原中・上層																														
窯体内																														
西側周溝																														
東側周溝																														

にあたって重要なポイントになるものと考えられる。

③灰原中・上層出土土器と窯体内出土土器および周溝内出土土器の関係を明確にすることができなかったが、器種構成からするとほぼ同じ性格を有するものと考えられる。灰原中・上層以外から出土した土器の器種は、灰原中・上層出土土器と比べると欠落する器種が認められるが、これは出土量そのものが少ないためと考えられる。特に、椀形態の土器が共通して出土していることが、如実に灰原中・上層出土土器との共通性を表しているものと考えられる。

④1号窯跡の器種構成と、他の相野窯跡群内の各窯跡の器種構成を比較すると、1号窯跡出土器種がバラエティーに富んでいる。杯B・蓋A・平瓶など相野窯跡群でも1号窯跡にしか出土がみられない器種もいくつか認められる。

次に、器種構成について量的な面から検討してみたい。なお、全体的に資料数が少なく、統計学的には不十分であることを前提としていることをことわっておく。

まず、灰原・窯体内・周溝内の区別なく総合して比較してみると、杯Aが圧倒的に多く、全体の約3割強(36%)を占める。次に蓋A(14%)・椀B(10%)・壺B(10%)・壺C(7%)と続く。

次に、灰原下層、灰原中・上層、窯体内、周溝内に分けてみたい。

まず灰原下層については、杯Aが最も多く29%を占める。つづいて壺B(25%)・壺C(16%)と続き、全体の器種構成とほぼ同様な傾向を示している。ただし、全体の器種構成と大きく異なる点は、杯Bが8%を占めている点である。また、壺類が壺A・壺B・壺C合わせて45%を占め、全体の器種構成と大きく異なる。



灰原中・上層においても杯Aが29%を占め、灰原下層とほぼ同様の傾向を示す。続いて、蓋A（18%）・椀B（13%）と続く。灰原と異なり壺類が15%と少ない傾向にある。

窯体内においては、杯Aが量的に最も多い点は他と共通しているが、53%と下半数を占めている。続いて壺B（15%）・甕（12%）が占め、甕の比率が高い点が特徴的である。

最後に周溝内においては、蓋A（18%）・杯A（15%）・壺B（13%）・椀B（12%）と極立って多く出土した器種は認められない。この他、皿A（9%）・壺C（9%）・鉢A（9%）と各器種が平均して出土している。

以上のことから、灰原、窯体内、周溝内に分けてみた器種構成は、大きくみるとそれらを総合してみた傾向と大きく異なるものではないといえよう。

## （2）2号窯跡

2号窯跡出土土器については、1号窯跡出土の土器と比較して、量的に明らかに少ない。また灰原についても、1号窯跡のように明確に分層することができなかった。さらに、周溝内出土土器についても、その量はわずかである。したがって、当該窯跡出土土器については、窯体内出土土器・灰原出土土器・周溝内出土土器の3者にわけて、検討していくことにする。

1号窯跡同様、各出土単位ごとの出土器種を一覧表にまとめたのが表12である。この表から、以下のことが指摘できる。

- ①出土量が最も多いこともあり、灰原から最も多くの器種が出土している。
- ②特に1号窯跡との比較で、焼成器種において壺類が壺B1と壺Cに限られる。ただし、他の器種構成については基本的に大差ない。
- ③2号窯跡においても、窯体内出土土器と灰原出土土器とでは、1号窯跡とほぼ同じ関係が考えられる。このような関係を前提とすると、杯Bが灰原のみに認められて、窯体内から

表12 向上・古城2号窯跡 出土器種一覧表

器種 出土位置	杯		蓋		皿				椀					壺					平瓶	鉢		甕	小型甕	羽釜	硯	塑像			
	A	B	A	B	A	B1	B2	C	A	B	C1	C2	C3	D	A	B1	B2	B3	B4	B5	C	瓶	A	B					
灰原	■	■	■	■			■	■		■	■										■								
窯体内	■		■							■											■								■
北側周溝			■				■																■				■		
南側周溝			■																										■





## 2. 小結

### (1) 1号窯跡と2号窯跡の関係

まず1号窯跡と2号窯跡の前後関係について確認しておきたい。1号窯跡と2号窯跡の関係は灰原下層どうしの切り合い関係から、2号窯跡の方が新しいと考えられる。しかし、ここで確実に断定できるのは、1号窯跡灰原下層と2号窯跡灰原の前後関係に限られる。つまり、2号窯跡灰原と1号窯跡灰原中・上層との関係、1号窯跡窯体内と2号窯跡窯体内との関係等については明確にすることはできない。

次に器種構成の点から両窯の前後関係についてみてみたい。そこで杯Bに注目すると、1号窯跡・2号窯跡とともにそれぞれ新しく位置付けられる窯体内から出土している点が共通している。しかし、他の器種については、共通した器種構成の変化を読みとることはできない。したがって、器種構成の点から両窯跡の前後関係を明確に示すものは認められなく、むしろ同時操業の可能性を示すのではないかと考えられる。

最後に統計的な比較をしてみたい。両窯跡とも杯Aが最も多く約3割を占める点は共通している。このほか、蓋・椀・皿・羽釜についても、明確な差を認めることはできない。大きく異なるのは、1号窯跡では壺類が10%を占めるのに対して、2号窯跡では3%とわずかである点である。なお1号窯跡で壺の占める比率は、当該窯跡で確認した各段階を通して認められるものであり、1号窯跡の操業期間を通しての傾向とみることができ。このことは、両窯跡の窯体の規模において、1号窯跡の方が大きかったことと無関係ではないと考えられる。つまり、1号窯跡と2号窯跡とでは、大型器種について分業がなされていたものと考えられる。このことから、両窯跡はほぼ同時期に操業されていたのではないかと考えられる。

### (2) 器種構成からみた向上・古城窯跡群における位置付け

前項で1号窯跡と2号窯跡とは、操業時期にほとんど差は認められないことを確認した。そこで、相野窯跡群における年代的な位置付けを検討するにあたっては、一括して扱うことにする。

当窯跡群の焼成器種について、他の窯跡群のものと比較すると、以下の点が特徴として指摘できる。

- ①当窯跡群のみにみられる器種として、蓋A・蓋B・皿A・皿B 1・壺Bがある。さらに、古城山1号窯跡を加えた3基の窯跡に限られる器種として、杯B・皿B 2・椀C 2・壺A・平瓶がある。
- ②または①とは逆に、当窯跡群と古城山1号窯跡を除く全ての窯跡にみられる器種として、椀A・椀C 3がある。

まず、①で指摘した器種については、いずれも古代からの系譜をたどれる器種、あるいは緑釉陶器・灰釉陶器を模倣した器種である。前者の器種としては、蓋A・椀C・壺A・平瓶が挙

げられる。後者の器種としては、蓋B・皿A・皿B1が挙げられる。次に、②で指摘した器種については、より中世において特徴的な器種へとつながるものである。

したがって、当窯跡群あるいは古城山1号窯跡を加えた3基の窯跡と他の相野窯跡群内の窯跡との間に大きなヒアタスが認められる。つまり、当窯跡群あるいは古城山1号窯跡を加えた3基の窯跡をもって、多くの古代に系譜を求めることのできる器種の焼成が消滅する。そして、当窯跡群あるいは古城山1号窯跡を加えた3基の操業の停止をもって、より中世的な器種の焼成が始められる。このような動きは、向上・古城1号窯跡における焼成器種の変遷においても指摘できたことである。

以上のことから、向上・古城窯跡群は、相野窯跡群内でも古い段階の窯跡と位置付けることが可能と考えられる。古城山1号窯跡との関係を見ると、当窯跡群で消滅する器種の多いことから、古城山1号窯跡より古く位置付けられるものと考えられる。したがって、調査で明らかとなった相野窯跡群内の窯跡のなかでは、最も古く位置付けられるものといえよう。このことは、熱残留磁気測定の結果（付載）とも一致する。

このことを前提とすると、底部の切り離し方法において、相野窯跡群全体としてはヘラ切りによることを特徴とするのに対して、向上・古城窯跡群のなかにわずかながら回転糸切りにより切り離された椀が存在していたことの理解が可能となってくる。つまり、当地において須恵器生産を開始するにあたって、その技術的系譜を、他の底部糸切りを基本とする工人集団に求めることができるのではないか。底部を回転糸切りにより切り離した椀の胎土は、他の底部をヘラ切りにより切り離した椀の胎土と異なる点も、これを支持するものとする。当地における須恵器生産の開始にあたっての技術伝播を示すものと考えたい。ただし、技術伝播後なぜ底部糸切り技法を継承しなかったのかについては、今後の検討課題といえよう。

ところで、当窯跡群に近接する時期の生産窯としては、約5km南東に位置する貝谷窯跡が調査によって明らかとなっている。しかし、当該窯の底部の切り離し方法もヘラ切りによるものである<sup>(1)</sup>。したがって、現段階では、篠窯跡との関係を考えたい。篠窯跡においては、緑釉陶器の生産もおこなっており、向上・古城窯跡群に認められる緑釉陶器を模倣した器種の存在も、上記の関係を支持するものと考えられる。

#### 〔註〕

- (1) 吉田 昇 「貝谷窯跡」『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)一本文編一』（兵庫県埋蔵文化財調査報告書 第62冊）兵庫県教育委員会 1988

表13 向上・古城1号窯跡 窯体内出土土器観察表

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴
		口径	器高	底径		
1	杯A	15.4	3.6	7.6	2/12	底部へラ切り・焼成不良・窯体内出土
2	杯A	14.7	3.6	7.7	4/12	底部へラ切り・焼成不良・窯体内出土
3	杯A	13.3	3.2	6.4	6/12	底部へラ切り・窯体内出土
4	杯A	15.0	2.3	8.3	2/12	底部へラ切り後ナデ・焼成不良・窯体内出土
5	杯A	14.2	2.9	7.7	2/12	底部へラ切り・窯体内出土
6	杯A	14.4	3.0	7.5	4/12	底部へラ切り後ナデ・焼成不良・窯体内出土
7	杯A	13.1	3.5	7.7	2/12	底部へラ切り後ナデ・窯体内出土
8	椀B	—	4.0	8.2	3/12	底部へラ切り・窯体内出土
9	椀C	15.6	5.7	—	2/12	底部輪高台・窯体内出土
10	杯A	15.4	4.0	8.6	7/12	底部へラ切り後ナデ・焼成不良・窯体内出土
11	杯A	14.6	3.4	7.4	9/12	底部へラ切り・内面に火禰痕・窯体内出土
12	杯A	14.2	3.3	7.5	3/12	底部へラ切り・窯体内出土
13	杯A	14.1	3.9	7.6	1/12	底部へラ切り・窯体内出土
14	杯A	15.0	3.5	8.3	3/12	底部へラ切り・窯体内出土
15	杯A	13.7	3.3	7.0	4/12	底部へラ切り・窯体内出土
16	杯A	13.3	4.0	6.1	6/12	底部へラ切り・窯体内出土
17	杯A	13.3	3.2	6.4	1/12	底部へラ切り・窯体内出土
18	杯A	12.9	3.8	7.0	2/12	底部へラ切り・窯体内出土
19	杯A	12.9	3.4	7.3	6/12	底部へラ切り・窯体内出土
20	皿A	15.8	2.4	7.7	6/12	底部へラ切り・焼成不良・窯体内出土
21	皿A	13.8	2.3	—	2/12	窯体内出土
22	椀B	16.8	5.0	7.8	5/12	底部へラ切り・焼成不良・窯体内出土
23	椀B	—	4.7	7.7	12/12	底部へラ切り後ナデ・窯体内出土
24	蓋B	16.0	4.0	—	2/12	窯体内出土
25	壺C	—	2.3	14.4	12/12	窯体内出土
26	壺	—	3.0	18.1	2/12	底部?・窯体内出土
27	壺B	17.6	8.9	—	6/12	内外面回転ナデ・窯体内出土
28	壺B	10.5	5.9	—	3/12	内外面回転ナデ・窯体内出土
29	壺B	—	23.8	10.0	4/12	底部へラ切り・窯体内出土
30	壺B	—	23.5	11.9	8/12	肩部3条の沈線・底部へラ切り・窯体内出土
31	壺B	—	24.8	11.4	4/12	肩部1条の沈線・底部へラ切り・窯体内出土
32	甕	40.2	11.2	—	3/12	肩部タタキ整形の後横方向のハケ調整・窯体内出土
33	甕	36.0	7.5	—	2/12	窯体内出土
34	甕	30.0	6.3	—	2/12	窯体内出土
35	甕	26.0	5.7	—	2/12	窯体内出土

表14 向上・古城1号窯跡 灰原出土土器観察表

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴
		口径	器高	底径		
1	杯A	14.4	3.0	6.9	3/12	底部ヘラ切り・見込みにヘラ書・灰原上層出土
2	杯A	14.4	3.8	8.0	2/12	底部ヘラ切り後ナデ・灰原上層出土
3	杯A	14.3	3.9	7.6	6/12	底部ヘラ切り・見込みにヘラ書・灰原上層出土
4	杯A	14.0	3.5	8.0	3/12	底部ヘラ切り後ナデ・灰原中層出土
5	杯A	14.0	3.4	9.0	3/12	底部ヘラ切り・灰原上層出土
6	杯A	14.0	3.6	6.8	3/12	底部ヘラ切り・灰原上層出土
7	杯A	13.9	3.3	7.3	6/12	底部ヘラ切り後ナデ・見込みにヘラ書・灰原上層出土
8	杯A	13.8	3.8	7.8	5/12	底部ヘラ切り・灰原上層出土
9	杯A	13.2	3.5	7.5	3/12	底部ヘラ切り・灰原上層出土
10	杯A	13.3	3.4	7.8	5/12	底部ヘラ切り・灰原中層出土
11	杯A	12.8	3.8	7.5	4/12	底部ヘラ切り・灰原上層出土
12	杯A	12.3	—	7.8	9/12	重ね焼・灰原上層出土
13	杯A	15.1	3.9	8.3	6/12	底部ヘラ切り・灰原上層出土
14	杯A	15.0	3.0	9.5	2/12	底部ヘラ切り・灰原上層出土
15	杯A	14.8	3.4	9.5	3/12	底部ヘラ切り・灰原上層出土
16	杯A	14.6	3.5	7.9	9/12	底部ヘラ切り・灰原上層出土
17	杯A	14.6	3.8	7.5	2/12	底部ヘラ切り・灰原上層出土
18	杯A	14.4	4.0	8.7	6/12	灰原中層出土
19	杯A	14.8	2.9	8.4	5/12	底部ヘラ切り後ナデ・灰原中層出土
20	杯A	14.4	3.2	7.9	12/12	底部ヘラ切り後ナデ・灰原上層出土
21	杯A	14.4	3.5	8.4	6/12	底部ヘラ切り・灰原上層出土
22	杯A	14.2	3.7	9.2	3/12	底部ヘラ切り・灰原上層出土
23	杯A	14.0	3.2	8.2	1/12	底部ヘラ切り・灰原上層出土
24	杯A	13.8	3.3	7.8	2/12	底部ヘラ切り・灰原中層出土
25	杯A	13.8	3.4	6.8	6/12	底部ヘラ切り・灰原下層出土
26	杯A	13.2	3.6	8.6	2/12	底部ヘラ切り後ナデ・灰原上層出土
27	杯A	13.0	3.4	8.1	4/12	底部ヘラ切り・灰原上層出土
28	杯A	15.3	3.7	9.6	1/12	底部ヘラ切り・灰原中層出土
29	杯A	15.0	4.0	8.9	2/12	底部ヘラ切り後ナデ・焼成不良・灰原中層出土
30	杯A	15.0	3.2	8.8	1/12	底部ヘラ切り後ナデ・焼成不良・灰原上層出土
31	杯A	14.4	3.9	8.6	2/12	底部ヘラ切り・焼成不良・灰原中層出土
32	杯A	14.6	4.0	7.8	/12	灰原出土
33	杯A	14.0	3.5	8.2	3/12	底部ヘラ切り・灰原中層出土
34	杯A	14.0	3.5	7.8	1/12	杯A・灰原中層出土
35	杯A	14.0	3.1	8.8	4/12	底部ヘラ切り・灰原上層出土
36	杯A	13.9	3.2	8.3	3/12	底部ヘラ切り後ナデ・灰原上層出土
37	杯A	13.5	3.6	7.9	3/12	底部ヘラ切り後ナデ・灰原上層出土
38	杯A	15.2	3.0	8.3	4/12	底部ヘラ切り後ナデ・灰原上層出土

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴
		口径	器高	底径		
39	杯A	14.8	3.4	8.4	2/12	底部へラ切り後ナデ・見込みにへラ書・灰原中層出土
40	杯A	14.4	3.3	9.2	3/12	底部へラ切り・灰原上層出土
41	杯A	14.6	2.8	8.0	1/12	底部へラ切り・灰原上層出土
42	杯A	14.4	3.0	8.7	3/12	底部へラ切り後ナデ・灰原中層出土
43	杯A	13.7	3.5	7.4	6/12	底部へラ切り・見込みにへラ書・灰原下層出土
44	杯A	14.4	3.5	8.7	2/12	底部へラ切り・灰原中層出土
45	杯A	13.2	3.7	7.6	3/12	底部へラ切り・灰原上層出土
46	杯A	12.6	3.7	6.1	2/12	底部へラ切り・見込みにへラ書・灰原上層出土
47	杯A	15.4	3.8	7.3	2/12	底部へラ切り・見込みにへラ書・灰原下層出土
48	杯A	13.4	3.8	6.7	3/12	底部へラ切り後ナデ・見込みにへラ書・灰原下層出土
49	杯A	12.8	4.0	7.0	2/12	底部へラ切り・見込みにへラ書・灰原中層出土
50	杯A	14.3	3.2	8.4	11/12	底部へラ切り・見込みにへラ書・灰原下層出土
51	杯A	13.4	4.0	7.2	2/12	底部へラ切り後ナデ・見込みにへラ書・灰原下層出土
52	杯A	—	1.1	8.3	8/12	底部へラ切り後ナデ・見込みにへラ書・灰原下層出土
53	蓋A	14.8	3.1	—	2/12	天井部へラ切り後ナデ・灰原中層出土
54	蓋A	15.0	3.2	—	3/12	天井部へラ切り後ナデ・灰原上層出土
55	蓋A	15.0	3.3	—	4/12	天井部へラ切り・灰原中層出土
56	蓋A	14.8	3.3	—	6/12	天井部へラ切り・灰原中層出土
57	蓋A	15.0	3.1	—	3/12	天井部へラ切り後ナデ・灰原上層出土
58	蓋A	13.4	4.3	—	2/12	天井部へラ切り・灰原中層出土
59	蓋A	18.4	2.5	—	2/12	天井部へラ切り後ナデ・灰原中層出土
60	蓋A	17.6	3.0	—	2/12	天井部へラ切り後ナデ・灰原上層出土
61	蓋A	17.8	2.2	—	2/12	天井部へラ切り・灰原中層出土
62	蓋A	17.0	1.9	—	3/12	天井部へラ切り後ナデ・灰原中層出土
63	蓋A	17.0	2.2	—	3/12	灰原中層出土
64	蓋A	16.9	2.5	—	2/12	天井部へラ切り・灰原中層出土
65	蓋A	17.0	2.8	—	1/12	天井部へラ切り後ナデ・灰原上層出土
66	蓋A	16.8	2.6	—	2/12	天井部へラ切り・灰原中層出土
67	蓋A	16.6	2.4	—	1/12	天井部へラ切り後ナデ・灰原上層出土
68	蓋A	16.0	3.0	—	6/12	天井部へラ切り後ナデ・灰原中層出土
69	蓋A	16.0	3.0	—	1/12	天井部へラ切り・灰原中層出土
70	蓋A	16.0	2.7	—	2/12	天井部へラ切り後ナデ・灰原中層出土
71	蓋A	16.3	2.5	—	2/12	天井部へラ切り後ナデ・灰原上層出土
72	蓋A	16.0	2.2	—	2/12	天井部へラ切り・灰原中層出土
73	蓋A	16.0	2.2	—	2/12	天井部へラ切り・灰原上層出土
74	蓋A	16.0	1.9	—	5/12	天井部へラ切り・灰原上層出土
75	蓋A	16.0	1.6	—	2/12	天井部へラ切り・灰原中層出土
76	蓋A	16.0	2.0	—	2/12	天井部へラ切り・灰原上層出土

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴
		口径	器高	底径		
77	蓋A	16.0	2.7	—	2/12	天井部ヘラ切り・灰原中層出土
78	蓋A	16.0	2.5	—	2/12	天井部ヘラ切り後ナデ・灰原中層出土
79	蓋A	15.8	2.1	—	2/12	天井部ヘラ切り後ナデ・灰原上層出土
80	蓋A	15.8	2.1	—	2/12	天井部ヘラ切り・下層出土
81	蓋A	15.8	2.8	—	6/12	天井部ヘラ切り後ナデ・上層出土
82	蓋A	15.7	2.7	—	2/12	天井部ヘラ切り・上層出土
83	椀B	16.2	5.5	7.7	3/12	底部ヘラ切り・中層出土
84	杯B	16.2	5.8	7.1	2/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・上層出土
85	杯B	16.3	6.2	7.5	10/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・火嚢痕あり・上層出土
86	杯B	16.4	7.0	8.0	3/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・中層出土
87	杯B	16.0	6.5	7.1	2/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・中層出土
88	杯B	16.0	5.3	7.3	4/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・見込みにヘラ書・上層出土
89	杯B	16.0	4.9	7.8	2/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・中層出土
90	杯B	15.4	5.5	8.4	2.12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・見込みにヘラ書・上層出土
91	杯B	15.0	5.8	7.8	3/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・見込みにヘラ書・上層出土
92	杯B	15.5	6.0	7.6	4/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・火嚢痕あり・上層出土
93	杯B	14.9	6.2	7.3	2/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・上層出土
94	杯B	—	2.4	7.5	2/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・底部に爪先圧痕・上層出土
95	杯B	13.4	6.2	7.1	2/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・上層出土
96	杯B	—	3.0	7.8	9/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・下層出土
97	杯B	—	2.3	7.5	4/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・中層出土
98	杯B	17.0	5.9	7.0	1/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・見込みにヘラ書・上層出土
99	杯B	14.4	6.0	8.5	2/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・見込みにヘラ書・下層出土
100	杯B	—	3.0	6.9	5/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・中層出土
101	椀B	16.4	5.2	8.1	4/12	底部ヘラ切り後ナデ
102	椀B	16.2	5.2	7.7	2/12	底部ヘラ切り・見込みにヘラ書・中層出土
103	椀B	16.2	5.5	7.8	2/12	底部ヘラ切り・中層出土
104	椀B	16.4	5.3	8.2	4/12	底部ヘラ切り後ナデ上層出土
105	椀B	15.8	5.0	7.1	4/12	底部ヘラ切り・中層出土
106	椀B	16.0	5.7	7.6	4/12	底部ヘラ切り
107	椀B	15.7	5.0	7.8	2/12	底部ヘラ切り後ナデ・中層出土
108	椀B	15.3	5.5	7.1	2/12	底部ヘラ切り後ナデ・中層出土
109	椀B	14.8	5.5	7.1	2/12	底部ヘラ切り・上層出土
110	椀B	14.4	5.8	8.0	2/12	底部ヘラ切り後ナデ・中層出土
111	椀B	14.4	4.6	8.3	4/12	底部ヘラ切り・中層出土
112	椀B	14.7	4.5	8.1	2/12	底部ヘラ切り後ナデ・中層出土
113	椀B	16.2	5.6	7.2	6/12	底部ヘラ切り・見込みにヘラ書・中層出土
114	椀B	15.8	5.4	8.0	2/12	底部ヘラ切り・見込みにヘラ書・中層出土

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴
		口径	器高	底径		
115	椀B	16.0	5.9	7.5	4/12	底部へら切り後ナデ・見込みにへら書・上層出土
116	椀B	—	<u>2.7</u>	8.7	12/12	底部へら切り後ナデ・見込みにへら書・中層出土
117	椀B	—	<u>1.1</u>	8.3	12/12	底部へら切り後ナデ・見込みにへら書・中層出土
118	椀B	—	<u>2.5</u>	8.2	5/12	底部へら切り後ナデ・見込みにへら書・上層出土
119	椀B	14.0	6.1	7.0	1/12	底部糸切り・見込みにへら書・中層出土
120	椀C	18.0	5.1	—	6.12	底部糸切り・内外面に火襷痕・中層出土
121	椀C	—	<u>1.8</u>	8.6	11/12	底部糸切り・上層出土
122	椀B	—	2.0	7.4	12/12	底部糸切り・見込みにへら書・中層出土
123	椀B	15.8	6.0	7.0	3/12	底部糸切り・見込みにへら書・中層出土
124	椀C	—	<u>3.5</u>	7.0	12/12	底部糸切り・体部に沈線1条残存・上層出土
125	椀D	19.4	<u>3.7</u>	—	3/12	体部に1条の凸帯・中層出土
126	椀D	18.0	5.3	—	2/12	体部に1条の凸帯・上層出土
127	椀D	15.9	<u>3.9</u>	—	2/12	体部に1条の凸帯・上層出土
128	椀D	15.4	4.3	—	1/12	体部に1条の凸帯・上層出土
129	皿A	20.2	2.2	10.8	2/12	底部へら切り後ナデ・中層出土
130	皿A	19.0	2.1	8.8	2/12	底部へら切り・中層出土
131	皿A	19.0	2.2	9.7	2/12	底部へら切り・中層出土
132	皿A	17.5	2.6	9.6	2/12	底部へら切り・中層出土
133	皿A	16.6	2.4	9.8	2/12	底部へら切り後ナデ・上層出土
134	皿A	16.4	2.1	8.4	2/12	底部へら切り・下層出土
135	皿A	16.0	1.8	9.2	2/12	底部へら切り・中層出土
136	皿A	15.4	2.8	7.5	4/12	底部へら切り・中層出土
137	皿A	15.0	2.5	8.4	1/12	底部へら切り後ナデ・中層出土
138	皿A	15.0	2.5	8.1	3/12	底部へら切り・上層出土
139	皿A	13.2	1.9	—	2/12	底部へら切り・上層出土
140	皿B	15.0	2.6	5.8	3/12	底部へら切り後高台貼り付け・上層出土
141	皿B	13.6	2.6	9.0	4/12	底部へら切り後高台貼り付け・中層出土
142	皿A	15.7	2.5	7.2	7/12	底部へら切り・見込みにへら書・中層出土
143	小壺	7.1	<u>2.9</u>	—	3/12	中層出土
144	壺C	9.2	<u>9.3</u>	—	2/12	中層出土
145	壺A	9.2	<u>6.8</u>	—	3/12	上層出土
146	壺	9.1	<u>8.5</u>	—	2/12	中層出土
147	壺	8.6	5.8	—	3/12	上層出土
148	壺	—	<u>8.2</u>	—	10/12	中層出土
149	壺	—	<u>12.3</u>	9.7	2/12	体部上半に2条の沈線・中層出土
150	壺	13.2	<u>7.4</u>	—	3/12	上層出土
151	壺	12.3	<u>6.9</u>	—	2/12	中層出土
152	壺	12.5	<u>7.7</u>	—	4/12	中層出土



遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴
		口径	器高	底径		
153	壺	12.0	6.6	—	4/12	中層出土
154	壺	11.0	6.3	—	2/12	下層出土
155	壺	10.9	6.1	—	4/12	上層出土
156	壺A	—	19.6	10.4	4/12	底部へラ切り・体部下半へラナデ・中層出土
157	壺	—	10.9	10.8	3/12	底部へラ切り・中層出土
158	壺A	—	10.5	—	5/12	下層出土
159	壺A	—	14.4	9.2	9/12	底部へラ切り後ナデ・中層出土
160	壺B	—	19.1	10.8	9/12	底部へラ切り・体部下半へラ削り・下層出土
161	壺B	—	19.3	9.8	6/12	底部へラ切り・下層出土
162	壺B	—	17.3	—	4/12	体部中央に1条のへラ書沈線・下層出土
163	壺B	—	21.5	—	8/12	中層出土
164	壺B	—	21.5	—	1/12	底部へラ切りの後ナデ・下層出土
165	壺	19.0	10.9	—	2/12	中層出土
166	壺	19.0	10.9	—	2/12	中層出土
167	壺B	18.2	13.8	—	7/12	肩部に1条の凸帯・下層出土
168	壺B	—	6.5	—	2/12	肩部に1条の凸帯・上層出土
169	壺B	—	5.1	—	4/12	肩部に1条の凸帯・中層出土
170	壺B	—	13.5	—	2/12	肩部に1条の凸帯・中層出土
171	壺B	—	27.6	—	3/12	肩部に1条の凸帯・中層出土
172	壺B	—	26.0	—	3/12	肩部に2条の凸帯・下層出土
173	壺	—	13.2	13.0	3/12	底部へラ切り・体部下半へラナデ・中層出土
174	壺B	—	9.0	—	3/12	肩部に2条の凸帯と2条のへラ書沈線・上層出土
175	壺B	—	7.7	—	1/12	肩部に1条の凸帯と4条のへラ書沈線・中層出土
176	壺B	—	21.2	—	4/12	肩部に1条の凸帯・体部下半へラナデ・上層出土
177	蓋B	12.5	3.9	—	6/12	上層出土
178	蓋B	13.0	2.6	—	3/12	中層出土
179	壺C	12.0	5.6	—	2/12	上層出土
180	蓋B	11.7	3.9	—	4/12	中層出土
181	蓋B	11.0	2.6	—	1/12	中層出土
182	壺C	10.4	3.4	—	2/12	上層出土
183	壺C	13.6	5.0	—	6/12	肩部から頸部外面タタキ整形後ナデ・下層出土
184	壺C	10.0	6.0	—	2/12	中層出土
185	壺C	9.6	6.9	—	2/12	
186	壺C	9.6	4.7	—	2/12	中層出土
187	壺C	10.5	15.2	—	4/12	下層出土
188	壺C	—	13.0	14.2	3/12	体部下半へラナデ調整・中層出土
189	壺C	—	1.8	12.7	3/12	中層出土
190	壺C	10.9	8.2	—	2/12	中層出土

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴
		口径	器高	底径		
191	壺C	16.0	<u>3.2</u>	—	2/12	上層出土
192	壺C	10.3	<u>4.8</u>	—	1/12	上層出土
193	壺C	11.0	<u>22.7</u>	—	3/12	体部下半ヘラナデ・ヘラ削り調整・下層出土
194	壺C	—	<u>3.4</u>	16.6	9/12	中層出土
195	壺C	—	<u>3.0</u>	17.0	7/12	下層出土
196	鉢B	13.2	<u>3.5</u>	—	1/12	内外面回転ナデ調整・中層出土
197	鉢B	11.8	<u>3.5</u>	—	3/12	内外面回転ナデ調整・中層出土
198	鉢B	—	<u>7.0</u>	—	4/12	底部外面弱いヘラ削り後ナデ・中層出土
199	甕	19.4	<u>10.4</u>	—	3/12	肩部タタキ整形・下層出土
200	甕	24.0	<u>6.4</u>	—	2/12	肩部タタキ整形・中層出土
201	甕	44.2	<u>12.5</u>	—	2/12	口縁部～肩部タタキ整形・中層出土
202	甕	31.2	<u>10.5</u>	—	2/12	肩部タタキ整形・上層出土
203	甕	32.1	<u>8.2</u>	—	2/12	上層出土
204	甕	16.4	<u>8.1</u>	—	4/12	土師質・下層出土
205	鉢A?	34.0	<u>8.0</u>	—	2/12	土師質・中層出土
206	羽釜	32.9	<u>6.6</u>	—	3/12	土師質・上層出土
207	羽釜	28.5	<u>10.1</u>	—	2/12	土師質・上層出土
208	羽釜	26.7	<u>6.5</u>	—	2.12	土師質・下層出土
209	羽釜	24.2	<u>13.1</u>	—	3/12	土師質・上層出土
210	平瓶	—	—	—	/12	下層出土
211	平瓶	—	—	—	/12	上層出土

表15 向上・古城1号窯跡 周溝内出土土器観察表

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴
		口径	器高	底径		
212	杯A	15.4	3.2	7.8	1/12	底部ヘラ切り後ナデ・西側周溝出土
213	杯A	14.4	3.5	7.8	1/12	底部ヘラ切り・東側周溝出土
214	杯A	13.8	3.7	7.8	3/12	底部ヘラ切り・見込みにヘラ書・東側周溝出土
215	杯A	12.9	3.3	7.1	1/12	底部ヘラ切り後ナデ・西側周溝出土
216	杯A	—	<u>1.5</u>	7.7	12/12	底部ヘラ切り・見込みにヘラ書・東側周溝出土
217	杯A	14.2	3.5	7.5	5/12	底部ヘラ切り後ナデ・底部外面にヘラ書・東側周溝出土
218	蓋A	16.9	<u>1.6</u>	—	2/12	天井部ヘラ切り後ナデ・東側周溝出土
219	蓋A	16.0	<u>1.6</u>	—	2/12	重ね焼痕あり・東側周溝出土
220	蓋A	14.5	<u>1.7</u>	—	3/12	東側周溝出土
221	蓋A	15.0	<u>1.9</u>	—	2/12	天井部ヘラ切り・東側周溝出土
222	蓋A	14.9	2.6	—	2/12	東側周溝出土
223	蓋A	14.5	3.7	—	3/12	天井部ヘラ切り後ナデ・東側周溝出土
224	杯B	—	2.4	8.9	4/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・底部に爪先圧痕・東側周溝出土
225	椀B	—	<u>1.9</u>	7.6	3/12	底部ヘラ切り後ナデ・見込みに「用」のヘラ書
226	椀B	—	<u>2.6</u>	6.8	8/12	底部ヘラ切り・東側周溝出土
227	椀B	16.3	5.3	8.3	1/12	底部ヘラ切り後ナデ・東側周溝出土
228	椀B	15.4	5.1	8.2	6/12	底部ヘラ切り・西側周溝出土
229	椀B	15.0	<u>4.9</u>	—	3/12	東側周溝出土
230	皿A	16.5	2.2	9.2	1/12	底部ヘラ切り・西側周溝出土
231	皿A	14.9	1.9	7.6	2/12	底部ヘラ切り後ナデ・東側周溝出土
232	皿B	16.3	2.6	7.5	1/12	底部ヘラ切り
233	皿B	15.2	2.2	5.8	2/12	東側周溝出土
234	壺	—	6.2	8.4	8/12	底部ヘラ切り後ナデ・東側周溝出土
235	壺C	—	10.8	9.0	6/12	底部ヘラ切り後ナデ・東側周溝出土
236	壺B	—	<u>14.8</u>	—	4/12	肩部に4条の沈線・西側周溝出土
237	壺	11.6	<u>7.1</u>	—	6/12	東側周溝出土
238	壺A	11.0	<u>6.7</u>	—	2/12	西側周溝出土
239	壺B	—	24.2	11.4	8/12	底部ヘラ切り後ナデ・東側周溝出土
240	壺B	—	<u>16.3</u>	9.1	6/12	底部ヘラ切り・西側周溝出土
241	壺	—	<u>11.1</u>	13.8	2/12	底部ヘラ切り後ナデ・東側周溝出土
242	蓋B	—	1.9	—	12/12	西側周溝出土
243	壺C	—	1.9	—	12/12	西側周溝出土
244	壺C	10.0	18.3	—	5/12	東側周溝出土
245	鉢A?	16.9	18.4	11.9	6/12	東側周溝出土
246	鉢A?	32.0	<u>6.3</u>	—	2/12	東側周溝出土
247	鉢A?	26.0	<u>7.6</u>	—	2/12	東側周溝出土
248	甕	23.0	<u>15.0</u>	—	3/12	体部タタキ整形・土師質・東側周溝出土
249	羽釜	21.2	9.4	—	3/12	体部・口縁部タタキの後ナデ・土師質・西側周溝出土
250	火舎	—	<u>3.3</u>	12.1	3/12	東側周溝出土

表16 向上・古城2号窯跡 窯体内出土土器観察表

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴
		口径	器高	底径		
1	杯A	15.4	4.3	8.9	12/12	底部へラ切り・焼成不良
2	杯A	14.9	4.2	9.3	12/12	底部へラ切り・焼成不良
3	杯A	15.2	4.2	9.1	12/12	底部へラ切り
4	杯A	15.2	4.4	9.2	12/12	底部へラ切り
5	杯A	14.2	3.2	8.2	4/12	底部へラ切り
6	杯A	14.1	3.1	8.3	8/12	底部へラ切り
7	杯A	15.9	3.7	—	4/12	底部へラ切り
8	杯A	15.2	4.0	9.7	4/12	底部へラ切り
9	杯A	15.6	3.7	8.9	6/12	底部へラ切り
10	杯A	14.9	3.3	8.3	3/12	底部へラ切り
11	杯A	14.1	3.6	8.4	4/12	底部へラ切り
12	杯A	14.4	4.2	8.4	6/12	底部へラ切り
13	杯A	14.1	4.3	9.2	4/12	底部へラ切り
14	杯A	13.7	4.3	6.1	2/12	底部へラ切り後ナデ・内面に沈線
15	杯A	12.9	3.4	7.1	2/12	底部へラ切り
16	蓋A	15.4	3.3	—	3/12	天井部へラ切り後ナデ
17	椀B	16.1	5.5	8.2	2/12	底部へラ切り・見込みに沈線あり
18	椀B	14.1	5.9	7.8	3/12	底部へラ切り
19	壺C	11.7	12.8	—	6/12	内外面とも回転ナデ仕上げ
20	風子硯	—	3.9	—	3/12	

表17 向上・古城2号窯跡 灰原出土土器観察表

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴
		口径	器高	底径		
21	杯A	14.2	3.0	8.3	8/12	底部へラ切り
22	杯A	14.0	3.1	8.0	6/12	底部へラ切り
23	蓋A	18.2	2.2	—	2/12	天井部へラ切り
24	蓋A	18.0	2.6	—	12/12	天井部へラ切り
25	蓋A	16.6	1.8	—	2/12	天井部へラ切り・口縁部に重ね焼痕
26	蓋A	16.0	2.6	—	2/12	天井部へラ切り後ナデ
27	蓋A	15.6	2.0	—	3/12	天井部へラ切り
28	蓋A	16.0	2.0	—	3/12	天井部へラ切り
29	蓋A	16.2	1.6	—	2/12	天井部へラ切り後ナデ
30	蓋A	15.0	1.9	—	2/12	天井部へラ切り・口縁部に重ね焼痕
31	蓋A	15.4	3.2	—	4/12	天井部へラ切りの後ナデ・口縁部に重ね焼痕
32	蓋A	15.4	3.0	—	5/12	天井部へラ切り

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴
		口径	器高	底径		
33	蓋A	15.0	2.8	—	2/12	天井部ヘラ切り
34	蓋A	15.3	3.4	—	9/12	天井部ヘラ切り後ナデ
35	蓋A	15.1	3.5	—	12/12	天井部ヘラ切り
36	蓋A	14.6	3.8	—	4/12	天井部ヘラ切り
37	杯B	20.0	7.4	9.0	2/12	天井部ヘラ切り後高台貼り付け
38	椀C	—	5.1	8.8	10/12	底部回転糸切り・内面見込みに螺旋状の沈線
39	椀B	16.6	5.5	7.6	7/12	底部ヘラ切り
40	椀B	15.7	5.5	8.2	2/12	底部ヘラ切り後ナデ
41	椀B	15.1	5.3	7.7	2/12	底部ヘラ切り後ナデ
42	皿A	18.0	2.3	8.7	2/12	底部ヘラ切り・口縁部に重ね焼痕
43	皿B 2	15.2	1.6	6.1	4/12	底部ヘラ切り後ナデ→高台貼り付け
44	皿A	13.6	2.1	7.4	3/12	底部ヘラ切り後ナデ
45	皿B 2	14.3	2.5	6.5	2/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け
46	皿C	3.3	3.1	4.0	3/12	底部ヘラ切り後ナデ・口径は最小径
47	壺	11.6	6.7	—	6/12	
48	壺	—	14.6	16.0	6/12	底部ヘラ切り・体部下半ヘラ削り
49	蓋	12.0	3.0	—	3/12	
50	壺	—	3.3	10.0	3/12	底部ヘラ切り
51	壺C	—	13.2	14.9	5/12	体部下半ヘラナデ
52	甕	30.0	7.4	—	2/12	
53	甕	20.4	7.3	—	5/12	体部内面ヘラ状工具によるナデ・土師質
54	甕	16.5	6.3	—	2/12	土師質
55	甕	16.8	5.3	—	3/12	土師質
56	甕	27.6	6.0	—	1/12	土師質
57	甕	24.0	5.1	—	2/12	土師質
58	羽釜	22.0	8.3	—	2/12	2 mm大の砂粒多く含む

表18 向上・古城2号窯跡 周溝内出土土器観察表

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴
		口径	器高	底径		
59	杯A	14.0	3.2	8.1	2/12	底部ヘラ切り・北側周溝出土
60	杯A	14.3	3.5	8.2	4/12	底部ヘラ切り・南側周溝出土
61	杯A	14.0	3.4	8.5	3/12	底部ヘラ切り・北側周溝出土
62	杯A	13.6	3.5	8.0	9/12	底部ヘラ切り・北側周溝出土
63	杯A	13.9	3.1	7.2	2/12	底部ヘラ切り・内面見込みに螺旋状沈線・北側周溝出土
64	蓋A	16.0	3.5	—	6/12	天井部ヘラ切り後ナデ・北側周溝出土
65	蓋A	16.0	2.4	—	2/12	天井部ヘラ切り・南側周溝出土
66	蓋A	15.2	2.5	—	3/12	天井部ヘラ切り・北側周溝出土
67	皿A	15.0	2.9	9.3	3/12	底部ヘラ切り・北側周溝出土
68	皿A	16.0	2.7	—	3/12	底部ヘラ切り・北側周溝出土
69	皿B 2	14.0	2.7	7.2	3/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け・見込みに重焼痕・北側周溝
70	壺B	—	13.9	—	4/12	北側周溝出土
71	壺	—	9.5	—	9/12	北側周溝出土
72	壺	—	6.1	—	3/12	北側周溝出土
73	鉢A ?	14.0	5.3	—	5/12	北側周溝出土
74	羽釜	22.4	9.8	—	2/12	体部外面をタタキ整形・土師質・南側周溝出土
75	羽釜	22.0	6.9	—	3/12	土師質・南側周溝出土
76	甕	42.0	11.4	—	4/12	北側周溝出土

表19 3号遺構出土土器観察表

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴
		口径	器高	底径		
93	杯A	—	2.9	7.0	6/12	底部ヘラ切り・内面見込みにヘラ書
94	杯A	—	<u>2.3</u>	8.1	7/12	底部ヘラ切りの後ナデ
95	杯B	—	<u>2.1</u>	8.0	4/12	底部ヘラ切りの後ナデ→高台貼り付け
96	椀B	16.0	6.1	7.9	5/12	底部ヘラ切りの後ナデ
97	壺C	11.2	<u>6.6</u>	—	3/12	

表20 4号遺構出土土器観察表

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴
		口径	器高	底径		
77	杯A	14.2	3.1	8.4	2/12	底部ヘラ切り後ナデ・内面見込みにヘラ書
78	杯A	13.8	3.7	7.3	2/12	底部ヘラ切り後ナデ・内面見込みにヘラ書
79	杯A	—	<u>2.9</u>	8.1	11/12	底部ヘラ切り後ナデ・内面見込みにヘラ書
80	杯A	—	<u>1.0</u>	7.4	12/12	底部ヘラ切り・内面見込みにヘラ書
81	杯A	16.0	2.9	9.3	4/12	底部ヘラ切り後ナデ
82	皿A	15.0	2.1	8.2	5/12	底部ヘラ切り
83	椀B	15.0	5.7	7.5	3/12	底部ヘラ切り
84	椀B	15.8	5.7	8.3	2/12	底部ヘラ切りの後ナデ
85	壺A	—	14.4	8.8	9/12	底部ヘラ切りの後ナデ
86	壺C	9.9	3.8	—	1/12	
87	壺	10.9	3.8	—	4/12	
88	壺	10.0	<u>6.2</u>	—	6/12	
89	壺A	—	<u>17.6</u>	—	4/12	底部ヘラ切りの後ナデ
90	壺A	—	<u>16.4</u>	—	4/12	
91	壺	19.2	<u>4.7</u>	—	6/12	
92	壺B	—	<u>20.8</u>	—	4/12	肩部に2条の沈線・耳貼り付け

## 第8章 中池ノ内1号窯跡の調査

### 第1節 調査の方法

#### 1. 位置 (図版99・100、挿図149)

中池ノ内1号窯跡は三田市上相野字中池ノ内に所在する。窯の位置する谷は、相野川左岸に広がる丘陵が開析されて形成したものである。谷の開口部付近は上相野の集落の北端にあつている。窯跡はこの谷の最奥部に立地する。

また、今回発掘調査を行った1号窯の他に、調査の途中、東に約60～70m谷を下った2箇所の地点で須恵器を採取した。いずれの採取地点も直上には尾根地形が張り出ししており、須恵器の存在が考えられた。従って、それぞれの地点を中池ノ内2号・3号窯跡と仮称した。しかし、両窯は今回の開発には支障がないため調査は実施していない。

谷の開口部付近の標高はおよそ200mで、谷奥に向けてやや急な角度で高さを増している。開口部から谷奥にかけてはほぼ直線的に伸びるもので、支谷等は形成されない。

周辺には谷の南側丘陵を挟んで西谷池窯跡が立地し、北側にはやや離れて約340mに向上・古城窯跡が立地する。向上・古城窯跡との間には2本の谷が入るが今の所窯跡は見つかっていない。しかし、中池ノ内窯跡に隣接する北側の谷で須恵器片を採取しており、未発見の窯が存在する可能性も残されている。

窯の狭口付近の標高は241.6mで、この周囲の谷底付近は標高225.0m、北背後の丘陵頂上部は標高246.0mである。窯本体は斜面の上方約2/3あたりに構築しており、谷底からかなり上つた部分に位置している。

窯の立地する斜面は南向きのやや急な地形で傾斜は約20～25°前後である。

#### 2. 方法 (図版101・102、挿図150・151)

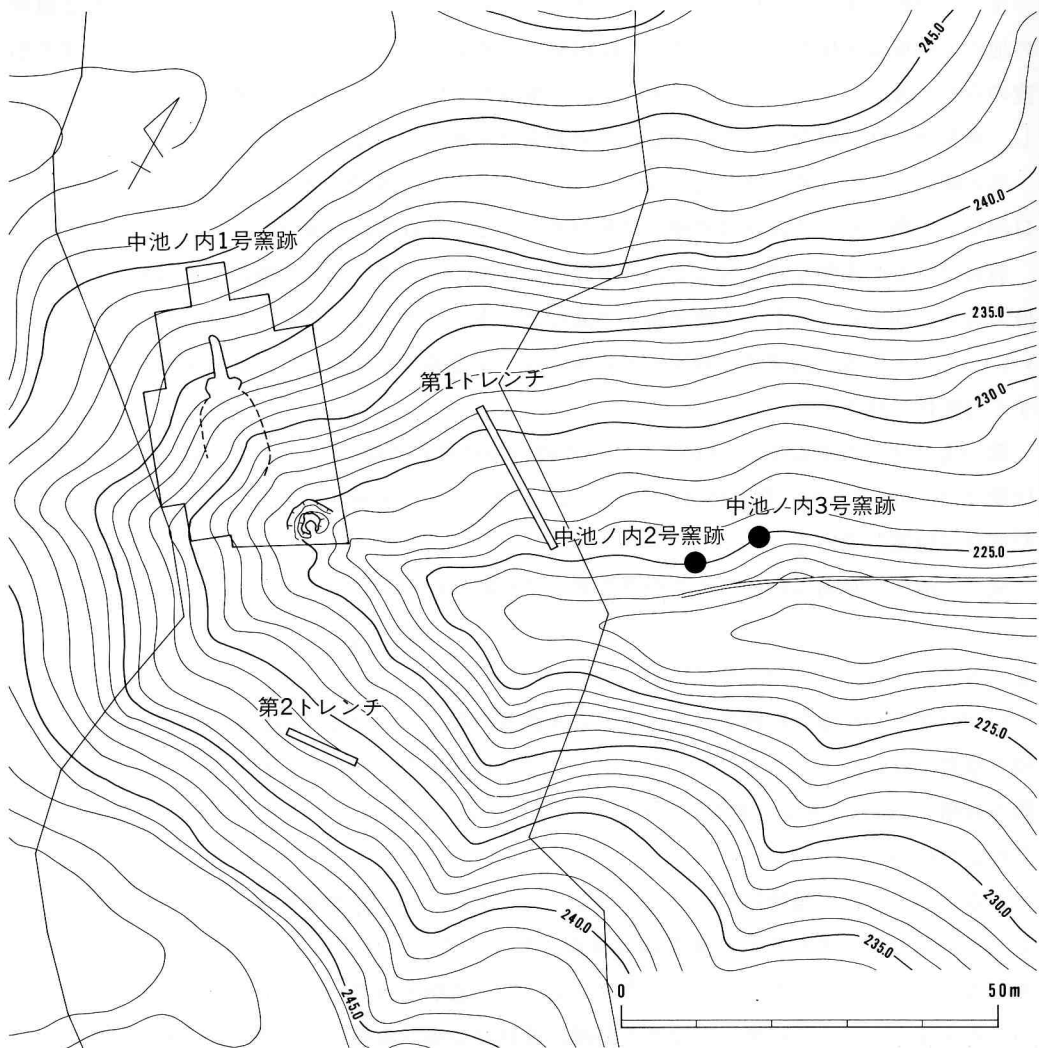
昭和54年度の兵庫県教育委員会による分布調査の際にこの付近で須恵器の散布が認められ、須恵器窯の存在が知られることとなった。このためSTA14地点と仮称して調査を実施した。調査面積は720㎡である。調査は昭和61年5月6日から6月30日にかけて行ない、岡崎正雄・山上雅弘が担当した。

調査に際しては、遺物散布状況から推定される窯跡の方向を基準線として、5m区画のメッシュを設定した。それぞれの基準線は東西が数字の1～5ライン、南北がアルファベットのA～Gラインとした。そして、表土掘削の際に遺物を各グリッドごとに取り上げ、遺物量その分布を捉えた。その結果、かなりの範囲に遺物の分布が認められ、灰原が広範囲に渡って広

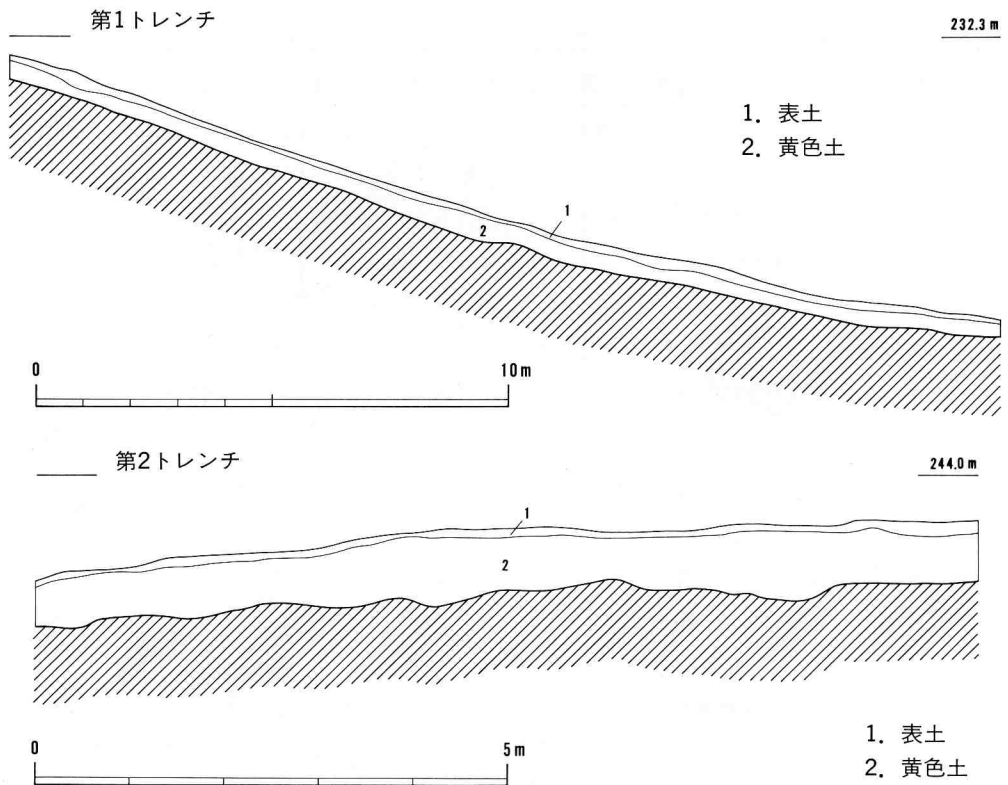


ることが予想された。窯跡を検出した後、その中軸線に縦断軸を、横断方向には、窯跡部に3本、灰原部に1本の軸線を決め、断面観察の基準線とし、断ち割りもそのラインに沿って行った。

なお、調査の後に熱残留磁気測定のための試料採取作業を実施している。この他、調査に入る前に窯体の存在箇所を確認するために電磁気探査測定を実施した。電磁気探査測定の結果、窯跡の立地する地点以外に3ヵ所で磁気反応が見られた。1ヵ所については調査の結果、炭窯と判明した。他の2ヵ所についてはそれぞれトレンチを設けて確認調査を全面調査に並行して行った。



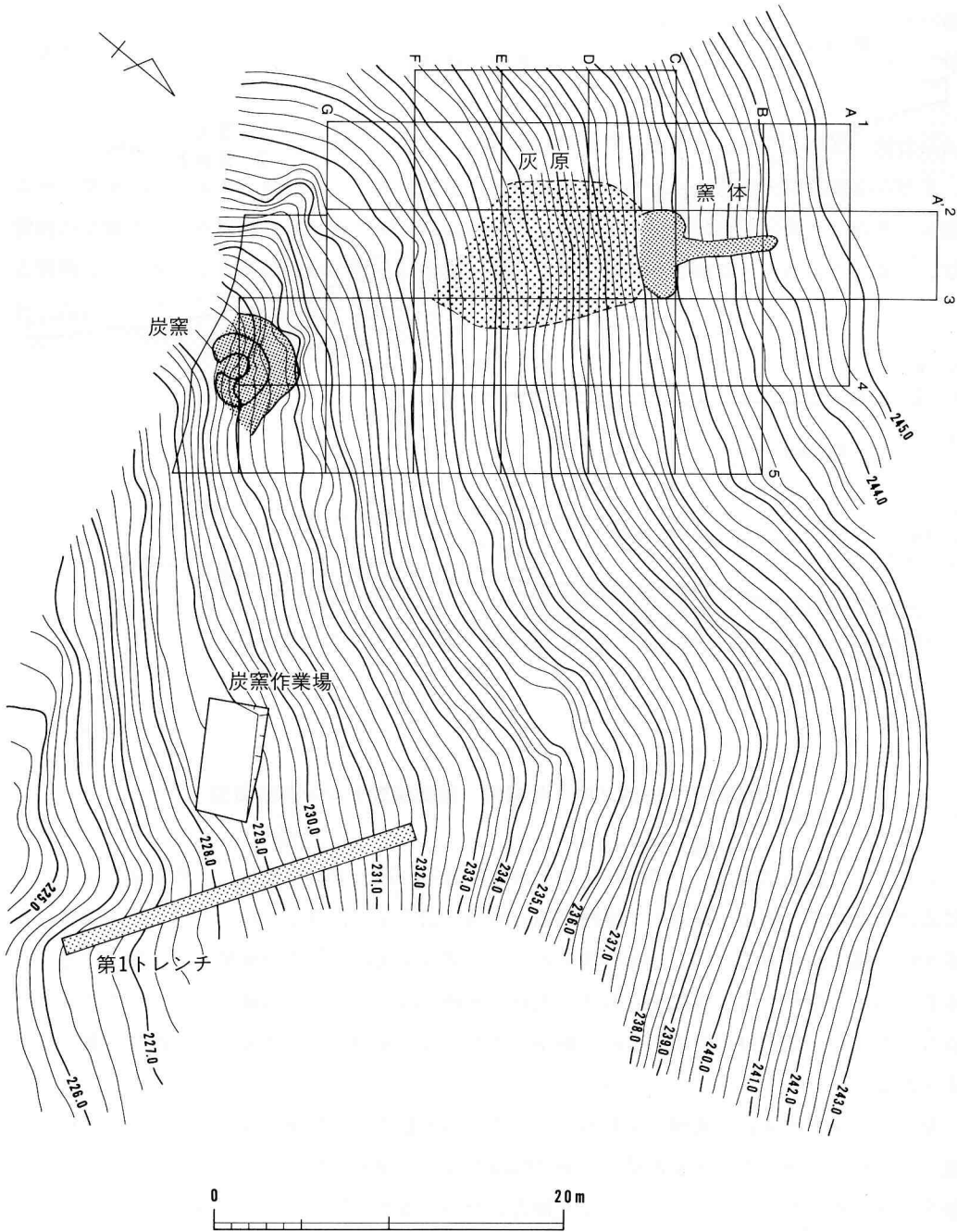
挿図149 中池ノ内窯跡群位置図



挿図150 中池ノ内1号窯跡 確認調査トレンチ断面図

トレンチの調査結果については以下のとおりである。第1トレンチは、1号窯址と同一斜面に設けたもので、斜面を縦走して道路用地の東端に沿うように設定した。トレンチの規模は長さ20m×幅1mである。10～15cm程度の表土と、40cm前後の黄色土が堆積していた。須恵器片も若干出土したが、炭・灰は見られず、土砂の堆積も浅いもので、遺跡の存在を示す徴候は得られなかった。この付近で磁気反応が観察できたのは、東側に立地する2号窯跡の影響とも考えられる。

第2トレンチは窯跡の南側の反対斜面に長さ10m×幅1mの規模で設けた。10～15cm程度の表土と、60cm前後の黄色土が堆積し、層厚64cmで地山を検出した。しかし、遺構・遺物は全く検出できなかった。また、付近をかなり踏査したが、遺物が散布している状況もないことから窯跡は立地しないと判断した。

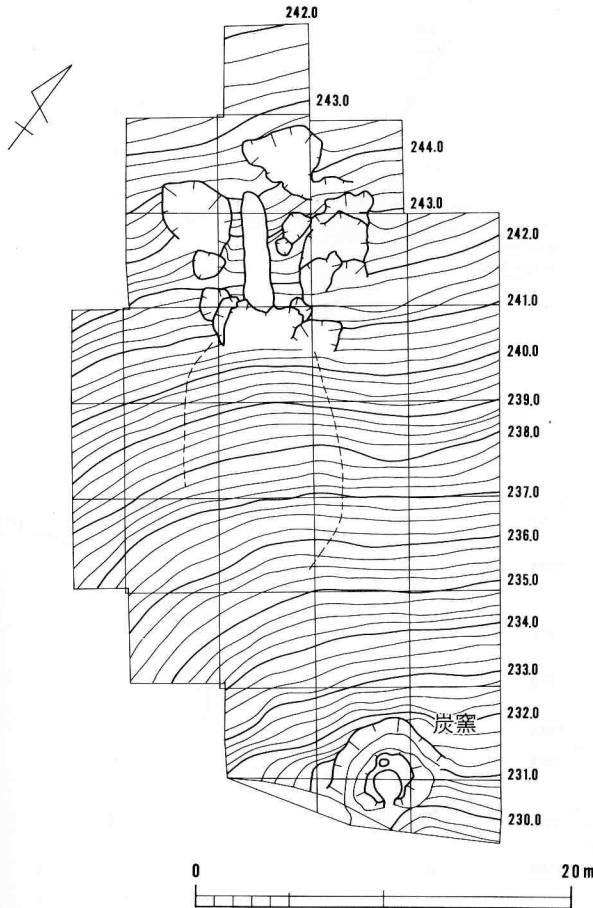


挿図151 中池ノ内1号窯跡 調査位置図

## 第2節 遺構の調査

### 1. 概要 (図版103~107、挿図153・154)

中池ノ内1号窯跡は地山を掘り込んだ半地下式の窖窯である。窯体・周溝・灰原を検出することが出来た。窯体は天井部・煙道部が欠失しており側壁も良く残るところで0.3m程度と余り深くない。煙道については焼土の広がり(赤変した土の範囲)からその痕跡をうかがうことができた。但し、窯体については側壁の残りは悪いが、窯体内部に埋土が遺存しており、窯廃棄時の窯体内の遺物を検出できた。また、焚口・灰原についても当時の堆積が攪乱されずに残っていることがわかった。出土遺物はコンテナ251箱分に及んでいる。周溝は窯体の周囲の地山を削り出し、テラス状の遺構が何段にも連なるものである。周溝として報告したが実際には、排水機能の他に作業場として利用されたと考えられる。窯体の主軸の方位はN42°Wである。



挿図152 中池ノ内1号窯跡・炭窯遺構全体図

### 2. 窯体 (挿図155~159)

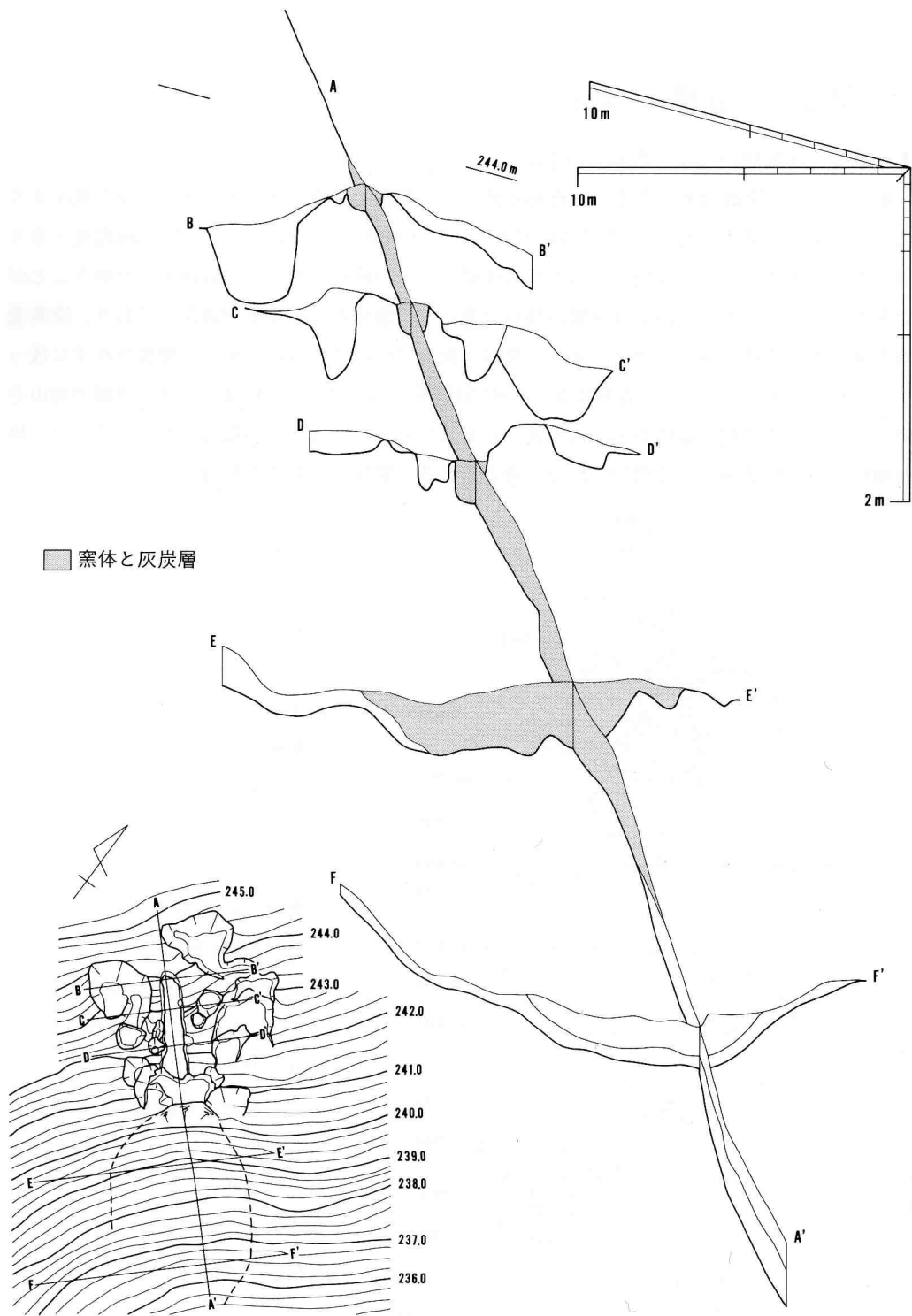
#### 規模

焚口部まで含めた窯跡の規模は全長が水平長6.1m、斜面長6.7mである。

燃烧部と焼成部の境界は厳密に区分できるものは見出せないが、窯体下端より1.25m付近(水平長、以下同様)が変換点と思われる。

#### 焚口・前庭部

焚口・前庭部は良く残っていた。前庭部は地山を削り出して長さ0.8~1.5m、幅2.5m程の長方形の段状を呈している。焚口と前庭部との段差は0.4mがある。前庭部は狭い場所であるが、窯炊きの作業場として使われたと思われる。調査の結果、窯焼成後の掻き出しによって溜まった土砂が検出できた。この土砂には大量の土器・窯体片・炭・灰を含んでおり、土器



挿図153 中池ノ内1号窯跡窯体・周溝・灰原土層堆積状況図

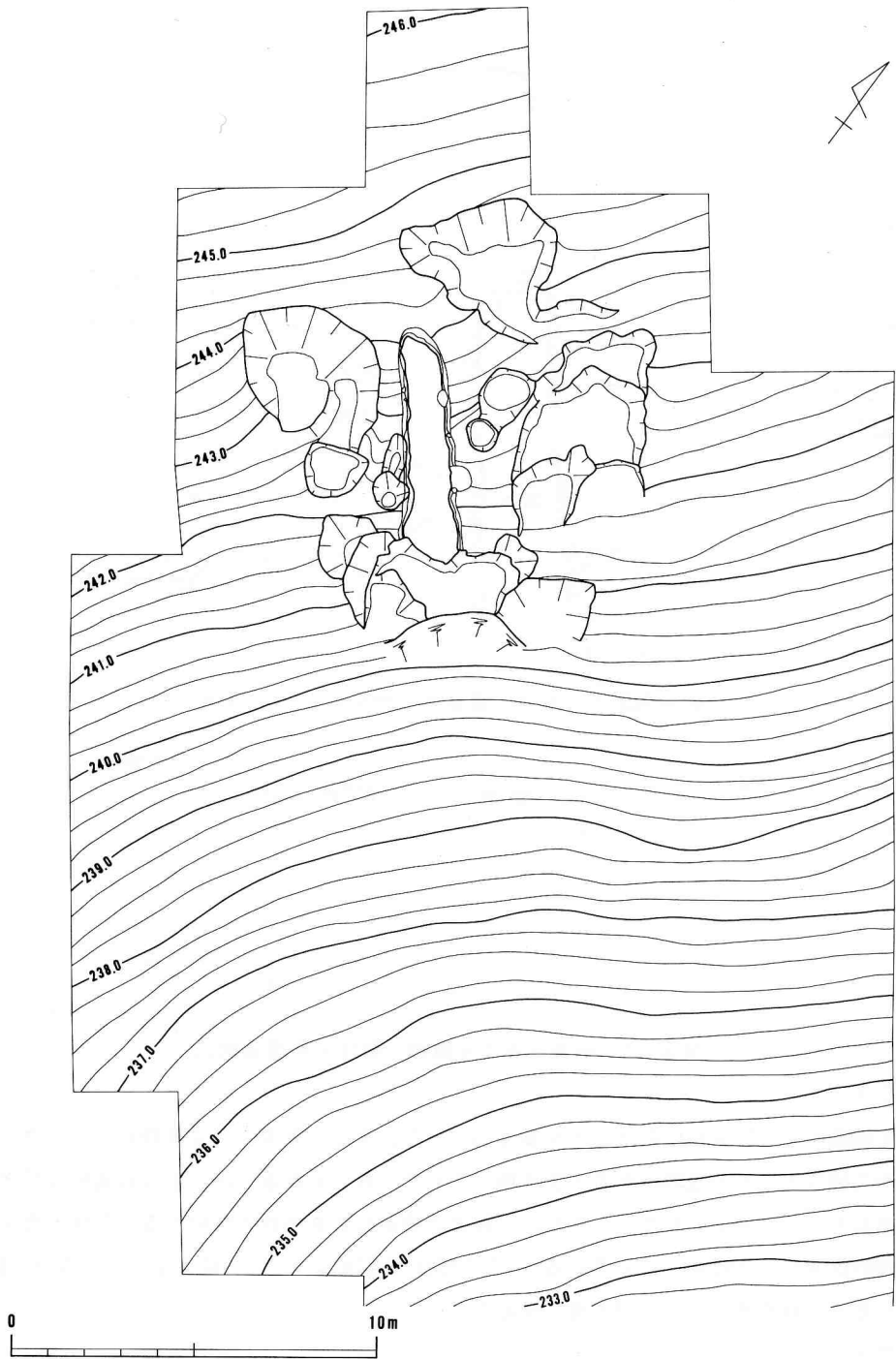
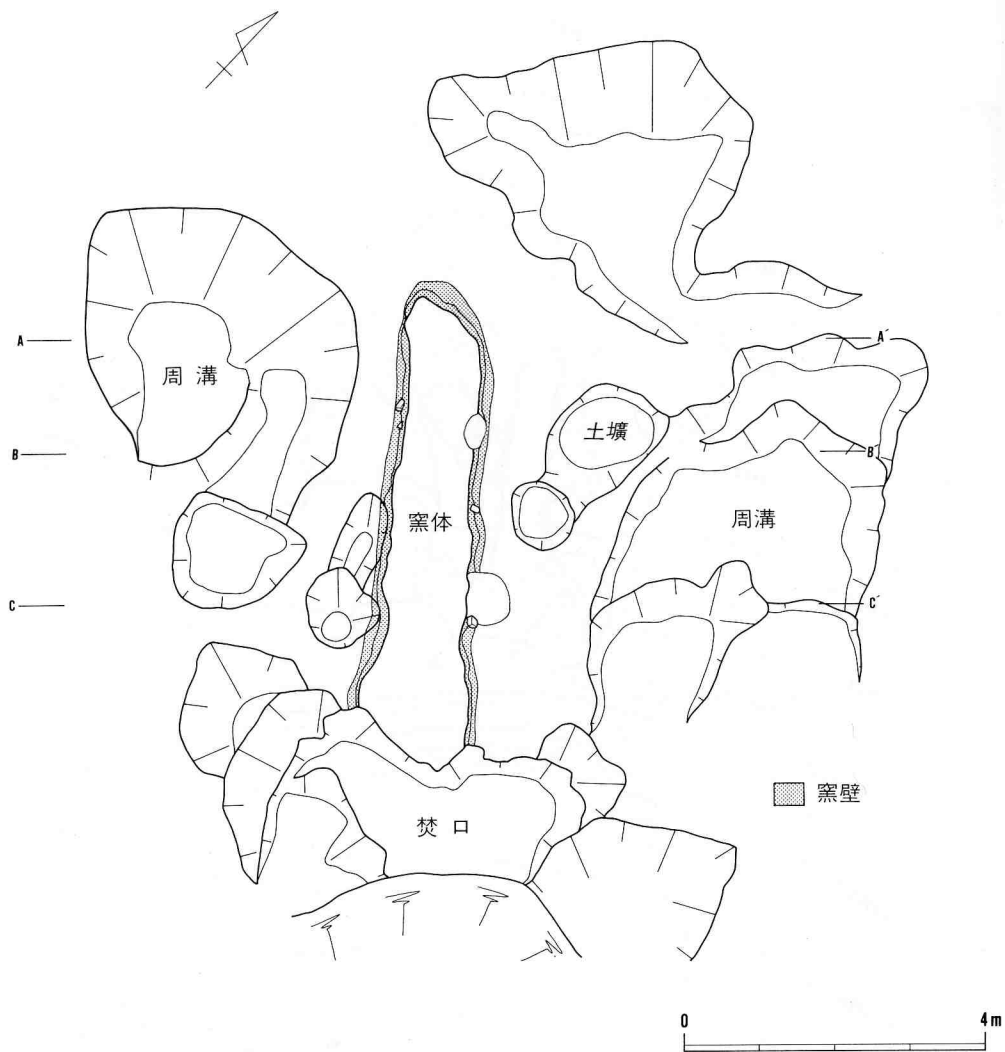


插图154 中池ノ内1号窠跡遺構全体図

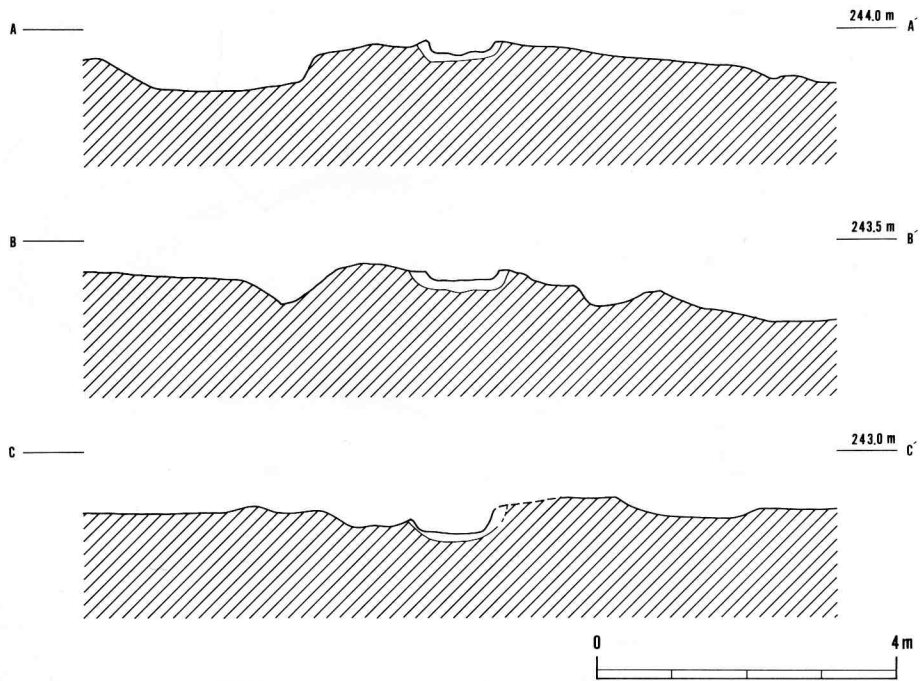


挿図155 中池ノ内1号窯跡 窯体・周溝遺構図

は杯・椀類を中心に完形に近いものが多く出土した。また、重焼きのまま粘着した遺物も見られ窯から掻き出された遺物がそのまま堆積したものと考えられる。従ってこの遺物は最終時の掻き出しのものと考えられた。しかし、下部の灰層との間を明瞭に区分することは出来ず、出土遺物の区分はやや曖昧になっている。そこで焚口の遺物については確実なもののみを掲載し、どららとも判断できないものは灰層に含んだ。

#### 燃焼部

燃焼部は長さ1.25m前後、幅1.25m(最大部分)である。最終床面の傾斜角度は約12°である。



挿図156 中池ノ内1号窯跡 窯体・周溝断面図

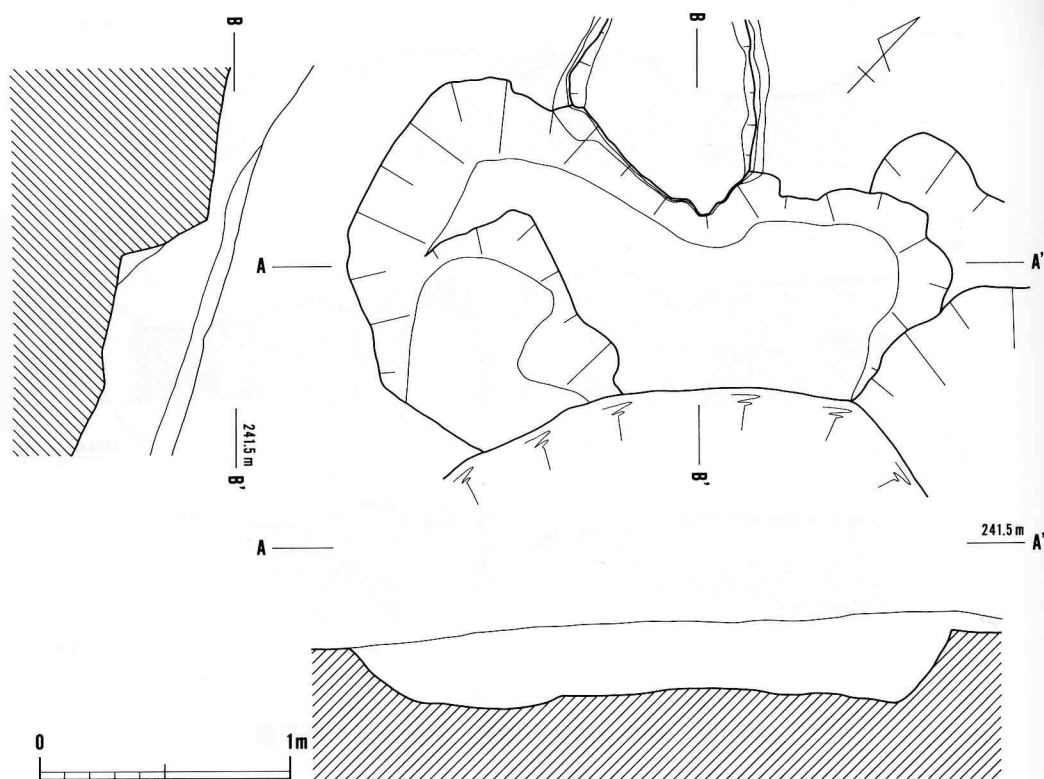
床面は部分的に1回以上の補修が認められた。(図に示した下層床面と上層床面の間が補修部分) 補修の結果、燃烧部の下端が上がり、床面の傾斜角が緩やかになっている。他にも窯体は様々な場所が部分的な補修を繰り返したと思われ、床面や窯壁には乱雑な凹凸が見られた。

また、燃烧部の西側が焚き口に向かうに従って広がっており、下膨れ様の形態を呈する。これらは、谷からの風をより多く取り込み、熱効率を良くするために工夫がなされた痕跡と考えられる。

#### 焼成部

焼成部の下半は比較的良く残るが、上端では床面のみがかろうじて残存する程度である。全長4.85m、幅は下方程広く、最大幅は1.1mである。床面の傾斜角度は下部で24°、上部で28°で、上部ほど斜度が増している。最も良く残っているところでの側壁の残存深さは0.15mである。窯体内には窯壁や赤く焼けた土が多く堆積しており、外部からの流入土は少ない。床面の還元層の厚さは7～8cm程度で、焼き締まって非常に硬く、灰青色を呈していた。還元層の下部には10cm前後の厚さで赤変層が続いている。床面には釉着した遺物が多く検出された。杯・碗類が多く一部に甕の破片も見られる。これらの遺物は最終焼成の製品の大半が持ち去られず放置されたのではないかとと思われる。また遺物は、正位置に重ねられたものもあるが、中には意図





挿図157 中池ノ内1号窯跡 窯体前庭部遺構図

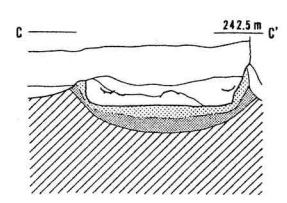
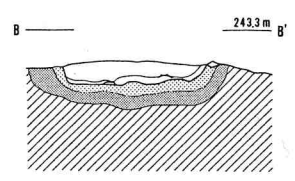
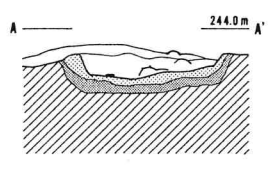
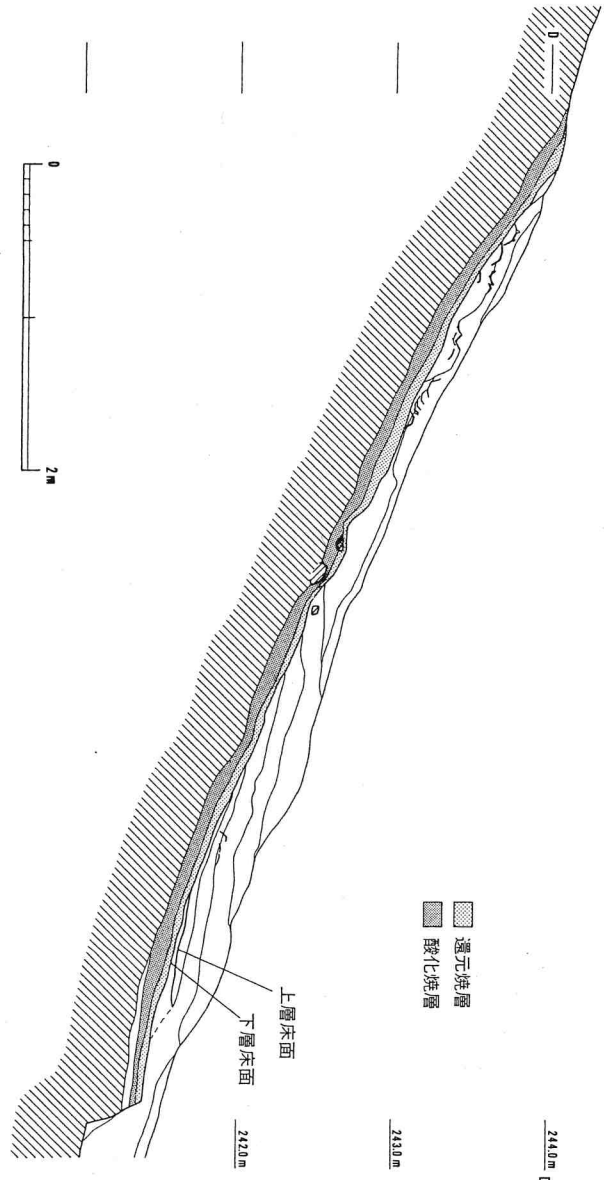
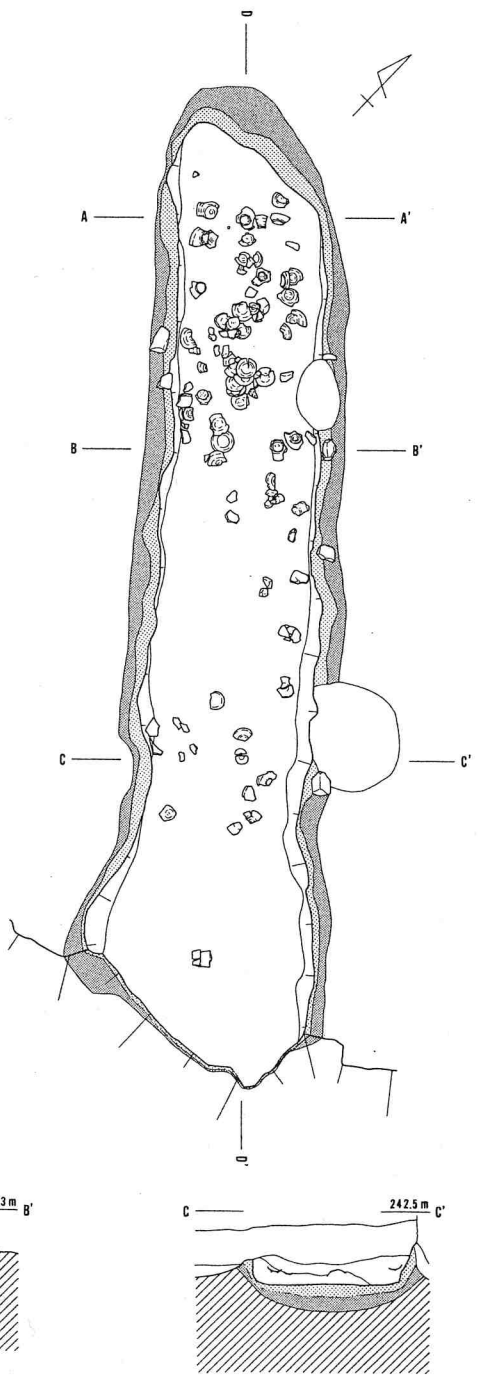
的に伏せて置いたものや、甕の破片などが小さく割られているものが見られることから窯道具として使ったものもあると思われる。

その他、甕には窯壁内に塗り込めた破片がある。これらは、壁補修時に補強材として入れたものと思われる。燃烧部同様何度かの補修を裏付けるこれらの痕跡は、当窯が何回かの操業を実施した結果と考えられる。

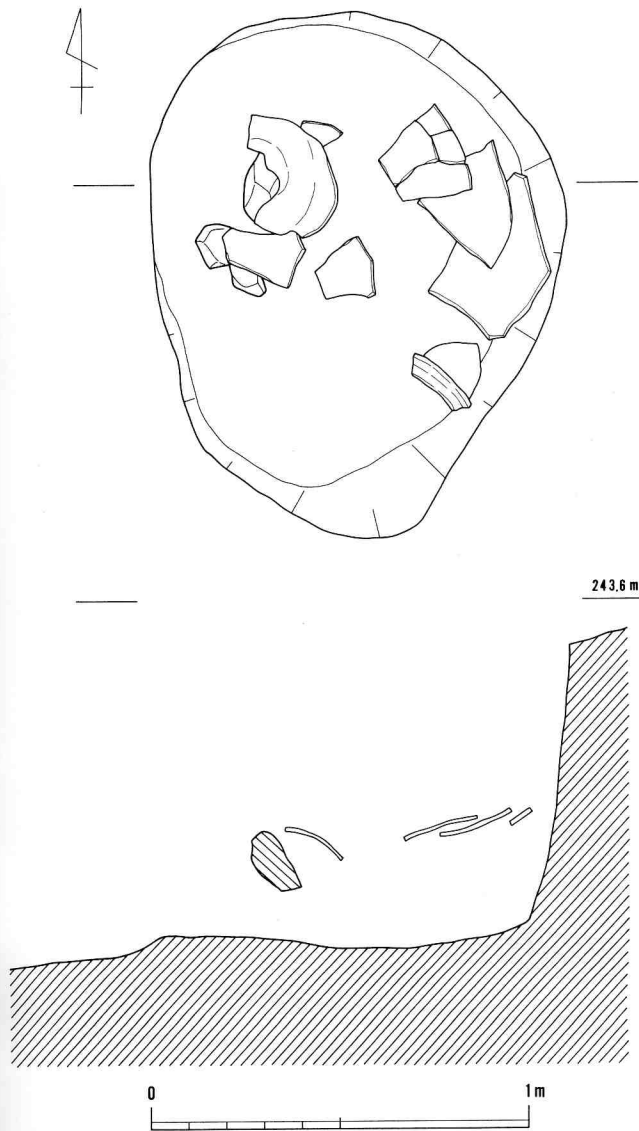
(なお、窯体平面図に示した窯の右側面を切り込む大きな土壙状のものは、木の切り株である。調査時に根を掘り起こしてしまうと窯体が破壊されるため、そのまま調査を行った。)

#### 煙道

煙道は削平されて残存しないが、窯体上部に薄く赤変した部分が若干観察できた。痕跡は薄く微かなもので窯体よりさらに1m程上方に伸びていたが、窯体の赤変層との区別も明確ではないため、範囲を明示することはできなかった。



挿図158 中池ノ内1号窯跡 窯体遺構図



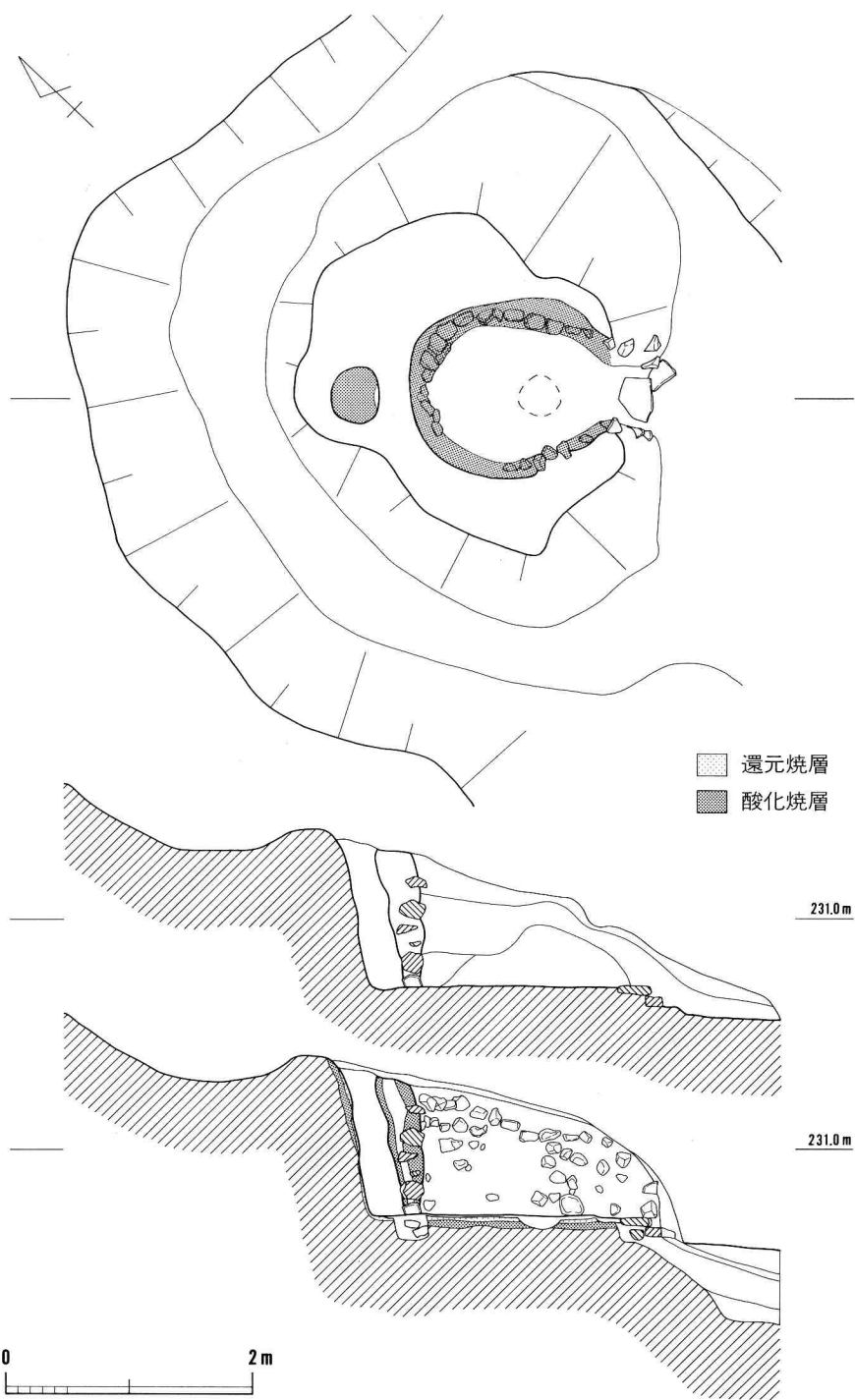
挿図159 中池ノ内1号窯跡 周溝内土壙遺構図

考えられる。挿図159に示した土壙は周溝東側の土壙としたものである。南北軸にやや膨らむ楕円形を呈する。長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.8mを測る。埋土は地山土であるが須恵器や炭を多く含んでいた。出土した遺物には羽釜・甕がある。

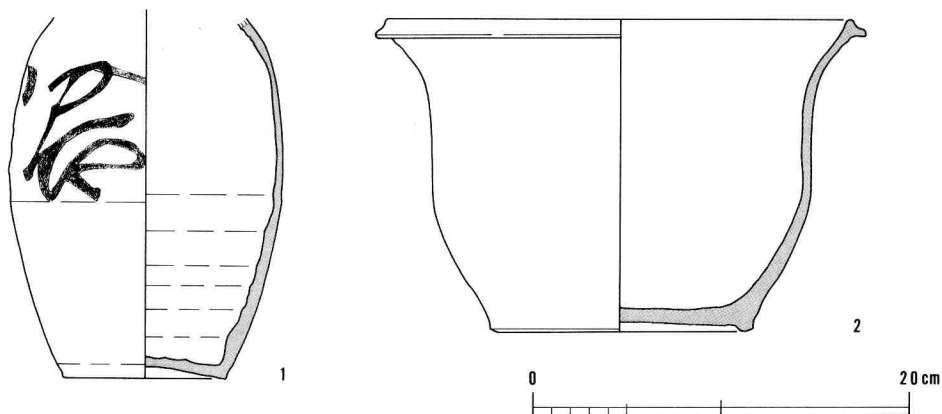
### 3. 周溝

窯体部を取り囲むように、斜面上方から両側方にかけて周溝が設けられている。しかし、整然としたものではなく、大小の土壙とそれを繋ぐ溝が不規則に連なったものである。周溝の範囲は縦10.0m、横11.2mの広がりをもっている。土壙は窯体下方ほど大きく残りがよいが、窯体の上方は浅い掘り込みがあるのみである。土壙の形状は不定形か楕円形が多いようである。

規模は大きいもので長さ4.0m、小さいもので長さ1.0m、深さは最も深いもので0.8m前後である。概して窯体同様下半ほど残りが良いようである。何れも埋土には須恵器・炭などを含んでいた。土層を観察すると、これらの遺構は一時にこの形態が形づくられたのではなく、部分的な掘削が繰り返された結果と考えられる。また、幾つかの平坦地状に削平された箇所がある所から、単に排水用としてのみ利用されたのではなく、何らかの作業場としても利用していたと



挿図160 中池ノ内窯跡群 炭窯遺構図



挿図161 中池ノ内窯跡群 炭窯出土土器

#### 4. 灰原

焚口部を基点に斜面下方に灰原が広がる。比較的良好に残っており、表土を除去し面検出を行ってみると、周囲から最大20~30cm隆起した灰層を検出できた。

灰層は黒色を呈し、須恵器・窯体片・炭・焼土を多く含んでいる。長さ12.0m、幅8.0m前後の規模を有していた。厚さは前庭部直下が最も厚く0.4mを測る。しかし、灰層の土層の観察が



挿図162 調査風景

らは作業単位ごとの投棄を認識することはできなかった。但し、断面の観察から、土層には攪乱が見られず、灰層堆積後、攪乱や大きな流失が起こっていないと思われる。

灰層から下方にはさらに広い範囲で遺物が出土する。これらの遺物は谷底まで広がっているが、灰層から流失したもので、2次的な堆積と考えられる。

#### 5. 炭窯 (図版108・109、挿図160)

調査区の斜面の谷底近くで炭窯が見つかり、併せて調査を行った(昭和59年度実施の地磁気探査No.14地点N地区のaとして、須恵器窯以外の遺構の反応を示していた)。炭窯は天井部が崩落しているものの、良好な形で残っていた。窯体の構築は、斜面側の地山を円形に削り出し、開口部には盛土をして側壁を築き、周囲に周溝を馬蹄形に巡らすものである。このため、外観は土饅頭形を呈している。窯体内の平面は無花実型を呈しており、寸法は長軸1.6m、短軸0.7m、残存高は最大で1.1mを測った。壁は石を塗り込めて補強しながら築いている。窯の入口は幅0.2mと狭く、床に平石を置き、側壁にも補強の石を立てている。煙道は窯体の奥壁に設けられ、煙が地表面に抜ける構造になっている。

窯体の床面にはタール状になった樹脂の油分が数cmの厚さで堆積している。また、床面中央には直径35cm、深さ10cmの円形の窪みがあって、天井を支える柱の沈んだ痕跡と考えられた。窯の前面には炭・焼土混じりの土層が厚く堆積していた。この堆積土によって炭窯の前面に狭い平場が確保され、作業場として利用したと思われる。

炭窯内からは丹波焼德利・同じく鉢・瓦片などが出土した。丹波焼德利(1)は肩部より下の破片で内面にロクロの引き上げ痕跡が残る。外面は暗褐色の鉄釉がかかり、イッチン掛けて文字が入る。丹波焼鉢(2)は大きく口縁の開くもので底部には低い輪高台が付く。

### 第3節 遺物

#### 1. 概要 (図版110~131、挿図163~192)

中池の内窯跡に伴う遺物は、窯体内・周溝・焚口・灰原・表土から出土している。中池ノ内1号窯跡の窯体中程より下半分は比較的良く残っており、遺物は灰原および表土のものが大多数である。また、表土と灰原については区別が困難であったため、一括して報告している。遺物については、窯体内・周溝・焚口・灰原(表土)の順に報告する。出土した遺物の器種には杯・椀・皿・壺・壺蓋・鉢・甕・硯などの他、土師器の甕が2点含まれている。器種別の個体数は杯Aが最も多く、次いで碗A・碗Bがある、他には壺・羽釜・甕などが豊富である。

実測に際しては、原則として残存率1/4以上の歪みの少ないものを選んで実測した。実測個体数は465個体である。この内、掲載した個体数は420個体である。

#### 2. 窯体内出土遺物

窯体内の出土遺物は杯・碗類が大半を占め、床面に粘着したものが多く見られた。中には重ね焼き状態で遺存しているものもある。床面は前述のように補修が認められた。そしてこの下層から甕片などの遺物が若干出土しているが、小片のため実測に耐えるものはなかった。

杯A (挿図164・165・166 3~73) 体部が直線的に立ち上がり、口縁端部がやや外反するが、大きく体部が開くものはみられない。全体的に底径の割に器高の低いものが多い。口縁端部直下は横ナデを施す。法量は口径12~14cm前後に集中している。ヘラ記号は内面底部に施しており「-」と「×」の2種類がある。

椀A (挿図166 75~86) 体部が直線的に立ち上がり、端部をすんなりと終わる、輪高台の椀である。高台は貼り付け高台で、「ハ」の字に外方に開くものが多い。81は高台内面を強くヨコナデするもので、高台がより大きく開く、そして高台端部の外周にも面をもっており、他に比べ特徴的な個体である。

椀B (挿図167 87~100) 平高台の椀である。体部が斜め上方に直線的に立ち上がるものが多い。底部は全てヘラ切りによって切り離している。内面底部に段を有するものが多い。87~89・92・95・96・98は明瞭な段をもつ。しかし、90・93・99のように段の痕跡を持たないものも含まれる。95は沈線ではなく、ヘラ先が誤って体部についたものと思われる。

椀C (挿図167 101~103) 沈線が体部外面に施されるタイプである。いずれも体部が直線的にすんなりと開くものである。

甕A (挿図167 105) 胴部の破片は数多く出土しているが図化できたのは1点である。口径は33.4cmで、口縁端部は上方に大きく立ち上がらせている。頸部は大きく「く」の字に曲げてしぼるものである。外面は平行タタキ、内面には同心円文の当て具痕跡を残す。

甕D (104) 外面平行タタキで内面に指頭痕跡を残す。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部を軽く上方につまむ。底部は丸底になると考えられる。

### 3. 焚口出土遺物

窯体の焚口とその作業場付近には炭・灰を多量に含んだ灰層が検出できたが、ここから出土した遺物をまとめて報告することとする。

杯A (挿図168・169 106~140) 窯体内の土器同様、大きく体部を外反するものは見られないが、端部を若干外へ曲げるものが目立つ。「-」のヘラ記号を内面底部に施すものが見られた。139・140は重ね焼きの遺物である。

碗A (挿図169 141~155) 口径14.0~16.0cm前後のもの、口径17.3cmとやや大きいもの(151)とがある。153~155は高台を「く」の字に大きく開かせて曲げるもので、高台端部の外周に面を持つ。81も同様に高台が開くが、これらに比べ丁寧で薄手のつくりである。152は口縁部を「く」の字に屈曲させるもので特徴的な個体である。

碗B (挿図169 156~158) 平高台の碗である。体部が斜め上方に直線的に立ち上がるもので、いずれも碗Aより小型である。内面底部に段を持つ157・158と、持たずに高台から体部にかけて直線的に立ち上がるものがある。

碗C (挿図169 159・160) 輪高台の碗に沈線をほどこしたタイプである。159は体部が湾曲しながら口縁端を外反さすものである。歪みが大きいため実際の器形はもう少し開くと思われる。159・160とも二条の沈線を施す。

壺 (挿図170 161~164) 壺の口縁部と底部の破片である。口縁はいずれも上方につまむもので外面に面を持つ。164は底部の破片で、平高台状になっている。

甕A (挿図170 165~168) いずれも口縁部のみの破片で全体の器形を知れるものはない。口縁は端部を上方につまむもので、先端を尖らすものが多いが、165は口縁を丸くおさめるものである。外面は平行タタキ、内面は同心円文の当て具痕跡を残す。167はさらに内面をハケ目調整する。

甕C (挿図171 169) 丸底の底部に高台が付く甕である。169は底部に高台を貼り付けた痕跡が観察できる。調整は他の甕と同様である。但し、底部の内面は不定方向にナデで当て具痕跡が部分的に消えている。外面は高台際の周囲にナデを施している。

鉢 (挿図171 170) 体部が丸く、甕に近い器形である。内外面ともナデによって最終仕上げをしており、タタキの痕跡は消している。

羽釜 (挿図171 171~174) 口縁の直下2.0cm前後のところに鐳がつく。やや内傾するものばかりで、体部が外開きになるものは見られない。口縁端部は面を持つ意識が強い。特に172・174は口縁端部のみを内外面に肥厚させて面を強調している。



#### 4. 周溝出土遺物

窯体の周囲に巡る溝ないし土壙から出土した遺物である。これらの遺構には炭・焼土に混じって多くの遺物が出土した。

杯A (挿図172 175~192) 技法的には他の遺物と同じであるが、器高の低いものが多い。

椀A (挿図172 193~196) 194はナデによる細かな凹凸が残る。他の遺物と同様の技法のものである。

椀B (挿図172 197~199) 平高台の椀である。体部が斜め上方に直線的に立ち上がり、内面底部に段をもつ197・198と、持たない199がある。

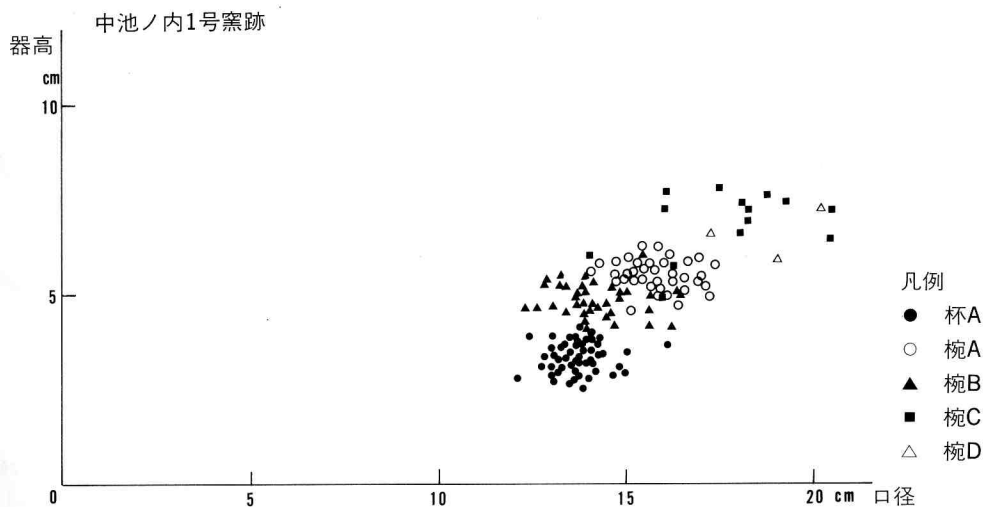
甕 (挿図173 200~205) 口縁端部は上方につまむ。頸部で大きく外反する。202・204と、やや上方に立ち上がる200・201・203がある。205は底部片である。

壺C (挿図174 206) 壺C 1に分類されるもので、全体の器形の知れるものである。口縁部は短く上方に立ち上がる直口壺である。底部には高台を貼り付ける。肩部と高台周辺はナデ調整を施すが、胴部の平行タタキはほとんど消さない。内面の当て具痕跡もナデで軽く消すが痕跡はよく観察できる。

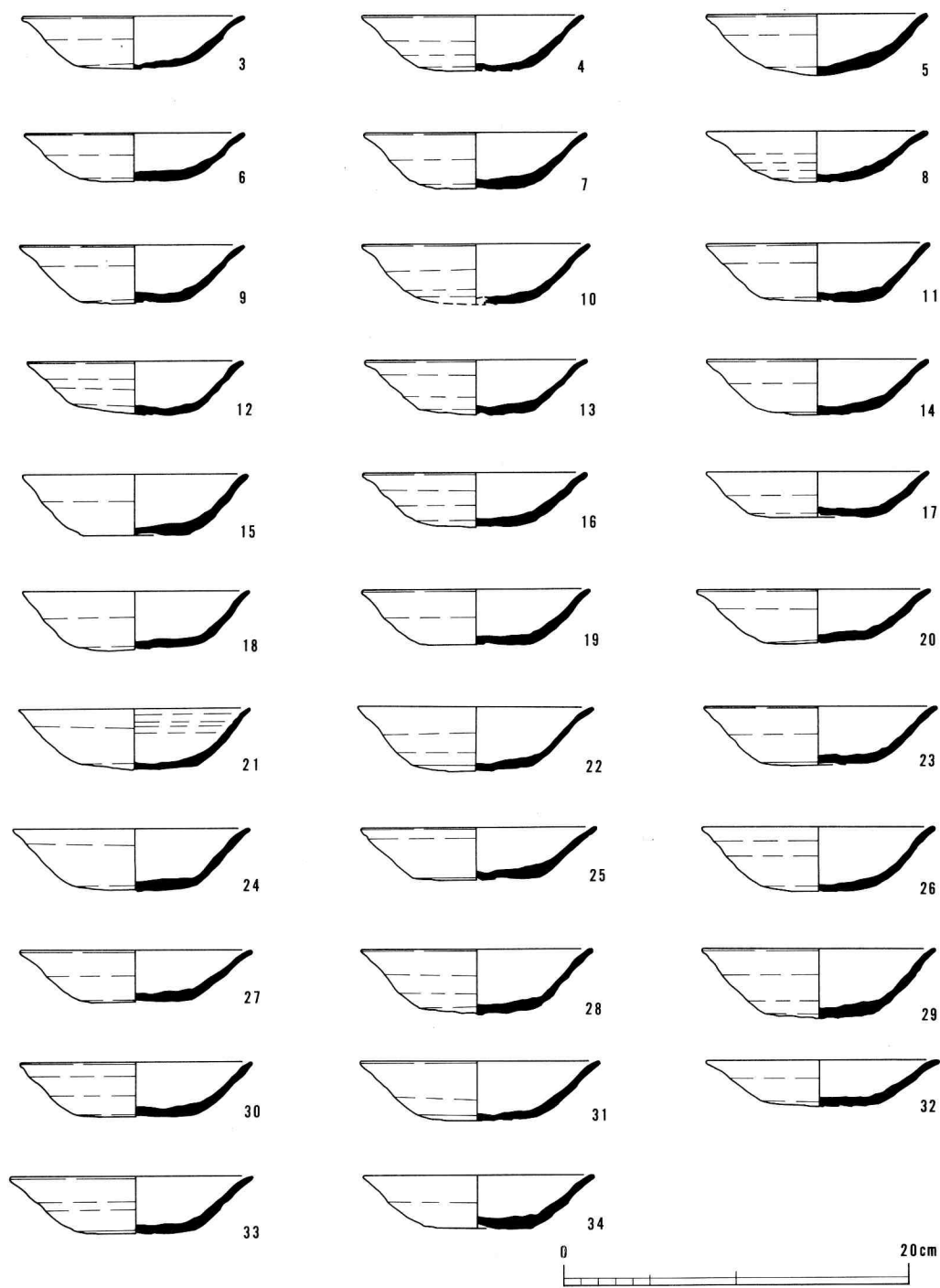
羽釜 (挿図174 207~208) 207は口縁の直下に下方に下がる鐔を貼り付け、胴部は直立ぎみに立ち上がる。口縁部は外方向につまんで、口縁端部の内側に面を持っている。208は口縁より3.7cm下がったところに短い長方形の鐔を持つ。器形はやや丸く胴長になるものである。

#### 5. 灰原出土遺物

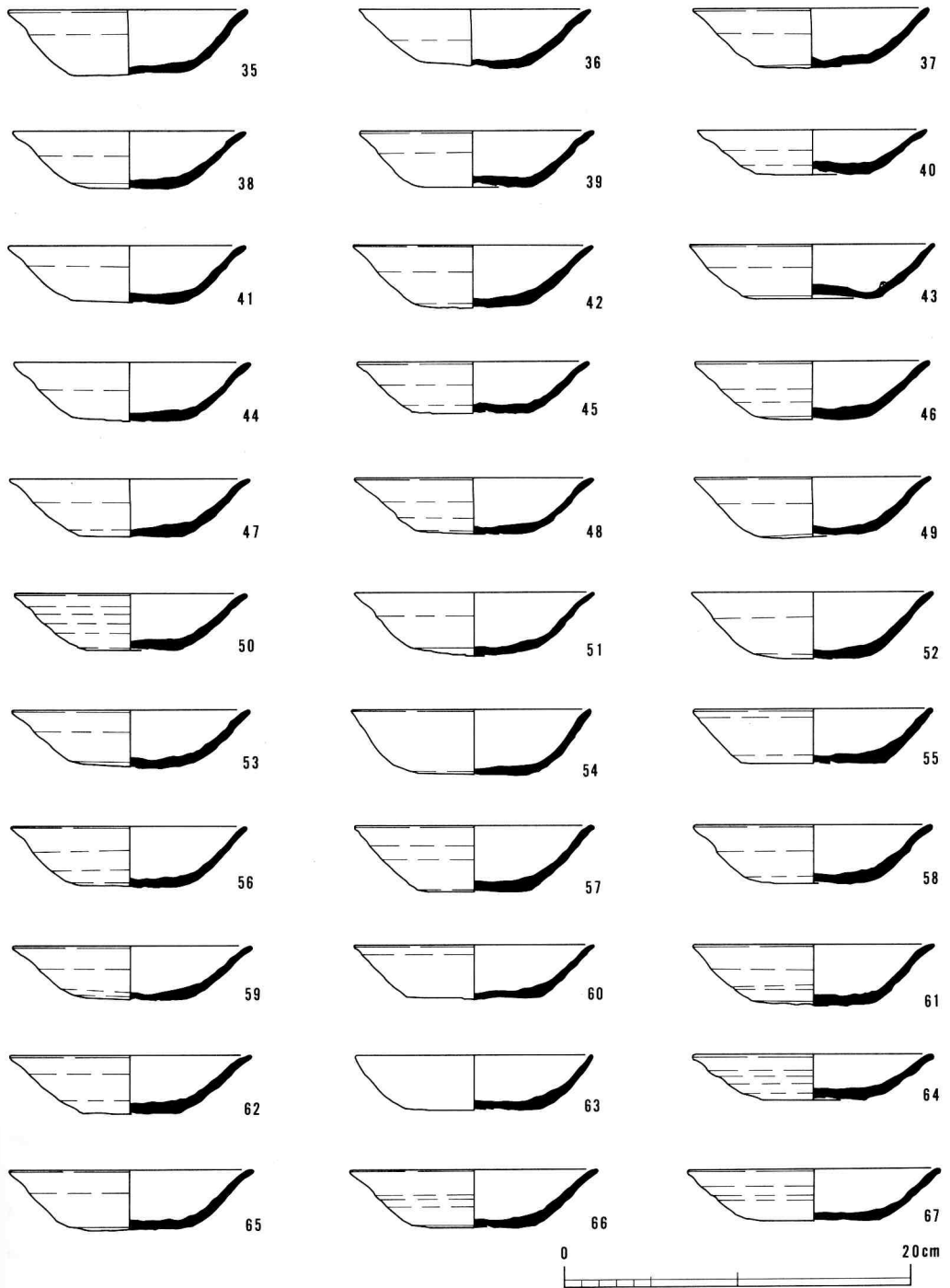
窯体から掻き出され投棄された遺物である。この他、灰層周辺あるいは斜面の下方の表土か



挿図163 中池ノ内窯跡須恵器法量グラフ



挿図164 中池ノ内1号窯跡 窯体内出土須恵器(1)



挿図165 中池ノ内1号窯跡 窯体内出土須恵器(2)

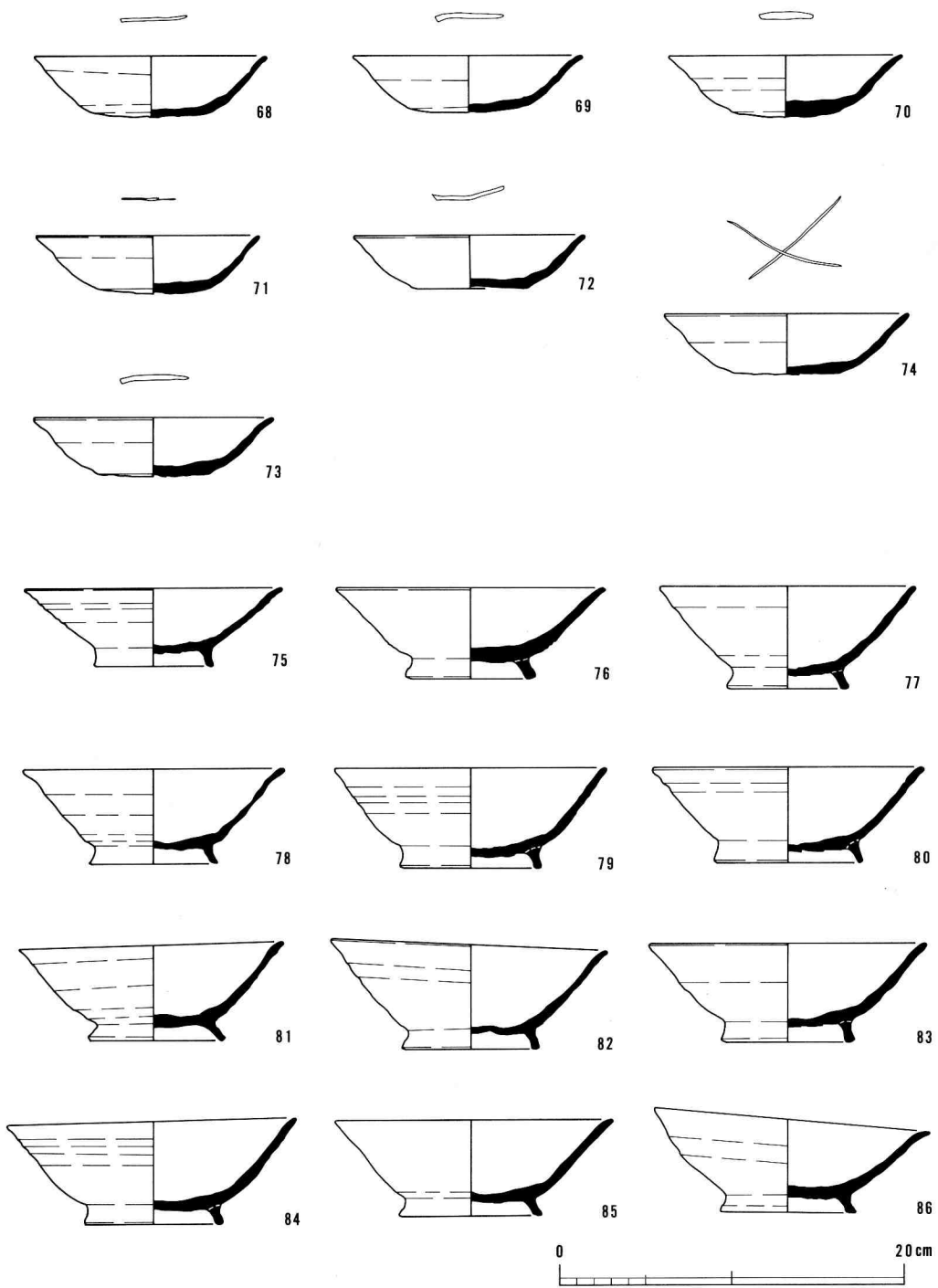
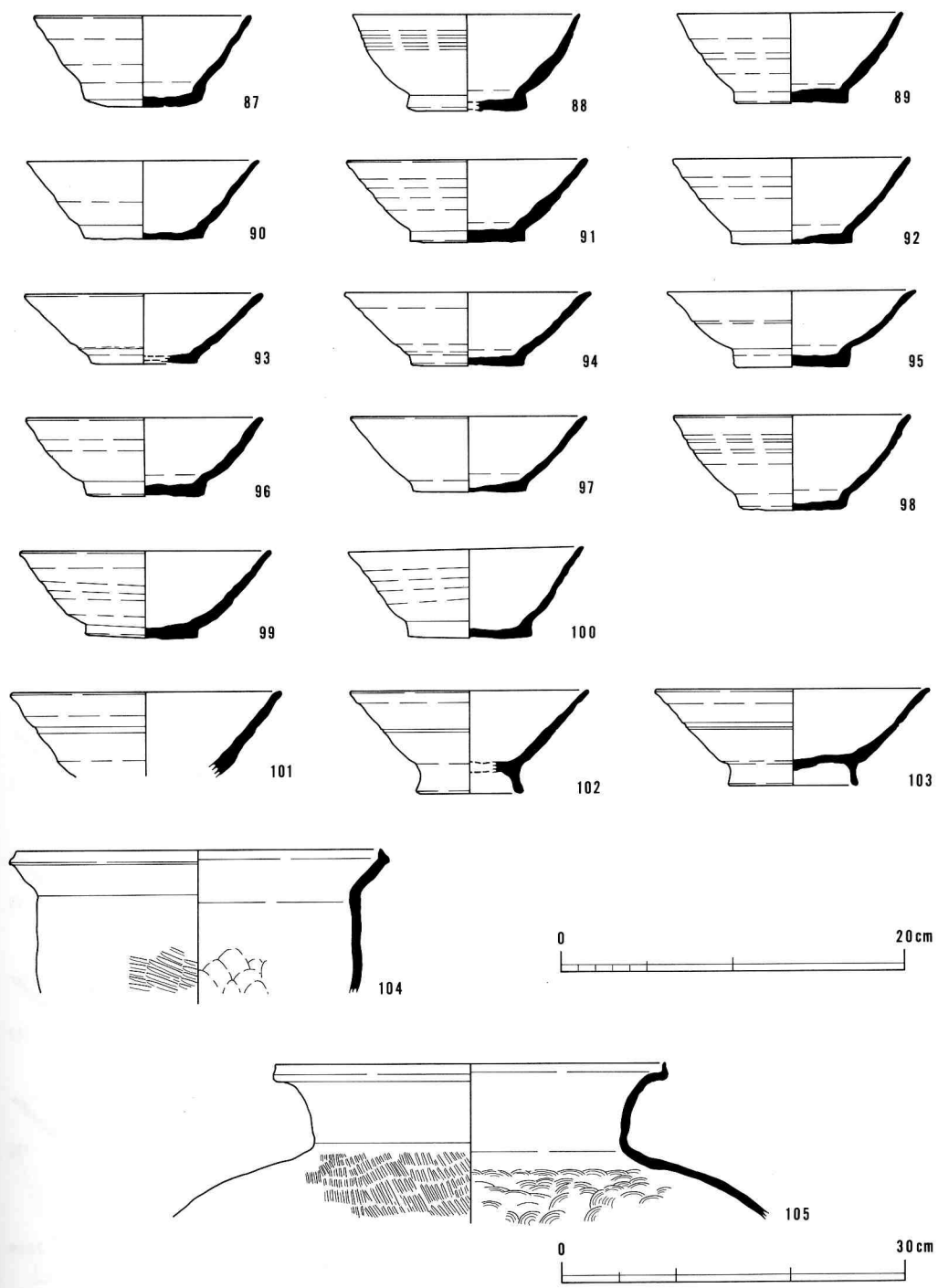
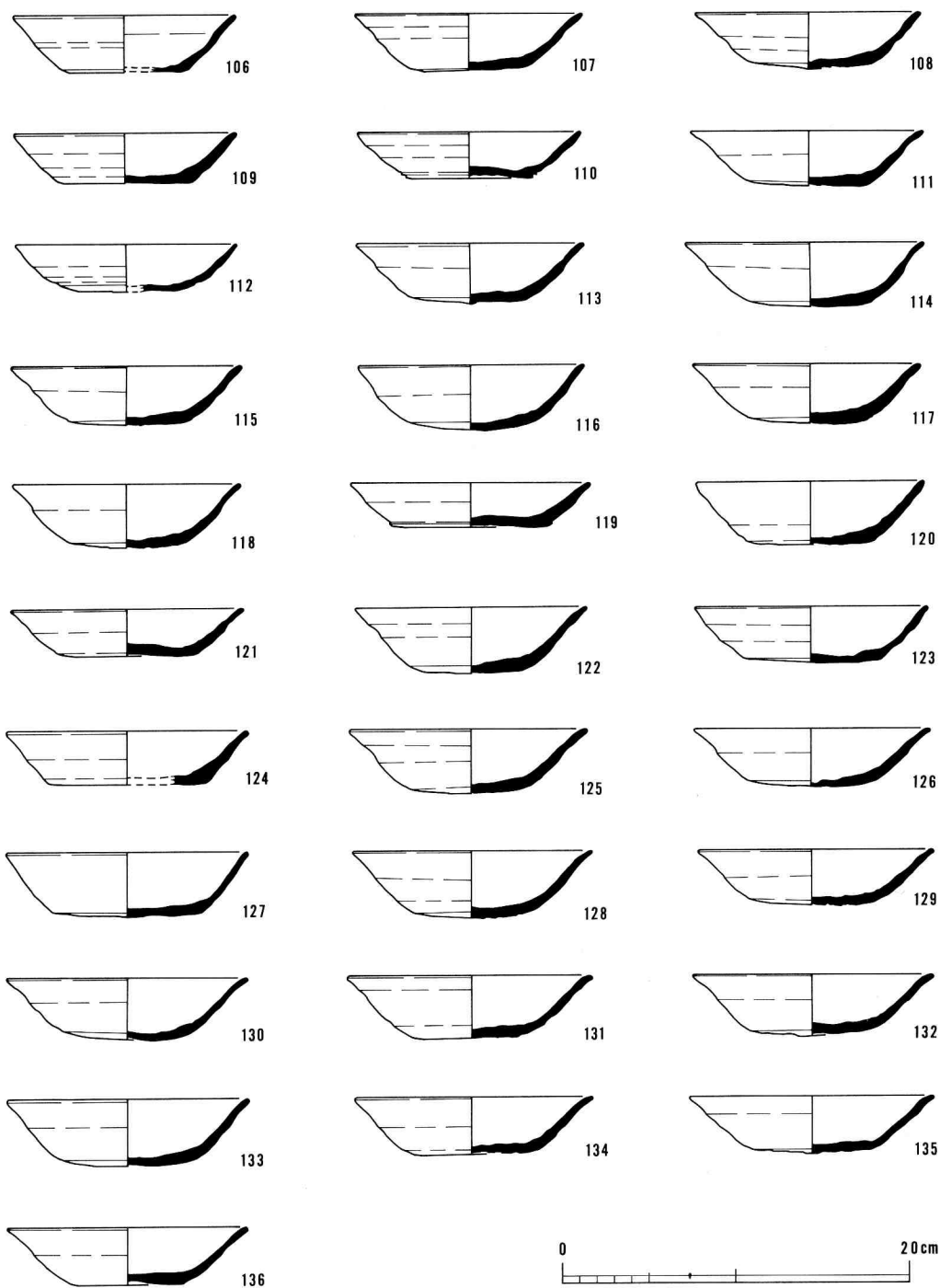


插图166 中池ノ内1号窠跡 窠体内出土須恵器(3)



挿図167 中池ノ内1号窯跡 窯体内出土須恵器(4)



挿図168 中池ノ内1号窯跡 焚口出土須恵器(1)

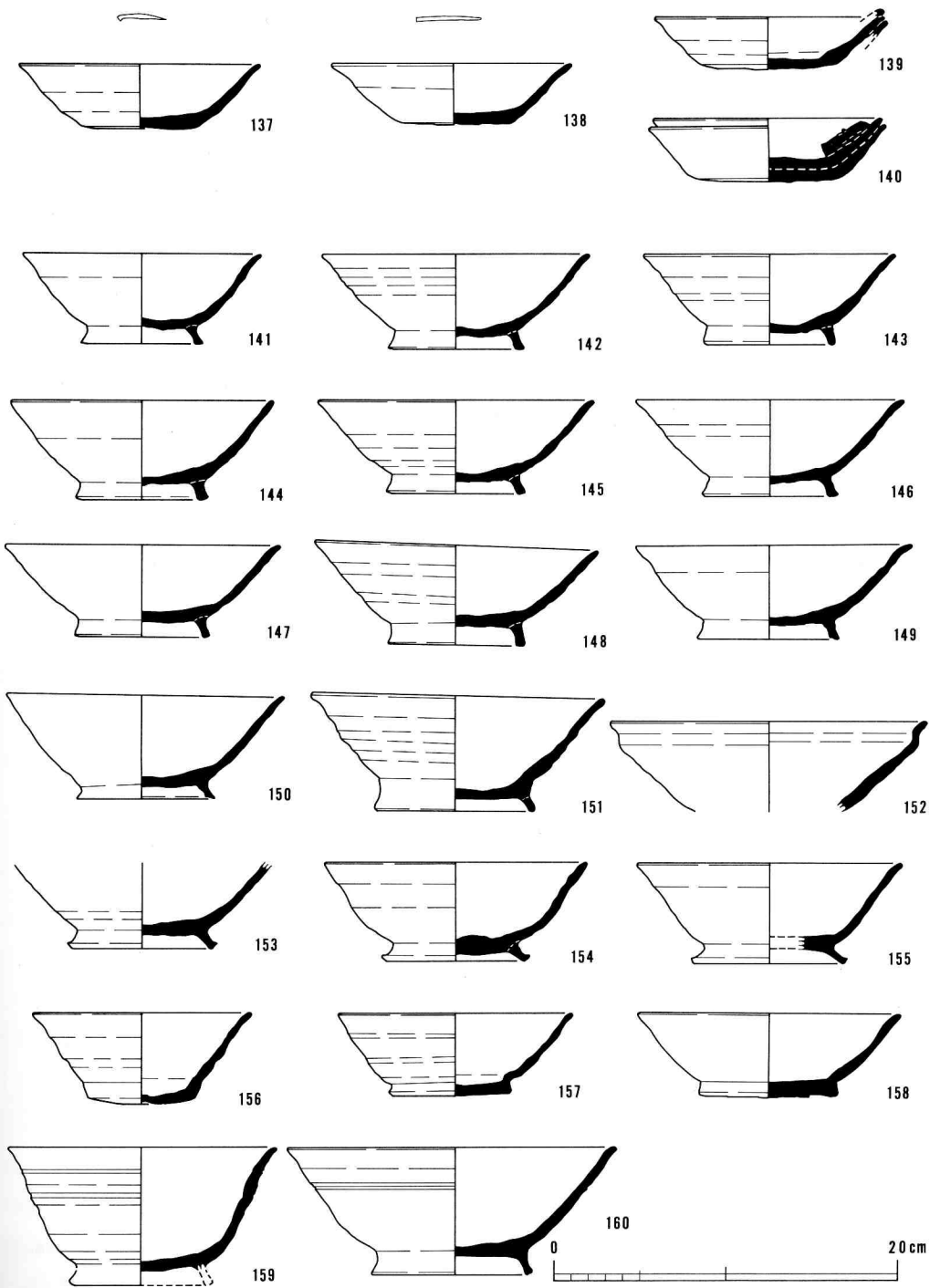


插图169 中池ノ内1号窟跡 焚口出土須恵器(2)

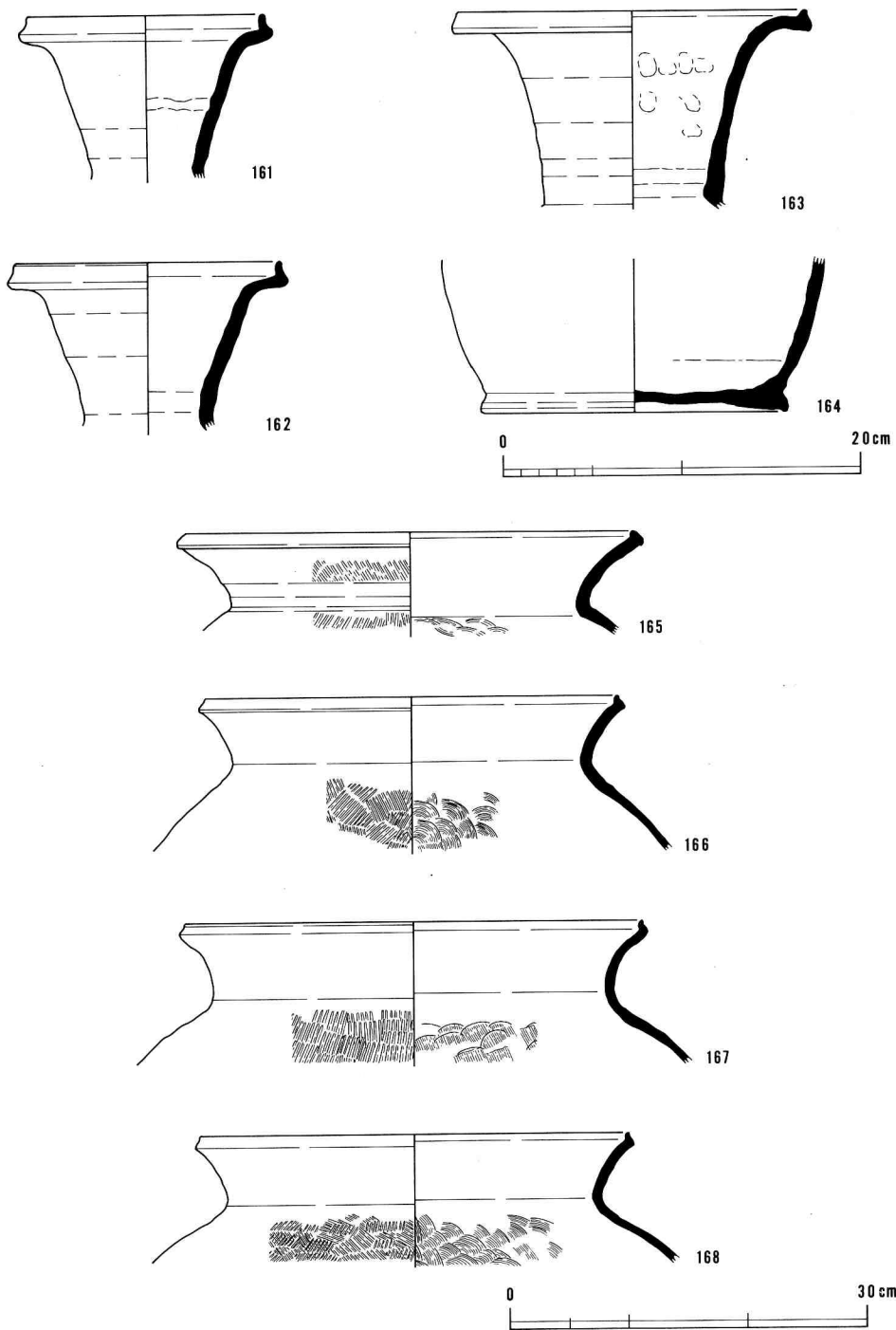
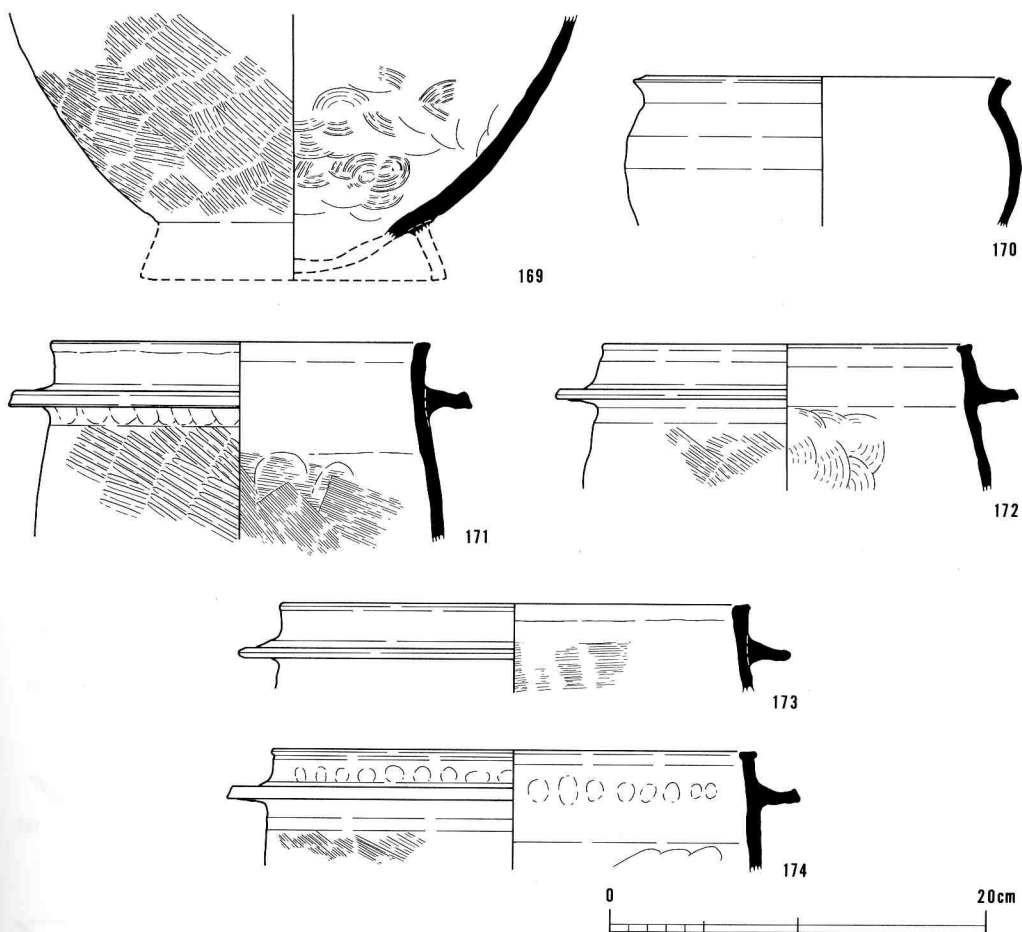


插图170 中池ノ内1号窯跡 焚口出土須恵器(3)





挿図171 中池ノ内1号窯跡 焚口出土須恵器(4)

ら出土した遺物についてもここで報告した。

杯A(挿図175・176 209~253) 凶化できたのは45点である。口径13.0~14.0cm代、器高3.0~4.0cm代前後に集中する個体が多いようである。

底部の切離しはすべてヘラ切りによるが、その後底部を軽くナデ調整するものと、しないものがある。器形の特徴は体部が直線的に立ち上がるものと、内湾ぎみに立ち上がるものが見られ、後者は内面の底部と体部の境が明瞭でないものが多い。220は内湾ぎみに立ち上がった後、口縁部を強くナデするため、「く」の字に湾曲している。225はヘラ切り時の篋のあたりが体部に及ぶものであろう。

底部の外面には並行に走る板状圧痕が観察できるものがある。制作途中に板の上・すのこなどに置いた痕跡と考えられる。

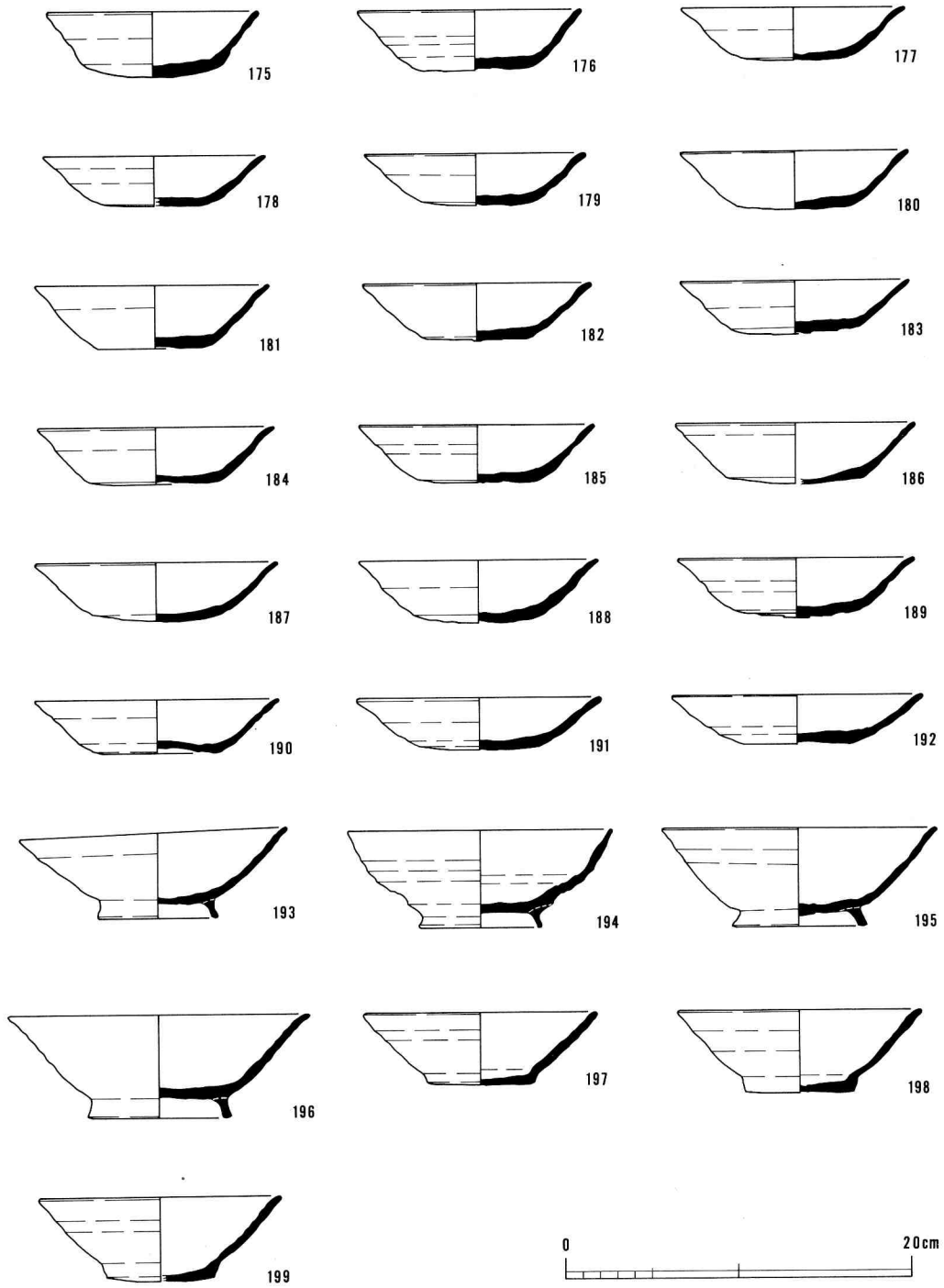


插图172 中池ノ内1号窯跡 周溝出土須恵器(1)

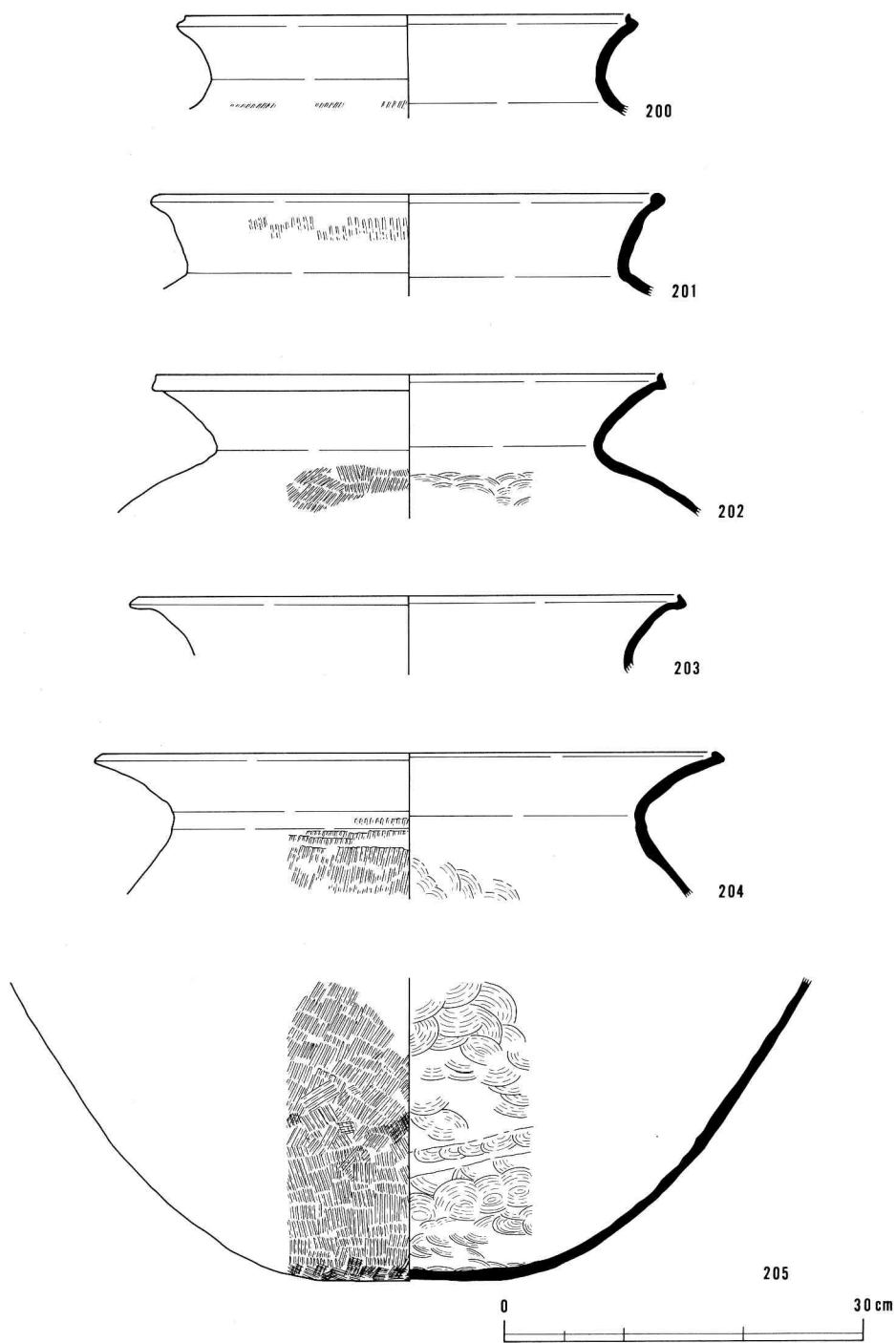
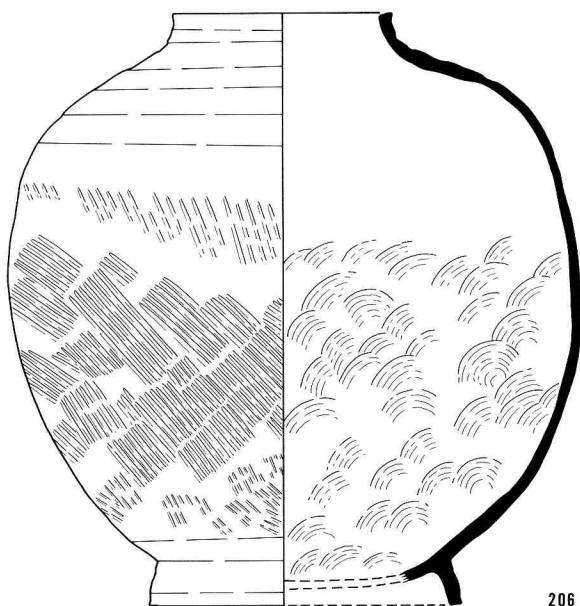
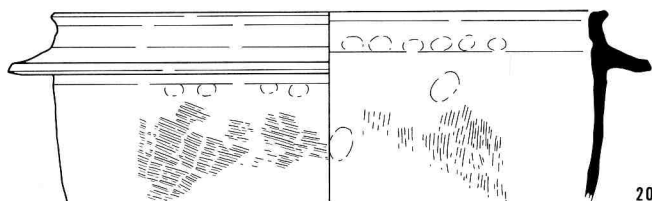


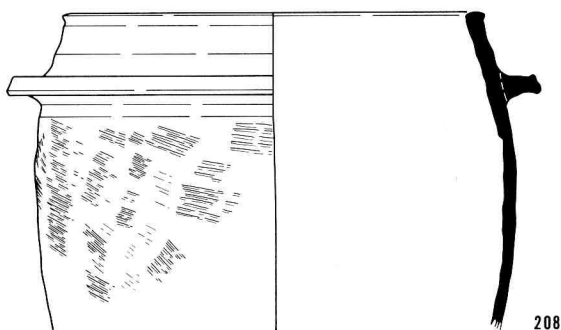
插图173 中池ノ内1号窯跡 周溝出土須恵器(2)



206



207



208



插图174 中池ノ内1号窠跡 周溝出土須恵器(3)

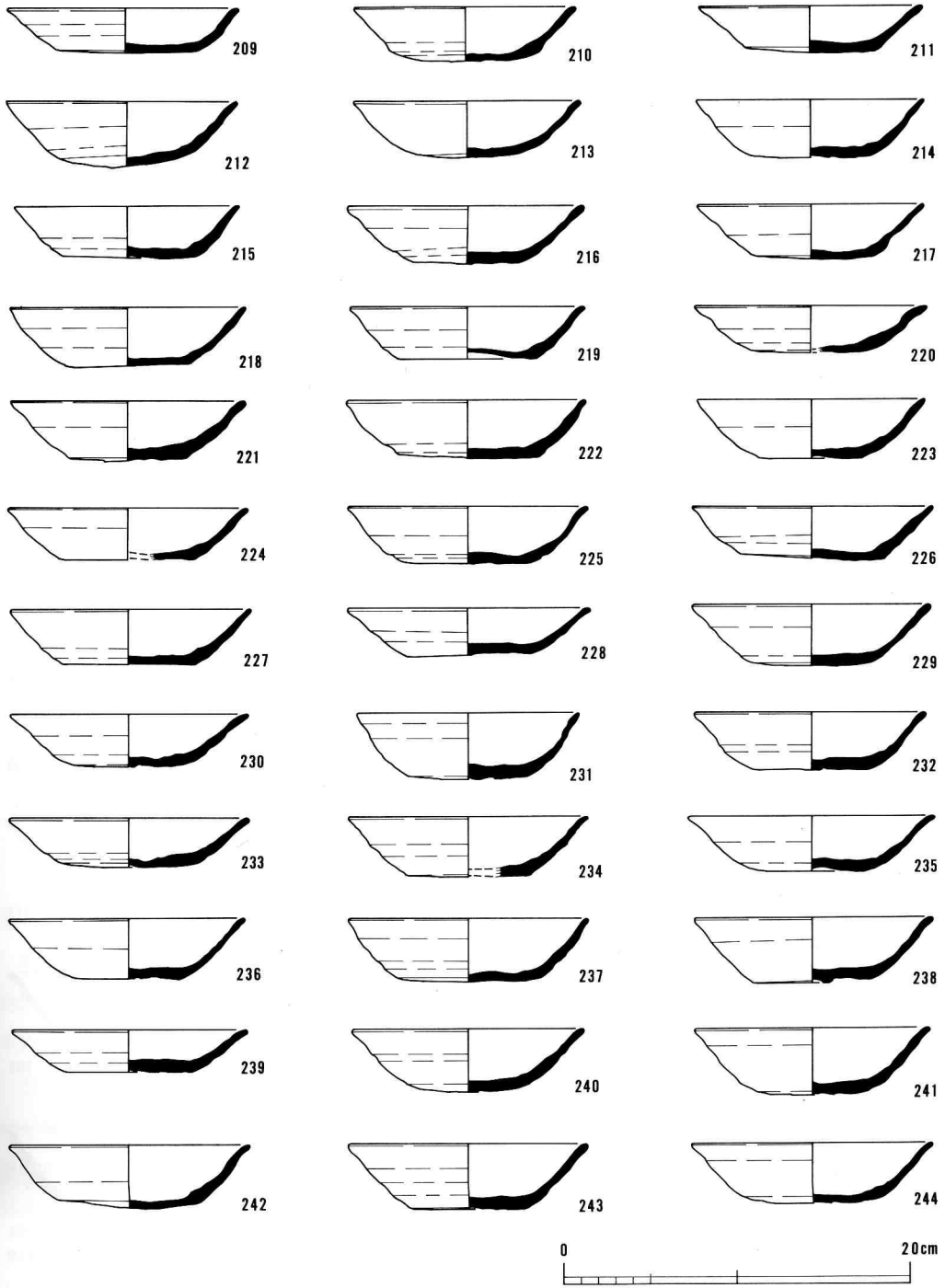


插图175 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(1)

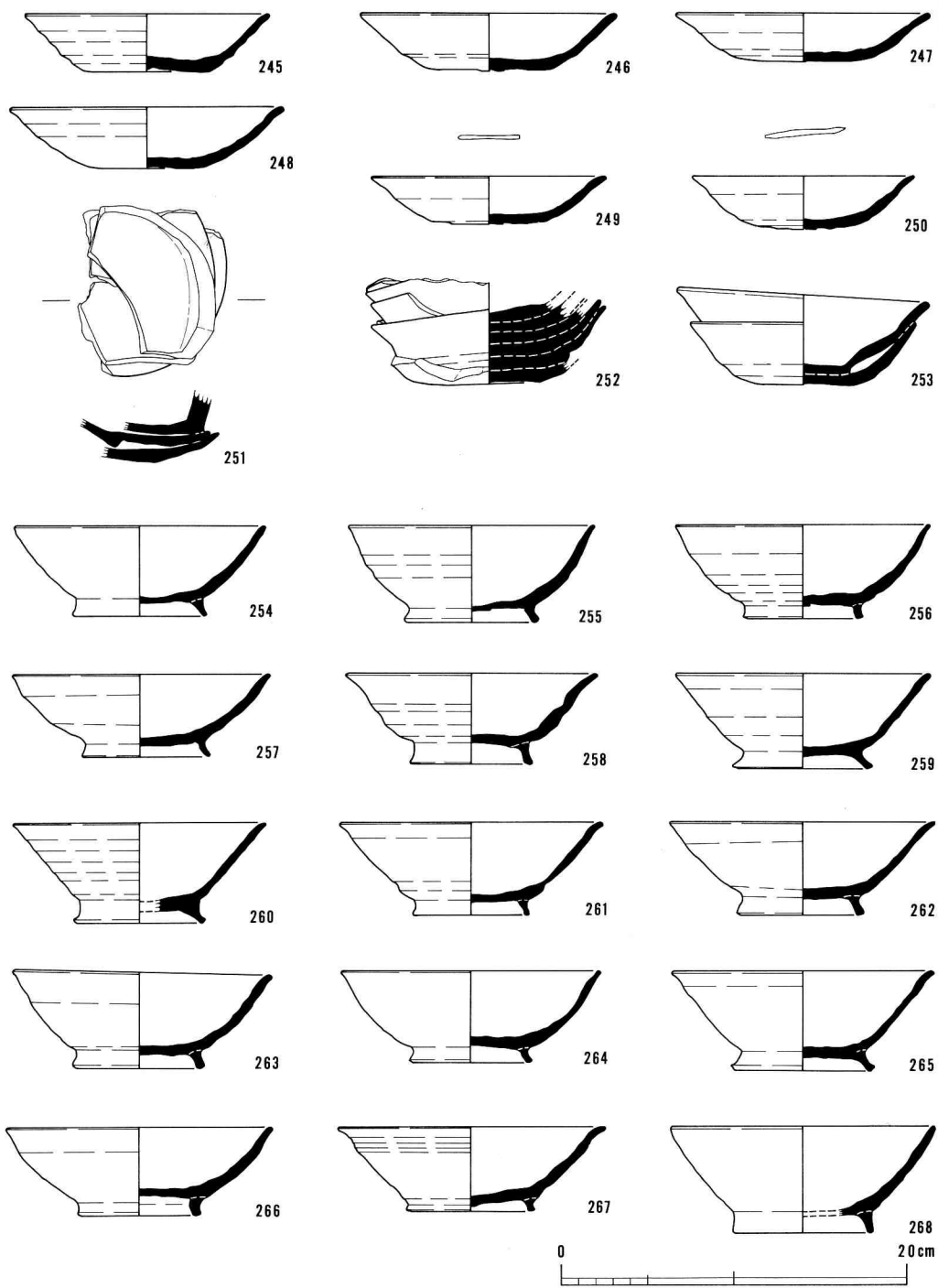


插图176 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(2)

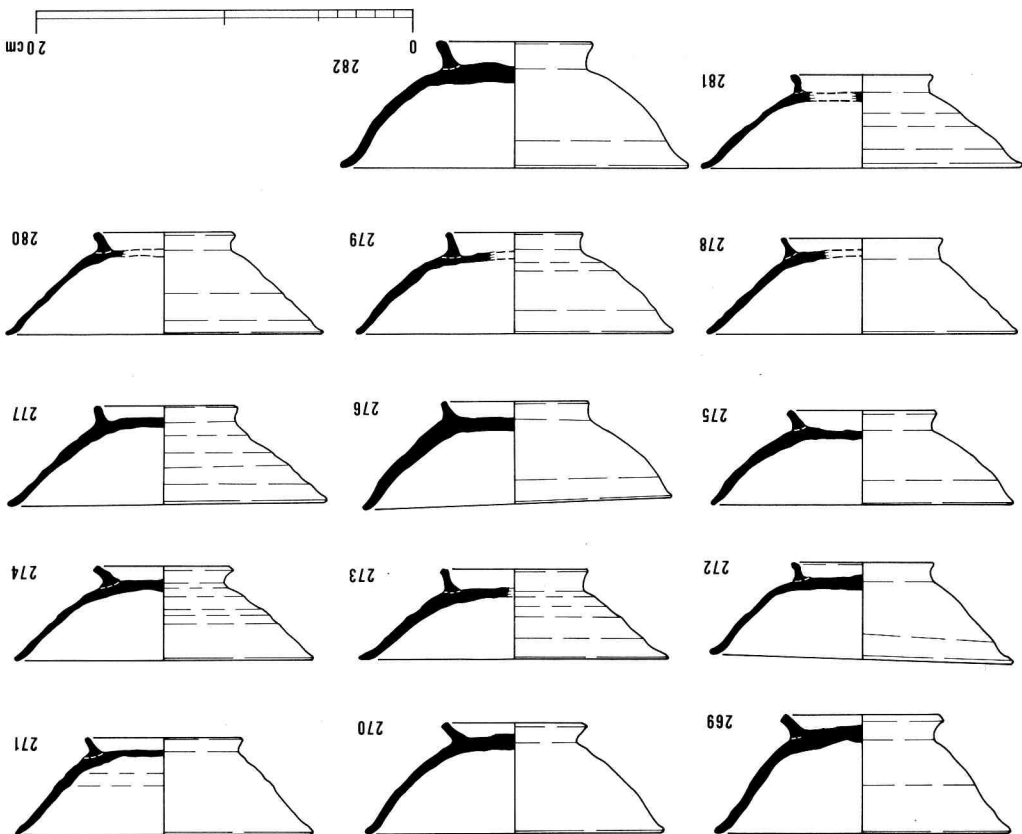
碗B (挿図178 283~310) 平高台の碗である。体部が斜め上方に直線的に立ち上がるもので上げています。

外反するものと、すんなり終わるものがある。しかし、いずれも口縁部は端部を尖らせておわき時の痕跡が顕著なものが多く、外面には細かな凹凸がよく観察できた。口縁部は端部が少しcmと他のものより一回り大きいものである。法量に大小が見られるようである。体部には水挽法量は口径14~17cm、器高5~6cm前後のものが一般的であるが、282は口径18.6cm、器高6.8cm内湾しながら立ち上がるものもある。

碗A (挿図176・177 254~282) 輪高台を底部に貼り付けた碗である。体部は斜め上方に直線的に立ち上がるものが大半であるが、254~256・263・264・266・269・270・282のように若もので、杯は破片である。おそらく、壺の焼き台として使用したと考えられる。

251~253は重ね焼き焼成の結果、釉着した個体である。253は杯Aの上に壺が重ねられている

挿図177 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(3)



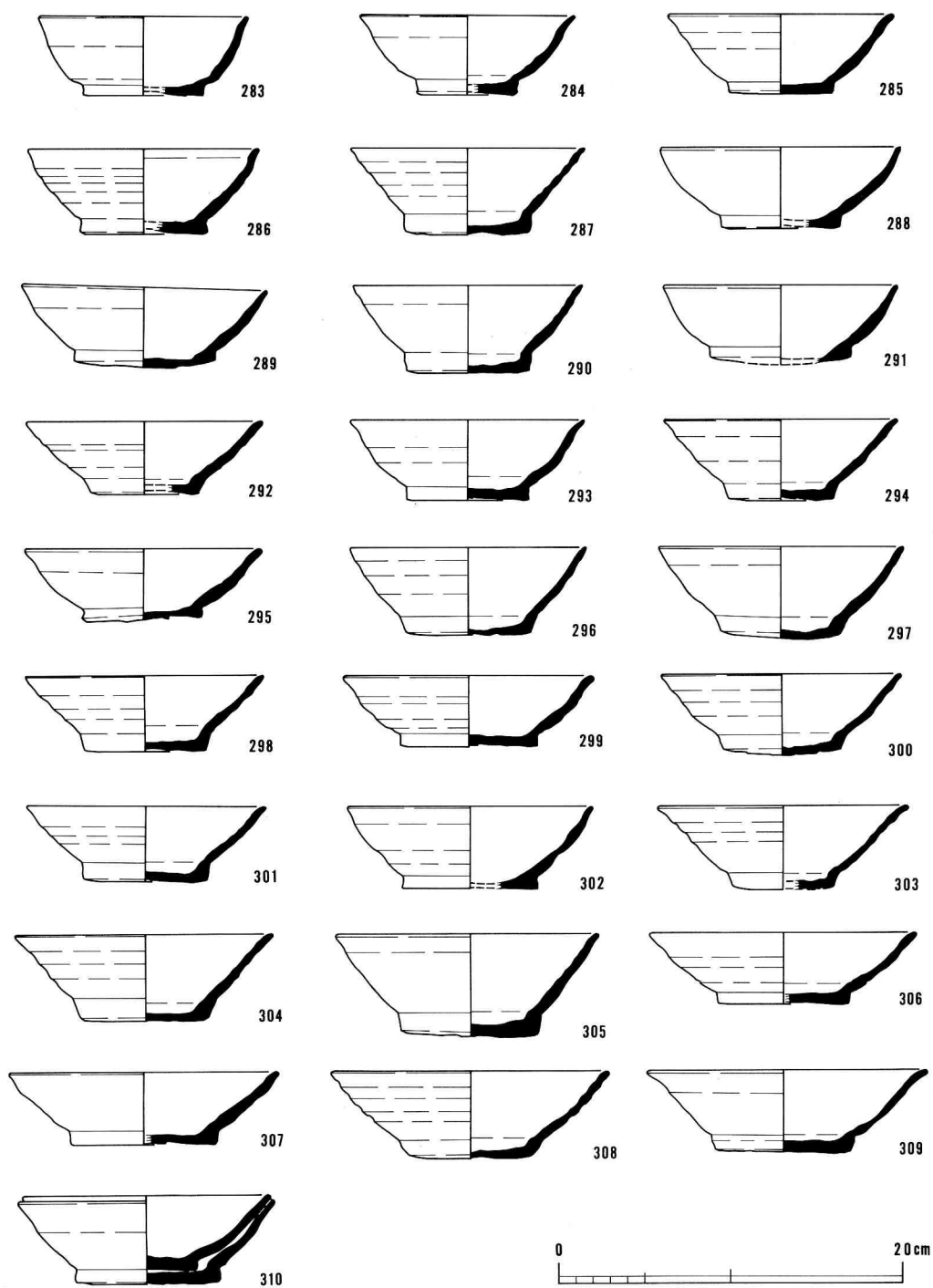


插图178 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(4)



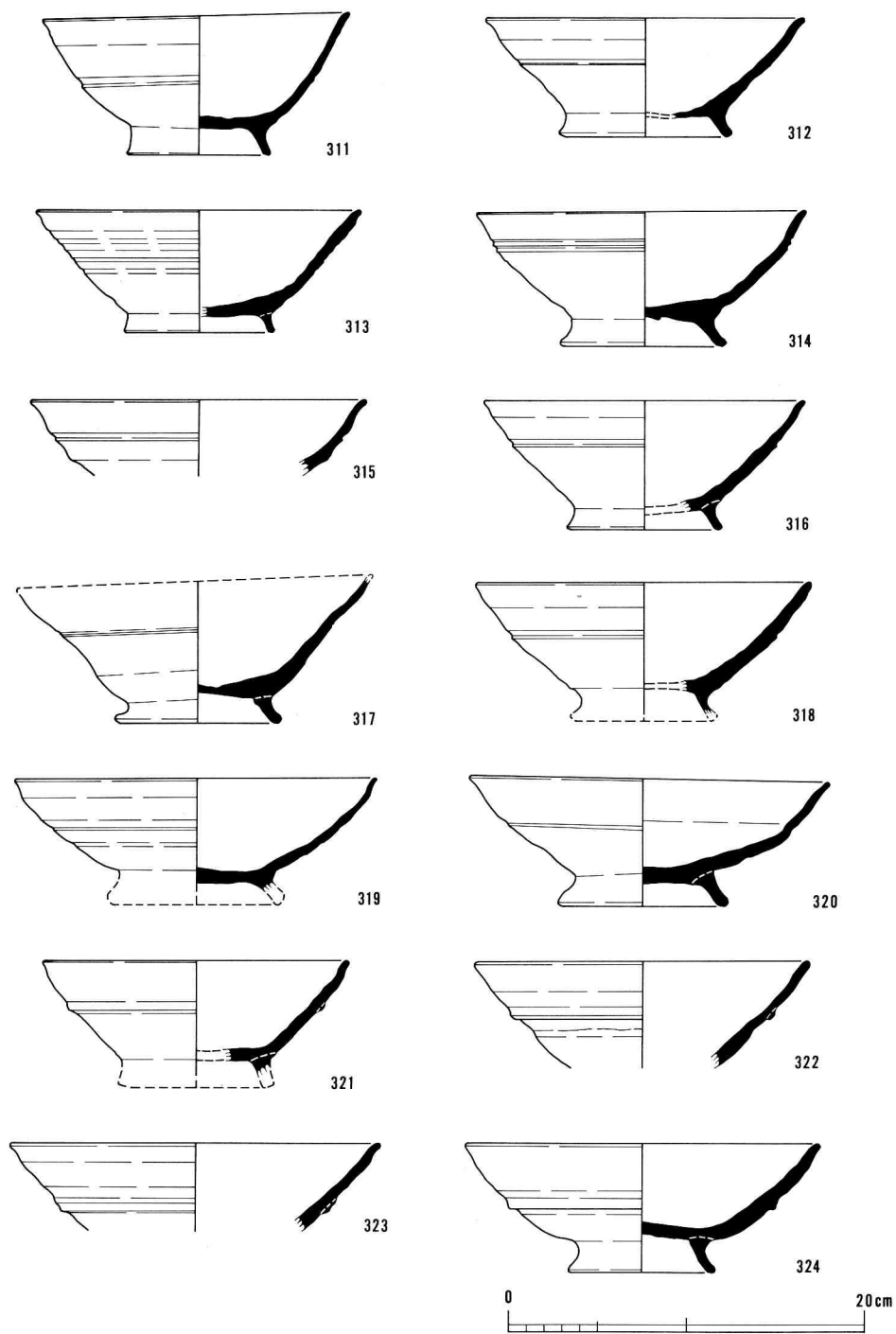


插图179 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(5)

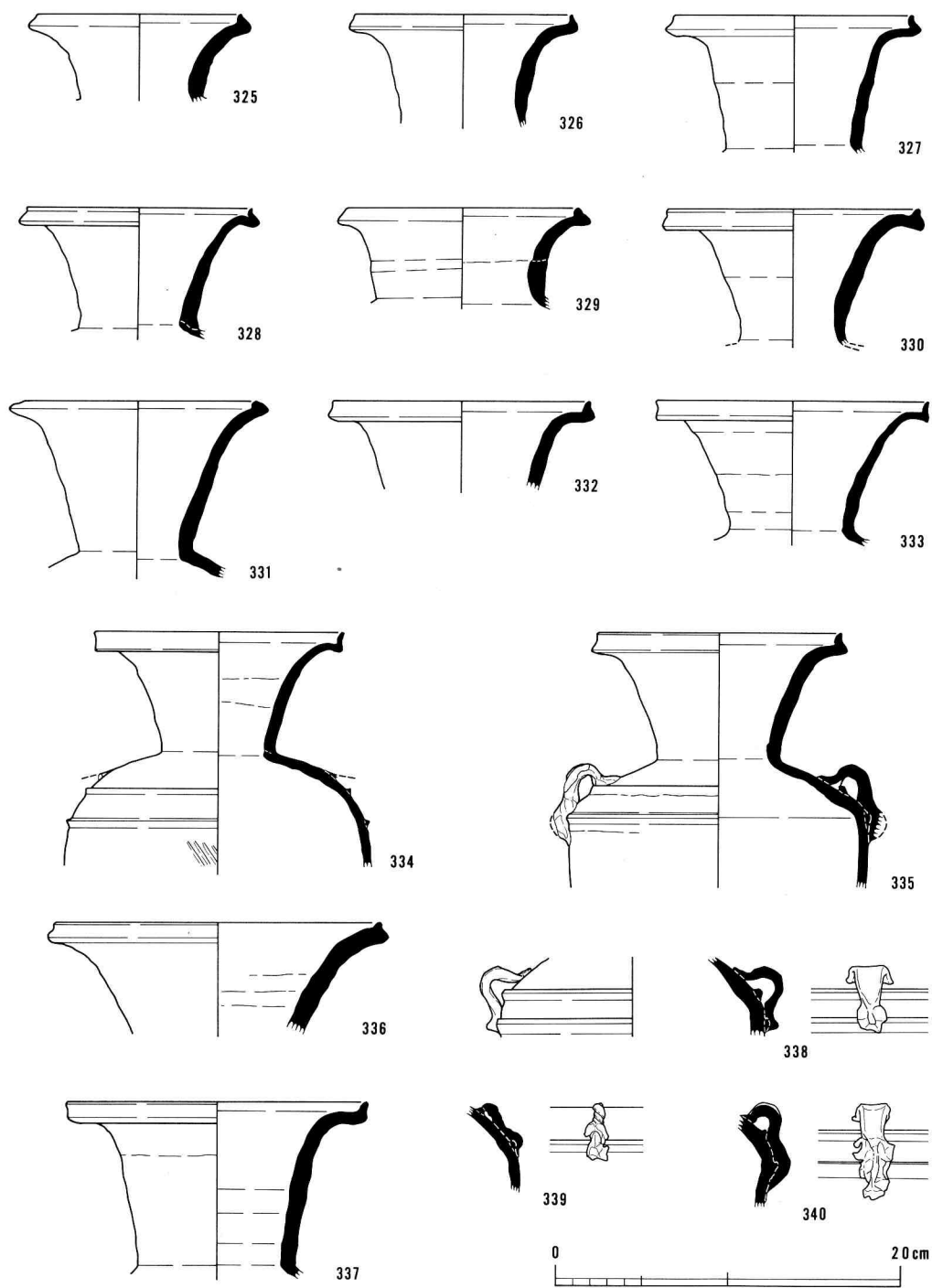
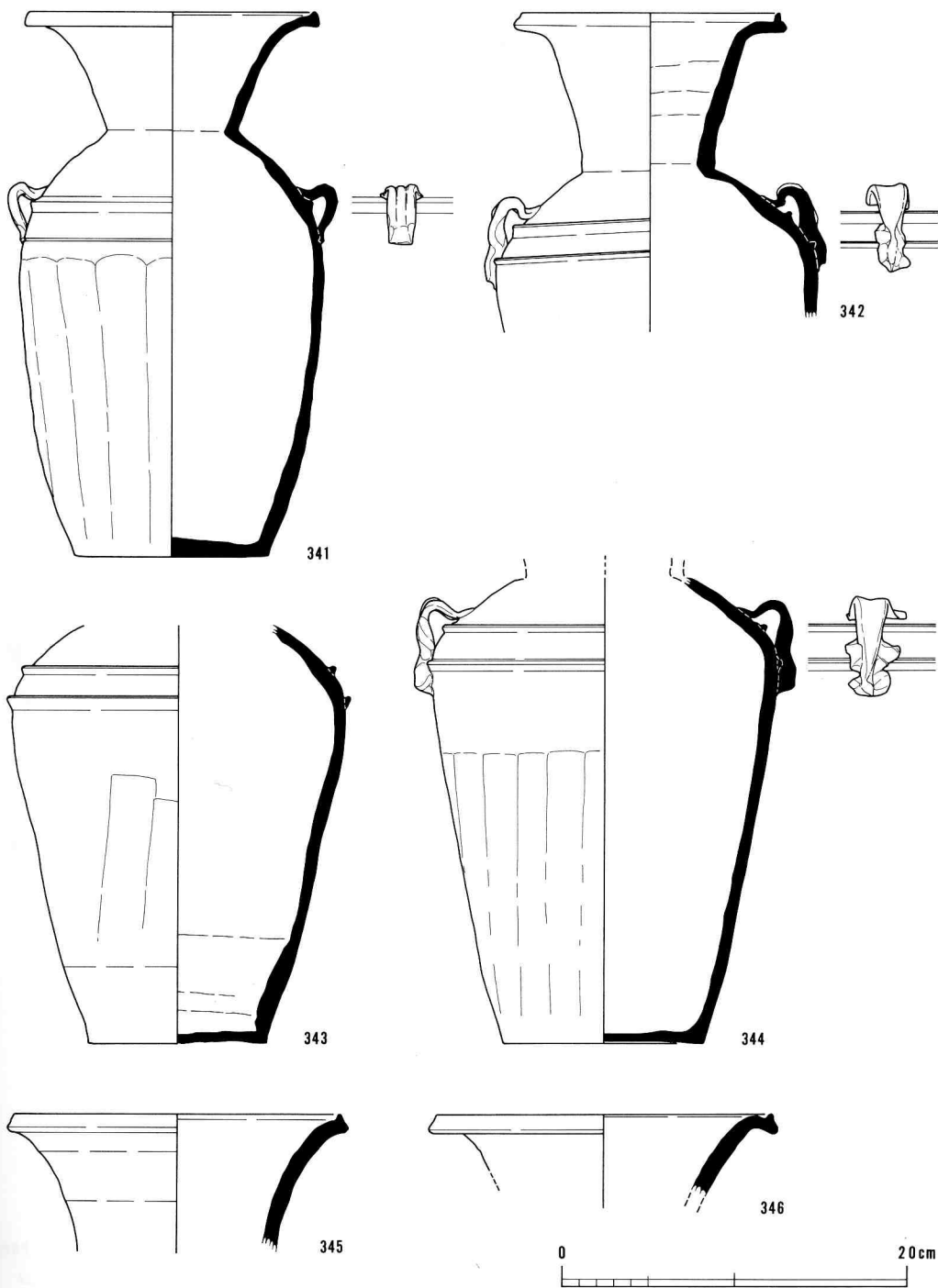


插图180 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(6)



挿図181 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(7)

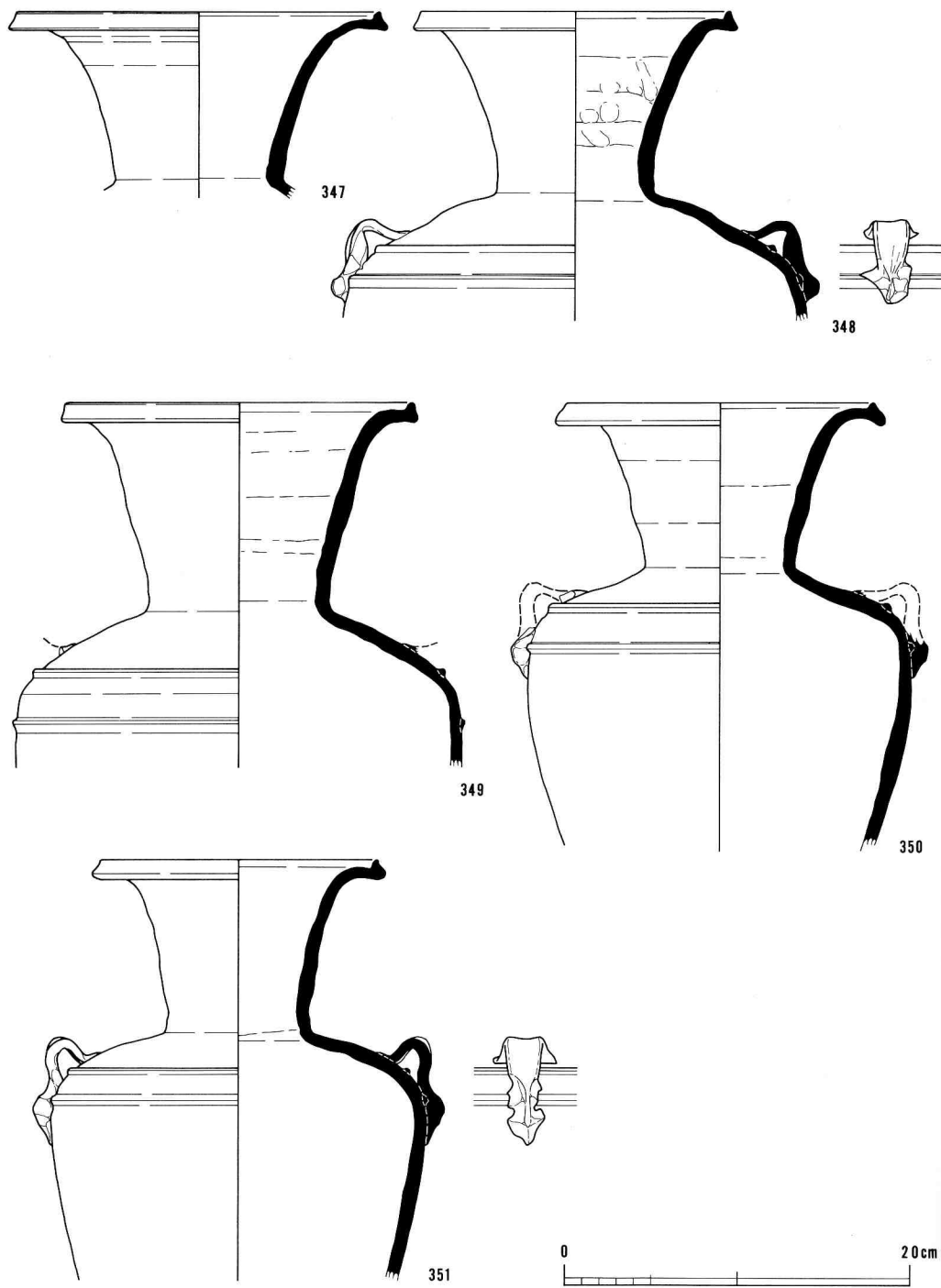
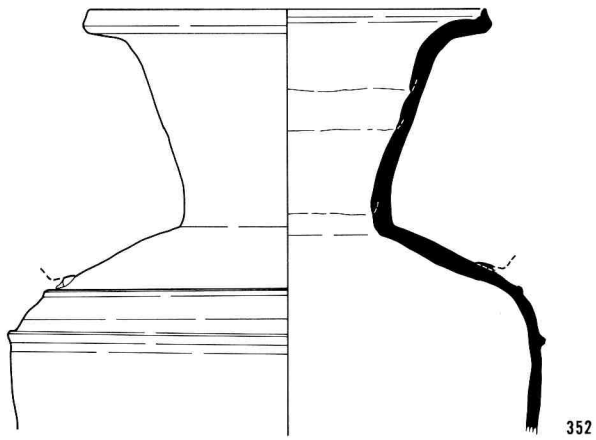
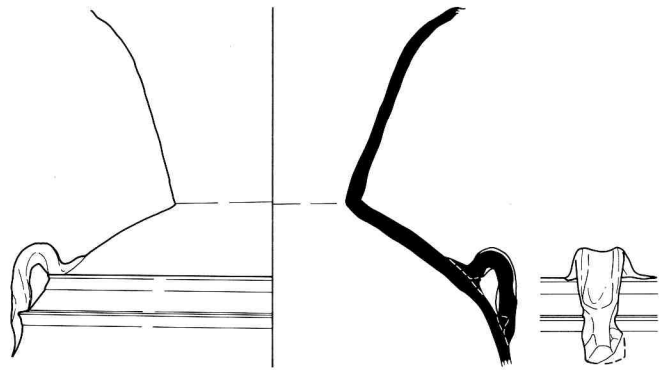


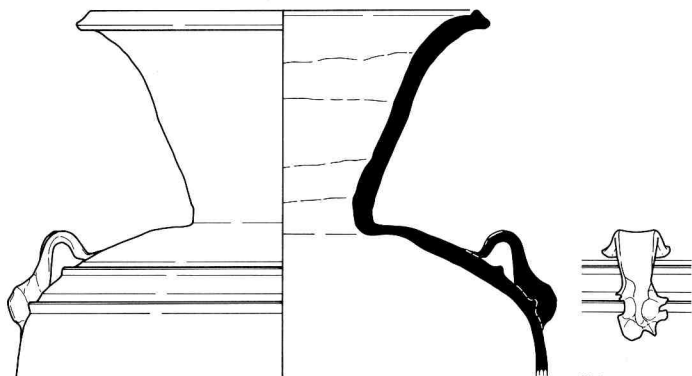
插图182 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(8)



352



353



354



挿図183 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(9)

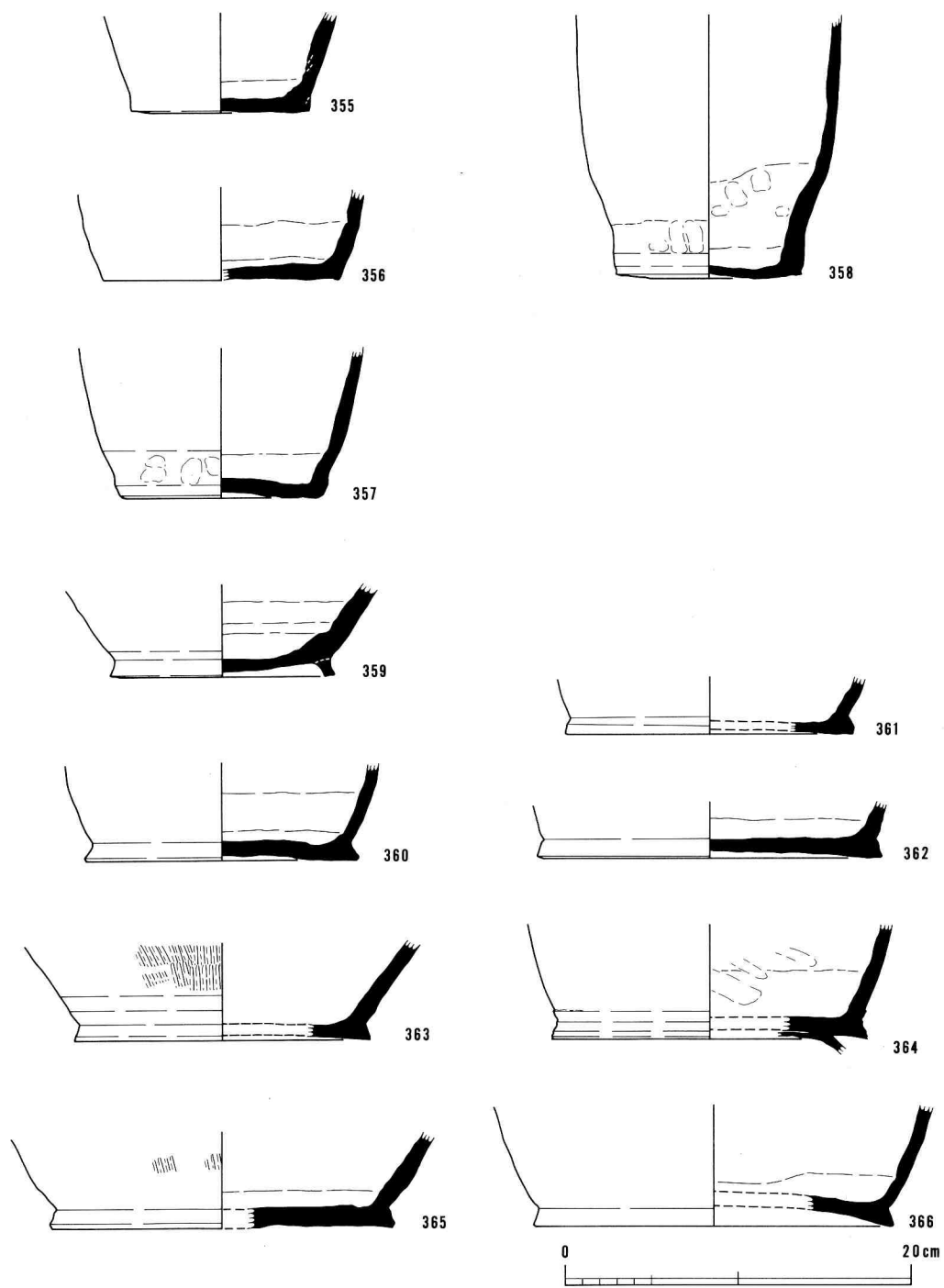
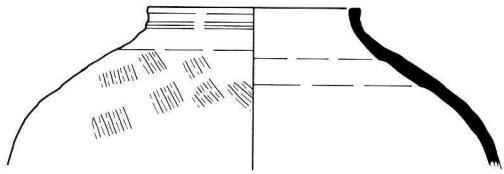
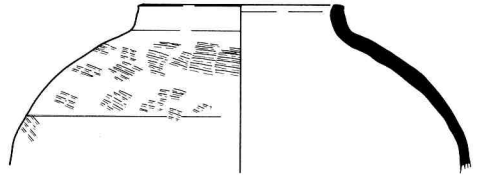


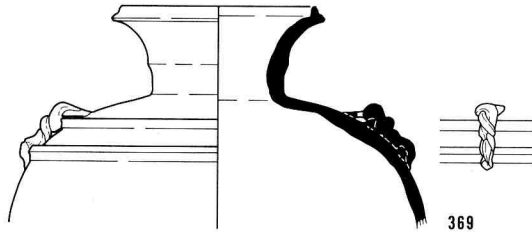
插图184 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(10)



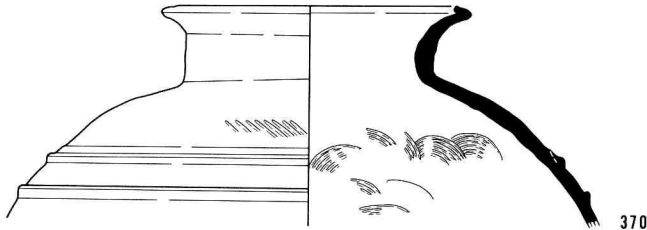
367



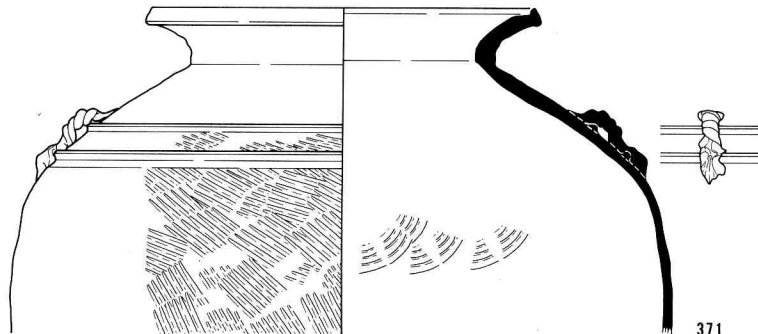
368



369



370



371



挿図185 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(1)

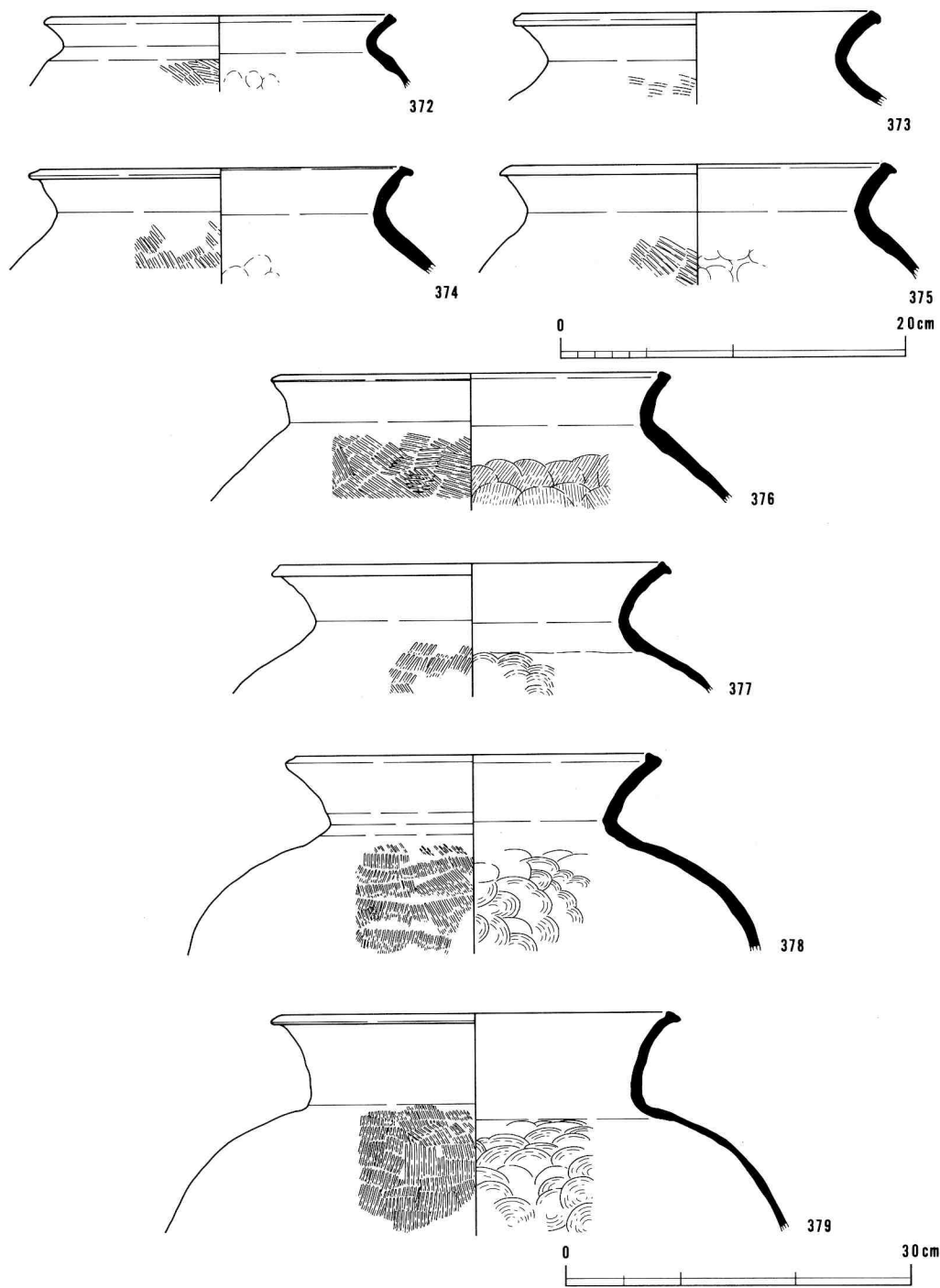
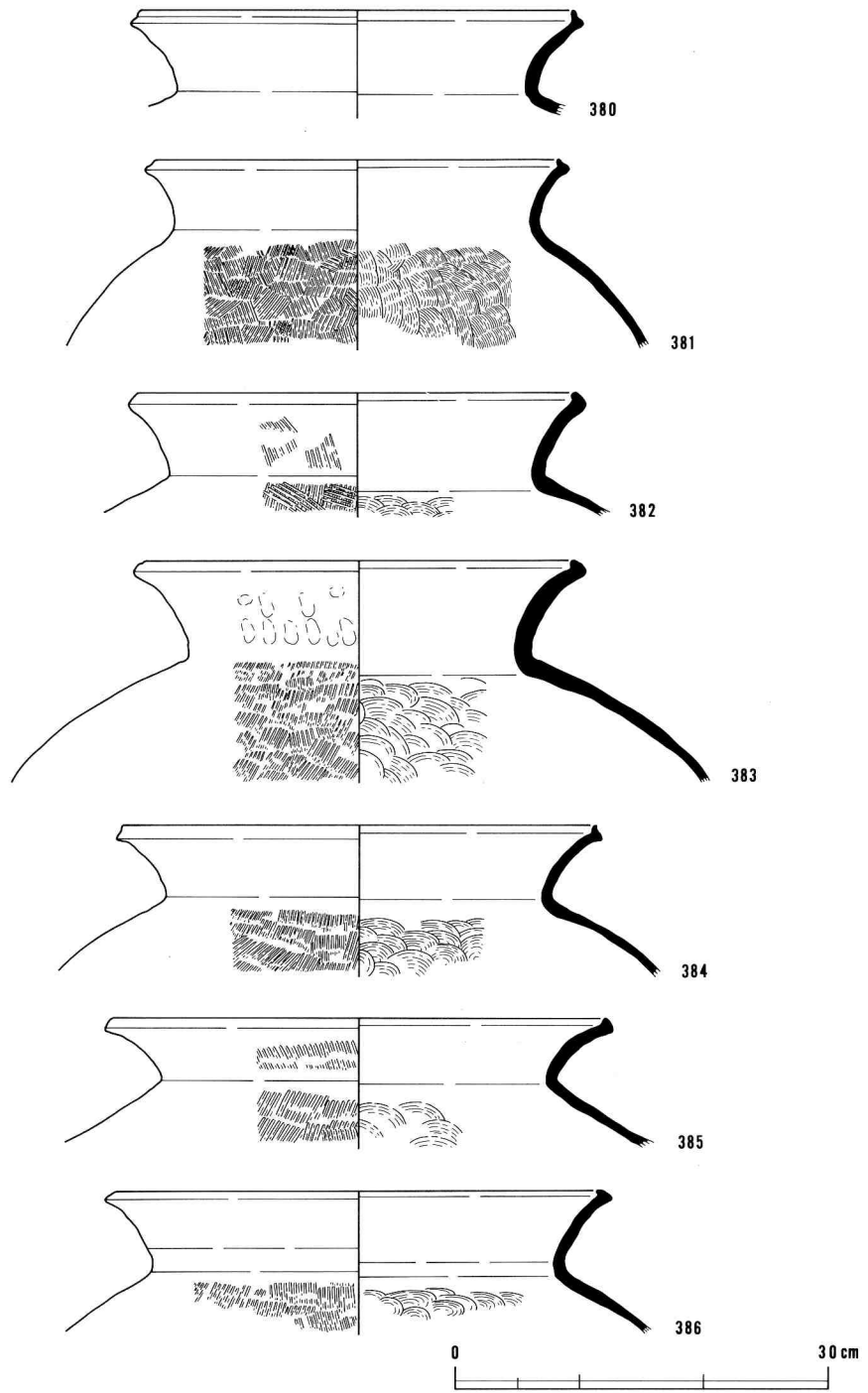


插图186 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(12)





挿図187 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(13)

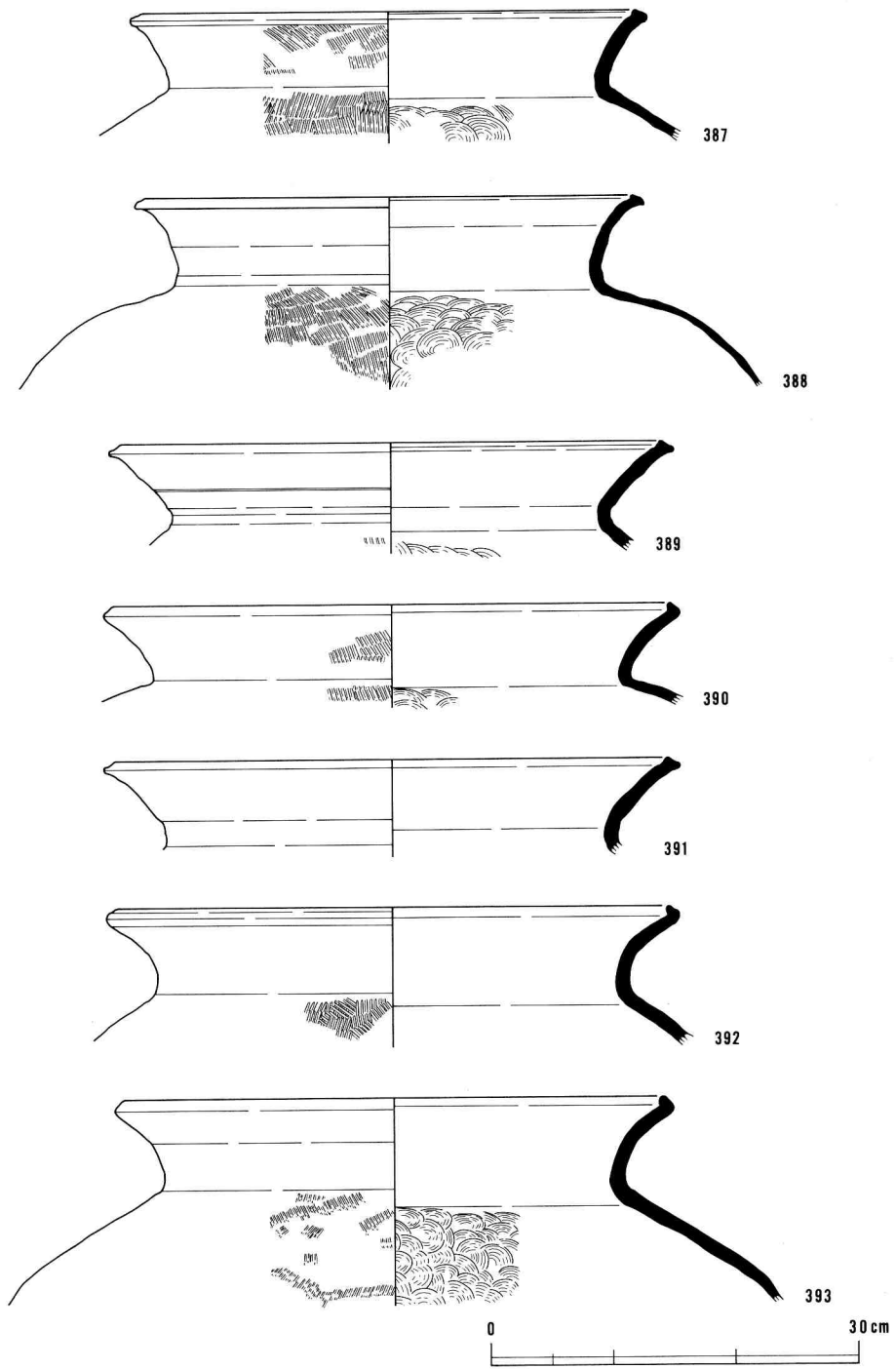
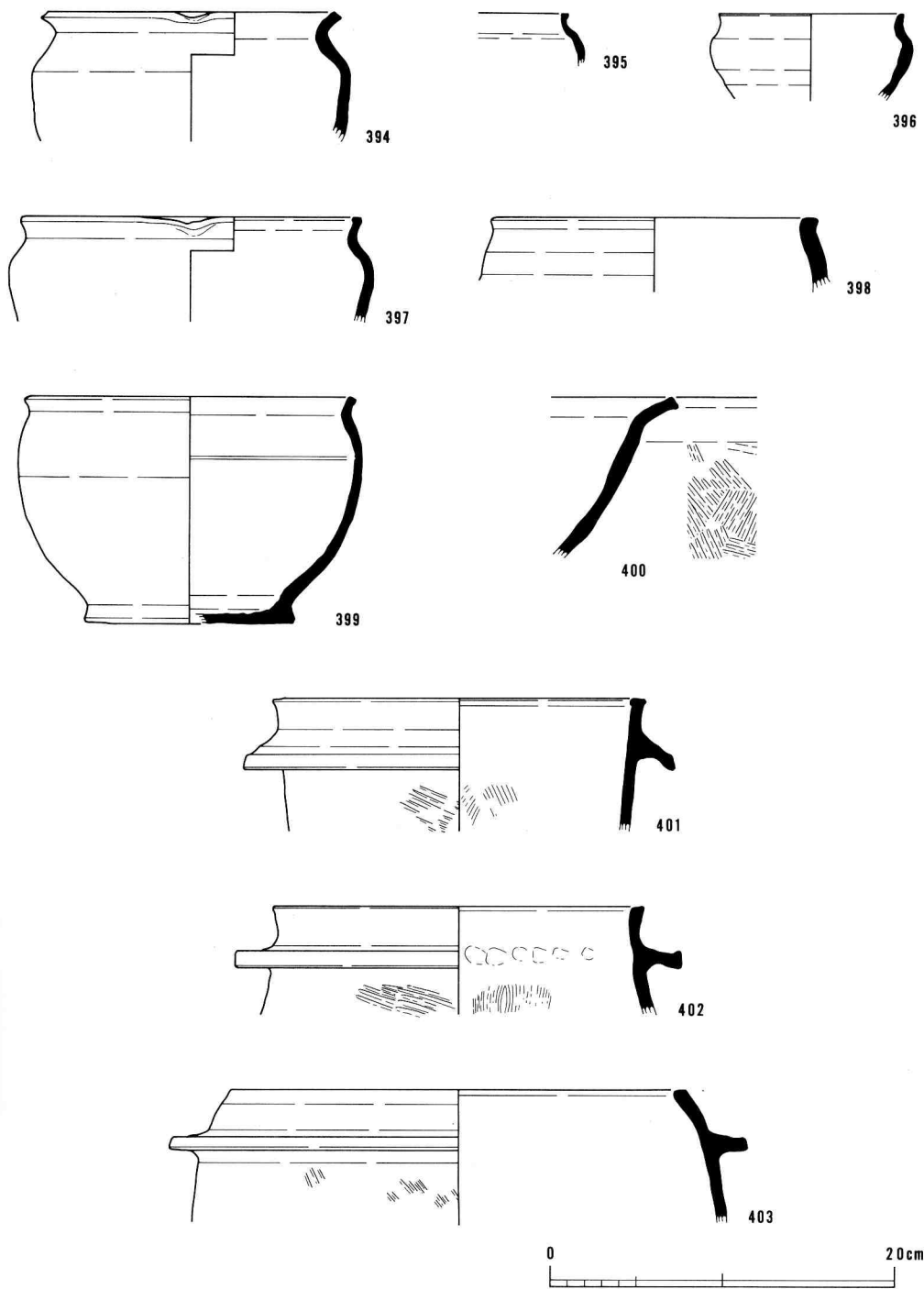


插图188 中池ノ内1号窠跡 灰原出土須恵器(14)



挿図189 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(15)

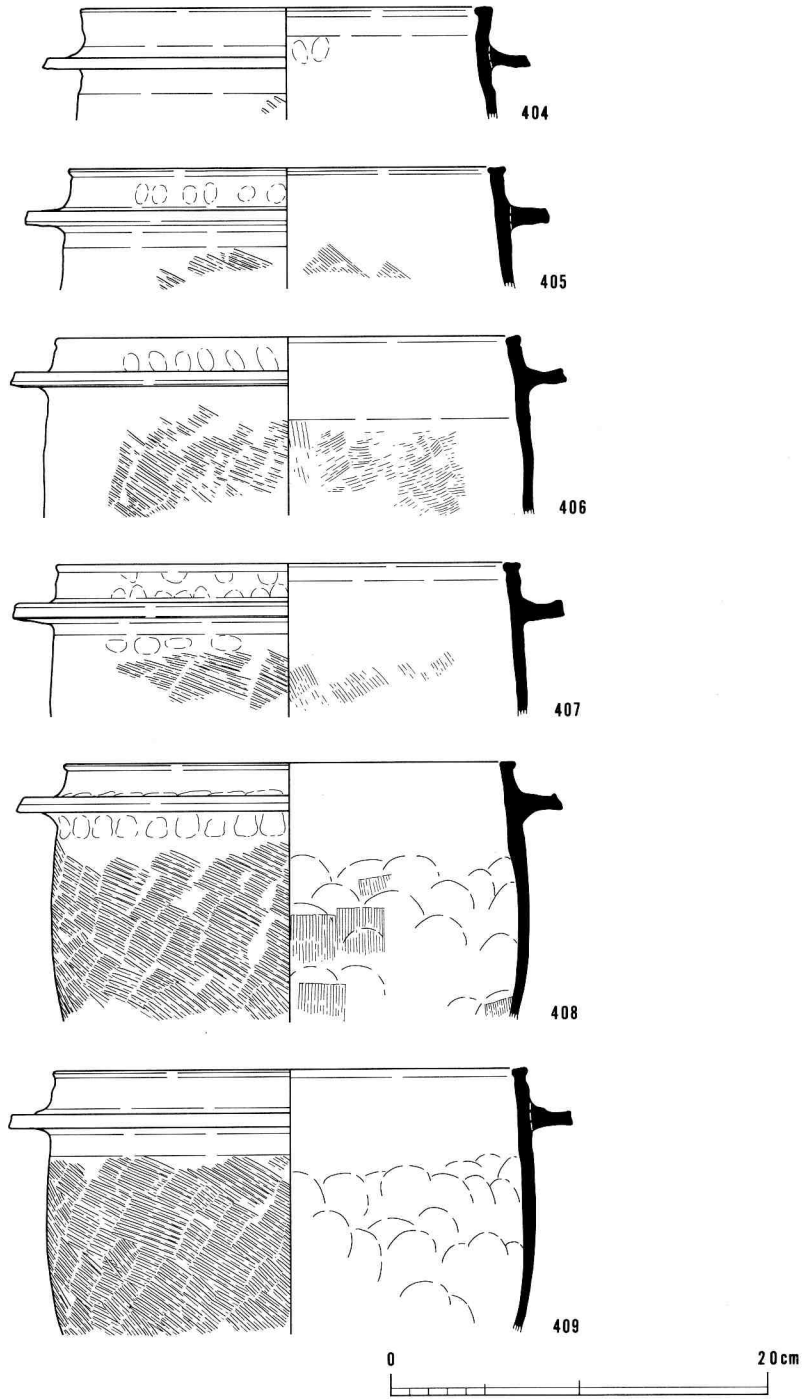
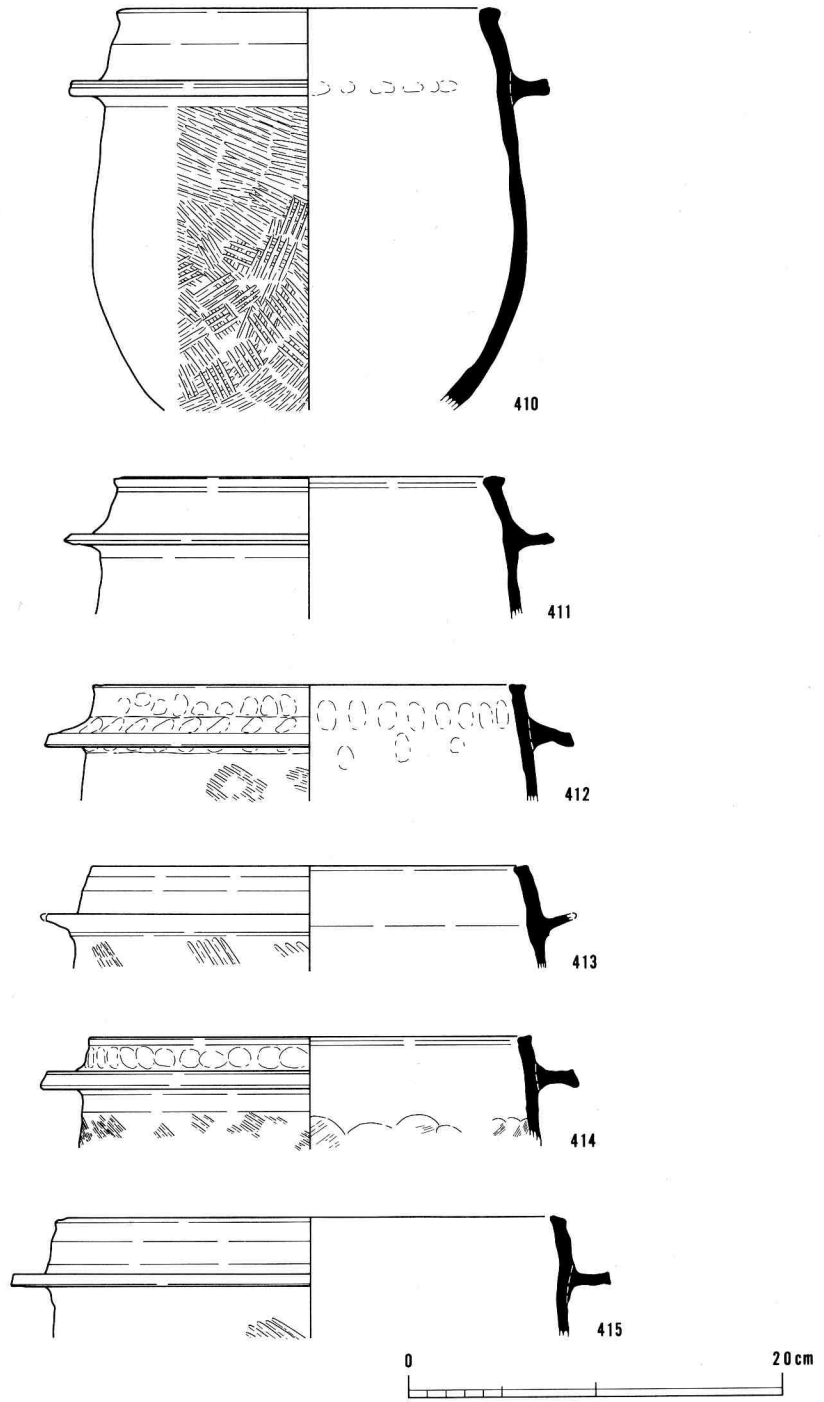
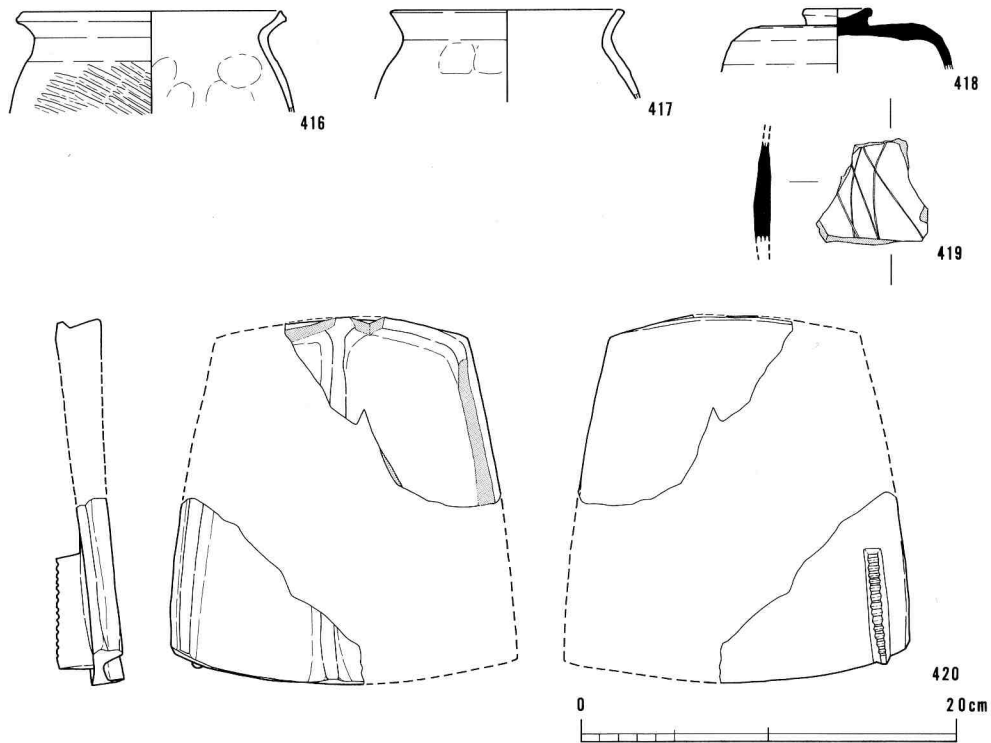


插图190 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(16)



挿図191 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(17)



挿図192 中池ノ内1号窯跡 灰原出土須恵器(18)

端部はすなりおわるもの、尖らすもの、外反するものなど様々である。椀Bの法量は口径13~16cm代、器高4~5.5cm代間に集中しており、椀Aに比べやや小型である。内面の底部は明瞭な段を持つものが多い。総体的に、個体個々の器形にはバラエティーがあるが、法量や技法には特徴的なものは見られない。

椀C(挿図179 311~320) 沈線文椀である。大半が口縁部の破片で全体を観察できるものは少ない。全体を観察できる遺物は椀C3タイプのものばかりである。法量は口径17.4~18.4cm、器高6.4~7.7cm前後のもので他の椀類に比べ大型である。破片のため口径が不正確なものもあるがこの法量を大きく下回るものはないと考えられる。比較的高台の高いものも多く、椀Aに比べ大きく外方に開くのが特徴である。断面を観察できたものは全て貼り付け高台である。沈線は1条ないし2条である。但し、2条のものは1条沈線が偶然一周以上したもので、本来1条を意識していると考えられる。

椀D(挿図179 321~324) 突帯椀で、形態の知れるものは全て椀D2タイプである。全体を復元できるものは324の1個体であった。突帯は体部中程よりやや上に1条を貼り付けている。断面は三角形で、稜が鋭角になるものが多い。口径は17.2~20.9cm、器高は320で7.2cmと椀C

に近い大きさを持っている。技法も椀Cに類似している。

壺B (挿図180~183 325~354) 破片が多く全体の器形が分かるものは少ない。さらに、325~333、336・337、345~347については口縁の形態から壺Bとした。特に小型の325~333については耳が付かないものも含まれる可能性がある。しかし、大半が壺Bになることは疑いないため、ここで紹介したことを断わっておきたい。突帯と沈線の組み合わせになる壺B 3 (341)と、2条突帯になる壺B 4の2種類が見られた。胴部は基本的にタタキ痕跡を消している。

胴部と底径などの観察から法量的には大・中・小の3種類があると思われる。強いて、目安とするならば、小が325~345(肩部の破片は作りの大きさから想定した。)、中は341~346、大は347~351となろうか。但し、数量的に比較出来る部分は遺物の残存状況から口径のみである。壺の口径は15.9~20.7cmであるが、この部分で見えるかぎり、歪みや口縁の開き具合が個々で違っており、それぞれの法量に規格性を見いだすことはできない。従って予測として法量に規格性があることを指摘するに止めたい。

壺の器形は口縁部が外方に大きく開き、端部を上方につまんでいる。肩部はやや張りぎみで頸部とは直線的に繋がる。体部は直線的で長く、底部にかけてやや細くなる。334には消し残された平行タタキが観察されたが、タタキの痕跡は内外面ともにナデで消しているものが大半である。また、341・343・344では縦方向にナデを施して器面を整えている。縦方向の板ナデは本窯跡の他には古城窯跡の壺のみで観察された手法である。

突帯は貼り付けで、上端に稜がくるものが多く全体的にシャープなつくりである。古城1号窯跡に比べると幅が細いのが特徴である。沈線と突帯あるいは突帯と突帯の組み合わせで必ず2条が付くが、下が肩部の最大径のところに、上がそれより2~2.5cm離れて付けられる。耳は突帯の上に貼り付けるもので手づくねで成形している。粘土紐を帯状にして上段の突帯より上と下段の突帯の上に貼り付けている。帯状の耳の他には、339のように粘土紐を捩じったものがある。

壺 (挿図184 355~366) 壺の底部片である。器形は不明であるが、平底のものと、輪高台が付くものがある。

壺C (挿図185 367~368) 口縁部の破片で胴部より下を復元できるものはない。短く直立する口縁を持つ壺である。外面の平行タタキは、粗くナデ消しているので、壺C 1に分類される。周溝から出土した206と同じとすれば丸底で高台が付く形態である。

壺A (挿図185 369~371) 球形の胴を持ち、窄まった頸部から外反して口縁端部を上方につまむ形態をもっている。胴下半は破片のため不明である。肩部には2条の突帯を持ち、小さな耳を貼り付ける。370は破片のため不明であるがやはり双耳壺になるタイプと考えられる。稜線は上端に寄るが端部はやや甘い。耳は捩じったものが付けられる。

甕A (挿図186~188 372~393) 破片が多く全体の器形が分かるものはない。図化した個体

は22個体である。口縁は体部をやはり上につまみ外面に面を持つ意識が認められる。胴部を復元できる個体がないため肩部より上しか明確にならないが、おそらく球形の胴で丸底になる甕と考えられる。肩はあまり張らず、肩部まで丸く膨らみながら連なっている。胴部の外面は平行タタキ、内面は同心円の当て具痕跡を残している。但し、これらの当て具痕跡はナデや板ナデによって部分的に消し残されたものが大半である。381は板ナデの目が残り刷毛状に観察できるものである。

甕D (挿図192 416・417) 土師質の甕である。口径は12.6~14.0cmと小さく球形になる甕と考えられる。416は口縁端部を上方につまむ。外面は平行タタキ、内面はナデによって当て具痕跡を消している。

鉢 (挿図189 394~400) 破片ばかりで全体の器形が分かるものはない。図化した個体は7個体である。394~395、397・399は広口のもので、片口が付くので鉢Aになる。396は小型の鉢である。398は厚手のもので下部の形態は不明である。400は鍋形のものと思われ、口縁部で大きく「く」の字に外反する。外面は平行タタキで成形し、口縁部周辺はナデで仕上げている。

羽釜 (挿図189~191 401~415) 外面は平行タタキ、内面は一部に板ナデによると思われるハケ目状の痕跡を残す。3cm前後の円形の窪みが多く観察できる、当て具の痕跡と考えられる。

この他、破片が多く全体の器形を知れるものは少ないが、408・409のように口縁ないし鐙付近に最大径のあるバケツ様のものと、410のように胴の下半に最大径のあるものがある。前者は404~409が含まれ、口縁が直立ないし外反するものが含まれる。口縁端部は面を持つ意識が強く、ほとんどが端部を内外面に肥厚させている。鐙は口縁直下に付き、短いものが大半である。後者は410~415が含まれる。やはり口縁端部は面をもつ意識が強いが、鐙は口縁をやや下ったところに付くものが多い。

壺蓋 (挿図192 418) 天井に偏平なつまみの付く蓋である。直口壺の蓋になると思われる。

硯 (挿図192 420) 硯は1点のみが出土した。二面硯の破片である。うみの先端部分が下るように縁部分に脚が付いている。脚の裏面は鋸型に凹凸させている。

その他 (挿図192 419) 器種は不明であるが、椀・杯などの底部と思われる破片である。内面側に暗文状のへら書が認められる。

## 第4節 小 結

中池ノ内1号窯跡の調査を通じて中池ノ内窯跡群には少なくとも3基の窯跡が存在することが明らかになった。何れも斜面の北側に立地しており、南側斜面には今のところ見つからない。同窯跡群の中でも今回調査を実施した1号窯跡は最も谷の深部に位置するもので、窯体は谷筋に対して直行して築窯されている。今回の1号窯跡の調査では窯の窯体・周溝・灰原の



全域を検出した。調査では当窯の投棄された遺物の大半を回収したと考えており、1基の窯で操業された遺物の様相を把握するのに十分な資料が得られたと思う。

出土遺物は大きく窯体内・焚口・周溝・灰原の4箇所から出土した。窯体内の遺物は掻き出されずに残ったものであるが、焼台として利用されたものも多いと考えられる。器種は杯・椀などの小型品が多いが、他の場所では器種的な偏りは見られない。窯体内・焚口の遺物は窯の最終操業時の様相を示すと考えられるが、残念ながら灰原などと比較して大差は認められなかった。

また、1号窯跡出土の遺物全体を通じて、形式的な時期差は認められない。従って、窯体の補修は部分的に繰り返しているものの、操業期間はあまり長くないことが予想される。

中池ノ内1号窯跡から出土した遺物には杯A・椀A・椀B・椀C・椀D・壺・壺A・壺B・壺C・壺蓋・甕A・甕C・甕D(土師器甕)・鉢・鉢A・羽釜・硯がある。当窯では既に、杯B・杯蓋は欠落しており、器種別の個体数では杯Aが圧倒的に多く、次いで椀A・Bが多く出土した。さらに、羽釜・甕なども比較的豊富に見られた。杯Aは法量が一定の大きさに集中しており一形式と考えられる。椀は椀A・椀B・椀C・椀Dの4形態がみられ、椀A・C・Dには大・小の2タイプがある。壺は壺A・壺B3・壺B4・壺Cの4形態がみられた。壺Bは胴部や底径の観察から幾つかの規格があると思われるが、細片が多く詳細は不明である。この他、壺Bは胴部に縦方向の板ナデを施すのが特徴である。甕は大半が甕Aであるが少量の甕Cや甕Dが見られた。

へら記号はいずれも内面の底部に見られた。窯体内出土遺物では、杯Aに「一」が6個体、「×」が1個体。焚口は杯Aに「一」が2個体、灰原は杯Aに「一」が2個体みられた。このほか、419には暗文状のへら書がみられた。古城窯跡群に比べると数が減少し記号も単純化していることが看取できる。

これらのことから、当窯は古城窯跡群の様相に近いものの、杯Bを欠くことや、へら記号が単純化し減少すること、杯Aと椀との比率に若干の差が見られることから、古城窯跡群の後に操業されたことが予想される。また、立地からも古城窯跡群→中池ノ内窯跡群→西谷池窯跡群・寄合谷窯跡の順に位置付けできると思われる。

表21 中池ノ内1号窯跡 出土土器観察表

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
1	德利	—	19.2	8.8	9/12		丹波焼(近世)
2	鉢	26.1	16.6	14.0	11/12		丹波焼(近世)
3	杯A	13.1	3.2	6.9	11/12	底部ヘラ切り	
4	杯A	13.1	3.3	6.6	10/12	底部ヘラ切り	
5	杯A	13.0	3.6	6.2	4/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
6	杯A	13.0	2.8	6.4	1/12	底部ヘラ切り	
7	杯A	13.0	3.3	6.8	5/12	底部ヘラ切り	
8	杯A	3.0	3.0	5.4	3/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
9	杯A	13.2	3.4	6.6	4/12	底部ヘラ切り	
10	杯A	13.4	3.6	7.3	6/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
11	杯A	13.1	3.4	7.2	8/12	底部ヘラ切り	
12	杯A	12.7	3.1	7.5	9/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
13	杯A	13.1	3.3	6.8	9/12	底部ヘラ切り	
14	杯A	13.0	3.3	5.0	2/12	底部ヘラ切り	
15	杯A	13.3	3.6	6.4	5/12	底部ヘラ切り	
16	杯A	13.2	3.2	7.1	9/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
17	杯A	13.0	2.7	5.6	5/12	底部ヘラ切り	
18	杯A	13.3	3.5	6.9	10/12	底部ヘラ切り	
19	杯A	13.4	3.3	6.7	3/12	底部ヘラ切り	
20	杯A	13.7	3.2	6.4	12/12	底部ヘラ切り	
21	杯A	13.6	3.6	6.9	11/12	底部ヘラ切り	
22	杯A	13.9	3.8	7.1	2/12	底部ヘラ切り	
23	杯A	13.6	3.5	6.8	12/12	底部ヘラ切り	
24	杯A	13.9	3.7	7.3	9/12	底部ヘラ切り	
25	杯A	13.8	3.1	7.5	5/12	底部ヘラ切り	
26	杯A	13.6	3.8	6.7	6/12	底部ヘラ切り	
27	杯A	13.6	3.0	6.6	5/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
28	杯A	13.6	3.9	7.1	8/12	底部ヘラ切り	
29	杯A	13.7	4.1	6.4	4/12	底部ヘラ切り	
30	杯A	13.6	3.2	7.0	2/12	底部ヘラ切り	
31	杯A	14.1	3.5	7.1	12/12	底部ヘラ切り	
32	杯A	13.7	2.8	6.8	11/12	底部ヘラ切り	
33	杯A	14.3	3.4	7.1	12/12	底部ヘラ切り	
34	杯A	13.5	3.1	6.3	8/12	底部ヘラ切り	

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
35	杯A	14.0	3.8	7.0	9/12	底部へラ切り	
36	杯A	13.5	3.3	6.6	2/12	底部へラ切り	
37	杯A	13.8	3.5	6.8	11/12	底部へラ切り	
38	杯A	13.5	3.4	6.9	6/12	底部へラ切り	
39	杯A	13.7	3.3	7.0	12/12	底部へラ切り	
40	杯A	13.4	2.6	6.6	3/12	底部へラ切り	
41	杯A	13.8	3.3	6.8	12/12	底部へラ切り	
42	杯A	14.0	3.7	7.0	6/12	底部へラ切り	
43	杯A	14.1	3.1	8.0	2/12	底部へラ切り	
44	杯A	13.7	3.4	6.7	12/12	底部へラ切り	
45	杯A	13.6	3.0	7.1	4/12	底部へラ切り	
46	杯A	13.8	3.4	6.8	5/12	底部へラ切り	
47	杯A	14.0	3.4	6.0	3/12	底部へラ切り	
48	杯A	13.7	3.3	6.9	5/12	底部へラ切り	
49	杯A	13.8	3.6	6.9	11/12	底部へラ切り	
50	杯A	13.4	3.3	6.1	7/12	底部へラ切り	
51	杯A	14.0	3.7	7.3	6/12	底部へラ切り	
52	杯A	14.1	3.9	6.8	11/12	底部へラ切り	
53	杯A	13.9	3.4	7.2	7/12	底部へラ切り	
54	杯A	14.0	3.8	7.5	9/12	底部へラ切り	
55	杯A	14.0	3.2	8.4	4/12	底部へラ切り	
56	杯A	13.7	3.5	6.1	4/12	底部へラ切り	
57	杯A	14.0	3.9	6.6	7/12	底部へラ切り	
58	杯A	14.0	3.4	5.9	6/12	底部へラ切り	
59	杯A	14.0	3.2	6.8	9/12	底部へラ切り	
60	杯A	14.0	3.2	7.8	5/12	底部へラ切り	板状圧痕
61	杯A	14.2	3.6	7.2	11/12	底部へラ切り	
62	杯A	14.1	3.4	5.8	1/12	底部へラ切り	
63	杯A	13.8	3.2	7.9	3/12	底部へラ切り	板状圧痕
64	杯A	14.0	2.7	6.1	1/12	底部へラ切り	板状圧痕
65	杯A	14.2	3.5	5.4	12/12	底部へラ切り	
66	杯A	14.4	3.4	7.2	3/12	底部へラ切り	
67	杯A	14.8	3.0	7.7	5/12	底部へラ切り後ナデ調整	板状圧痕
68	杯A	13.6	3.6	7.2	9/12	底部へラ切り	へラ記号
69	杯A	13.4	3.4	7.1	7/12	底部へラ切り	へラ記号

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
70	杯A	13.6	3.6	6.3	3/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	ヘラ記号
71	杯A	13.1	3.4	6.7	6/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
72	杯A	13.5	3.1	6.8	5/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
73	杯A	14.0	3.5	6.6	4/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
74	杯A	14.3	3.6	6.2	5/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
75	椀A	15.1	4.6	7.0	2/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
76	椀A	15.8	5.4	7.6	3/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
77	椀A	15.0	6.0	7.2	4/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
78	椀A	15.0	5.6	7.5	1/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
79	椀A	15.6	5.9	8.3	4/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
80	椀A	15.8	8.7	5.6	4/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
81	椀A	15.5	5.7	7.7	2/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
82	椀A	16.2	6.1	8.0	12/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
83	椀A	16.2	5.8	7.8	6/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
84	椀A	16.9	6.0	8.1	4/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
85	椀A	16.2	5.6	8.3	9/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
86	椀A	16.1	6.1	7.6	12/12	底部ヘラ切り後高台貼り付け	
87	椀B	12.8	5.3	6.9	2/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
88	椀B	13.2	5.6	7.0	4/12	底部ヘラ切り	
89	椀B	13.2	5.3	6.8	2/12	底部ヘラ切り	
90	椀B	15.6	4.6	6.9	2/12	底部ヘラ切り	
91	椀B	14.1	4.8	6.7	4/12	底部ヘラ切り	
92	椀B	13.9	5.1	7.1	1/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
93	椀B	14.0	4.1	6.2	4/12	底部ヘラ切り	板状圧痕
94	椀B	14.4	4.4	6.6	4/12	底部ヘラ切り	
95	椀B	14.6	4.5	6.7	2/12	底部ヘラ切り	
96	椀B	13.8	4.6	6.9	5/12	底部ヘラ切り	
97	椀B	13.9	4.5	6.6	5/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
98	椀B	13.9	5.6	6.3	5/12	底部ヘラ切り	
99	椀B	14.8	5.1	6.4	8/12	底部ヘラ切り	
100	椀B	13.8	5.2	7.2	4/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
101	椀C	15.9	5.0	—	2/12	ヘラ切り・一条沈線	
102	椀C	14.0	6.0	6.3	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
103	椀C	16.2	5.7	7.6	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
104	甕	22.3	8.3	—	3/12	外面平行タタキ	

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
105	甕A	33.4	13.4	—	1/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
106	杯A	12.8	3.4	7.5	3/12	底部ヘラ切り	
107	杯A	13.2	3.3	6.5	8/12	底部ヘラ切り	
108	杯A	13.2	3.3	7.0	8/12	底部ヘラ切り	火襻き痕跡
109	杯A	13.0	3.0	8.0	2/12	底部ヘラ切り	
110	杯A	13.0	2.7	7.4	3/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
111	杯A	13.6	3.2	7.2	3/12	底部ヘラ切り	
112	杯A	13.0	2.8	7.9	2/12	底部ヘラ切り	
113	杯A	13.3	3.6	7.1	12/12	底部ヘラ切り	
114	杯A	13.8	3.7	7.1	12/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
115	杯A	13.6	3.4	7.2	12/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
116	杯A	13.1	3.2	7.4	4/12	底部ヘラ切り	
117	杯A	13.2	3.6	7.1	2/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
118	杯A	13.3	3.8	6.9	2/12	底部ヘラ切り	
119	杯A	13.8	2.6	9.5	1/12	底部ヘラ切り	
120	杯A	13.3	3.7	6.6	4/12	底部ヘラ切り	
121	杯A	13.6	2.8	8.4	1/12	底部ヘラ切り	
122	杯A	13.5	3.9	7.3	1/12	底部ヘラ切り	
123	杯A	13.6	3.3	8.1	2/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
124	杯A	14.0	3.1	9.0	4/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
125	杯A	13.6	3.8	6.7	10/12	底部ヘラ切り	
126	杯A	13.8	3.3	7.5	5/12	底部ヘラ切り	
127	杯A	14.0	3.7	8.7	4/12	底部ヘラ切り	
128	杯A	13.7	3.9	7.0	3/12	底部ヘラ切り	
129	杯A	13.7	3.2	7.3	9/12	底部ヘラ切り	
130	杯A	13.9	3.6	7.2	8/12	底部ヘラ切り	
131	杯A	14.2	3.6	6.0	6/12	底部ヘラ切り	
132	杯A	13.9	3.9	7.0	6/12	底部ヘラ切り	
133	杯A	14.0	3.9	7.8	3/12	底部ヘラ切り	
134	杯A	13.9	3.3	6.7	6/12	底部ヘラ切り	
135	杯A	14.2	3.4	7.0	2/12	底部ヘラ切り	
136	杯A	14.0	3.4	6.5	4/12	底部ヘラ切り	
137	杯A	14.0	3.8	6.8	3/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
138	杯A	14.1	3.6	6.5	5/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号・板状圧痕
139	杯A	13.5	3.1	8.1	6/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号・重焼き

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
140	杯A	13.9	3.3	8.6	3/12	底部へラ切り後ナデ調整	へラ記号・重焼き
141	椀A	13.9	5.3	7.2	3/12	へラ切り後高台貼り付け	
142	椀A	15.6	5.6	8.0	5/12	へラ切り後高台貼り付け	
143	椀A	14.8	5.4	7.7	4/12	へラ切り後高台貼り付け	
144	椀A	15.4	5.8	7.8	4/12	へラ切り後高台貼り付け	
145	椀A	16.2	5.5	8.2	3/12	へラ切り後高台貼り付け	
146	椀A	15.7	5.7	8.0	3/12	へラ切り後高台貼り付け	
147	椀A	16.1	5.4	7.9	1/12	へラ切り後高台貼り付け	
148	椀A	16.6	5.9	8.0	6/12	へラ切り後高台貼り付け	
149	椀A	16.2	5.5	8.3	10/12	へラ切り後高台貼り付け	
150	椀A	16.1	6.1	8.1	4/12	へラ切り後高台貼り付け	
151	椀A	17.3	6.8	9.4	1/12	へラ切り後高台貼り付け	
152	椀A	18.6	5.3	—	4/12		
153	椀A	—	5.1	8.1	12/12	へラ切り後高台貼り付け	
154	椀A	14.3	5.8	8.6	2/12	へラ切り後高台貼り付け	
155	椀A	15.3	5.9	8.6	2/12	へラ切り後高台貼り付け	
156	椀B	12.8	5.4	6.3	1/12	底部へラ切り	
157	椀B	13.8	4.8	6.8	6/12	底部へラ切り	
158	椀B	15.5	5.0	8.2	1/12	底部へラ切り	
159	椀C	15.9	7.3	—	1/12	へラ切り後高台貼り付け・二条沈線	
160	椀C	19.2	7.5	9.4	6/12	へラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
161	壺	13.4	9.2	—	3/12		口縁部の破片
162	壺	16.0	9.5	—	3/12		口縁部の破片
163	壺	20.2	11.1	—	3/12		口縁部の破片
164	壺	—	8.7	17.4	8/12		底部の破片
165	甕	38.3	8.6	—	2/12	外面平行タタキ	
166	甕	35.0	12.8	—	3/12	外面平行タタキ・内面同心円	
167	甕	38.5	11.8	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円	
168	甕	36.0	10.8	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円	
169	甕	—	11.9	—	1/12	外面平行タタキ・内面同心円	高台付き
170	鉢	20.2	8.0	—	7/12		
171	羽釜	20.2	10.6	—	3/12	鐳貼り付け・体部外面平行タタキ	
172	羽釜	19.8	7.8	—	3/12	鐳貼り付け・体部外面平行タタキ	
173	羽釜	25.1	4.7	—	2/12	鐳貼り付け・体部外面平行タタキ	
174	羽釜	25.8	6.4	—	2/12	鐳貼り付け・体部外面平行タタキ	

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
175	杯A	12.4	3.9	8.4	3/12	底部ヘラ切り	
176	杯A	13.1	3.6	6.3	9/12	底部ヘラ切り	
177	杯A	13.0	3.1	6.1	5/12	底部ヘラ切り	
178	杯A	13.0	3.0	6.2	3/12	底部ヘラ切り	
179	杯A	12.9	3.1	6.4	10/12	底部ヘラ切り	
180	杯A	13.2	3.4	6.6	3/12	底部ヘラ切り	
181	杯A	13.7	3.7	6.6	9/12	底部ヘラ切り	
182	杯A	13.4	3.4	6.6	4/12	底部ヘラ切り	
183	杯A	13.4	3.2	7.6	8/12	底部ヘラ切り	
184	杯A	13.9	3.1	7.6	11/12	底部ヘラ切り	
185	杯A	13.7	3.4	6.9	3/12	底部ヘラ切り	
186	杯A	14.0	3.6	8.1	3/12	底部ヘラ切り	
187	杯A	14.2	3.5	7.6	6/12	底部ヘラ切り	
188	杯A	14.0	3.7	7.6	4/12	底部ヘラ切り	
189	杯A	13.8	3.5	7.4	3/12	底部ヘラ切り	
190	杯A	14.2	3.2	7.5	3/12	底部ヘラ切り	
191	杯A	14.7	3.1	6.7	3/12	底部ヘラ切り	
192	杯A	14.6	2.9	6.2	3/12	底部ヘラ切り	
193	椀A	15.6	5.0	7.0	11/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
194	椀A	15.4	5.7	7.2	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
195	椀A	16.0	5.8	7.8	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
196	椀A	17.6	6.0	8.4	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
197	椀B	13.6	4.3	6.3	6/12	底部ヘラ切り	
198	椀B	14.2	4.9	3.3	3/12	底部ヘラ切り	
199	杯A	14.2	4.9	6.3	1/12	底部ヘラ切り	
200	甕	37.6	<u>8.3</u>	—	3/12	外面平行タタキ	
201	甕	42.0	<u>8.4</u>	—	2/12	外面平行タタキ	
202	甕	41.9	<u>11.7</u>	—	6/12	外面平行タタキ・内面同心円	
203	甕	45.9	<u>6.4</u>	—	10/12		
204	甕	51.6	<u>11.9</u>	—	1/12	外面平行タタキ・内面同心円	
205	甕	—	<u>24.7</u>	—	1/12	外面平行タタキ・内面同心円	底部の破片
206	壺C	11.7	31.3	16.6	11/12	外面平行タタキ・内面同心円	
207	羽釜	29.6	<u>10.1</u>	—	2/12	鍔貼り付け・外面平行タタキ	
208	羽釜	22.5	<u>16.7</u>	—	3/12	鍔貼り付け・外面平行タタキ	
209	杯A	13.4	2.6	8.2	3/12	底部ヘラ切り	

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
210	杯A	12.9	3.2	7.7	5/12	底部へラ切り	
211	杯A	12.0	2.7	8.0	6/12	底部へラ切り	
212	杯A	13.3	3.8	7.3	4/12	底部へラ切り	
213	杯A	13.2	3.3	7.0	4/12	底部へラ切り後ナデ調整	
214	杯A	13.3	3.4	6.9	4/12	底部へラ切り	
215	杯A	13.1	2.9	7.7	6/12	底部へラ切り	
216	杯A	13.6	3.4	6.1	3/12	底部へラ切り	
217	杯A	13.2	3.4	7.0	9/12	底部へラ切り	
218	杯A	13.8	3.4	7.2	3/12	底部へラ切り後ナデ調整	
219	杯A	13.7	3.1	8.1	5/12	底部へラ切り	
220	杯A	13.6	2.7	7.0	1/12	底部へラ切り	
221	杯A	13.7	3.5	7.0	9/12	底部へラ切り	
222	杯A	13.9	3.4	8.1	6/12	底部へラ切り後ナデ調整	
223	杯A	13.2	3.5	6.0	3/12	底部へラ切り	
224	杯A	14.0	3.1	7.9	8/12	底部へラ切り	
225	杯A	14.0	3.3	7.4	6/12	底部へラ切り	
226	杯A	13.9	3.1	8.1	12/12	底部へラ切り	
227	杯A	13.9	3.2	7.6	4/12	底部へラ切り	
228	杯A	14.2	3.8	7.0	4/12	底部へラ切り	
229	杯A	14.0	3.6	7.0	2/12	底部へラ切り	
230	杯A	14.0	3.1	6.1	3/12	底部へラ切り	
231	杯A	13.0	3.9	7.0	1/12	底部へラ切り	
232	杯A	13.9	3.4	7.0	4/12	底部へラ切り	火襷痕跡
233	杯A	14.1	2.9	7.9	3/12	底部へラ切り	
234	杯A	14.0	3.5	7.2	3/12	底部へラ切り	
235	杯A	14.4	3.3	6.2	3/12	底部へラ切り	
236	杯A	13.7	3.5	5.9	6/12	底部へラ切り	
237	杯A	14.0	3.7	8.4	8/12	底部へラ切り	
238	杯A	13.7	3.8	6.7	3/12	底部へラ切り	
239	杯A	13.8	2.5	7.4	3/12	底部へラ切り	
240	杯A	13.5	3.7	7.1	2/12	底部へラ切り	
241	杯A	13.5	3.9	6.4	6/12	底部へラ切り	火襷痕跡
242	杯A	14.1	3.6	8.2	7/12	底部へラ切り	
243	杯A	14.0	3.8	6.8	3/12	底部へラ切り	
244	杯A	14.1	3.5	8.3	3/12	底部へラ切り	



遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
245	杯A	14.4	3.4	7.4	4/12	底部ヘラ切り	
246	杯A	15.0	3.4	7.3	6/12	底部ヘラ切り	
247	杯A	14.9	2.9	4.4	5/12	底部ヘラ切り	
248	杯A	16.1	3.6	6.7	1/12	底部ヘラ切り	
249	杯A	13.7	2.9	6.8	2/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
250	杯A	13.0	3.1	5.9	5/12	底部ヘラ切り	ヘラ記号
251	杯A	—	—	—	4/12	底部ヘラ切り	重焼き
252	杯A	13.8	—	7.4	4/12	底部ヘラ切り	重焼き
253	杯A	13.2	5.3	8.2	7/12	底部ヘラ切り	重焼き
254	椀A	14.7	5.3	7.8	1/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
255	椀A	14.1	5.7	7.9	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
256	椀A	14.9	5.5	7.0	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
257	椀A	14.3	4.9	7.3	11/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
258	椀A	14.7	5.4	7.2	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
259	椀A	14.7	5.6	8.2	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
260	椀A	14.7	5.9	7.7	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
261	椀A	15.4	5.4	6.8	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
262	椀A	15.4	5.5	7.0	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
263	椀A	15.2	5.7	7.7	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
264	椀A	15.2	5.4	7.2	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
265	椀A	15.3	5.9	8.4	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
266	椀A	15.6	5.2	7.2	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
267	椀A	15.8	5.0	7.5	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
270	椀A	16.0	5.9	7.8	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
271	椀A	15.9	5.2	8.4	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
272	椀A	16.2	5.2	7.6	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
273	椀A	16.4	4.8	7.9	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
274	椀A	16.0	5.0	7.5	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
275	椀A	16.1	5.0	8.0	8/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
276	椀A	16.5	5.5	7.9	12/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
277	椀A	17.1	5.3	7.6	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
278	椀A	16.5	5.1	8.6	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
279	椀A	16.9	5.4	7.3	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
280	椀A	17.0	5.5	7.8	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
281	椀A	17.2	5.0	9.6	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
282	椀A	18.6	6.8	8.4	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
283	椀B	12.3	4.7	7.1	3/12	底部ヘラ切り	
284	椀B	12.6	4.7	6.0	3/12	底部ヘラ切り	
285	椀B	13.1	4.7	6.1	3/12	底部ヘラ切り	
286	椀B	13.6	5.0	7.5	4/12	底部ヘラ切り	
287	椀B	13.7	5.1	7.5	6/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
288	椀B	14.0	4.6	7.0	4/12	底部ヘラ切り	
289	椀B	14.2	4.7	8.2	3/12	底部ヘラ切り後ナデ調整	
290	椀B	13.4	5.2	7.2	3/12	底部ヘラ切り	
291	椀B	13.7	4.6	8.3	5/12	底部ヘラ切り	
292	椀B	13.9	4.3	6.4	6/12	底部ヘラ切り	
293	椀B	13.8	4.7	7.2	2/12	底部ヘラ切り	
294	椀B	13.6	4.8	6.2	2/12	底部ヘラ切り	
295	椀B	13.9	4.1	7.1	6/12	底部ヘラ切り	
296	椀B	13.8	5.1	7.3	3/12	底部ヘラ切り	
297	椀B	14.2	5.4	6.9	6/12	底部ヘラ切り	
298	椀B	14.0	4.5	7.1	2/12	底部ヘラ切り	
299	椀B	14.7	4.2	8.0	2/12	底部ヘラ切り	
300	椀B	14.1	4.8	6.9	3/12	底部ヘラ切り	
301	椀B	14.1	4.5	7.3	4/12	底部ヘラ切り	
302	椀B	14.4	4.8	8.0	2/12	底部ヘラ切り	
303	椀B	14.8	5.0	6.0	1/12	底部ヘラ切り	
304	椀B	15.0	5.1	7.4	4/12	底部ヘラ切り	
305	椀B	15.4	6.0	8.1	3/12	底部ヘラ切り	
306	椀B	15.6	4.2	7.6	5/12	底部ヘラ切り	
307	椀B	16.2	4.2	9.4	3/12	底部ヘラ切り	
308	椀B	16.3	5.1	7.2	4/12	底部ヘラ切り	
309	椀B	16.4	4.9	7.9	3/12	底部ヘラ切り	
310	椀B	14.6	5.2	8.6	2/12	底部ヘラ切り	重焼き
311	椀C	17.4	7.8	7.9	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
312	椀C	18.0	6.7	9.8	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
313	椀C	18.2	6.9	8.4	1/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
314	椀C	18.7	7.7	9.4	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け・二条沈線	
315	椀C	18.0	4.3	—	2/12	一条沈線	
316	椀C	18.1	7.3	8.8	1/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
317	椀C	—	—	9.4	8/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
318	椀C	18.0	7.5	—	3/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
319	椀C	20.4	6.5	—	1/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
320	椀C	20.4	7.2	9.6	1/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
321	椀D	17.2	6.6	—	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条突帯	
322	椀D	19.0	6.0	—	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条突帯	
323	椀D	20.9	5.0	—	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条突帯	
324	椀D	20.2	7.3	8.3	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条突帯	
325	壺	13.6	5.1	—	6/12		口縁部の破片
326	壺	13.4	6.5	—	6/12		口縁部の破片
327	壺	15.0	8.0	—	3/12		口縁部の破片
328	壺	14.2	7.6	—	5/12		口縁部の破片
329	壺	14.8	5.9	—	12/12		口縁部の破片
330	壺	15.4	7.9	—	6/12		口縁部の破片
331	壺	15.2	10.2	—	10/12		
332	壺	15.6	5.1	—	4/12		
333	壺	16.0	8.4	—	5/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線	
334	壺B	14.6	13.7	—	1/12	耳貼り付け・二条突帯	
335	壺B	14.1	14.9	—	3/12	耳貼り付け・二条突帯	
336	壺	20.0	6.5	—	4/12	耳貼り付け・二条突帯	
337	壺	17.6	10.2	—	3/12	耳貼り付け・二条突帯	
338	壺B	—	4.6	—	2/12	耳貼り付け・二条突帯	胴部の破片
339	壺B	—	—	—	1/12	耳貼り付け・一条突帯 (残存部)	胴部の破片
340	壺B	—	—	—	1/12	耳貼り付け・二条突帯 (残存部)	胴部の破片
341	壺B	17.1	31.5	11.3	6/12	耳貼り付け・一条突帯・一条沈線	
342	壺B	15.9	18.5	—	12/12	耳貼り付け・二条突帯	
343	壺	—	24.1	10.3	8/12	二条突帯	
344	壺B	—	27.0	11.6	7/12	耳貼り付け・二条突帯	
345	壺	20.0	8.0	—	3/12		口縁部の破片
346	壺	20.0	4.8	—	6/12		口縁部の破片
347	壺	21.1	10.8	—	3/12		
348	壺B	18.8	17.9	—	12/12	耳貼り付け・二条突帯	
349	壺B	20.7	21.1	—	5/12	耳貼り付け・二条突帯	
350	壺B	19.1	26.0	—	1/12	耳貼り付け・二条突帯	
351	壺B	17.2	24.2	—	3/12	耳貼り付け・二条突帯	

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
352	壺B	21.7	22.6	—	3/12	耳貼り付け・二条突帯	
353	壺B	—	19.0	—	1/12	耳貼り付け・二条突帯	
354	壺B	21.9	19.5	—	6/12	耳貼り付け・二条突帯	
355	壺	—	5.8	10.4	12/12		底部の破片
356	壺	—	5.3	13.8	6/12		底部の破片
357	壺	—	8.8	11.9	10/12		底部の破片
358	壺	—	15.4	10.9	12/12		底部の破片
359	壺	—	5.4	13.1	11/12	高台貼り付け	底部の破片
360	壺	—	5.6	16.8	6/12		底部の破片
361	壺	—	3.4	16.8	10/12		底部の破片
362	壺	—	3.3	20.1	12/12		底部の破片
363	壺	—	5.7	17.2	4/12	外面平行タタキ	底部の破片
364	壺	—	6.6	18.3	5/12		底部の破片
365	壺	—	5.5	20.0	6/12		底部の破片
366	壺	—	7.0	21.0	4/12		底部の破片
367	壺C	11.3	8.6	—	2/12	外面平行タタキ	
368	壺C	11.0	9.0	—	2/12	外面平行タタキ	
369	壺B	11.4	11.8	—	4/12	耳貼り付け・二条突帯	
370	壺A	16.7	11.7	—	10/12	外面平行タタキ・二条突帯	
371	壺B	21.0	17.3	—	11/12	外面平行タタキ・耳貼り付け・二条突帯	
372	甕D	25.0	4.3	—	3/12	外面平行タタキ・内面同心円文	口縁部の破片
373	甕	21.4	5.5	—	3/12	外面平行タタキ・内面同心円文	口縁部の破片
374	甕	22.4	6.3	—	3/12	外面平行タタキ・内面同心円文	口縁部の破片
375	甕	23.1	6.7	—	3/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
376	甕	23.0	7.6	—	1/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
377	甕	34.1	11.2	—	4/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
378	甕	38.0	16.8	—	3/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
379	甕	34.9	18.7	—	3/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
380	甕	35.5	8.2	—	6/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
381	甕	33.3	14.9	—	4/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
382	甕	36.0	9.3	—	3/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
383	甕	35.7	17.5	—	7/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
384	甕	38.2	11.9	—	1/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
385	甕	38.7	10.2	—	3/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
386	甕	39.8	11.3	—	3/12	外面平行タタキ・内面同心円文	

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
387	甕	41.4	<u>10.5</u>	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
388	甕	40.9	<u>15.4</u>	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
389	甕	45.2	<u>8.8</u>	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
390	甕	46.0	<u>8.2</u>	—	1/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
391	甕	46.0	<u>7.7</u>	—	3/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
392	甕	45.8	<u>11.2</u>	—	4/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
393	甕	44.8	<u>16.5</u>	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
394	鉢A	17.4	7.5	7.4	3/12		
395	鉢	—	<u>3.1</u>	—	1/12		
396	鉢	10.8	<u>5.1</u>	—	1/12		
397	鉢A	19.8	<u>6.1</u>	—	4/12		
398	鉢	19.3	13.2	12.3	1/12		
399	鉢	19.1	<u>4.4</u>	6.8	2/12		
400	鉢	—	—	—	1/12	外面平行タタキ	
401	羽釜	21.8	<u>7.7</u>	—	1/12	鏝貼り付け・外面平行タタキ	
402	羽釜	21.7	<u>6.3</u>	—	3/12	鏝貼り付け・外面平行タタキ	
403	羽釜	26.4	<u>7.7</u>	—	2/12	鏝貼り付け・外面平行タタキ	
404	羽釜	22.0	<u>6.0</u>	—	3/12	鏝貼り付け・外面平行タタキ	
405	羽釜	23.4	<u>6.4</u>	—	2/12	鏝貼り付け・外面平行タタキ	
406	羽釜	24.9	<u>9.6</u>	—	2/12	鏝貼り付け・外面平行タタキ	
407	羽釜	24.9	<u>8.2</u>	—	2/12	鏝貼り付け・外面平行タタキ	爪状圧痕
408	羽釜	24.0	<u>13.6</u>	—	6/12	鏝貼り付け・外面平行タタキ	
409	羽釜	25.1	<u>14.0</u>	—	7/12	鏝貼り付け・外面平行タタキ	
410	羽釜	20.6	<u>21.4</u>	—	3/12	鏝貼り付け・外面平行タタキ	
411	羽釜	21.0	<u>7.6</u>	—	5/12	鏝貼り付け・外面平行タタキ	
412	羽釜	23.3	<u>6.2</u>	—	8/12	鏝貼り付け・外面平行タタキ	
413	羽釜	23.5	<u>5.5</u>	—	3/12	鏝貼り付け・外面平行タタキ	
414	羽釜	23.8	<u>5.9</u>	—	3/12	鏝貼り付け・外面平行タタキ	
415	羽釜	27.5	<u>6.4</u>	—	2/12	鏝貼り付け・外面平行タタキ	
416	甕D	14.0	<u>5.3</u>	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
417	甕D	12.6	<u>4.8</u>	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
418	蓋	—	<u>3.0</u>	—	6/12	つまみ貼り付け	
419	椀	—	—	—	1/12		へら書
420	硯	—	—	—	1/12	二面硯・底部に脚を貼り付ける	
403	羽釜	26.4	<u>7.7</u>	—	2/12	鏝貼り付け・外面平行タタキ	

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴	備 考
		口径	器高	底径			
404	羽釜	22.0	<u>6.0</u>	—	3/12	鐳貼り付け・外面平行タタキ	
405	羽釜	23.4	<u>6.4</u>	—	2/12	鐳貼り付け・外面平行タタキ	
406	羽釜	24.9	<u>9.6</u>	—	2/12	鐳貼り付け・外面平行タタキ	
407	羽釜	24.9	<u>8.2</u>	—	2/12	鐳貼り付け・外面平行タタキ	爪状圧痕
408	羽釜	24.0	<u>13.6</u>	—	6/12	鐳貼り付け・外面平行タタキ	
409	羽釜	25.1	<u>14.0</u>	—	7/12	鐳貼り付け・外面平行タタキ	
410	羽釜	20.6	<u>21.4</u>	—	3/12	鐳貼り付け・外面平行タタキ	
411	羽釜	21.0	<u>7.6</u>	—	5/12	鐳貼り付け・外面平行タタキ	
412	羽釜	23.3	<u>6.2</u>	—	8/12	鐳貼り付け・外面平行タタキ	
413	羽釜	23.5	<u>5.5</u>	—	3/12	鐳貼り付け・外面平行タタキ	
414	羽釜	23.8	<u>5.9</u>	—	3/12	鐳貼り付け・外面平行タタキ	
415	羽釜	27.5	<u>6.4</u>	—	2/12	鐳貼り付け・外面平行タタキ	
416	甕D	14.0	<u>5.3</u>	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
417	甕D	12.6	<u>4.8</u>	—	2/12	外面平行タタキ・内面同心円文	
418	蓋	—	<u>3.0</u>	—	6/12	つまみ貼り付け	
419	椀	—	—	—	1/12		へら書
420	硯	—	—	—	1/12	二面硯・底部に脚を貼り付ける	

## 第9章 西谷池窯跡群の調査

### 第1節 調査の方法

#### 1. 位置 (挿図193)

西谷池窯跡群は三田市上相野字西谷に所在し、2基の須恵器窯からなる。相野付近では南北に伸びる尾根が播磨国と摂津国の境となり、現在でも美囊郡吉川町と三田市の市町境となっている。この尾根から東向きに派生した尾根の先端では、谷を堰き止めて溜池が作られていることが多いが、西谷池もこのような灌漑用の溜池の一つである。

西谷池1号窯跡・2号窯跡の位置する西谷は、標高210m付近まで水田化されており、それ以上が山となる。この谷の奥まった部分に2基の窯は構築されている。1号窯跡は西谷池の北側にある南西向き斜面に位置し、2号窯跡は西谷池の西側にある南東向き斜面に位置している。両者の位置する斜面は別のもので、両窯跡は約90度主軸を異にしている。

#### 2. 方法

近畿自動車道舞鶴線の建設に伴い、西谷池の約半分が高速道路用地にかかることとなった。当然灌漑用水の不足が予想され、そのため用水確保を目的として池の拡張が計画された。従って同高速道路建設に先立つ分布調査は、この池の拡張部も含めて実施することとなった。

昭和54年度に実施した分布調査では、西谷池の北西斜面で須恵器片を1点採集しており(No.15地点)、付近に窯跡の存在する可能性が認められた。路線がほぼ確定した昭和59年度には再分布調査を実施したが、この時は池の水量が多く、池底まで踏査ができなかった。

過去2回の分布調査の結果、西谷池周囲の斜面に窯跡が存在する可能性があったため、昭和60年度三田市下相野～三田市藍本にかけて近畿自動車道舞鶴線建設に伴う遺跡の確認調査を実施した際に、3度目の分布調査を実施した。この時は西谷池の水量が減少しており、従来の池岸よりも低い位置まで踏査が可能であった。踏査の結果、池の北西部分・西部分・南西部分で須恵器片を採集した。

池の北西部分については、①須恵器片を採集した地点の斜面の上方で、人為的に掘られた(工事に伴う)穴があり、その周囲に須恵器片が散乱していたこと、②その穴の断面に灰層と思われる土層の堆積が認められたこと、から窯跡が存在することはほぼ確実であると思われたため、確認調査を行わずに全面調査を実施することになった。この窯跡を「西谷池1号窯跡」と呼ぶこととした。

池の西部分及び南西部分では、北西部分のように窯跡の存在を示す積極的な根拠が認められ

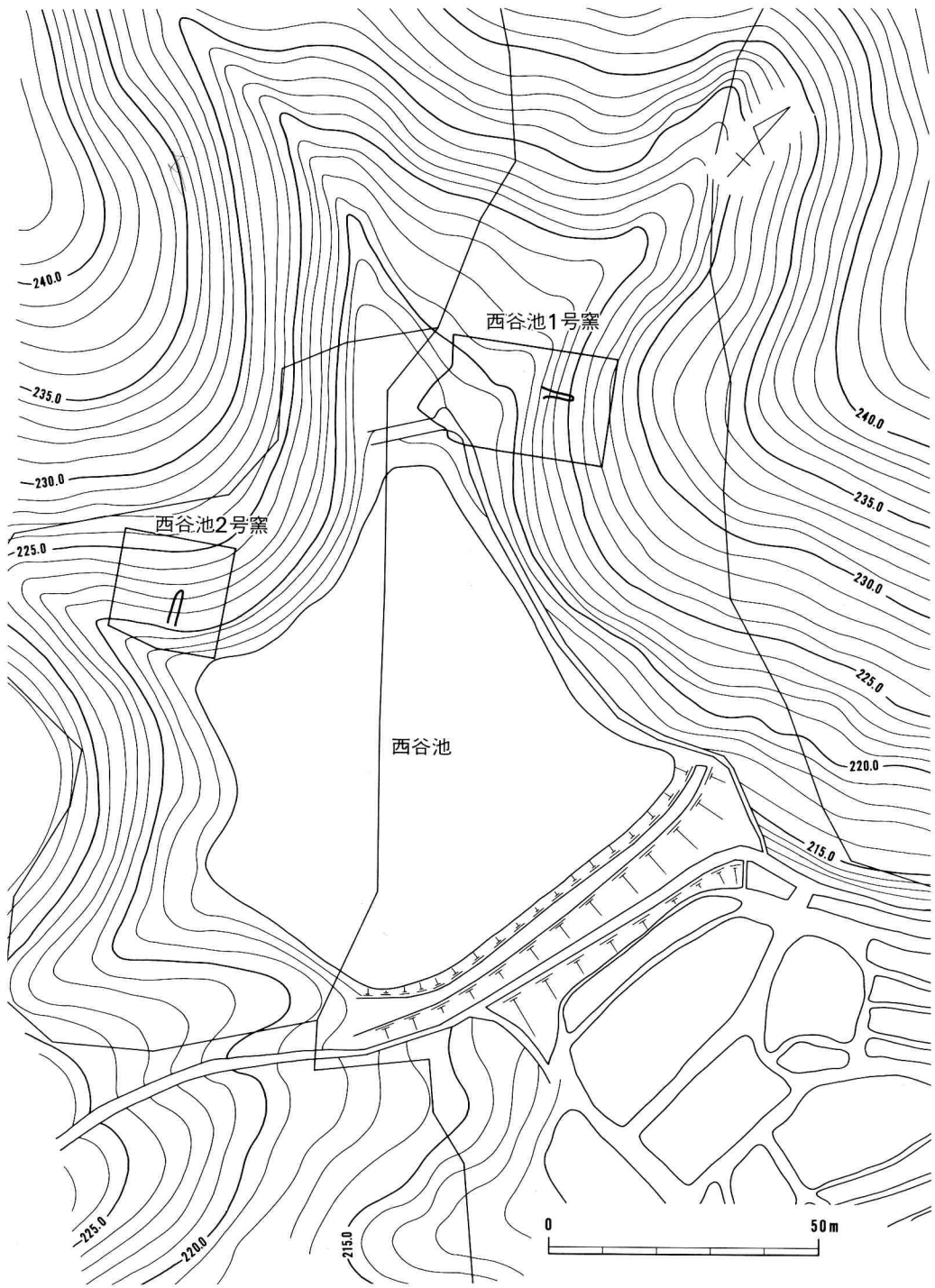


插图193 西谷池寨跡群位置图



なかったため、バックホーにより掘削し、灰層の有無を確認することにした。その結果、西部分では予想したよりも低い位置で窯体を検出した。窯跡は「西谷池2号窯跡」と呼ぶこととした。なお、南西部分では窯跡・灰原のいずれも認められず、またその後土器も採集できなかったため、窯跡は存在しないものと判断した。

以上の2基の窯跡については、急遽昭和60年度中に全面調査を実施することとなった。

#### 〔西谷池1号窯跡〕

灰層を確認した穴を中心として、斜面上方に約15m・下方に約20m・等高線と平行する方向に左右に10mずつの範囲を調査範囲とし、樹木の伐採を行った。またこの調査範囲には、5m方眼を設定した。斜面の上から下へアルファベットのB～H、北から南にかけて数字の8～12のラインを設定した。これらを基準として表土掘削・出土遺物の取り上げ・土層断面図の作成等を行った。

樹木の伐採後には、9ラインと10ラインの間で窯体と思われる地形の盛り上がり認められた。表土掘削後は窯体の掘削を行ったが、その中軸線に縦断軸を、横断方向には窯体内で1本の軸線を決め、断面観察の基準軸とした。また断ち割りもそのラインに沿って実施した。

窯体の下方で検出した炭窯については、縦断軸を基準線として、そのほぼ中心付近で横断面の観察を行った。

最後に窯体の断ち割りをを行い、発掘調査は終了したが、断ち割り調査の後、熱残留磁気測定のための資料採集を行った。

調査範囲外にも1号窯跡が位置する斜面と同様の傾斜面が存在することから、その他の窯跡の存在を確認するために、E12付近（炭窯のレベル）から等高線に沿って南東側へ幅1m・延長27mのトレンチを設定し掘削を行ったが、遺物の出土もなく遺構も認められなかった。

なお調査範囲が道路建設の本体工事部分と溜池工事部分とにまたがっており、工事工程章溜池部分の工事が先行することになったため、Fライン以下の谷部を先に調査し、B～Fライン間は後に調査を行った。調査面積は、本体工事部分が427m<sup>2</sup>（昭和61年2月10日～昭和61年4月8日）・溜池工事部分が275m<sup>2</sup>（昭和60年12月16日～昭和61年1月9日）である。

#### 〔西谷池2号窯跡〕

前述したように、バックホーにより窯体を検出したため、当初から窯体の位置は判明していた。そのため、1号窯跡と同様に5m方眼を設定し、斜面の上から下へアルファベットのB～E、西から東にかけて数字の8～12のラインを設定した。これらを基準として表土掘削・出土遺物の取り上げ・土層断面図の作成等を行った。

表土掘削後は窯体の掘削を行ったが、その中軸線に縦断軸を、横断方向には窯体内で2本の軸線を決め、断面観察の基準軸とした。また断ち割りもそのラインに沿って実施した。

調査面積は400m<sup>2</sup>（昭和60年1月24日～昭和61年3月6日）である。

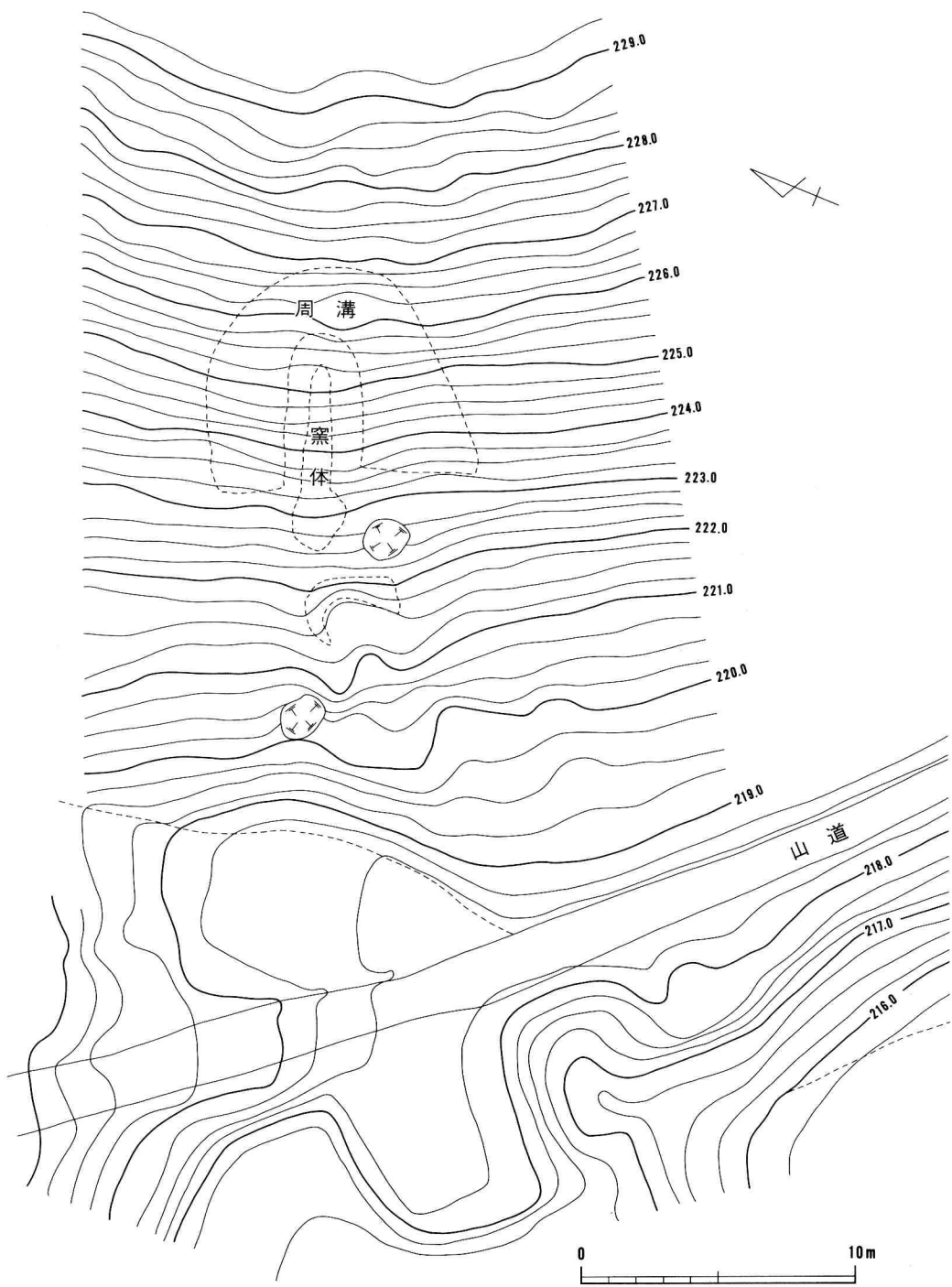


插图194 西谷池1号窑迹 调查前地形测量图

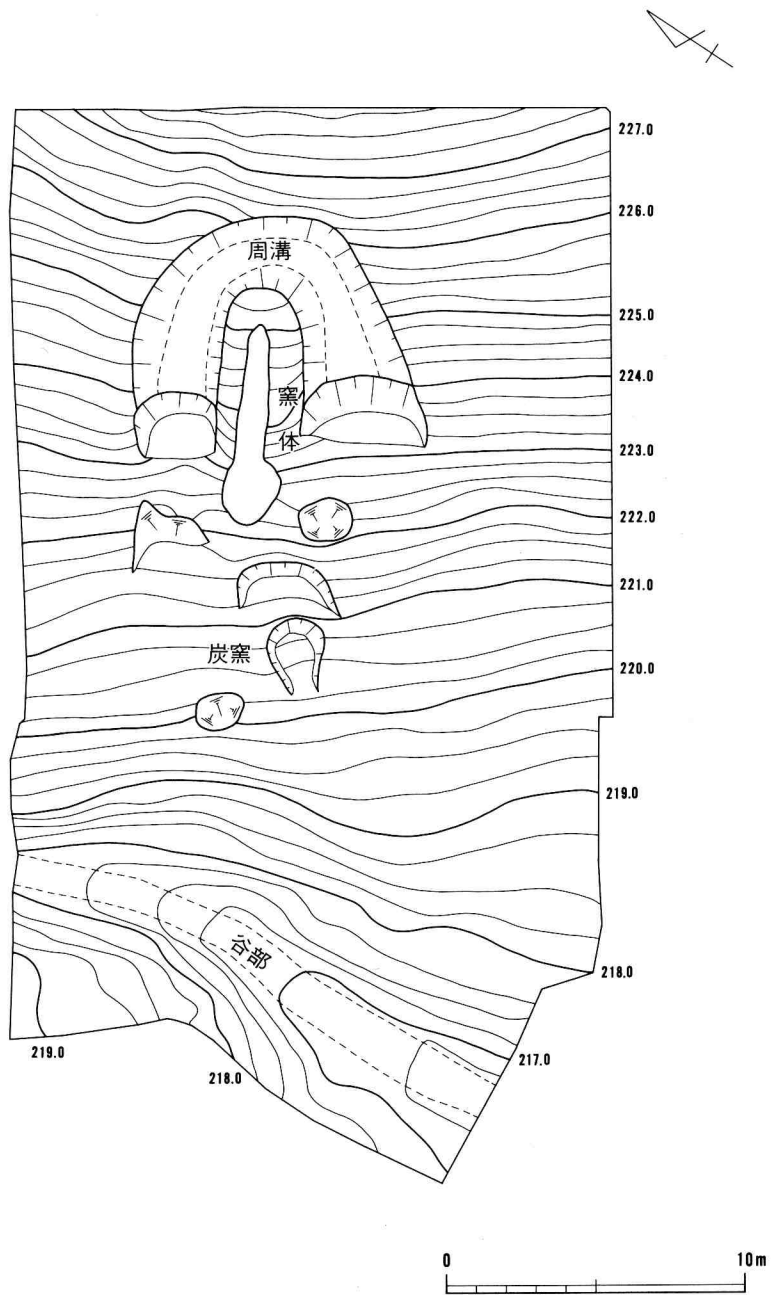


插图195 西谷池1号窯跡 調査後地形測量図

## 第2節 西谷池1号窯跡の調査

### 1. 遺構の調査 (図版133~140, 挿図194~200)

#### 1) 概要

西谷池1号窯跡は、天井部は欠損しているものの、焚口部から煙道部にいたるまで、比較的良好的な状況で残っていた。半地下式の須恵器窯で、地山を掘り込んだ壁の立ち上がり部分が残っている。灰原も完全な形で残っており、廃棄された須恵器片は窯体から約15m下の谷部まで広がっていた。

床面は、補修を受けている箇所もあり、部分的に2枚を確認した。壁面では部分的に2回の補修を受けている。

窯体の周囲には溝がめぐり、その末端では、地山を削りだしたテラス状の遺構が左右1箇所ずつ設けられている。主軸の方位はN120°Eである。

#### 2) 窯体

##### 規模

焚口部まで含めた窯体の全長は、水平長で6.7m・斜面長で8.4mである。焼成部と燃焼部の境界は明確でない。

##### 焚口部

焚口部は幅1.8m、長さは2.2mで、床面の傾斜角は約20°である。周囲は馬蹄形に壁で囲まれており、炭の堆積が見られた。

燃焼部から焚口部にかけて、最終操業時に掻き出したままのような状態で、完形品に近い須恵器の杯・椀類が残されていた。

##### 焼成部・燃焼部

燃焼部及び焼成部は、延長4.5m、最大幅1.0mである。燃焼部と焼成部は構造上は明確には区別されていない。床面の平均傾斜角度は28°42'21"を測る。還元焼成のため灰色あるいは淡青灰色に固く焼けた床面が部分的に2枚認められる。また燃焼部から焚口部にかけての左側(焚口から上方を見た場合)の壁では壁が3枚認められる。焚口から焼成部へ約2/3の場所では床面に段が1段認められる。

この段の上下では、土器片がうつ伏せの状態出土している。ほとんどの土器が床面に接しており、床面に塗り込められた状態のものも出土している。焚口部での土器の出土状態とは異なっており、焼き台として使用されたものと思われる。

##### 煙道部

焼成部の上端は窯壁が遺存せず、上方への立ち上がりは認められない。還元色は見られず、赤色の焼土が見られるのみであるが、この上端から約50cm上方の斜面で、長軸40cm・短軸35cm

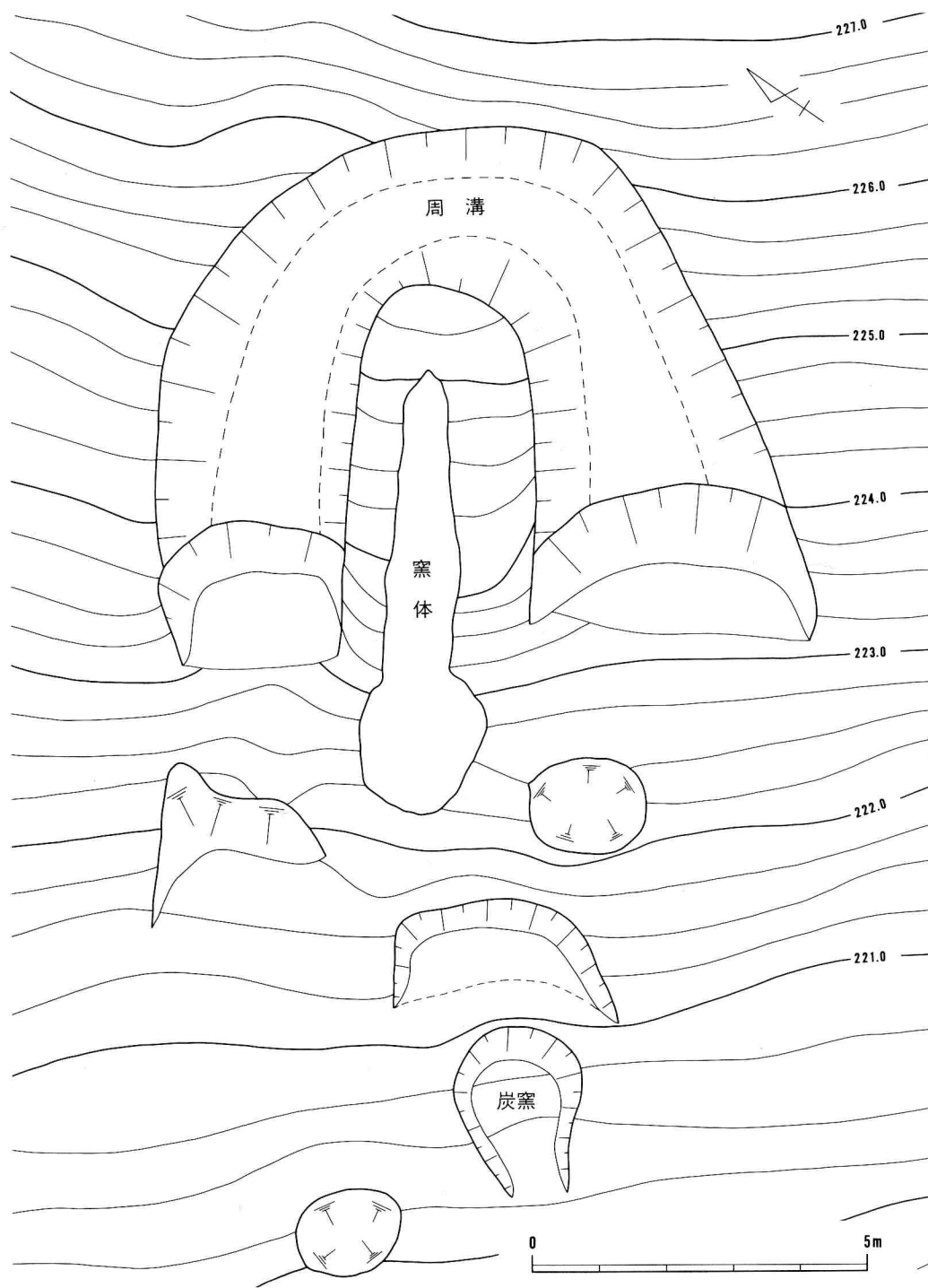


插图196 西谷池1号窠迹 遺構全体図

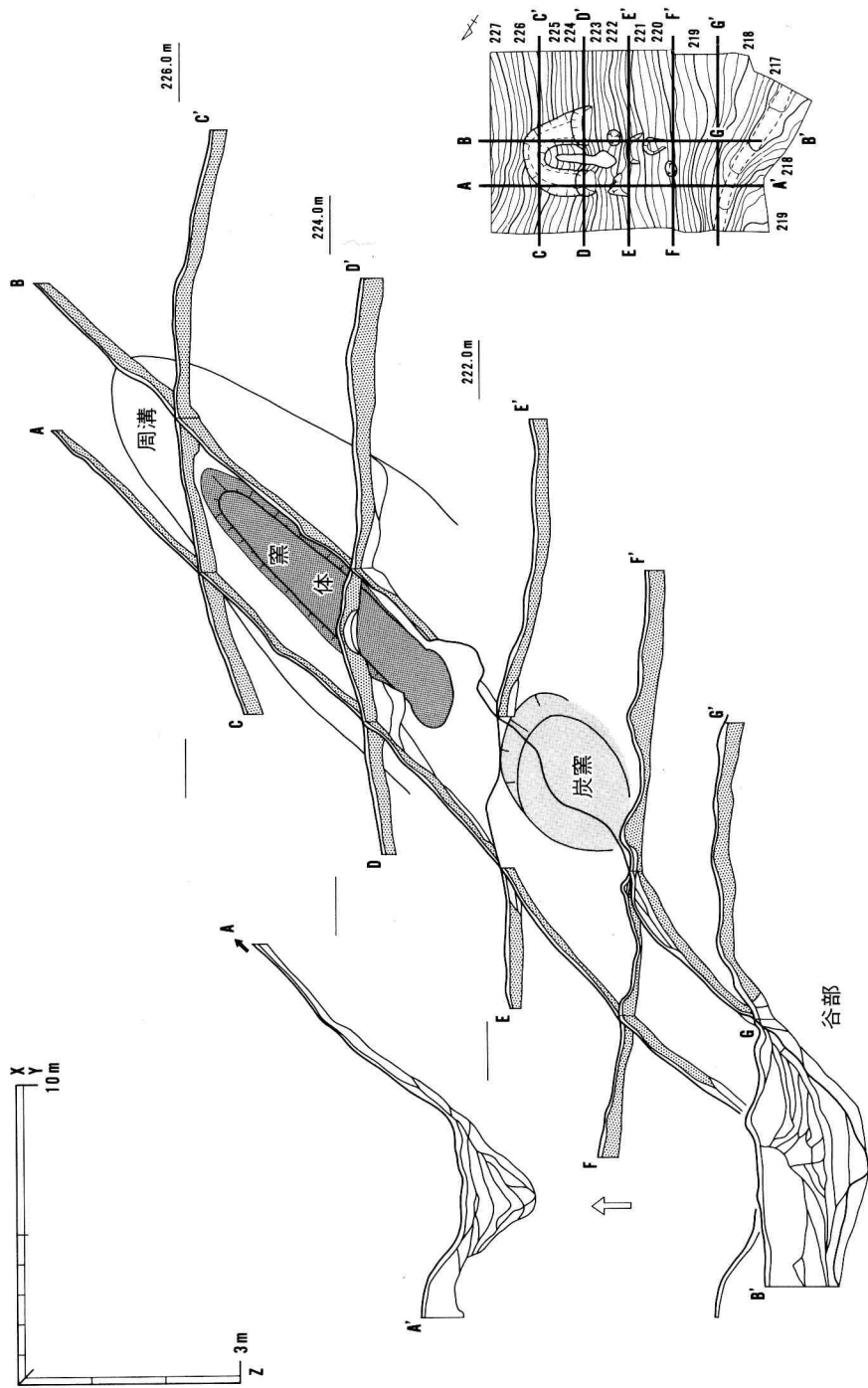
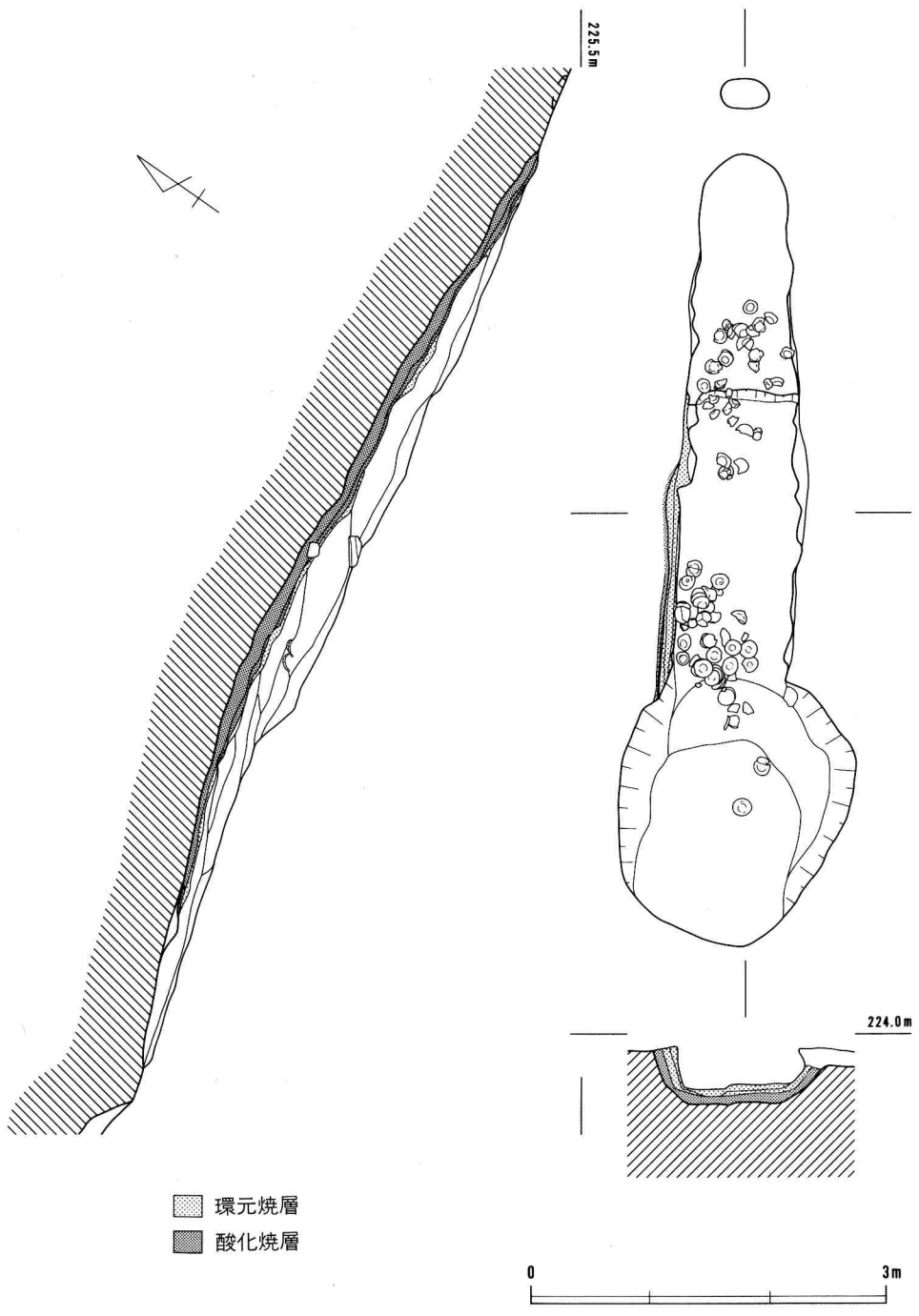


插图197 西谷池1号炭迹 炭体·周溝·灰原土层堆积状况图



挿図198 西谷池1号窯跡 窯体遺構図

の長円形の焼土を検出した。この焼土付近に煙道が存在したと考えられる。

### 3) 周溝

窯体の左右及び上方を取り巻くように溝が掘られている。周溝内の埋土は炭を含まない黄褐色の土であり、若干の遺物が出土している。左右の周溝の端は、テラス状に掘り窪められた平坦面で終わっている。これらの平坦面は焚口よりも1m程度上方に位置している。相野窯跡群の他の窯跡でも、周溝や平坦面が認められており、西谷池1号窯跡の平坦面も他と同様に薪置場などの作業空間として考えることができる。

### 4) 灰原

表土の掘削後、焚口分から扇形に広がる灰原を確認した。その末端は炭窯の下端にまで達している。灰層は黒色で炭を含んでいる。

### 5) 谷部

西谷池1号窯跡北側及び東側には小さな谷があり、調査区の端(G~Iライン)付近で合流して1つの谷になっている。溜池工事に伴って調査を実施した部分では、挿図207のA・Bライン下端で見られるように、元の谷地形に自然堆積がなされたことが分かる。この谷の埋土の中からも遺物が出土している。

### 6) 炭窯 (図版138, 挿図201)

窯体の斜面下方で炭窯を1基検出した。調査前の等高線図(挿図204)をみても分かるように、上下2つの攪乱孔の間の等高線が乱れており、表土掘削をする以前から斜面を「コ」の字形に掘り込んだ遺構が存在することが想定できた。

炭窯は、旧地表面を2.2m×1.6mに渡って、斜面の下側が開いた馬蹄形に、底が水平になるように掘り込んでいる。窯の内面には、石をブロック状に積み重ね壁とし、旧地表面以上は土を盛りながら壁を構築している。盛土は、等高線に沿った方向に長く、斜面の方向に短い楕円形に盛り上げている。長軸方向約4.4m・短軸方向約3.3mを測る。

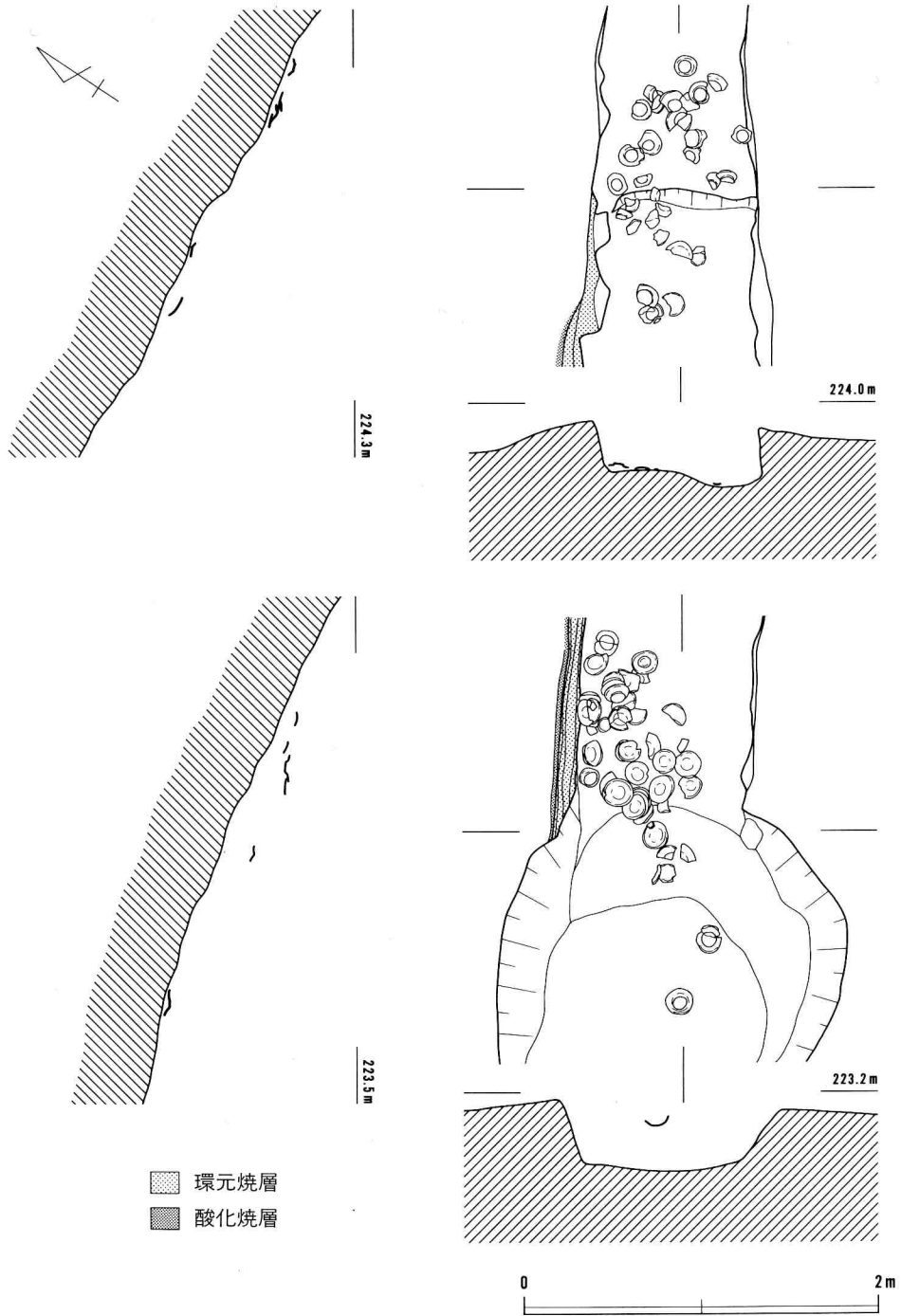
窯体の斜面上方には煙突がつくられている。焼成部と煙突の境の壁面では、他の壁面と比べて横に長い石を使用している。

窯体の上方は、3.6m×1.9mの範囲で斜面を「コ」の字形に掘り込んでいる。挿図211の縦断面図で見られるように、この掘り込み面と窯体の盛土の間が浅い溝状になっており、1号窯跡で見られる周溝と同じ機能を持っていると考えられる。

焚口部は窯体の床面よりも半円形状に一段深く掘り込まれている。

窯体内の埋土は、5層に分類でき、最下層に炭層が認められる。またこの炭窯は、1号窯の灰層(2次堆積層)を切り込んで築かれている(挿図201第5層)ので、盛土内からも1号窯で焼成された土器片が出土している。





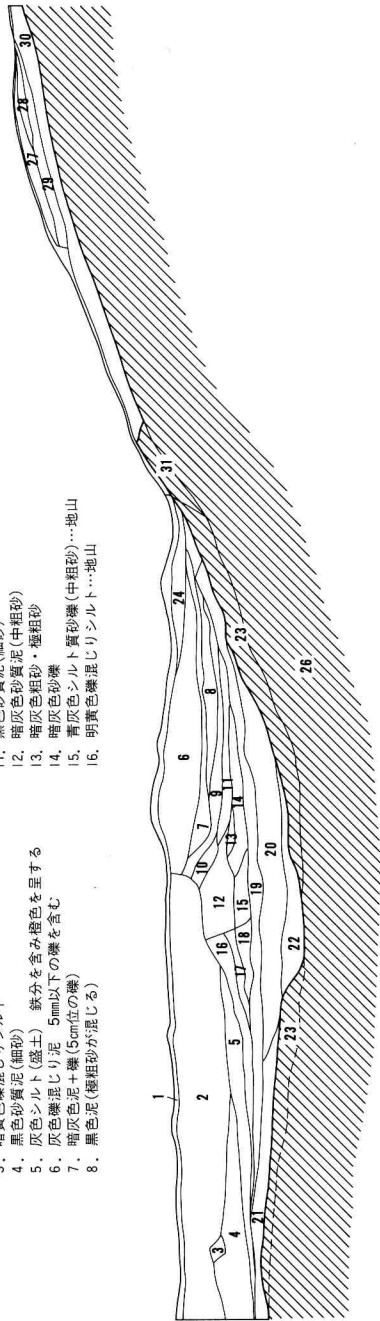
挿図199 西谷池1号窯跡 遺物の出土状況

[Aライン]

1. 腐食土
2. 明黄色シルト(盛土)
3. 暗黄色礫混じりシルト
4. 黒色砂質泥(細砂)
5. 灰色シルト(盛土) 鉄分を含み橙色を呈する
6. 灰色礫混じり泥 5mm以下の礫を含む
7. 暗灰色泥+礫(5cm位の礫)
8. 黒色泥(細粗砂が混じる)

9. 暗灰色砂質泥(中粗砂)
10. 暗灰色砂質泥(中粗砂) 9層よりやや黒い
11. 黒色砂質泥(細砂)
12. 暗灰色砂質泥(中粗砂)
13. 暗灰色粗砂・極粗砂
14. 暗灰色砂礫
15. 青灰色シルト質砂礫(中粗砂)…地山
16. 明黄色礫混じりシルト…地山

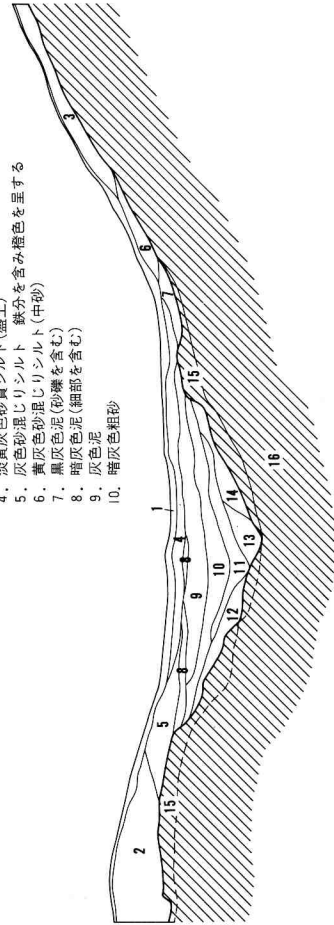
220.5 m



[Bライン]

1. 腐食土
2. 明黄色シルト(盛土)
3. 23層ブロック
4. 淡黄灰色砂質シルト(盛土) 鉄分を含み橙色を呈する
5. 灰色砂混じりシルト(中砂)
6. 黄灰色砂混じりシルト(中砂)
7. 黒灰色泥(砂礫を含む)
8. 暗灰色泥(細部を含む)
9. 灰色泥
10. 暗灰色粗砂

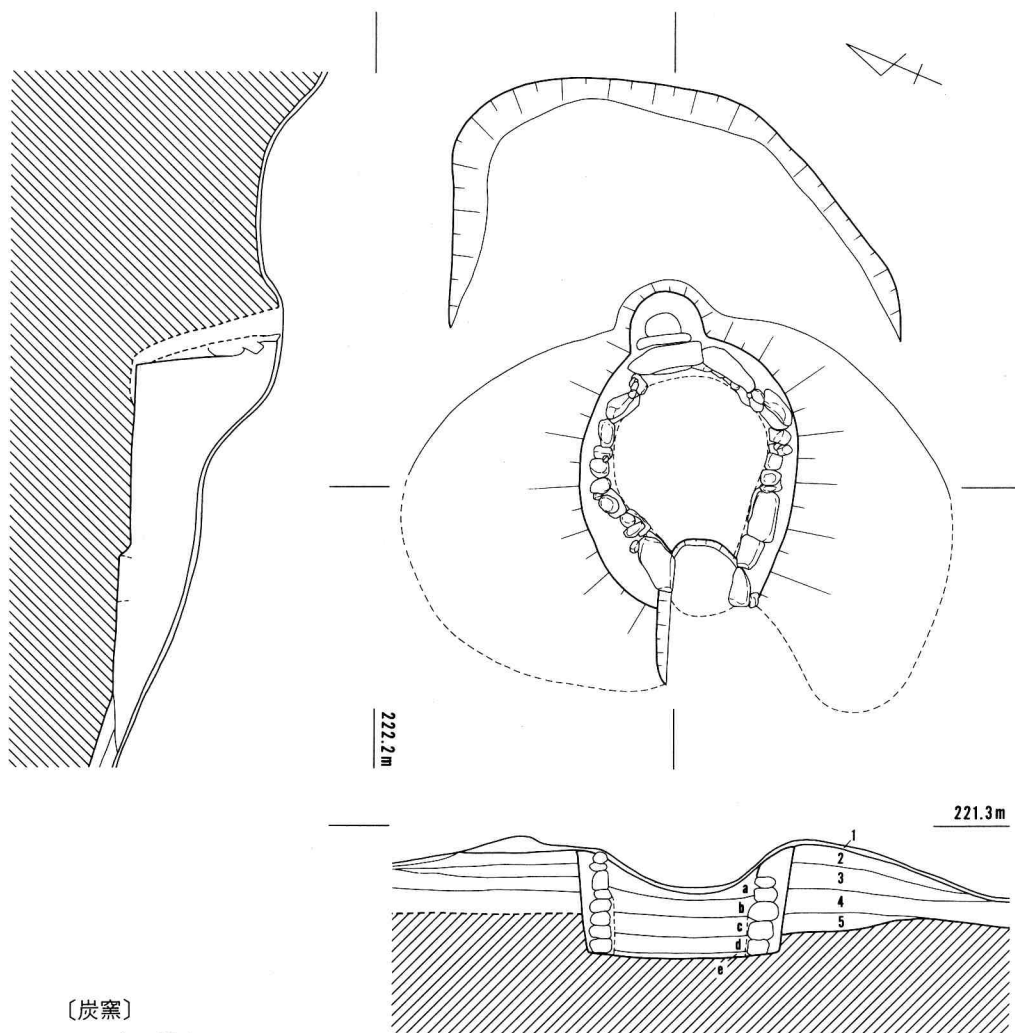
220.5 m



11. 暗灰色泥
12. 暗灰色中砂
13. 灰色粗砂・極粗砂
14. 暗灰色泥(11層より黒い)
15. 暗灰色粗砂(12層より粗い)
16. 灰色砂質シルト(細部)
17. 明灰色砂質シルト(中細砂)
18. 灰色砂質シルト(中細砂)
19. 黒灰色泥
20. 黒灰色泥+砂礫
21. 暗灰色泥(粗砂礫粗砂を含む)
22. 黒色泥
23. 青灰色泥+砂礫(地山)
24. 暗灰色砂 1cm程の礫を含む
25. 暗灰色粗砂(地山)
26. 暗黄灰色礫混じりシルト(2~3mmの礫)
27. 暗黄灰色礫混じりシルト 炭が混じる
28. 明黄灰色礫混じりシルト
29. 明黄灰色礫混じりシルト
30. 暗黄色シルト
31. 灰色礫混じりシルト(粗砂)



挿図200 西谷池1号築跡 谷部土層堆積状況図



〔炭窯〕

- 1. 表土
- 2. 黄色土層(盛土)
- 3. 黒灰色土層(盛土)
- 4. 暗黄色シルト
- 5. 1号窯灰原層
- a. 黒灰色層
- b. 暗黄色層
- c. 赤褐色粗砂
- d. 黄褐色粗砂
- e. 炭層

挿図201 西谷池1号窯跡 炭窯遺構図

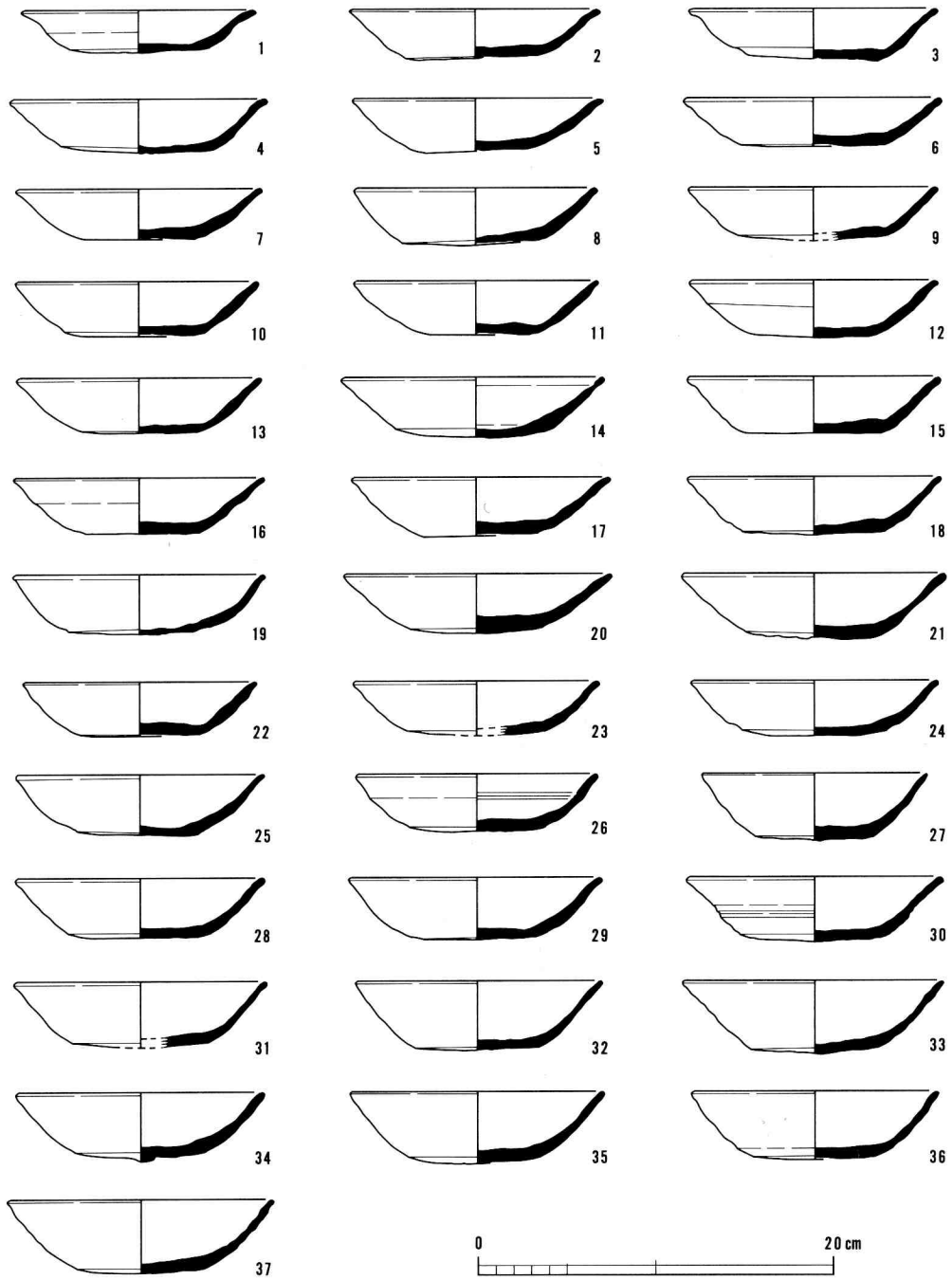


插图202 西谷池1号窠跡 窠体内出土須惠器(1)

## 2. 遺物

### 1) 概要 (図版141~155, 挿図202~215)

西谷池1号窯跡は、谷部にまで及ぶ灰原がほぼ完全な形で残っていた。整理前の遺物数量はコンテナ約40箱である。多くの遺物は灰原から出土している。

器種としては、杯・椀・耳皿・皿・壺・甕・鉢・硯がある。個体数としては、杯Aが最も多く、ついで椀Bが多い。底部の切り離しは全てヘラで行っており、糸切りしたものはない。

実測に際しては、他の窯と同様に原則として残存率1/4以上で歪みの少ないものを対象としている。

焚口部・焼成部・燃焼部の区別があまりはっきりしていないので、これらを一括して窯体内出土遺物として扱った。また窯体内の資料と接合した破片についても、窯体内出土遺物として扱っている。土師器は出土していない。

### 2) 窯体内出土遺物

窯体内から出土した器種には、杯A・杯B・椀A・椀B・椀C・鉢・壺B・甕がある。焚口部付近から燃焼部にかけて、作業時に掻き出されたと考えられる完形品に近い土器群があり、また焼成部上方には、焼台に使用されたとされる土器群がある。この両者については、出土状況を記録し、個別番号を付けて取り上げている。その他の窯体内(特に埋土)から出土した遺物については、窯体を4分割し、左上方を1区・右上方を2区・左下方を3区・右下方を4区として取り上げを行った。

杯A (挿図202 1~37, 挿図203 38~69)

窯体内から出土した遺物のうち最も点数が多い。いずれも底部はヘラ切りされており、その後調整しているものと未調整のものがある。

1~37は、底部から体部への立ち上がりやや丸みを帯びタイプである。その中でも1~18は口径に比べると器高が低い。

一方38~61は口縁部が比較的直線的に広がるタイプである。この中も2タイプに分類され、38~52のように底部から体部にかけてやや丸みを持っているものと、53~61のようにはっきりと稜を持って区別できるものがある。

62~65は焚口部の灰層から出土したもので、各タイプのものが混じっている。

66~69は底部内面にヘラ記号が施されているもので、「×」と「一」とがある。いずれも床面から浮いて出土している。

杯B (挿図203 70)

底部のみが遺存している。底部外面に爪形痕がある。高台を底部に接合する際のものであろう。杯Bとしているが、灰原でもあきらかに杯Bとなるものは出土しておらず、この資料が椀Aである可能性も残っている。

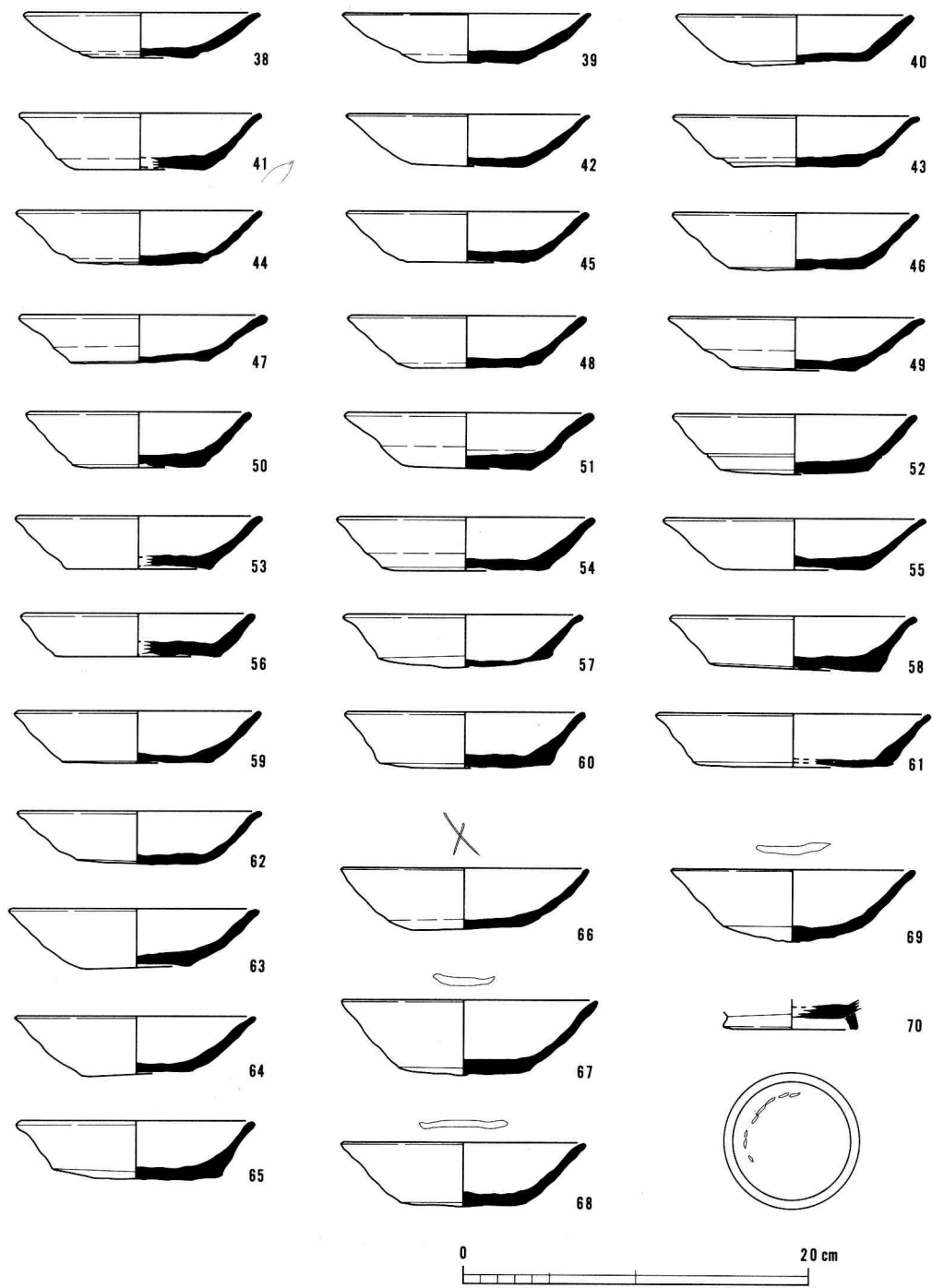


插图203 西谷池1号窠跡 窠体内出土須恵器(2)

椀A (挿図204 71~73)

窯体内からは3点が出土している。71は杯Aに輪高台を付けたような形をしており、口径に対して高さが低い。72・73はともに底部から体部にかけて丸みを帯びている。

椀B (挿図204 74~91)

平高台をもつ一群である。74・75は口径と底部径の比が他のものよりも低く、高さの低いタイプである。76~82は、底部から口縁にかけて直線的で、身込み部が窪められているタイプである。83~91は前者と比べると、底部から口縁部にかけてやや内湾しており、底部の厚さが薄いのが特徴である。

椀C (挿図204 92~94)

この3点は椀Aの体部に沈線をめぐらすタイプである。92は2条、93・94は1条の沈線がめぐる。沈線以外は椀Aと同じ形をしているが、椀Aと比べて一回り大型である。92は焚口部分に掻き出された土器群から、93・94は焚口の灰層中から出土している。

輪高台を持つのは椀Aと椀Cだけであるが、両者をあわせても6点にしかならず、窯体内出土土器の中では少数である。

壺B (挿図205 96~99)

いずれも土器のごく一部が窯体内あるいは焚口内の灰層から出土しているもので、破片の多くは窯体から下の灰層から出土している。96・97は1条の凸帯を持ち、97は1条の沈線をめぐらすB4タイプである。両者とも胴部外面はヘラ削りが施されている。

98・99は2条の凸帯を持ち、その凸帯をつなぐように耳を貼り付けたタイプである。両者とも胴部外面裾にヘラ削りが施されている。また98の内面には、胴部裾で叩きの痕跡が認められる。

壺C (挿図206 100)

ごく小型の短頸壺で、焚口部に掻き出された土器群中から出土しており、完形品である。底部外面はヘラ切り未調整で、内面はナデられているが指痕が残る。

片口壺 (挿図205 95)

短頸壺の口縁の一部を片口にした壺である。体部は内外面とも回転ナデを施し、底部はナデ調整をしている。土器片は、掻き出された土器群・窯体東側のテラス部分および表土中から出土している。

甕 (挿図206 101)

一部の破片が窯体内から出土している他は、谷部の堆積土中から出土している。口縁部外面・体部外面とも平行叩き目が見られる。口縁部外面ではその上から回転ナデを施している。内面には叩き目が見られない。

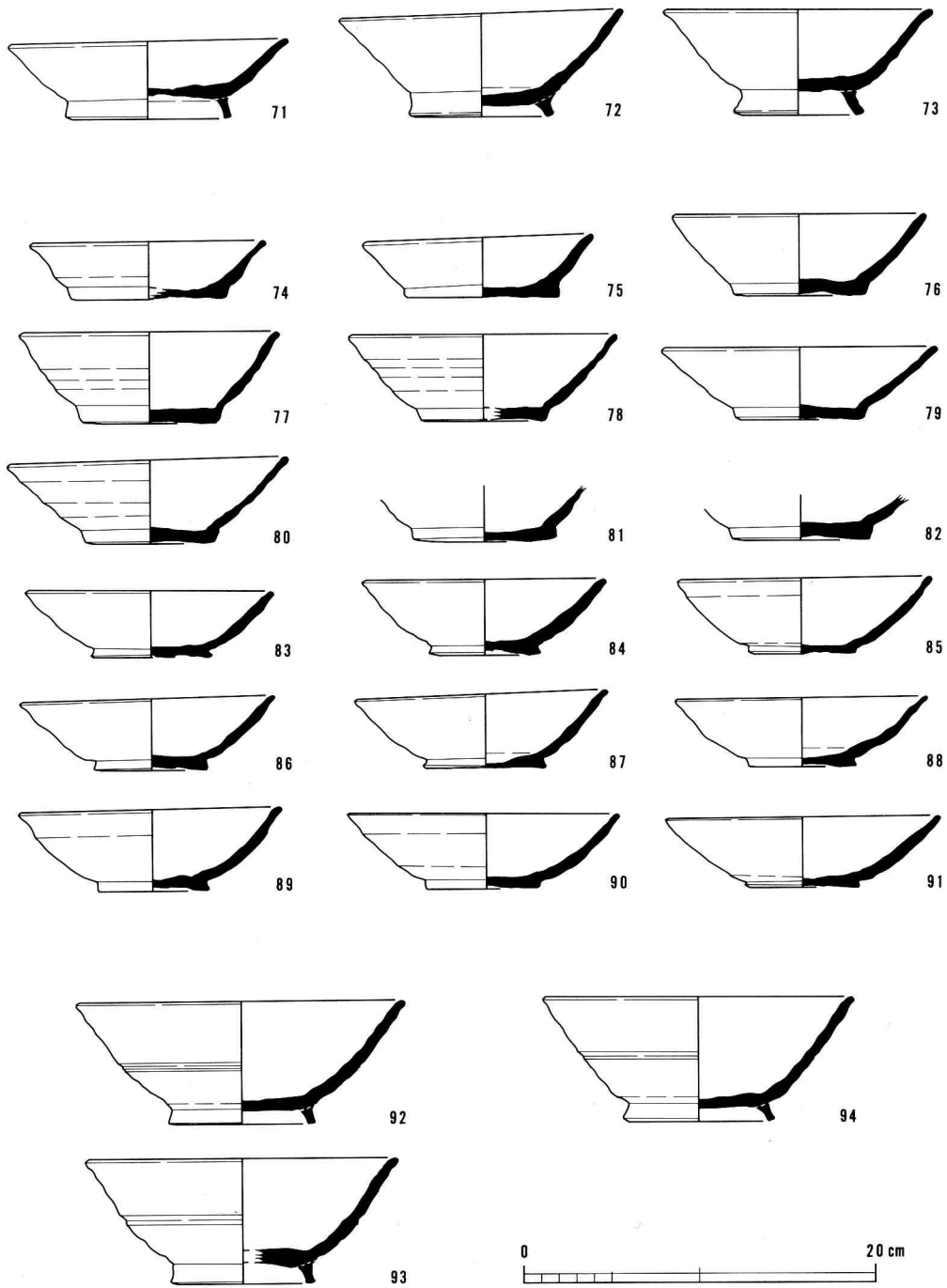


插图204 西谷池1号窯跡 窯体内出土須恵器(3)



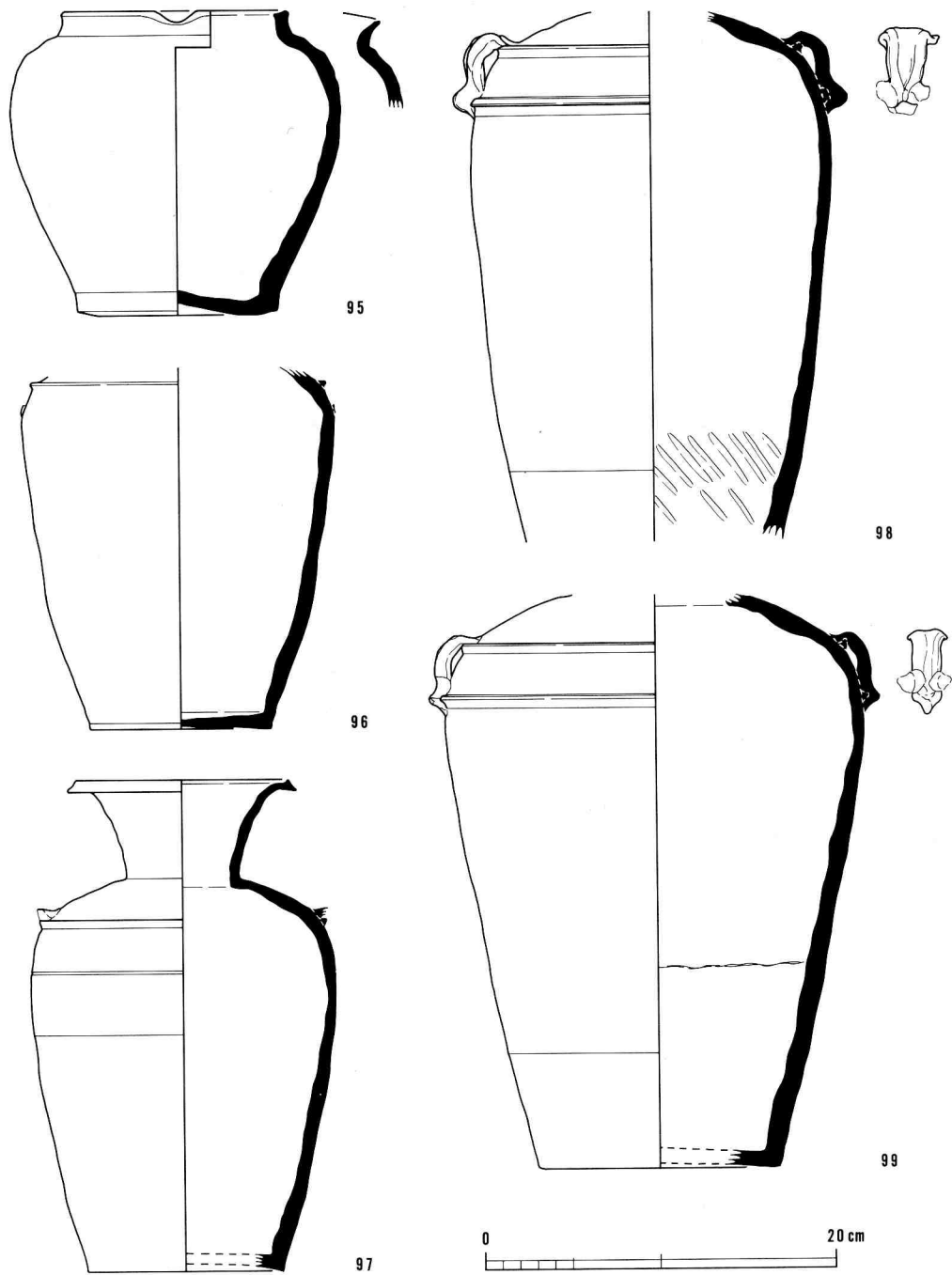
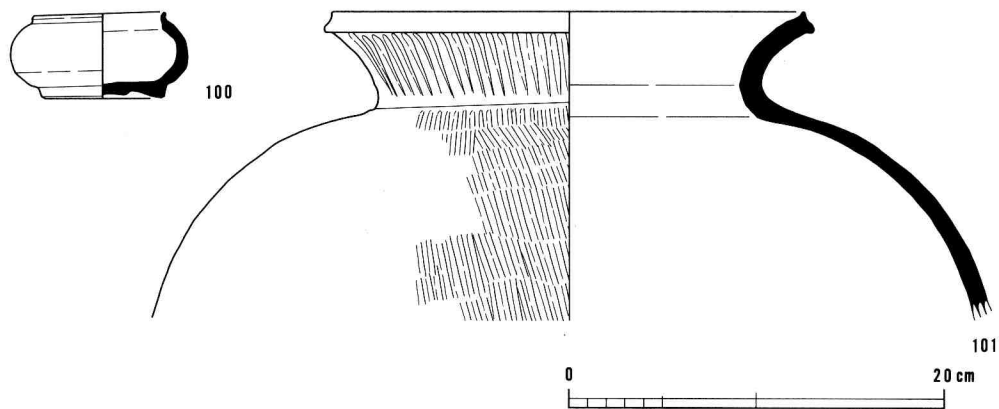


插图205 西谷池1号窯跡 窯体内出土須恵器(4)



挿図206 西谷池1号窯跡 窯体内出土須恵器(5)

### 3) 灰原出土遺物

灰原から出土した器種には、杯A・椀A・椀B・椀C・皿・壺B・鉢・甕がある。出土数は窯体内と同じく他の器種と比べて杯Aと椀Bが多いが、灰原からは杯Aよりも椀Bの方が多く出土している。

#### 杯A (挿図207 102~125)

窯体内出土の杯Aと同じように色々なタイプがある。

115~122は、底部から体部への立ち上がりがやや丸みを帯びタイプである。122は特に器高に対して口径・底径が大きく、底部と体部の境に段をもつ。

102~114は口縁部が比較的直線的に広がるタイプである。この中も2タイプに分類され、102~107のように、底部から体部にかけてやや丸みを持っているものと、108~114のようにはっきりと稜を持って区別できるものがある。

123・125は底部内面に「×」のヘラ記号が施されている。

124は窯体下方の炭窯の向かって左側の灰層中から出土した。口縁部の残存率2/12、全体の約1/3程度の破片である。底部はヘラ切りをしており、底部から体部にかけては明瞭な稜が見られる。内面・外面とも線刻による絵が描かれている。内面は蓮弁が描かれており、残存しているのは2弁であるが、元々は6枚の蓮弁が描かれていたものと思われる。体部外面には、人物像1体が描かれている。西谷池1号窯で出土した遺物のうち、このような絵画が描かれていたのはこの1点だけである。

#### 椀A (挿図207 126~130)

底部は、127・129のようにヘラ切りの後にナデ調整をしているものと、126・128・130のように未調整のものがある。130は体部から口縁にかけて外に大きく反っており、他の4点とはタイプが異なる。

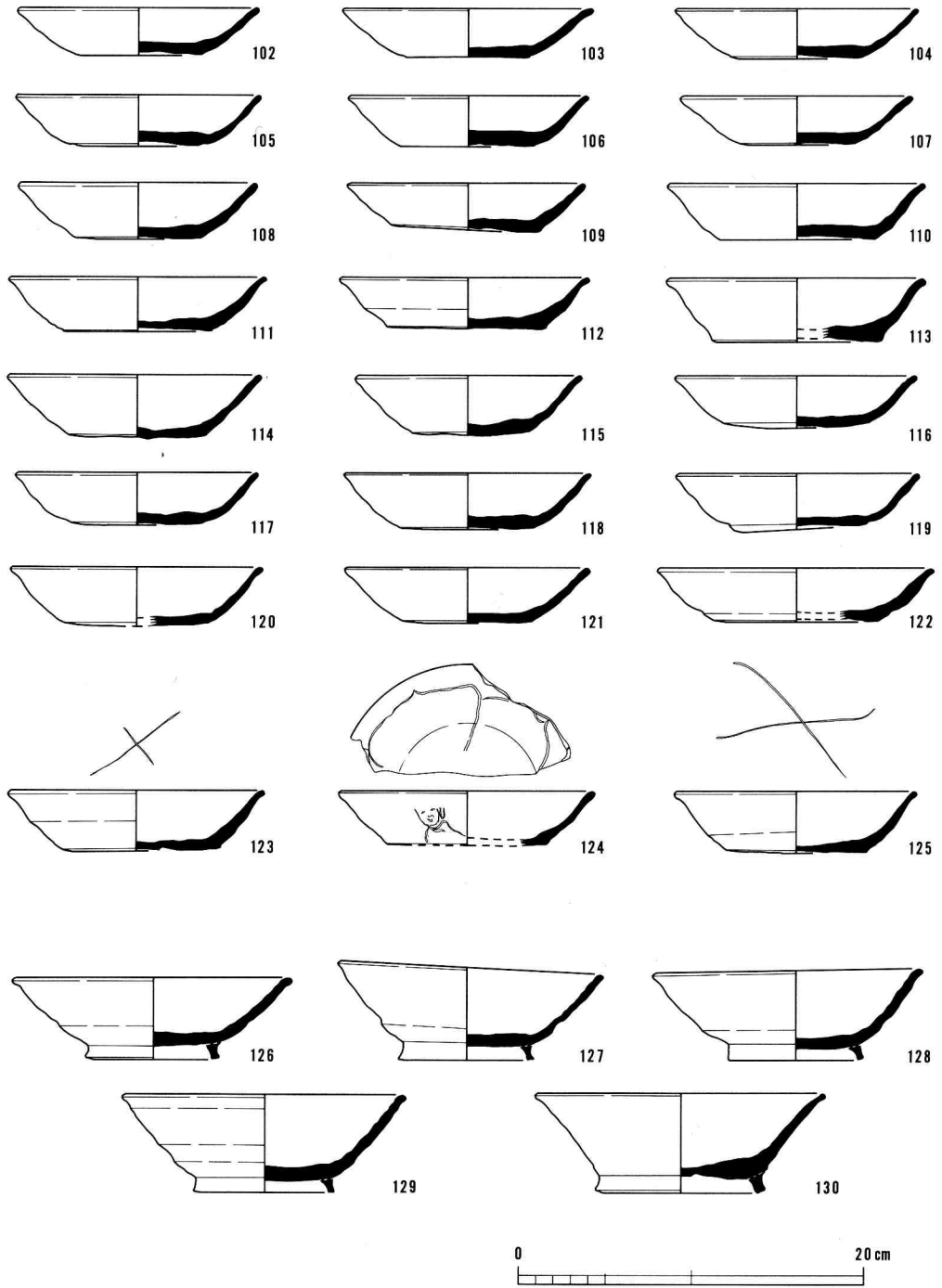


插图207 西谷池1号窟跡 灰原出土須惠器(1)

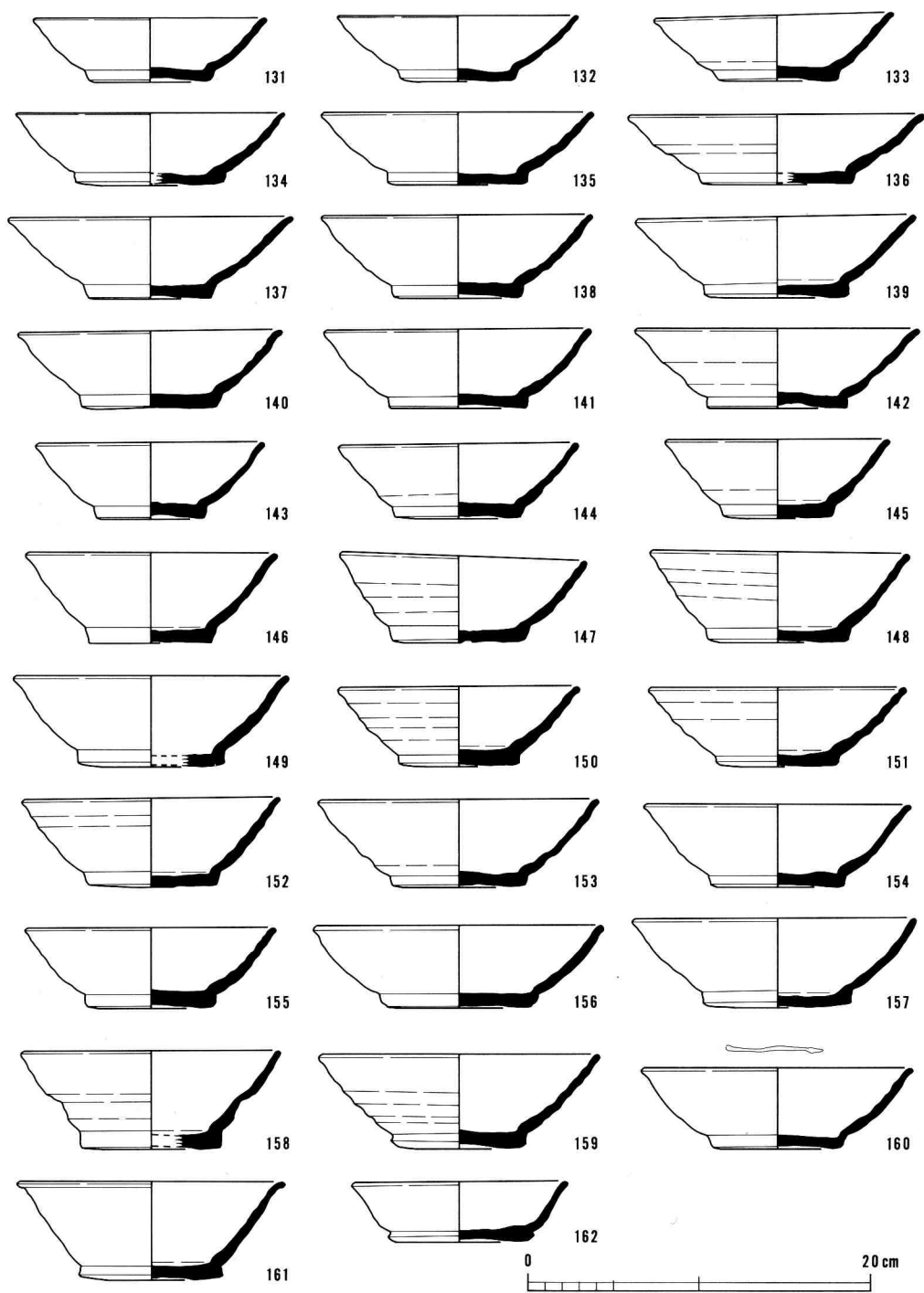
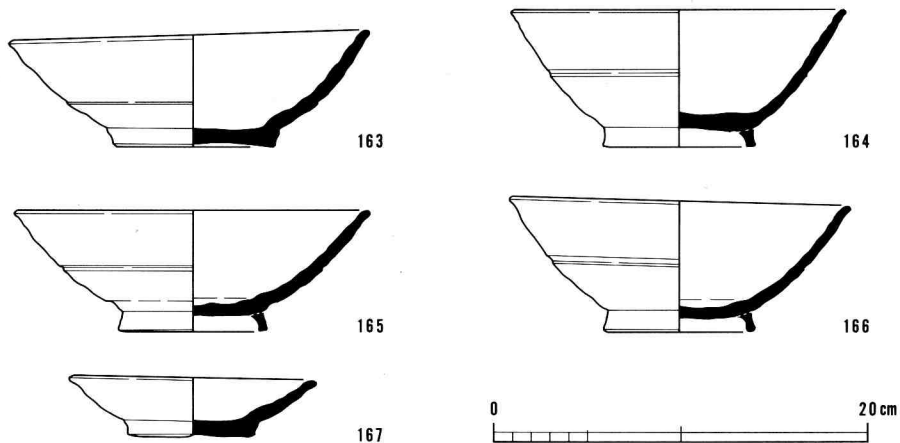


插图208 西谷池1号窠跡 灰原出土須恵器(2)



挿図209 西谷池1号窯跡 灰原出土須恵器(3)

碗B (挿図208 131~162)

ほとんどが身込み部分が一段窪むタイプで、窯体内出土の碗B (83~91) のように身込みに窪みのないタイプは非常に少なくなっている。体部から口縁にかけては、直線的に広がるものや、やや内湾しているものなど様々である。158は体部中央での屈曲が著しく、他の碗とは外形上異なっている。底部は6/12、口縁部は2/12の残存率である。160・161は、底部内面に「一」のヘラ記号がある。161は口縁端部が外に大きく反っているのが特徴である。162は他の碗Bとは異なって、杯Aに平高台を貼り付けた形をしている。底部はヘラ切りの後ナデを施し、内面底部もナデ調整が行われている。

碗C (挿図209 163~166)

4点とも1条の沈線を持つ碗である。163は碗Bと同じ平高台で、身込み部分が一段窪められている。底部外面はヘラ切り後ナデ調整が行われ、内面もナデ調整が行われている。沈線も他の3点と比べると低い位置にある。

164~166は体部が丸く内湾するいわゆる碗タイプをしている。これら4点は窯体内出土の碗Cと同様に、碗A・碗Bと比べて口径も大きく器高も高い大型品である。

皿 (挿図209 167)

皿の出土は少なく、灰原出土のもので図化できたのはこの1点のみである。口径と底径に対して器高が低いため皿とした。碗Bのように平高台で、身込み部分がやや窪められている。口縁は直線的に外方に延び、口縁端部はやや外反している。底部外面はヘラ切りで調整はされていない。

壺 (挿図210 168~172)

169は肩部に1条の凸帯を、その下に1条の沈線を持つ壺である。胴部の残りが悪いので耳が

付けられていたのかどうかは不明であるが、西谷池1号窯出土の他の壺の形態からみて、169も壺B3と類推され、凸帯と沈線にまたがる耳が取り付けられていたと思われる。170は壺の底部であるが、残存率が1/12と悪く歪みも大きい。外面の下半分は平行叩き目を施した後に回転ヘラ削りを行っている。それ以外の部分は回転ナデ調整が行われている。

171・172は耳が付くことがはっきりしている資料で、両者とも2条の凸帯を肩部と胴部にめぐらしている。耳はこの2条の凸帯を繋ぐように、それぞれ2箇所につけられていた。

171の胴部は、底部にむけてあまりすばまらない。一方172の胴部は肩部から底部に向けて補足細くなっており、残存している下端部ではヘラ削りの後回転ナデを施している。底部は欠損しているが、170のような底部になると推定される。壺B4タイプで大型の製品である。

鉢（挿図210 173・174）

173は口縁部しか残存していないが、その形態から174と同じタイプのもものと推定される。

174は古墳時代の杯蓋を逆にしたような形態をしている。底部は平底で、ヘラ切り未調整である。底部から口縁部にかけては、やや内湾しながら上方にのび、口縁端部は逆に外方に広がるようにつまみあげられている。全体としては、回転ナデが施されているが、底部内面はナデ調整である。鉢は非常に個体数が少なく、図化できたのはこの2点だけである。

甕（挿図210 175）

小型の甕で、土師器の甕に近い球形の胴部を持つ。底部は欠損している。胴部外面は平行叩き目の上に縦方向にヘラ状工具による線が幾筋か見られる。内面は叩きの後、底部から口縁部方向にナデ調整をしているが、当て具の痕が残っている。口縁は大きく外反し、口縁端部は上方につまみ上げられている。この器種も出土数量は非常に少ない。

#### 4) 周溝・平坦面出土遺物

窯体をめぐる周溝及び周溝の末端に造り出された作業場と思われる平坦面から出土した遺物で、器種としては椀A・椀B・椀C・甕がある。出土数量は少なく、杯類で図化できるものはなかった。

椀A（挿図211 176）

窯体の向かって右側の周溝から出土している。口縁端部はやや外方に広がる。完形品に近いが口縁部の歪みが大きい。

椀B（挿図211 177～184）

8点とも平高台で、身込み部分を1段窪ませるタイプである。177～181は椀Aと同じく右側の周溝から出土している。182・183は平坦面からの出土である。

椀C（挿図211 185）

椀Bの身込み部分を1段窪ませるタイプの体部中央に1条の沈線がめぐるもので、完形品である。底部はヘラ切りの後ナデ調整をしている。

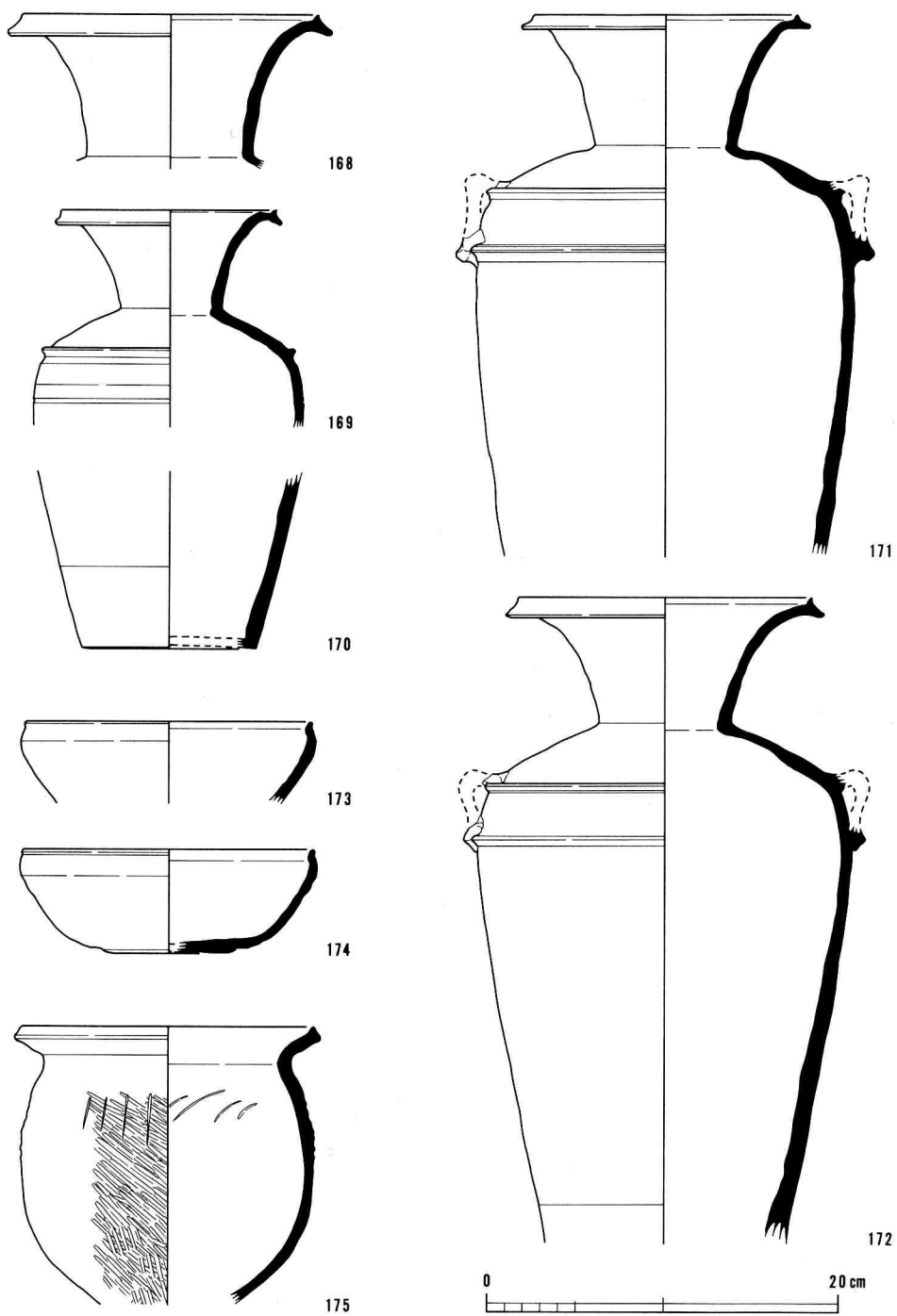


插图210 西谷池1号窠跡 灰原出土須恵器(4)

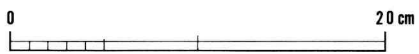
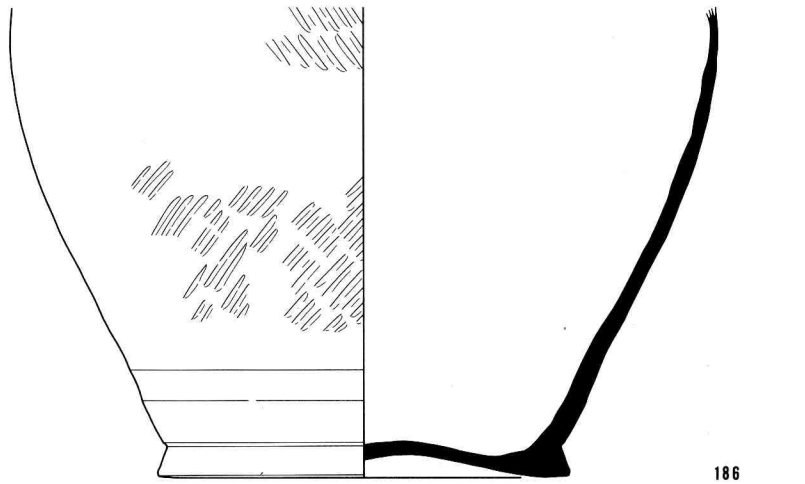
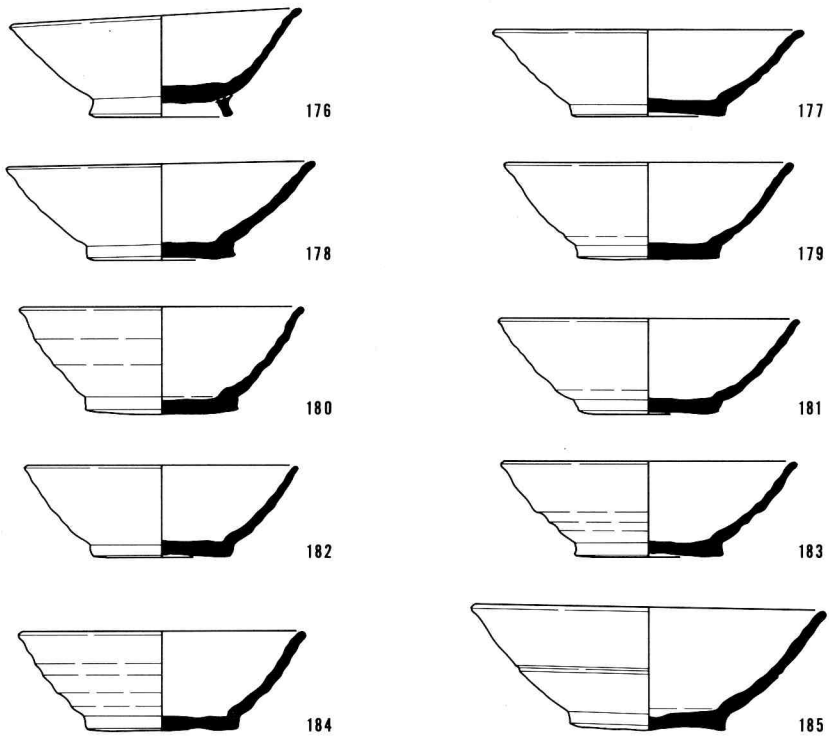


插图211 西谷池1号窠迹 周溝・平坦面出土須恵器



甕 (挿図211 186)

甕の胴部下半分から底部の破片で、大型の甕のものである。胴部外面は平行叩き目が見られるが、上部と下部とはその方向が逆になる。叩き目の上は回転ナデ調整を施している。内面外面下部の叩き目に対応する部分から底部にかけてはナデ調整で、それ以上は回転ナデ調整を施している。底部は歪んでいるが平底である。

5) 谷部出土遺物

窯体下方の谷部分から出土した遺物で、器種としては杯A・椀A・椀B・椀C・皿・耳皿・壺・甕がある。窯体内や焚口部の遺物と比較すると、杯・椀類に比べて壺や甕の破片が多く出土している。

杯A (挿図212 187~194)

ここでも色々なタイプの杯Aが出土しているが、191以外は口径に対して高さの低い資料である。194は他の資料と比べると底部からの立ち上がりの角度が急で、口縁端部もそのまま丸く終わっている。底部から体部の一部にかけて回転ヘラ削りが施されている。古い杯の様相を示している。

椀A (挿図212 195)

体部に強い回転ナデの跡を残している。口縁端部はやや外方向に広がっており、底部はヘラ切りである。

椀B (挿図212 196~204)

身込み部分が一段窪められたタイプが多い。196~201は形の大小はあるが、底部から口縁部にかけてやや内湾しているもので、202~204は底部から直線状あるいはやや外反しながら口縁部にいたる資料である。

203・204は高台部分の側面が外方に開き、三角の輪高台を貼り付けたような形状をしている。

椀C (挿図212 205~210)

205~207のような椀Aのタイプと208・210のような椀Bのタイプとがある。いずれも1条の沈線をめぐらす。沈線の位置は206のように体部中央にあるもの、205・208・210のようにやや下方にあるものが多く、207のように口縁に近い部分に存在するのはあまりない。また椀Bの沈線は、体部下方に位置するものが多い。

207は底部外面に逆「レ」形のヘラ記号がある。西谷池1号窯ではこの印および底部外面のヘラ記号は他に例がない。

耳皿 (挿図212 211)

西谷池1号窯跡で出土した唯一の耳皿である。図上左の耳部分が一部欠損しているため、断面図は右の耳部分を反転復元している。底部は厚くヘラ切りされている。

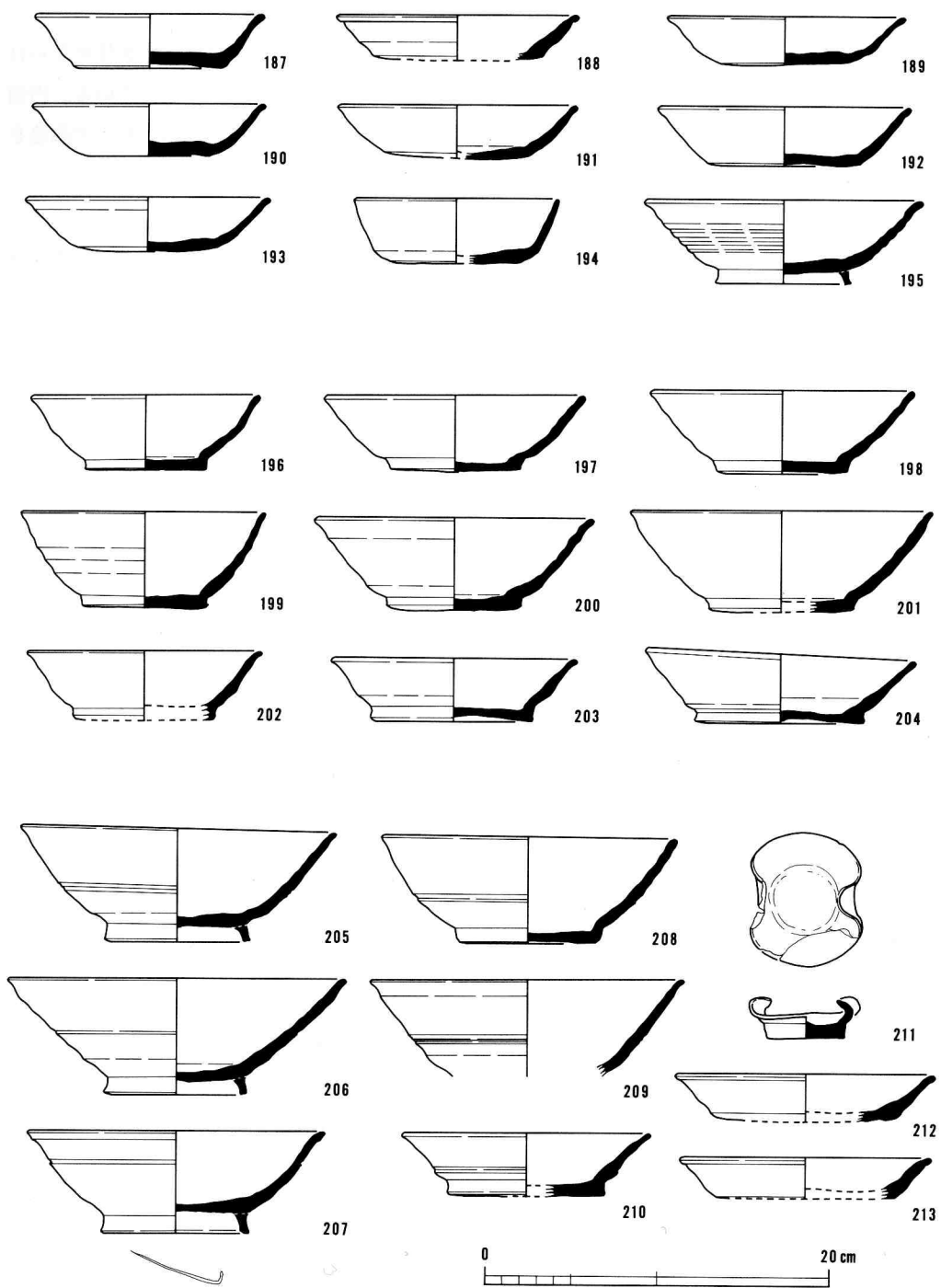


插图212 西谷池1号窯跡 谷部出土須恵器(1)

皿 (挿図212 212・213)

底部から口縁部にかけて大きく外反し、口縁端部はさらに外に広がっている。また口径に対して器高が低いため皿に分類したが、杯Aにも近い形態をしている。ただ両者とも残存率が3/12程度と悪く、実測図は反転復元しているが、誤差は大きいと思われる。

壺B (挿図213 214~218)

216と217は、肩部に1条の凸帯とその下に1条の沈線を持つ壺B3タイプである。耳は凸帯のすぐ上から沈線の上部までをまたぐように貼りつけられている。耳は帯状で、その下端は二方向の指ナデで取り付けられている。胴部外面は回転ナデ調整である。

217は胴部外面に平行叩きの後、回転ナデを施しているが、一部叩き目が残っている。

218は2条の凸帯を持つ壺で、上の凸帯の上方から下の凸帯に被さるように耳が取り付けられている。耳は215・216と同じく帯状のものでその下端は二方向の指などで取り付けられている。胴部外面には、耳から5cm下までは平行叩きの後に回転ナデを施し、さらにその下から底部にかけては、平行叩きの後縦方向のナデ調整を行い、さらに回転ナデで仕上げている。内面は回転ナデ調整が見られるだけである。内面の最下部は胴部に比べてやや傾斜が緩やかになってきており、ほとんど底部に近い部分であると想定される。

壺C (挿図213 219)

大型の短頸壺で、肩部に2条の凸帯がめぐる。口縁はやや内傾気味である。胴部以下は欠損している。肩部外面はナデ調整をしているものの強い叩き目が見られる。内面は下半分はナデ調整を、それ以外の部分は回転ナデを施し叩き目を消している。壺C3に分類されるタイプである。

甕 (挿図213 220, 挿図214 221・222)

220は小型の甕で、土師器の甕に近い球形の胴部を持つ。胴部下半から底部にかけては欠損している。胴部外面には平行叩き目が見られ、内面に当て具の跡が見られる。口縁は大きく外反し、口縁端部は上方につまみ上げられている。口縁部が約3/12しか残存しておらず、焼け歪みが著しいため、復元径は誤差が大きい可能性がある。

221は底部は欠損しているものの口縁部は完存している。胴部外面には縦方向の叩き目が見られる。内面は、下半分に不定方向のナデ調整を、それ以上から頸部までは回転ナデが施されている。また肩部と頸部との境には当て具の跡が見られる。

222は非常に大型の甕で、現存する最大径は60cmである。残存している破片は肩部の途中までであるので、胴部の最大径はさらに大きくなるものと思われ、西谷池1号窯で出土した遺物のうち最も大型品となる。径部外面には平行叩き目が見られ、内面には同心円状の当て具の痕が明瞭に残る。口縁部外面は、平行叩きを行った後にナデ調整を行っているが、部分的に叩きの工具の跡が残る。口縁端部は外方に広がった後、内側上方につまみあげられている。

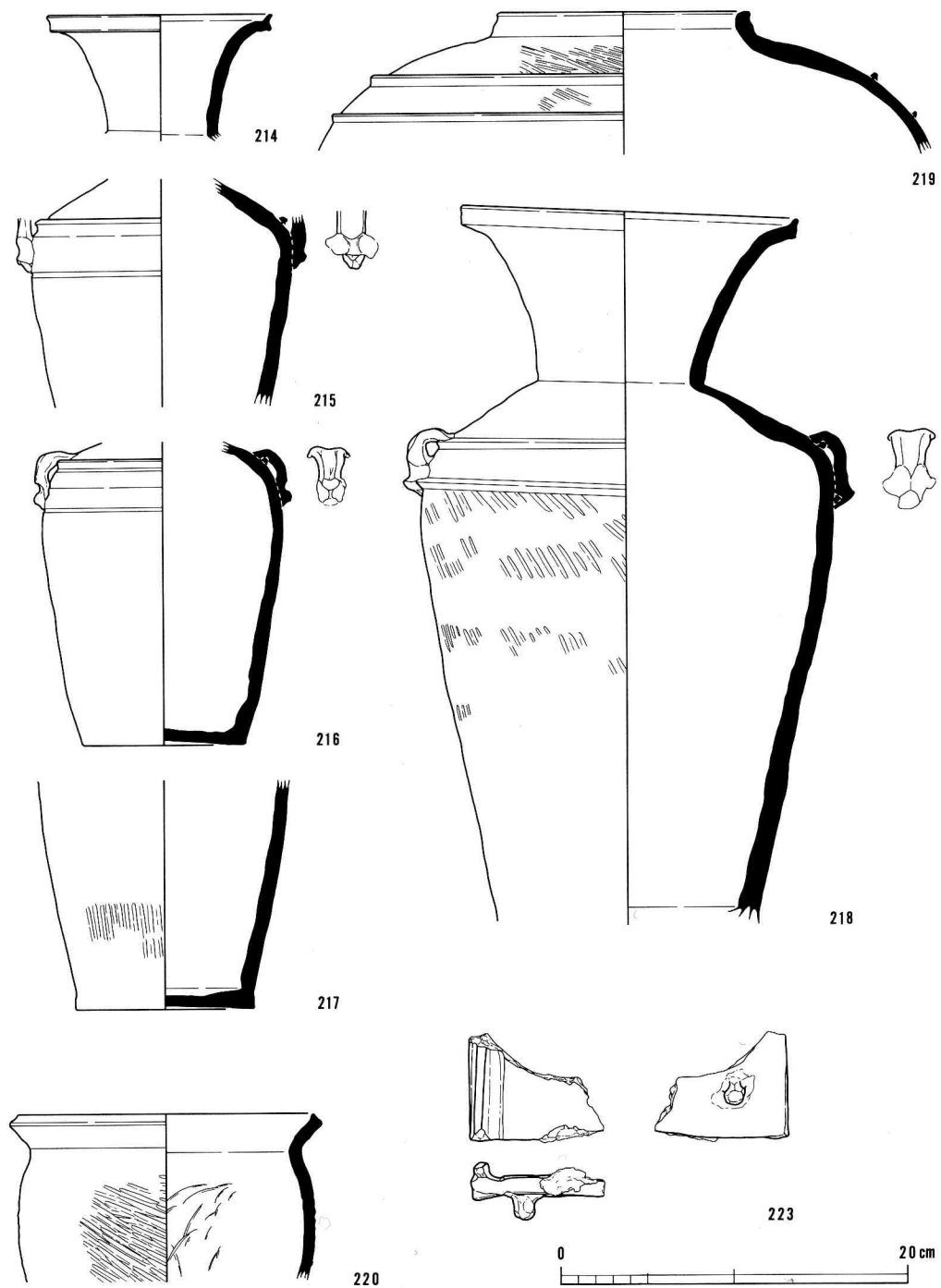
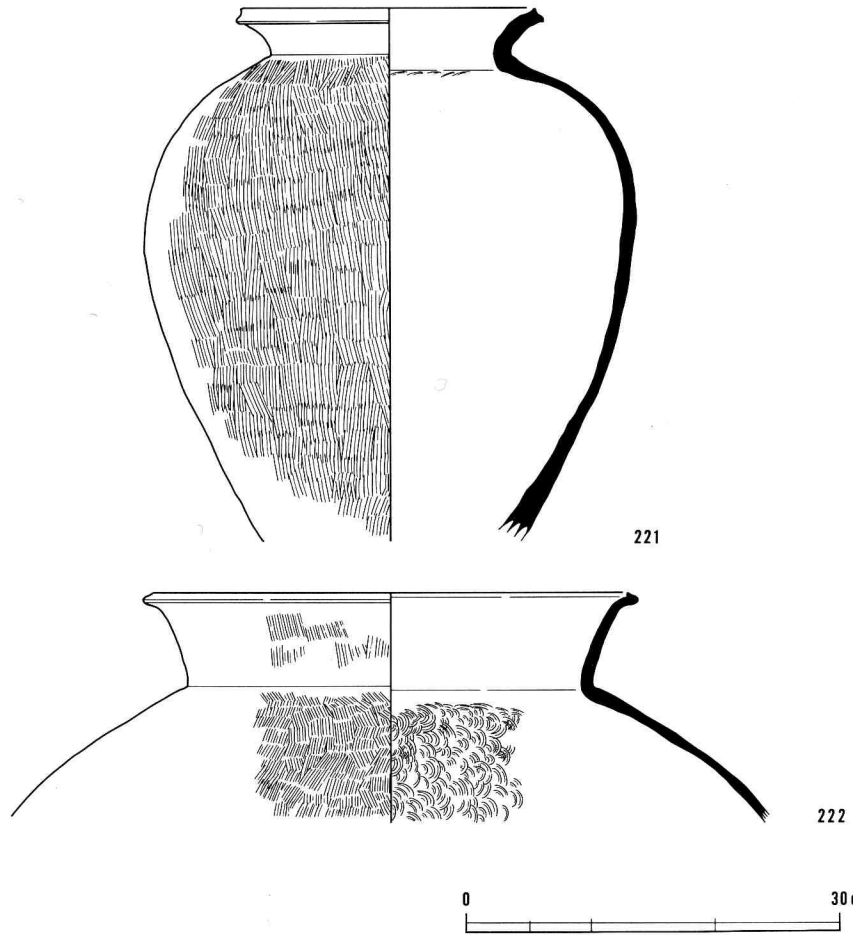


插图213 西谷池1号窟跡 谷部出土須恵器(2)



挿図214 西谷池1号窯跡 谷部出土須恵器(3)

碗 (挿図213 223)

西谷池1号窯跡で唯一出土した碗の破片で、風字碗であると想定される。残存長は、横幅が7.65cm・縦が6.20cm・高さが3.25cmを測る。一部に窯壁片が付着している。出土位置は不明である。

### 3. 小結

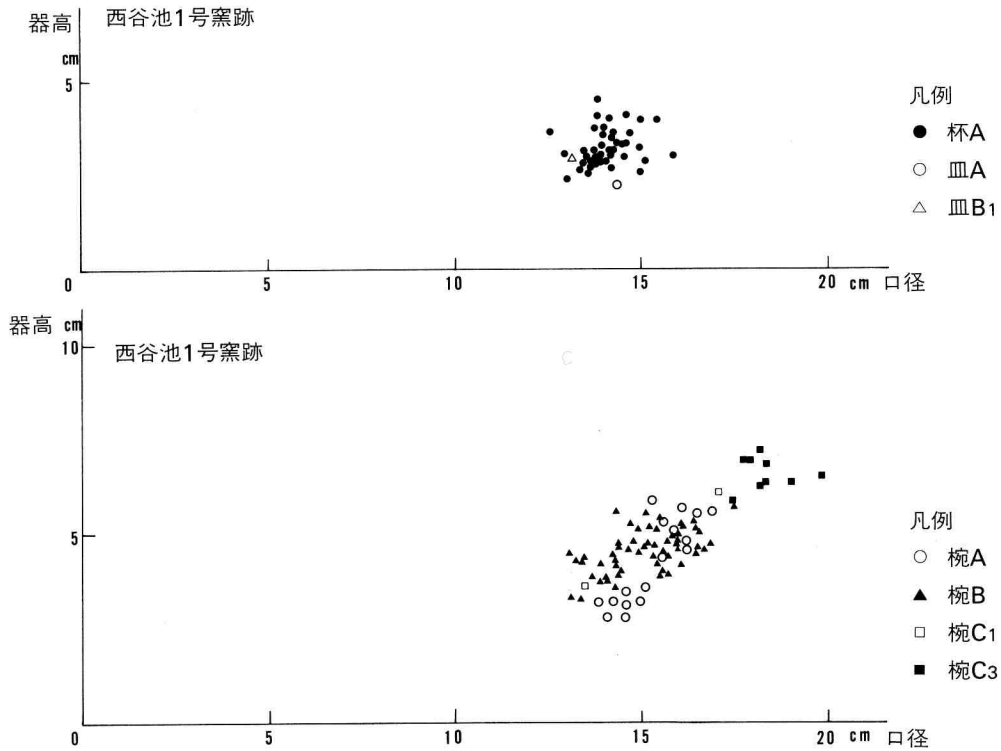
以上西谷池1号窯跡の構造や遺物について述べてきたが、ここで今一度整理しておく以下のようなになる。

〔構造について〕

- ① 西谷池1号窯跡は、半地下式の須恵器窯で、焚口部まで含めた窯体の全長は、水平長で6.7m・斜面長で8.4mである。
- ② 部分的な補修を含めると、床面では1回・壁面では2回の補修痕が見られる。
- ③ 窯体をめぐって「コ」の字状に周溝が掘られ、その末端では地山を削りだした作業場と思われる平坦面が2箇所造られている。
- ④ 燃焼部から焚口部にかけて、完形品に近い須恵器の杯・椀類が残されていた。最終操業時に掻き出されたものと思われる。
- ⑤ 燃焼部の床面で段が1段認められる。

〔出土遺物について〕

- ① 出土した遺物の器種構成は、杯A・(杯B)・椀A・椀B・椀C・壺B・壺C・耳皿・皿・



挿図215 西谷池1号窯跡 須恵器法量グラフ

鉢・甕・硯がある。

- ② 窯体内からの出土は杯・椀類が多く、壺や甕などの大型品は谷部の堆積土から比較的多く出土している。
- ③ 出土数量は杯Aが圧倒的に多く、ついで椀Bである。椀Aは少ない。
- ④ 杯・椀類の底部は全てヘラ切りで、糸切りのものはない。ヘラ切り後はナデ調整しているものと未調整のものがある。
- ⑤ 椀Cは他の杯類・椀類と比べると口径・器高とも大きく、大型の製品である。
- ⑥ 壺Bには、2条凸帯のものと1条凸帯・1条沈線のものがある。後者の場合、凸帯が上で沈線が下である。
- ⑦ 壺Bに取りつけられた耳は帯状の幅の広いものである。耳は上下の凸帯あるいは凸帯と沈線をつなぐように貼りつけられている。
- ⑧ 杯Aの中には、内面に連弁を、外面に人物を線画で描いた資料が1点ある。内面の連弁は6葉と想定される。連弁が描かれているため、外面に描かれた人物像は仏かと想像される。
- ⑨ 皿類は3点出土しており、耳皿はそのうちの1点のみである。
- ⑩ 風字硯の一部と思われる破片が出土している。
- ⑪ 椀に凸帯のつく椀Dや羽釜は1点も出土していない。

表22 西谷池1号窯跡 出土土器観察表

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴 (整形・調整)	備 考 (焼成など)
		口径	器高	底径			
1	杯A	13.2	2.4	7.8	8/12	底部ヘラ切り後ナデ	内面に火襷状痕
2	杯A	14.0	2.9	7.3	8/12	底部ヘラ切り後ナデ	全体に灰被り
3	杯A	13.8	2.8	7.2	10/12	底部ヘラ切り未調整	口縁部歪み大
4	杯A	14.4	3.4	8.4	8/12	底部ヘラ切り後ナデ	
5	杯A	14.1	2.9	5.7	完存	底部ヘラ切り後ナデ	
6	杯A	14.4	2.7	8.1	4/12	底部ヘラ切り後ナデ	全体に歪み
7	杯A	13.8	2.8	6.2	完存	底部ヘラ切り	内面に重焼き痕
8	杯A	13.6	3.2	8.0	完存	底部ヘラ切り後ナデ	焼成による亀裂
9	杯A	13.9	2.9	8.2	3/12		内面に砂粒が付着
10	杯A	13.6	3.0	6.0	11/12	底部ヘラ切り後ナデ ほぼ完形品	焼成による亀裂
11	杯A	13.6	3.0	5.6	12/12	底部ヘラ切り	体部内外面灰被り
12	杯A	13.8	3.2	5.9	10/12	体部外面の下半に回転ヘラ削り	
13	杯A	13.7	3.0	6.3	完存	底部ヘラ切り後ナデ	焼成による亀裂

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴 (整形・調整)	備 考 (焼成など)
		口径	器高	底径			
14	杯A	14.7	3.3	8.8	7/12	底部へラ切り後ナデ	
15	杯A	14.1	3.1	7.4	4/12	底部へラ切り後ナデ	
16	杯A	14.0	3.1	6.4	10/12	底部へラ切り後ナデ	焼成による亀裂
17	杯A	14.5	3.3	6.3	完存	底部へラ切り	全体に歪み
18	杯A	14.2	3.2	8.0	3/12	底部へラ切り後ナデ	
19	杯A	14.1	3.3	8.0	11/12	底部へラ切り	ほぼ完形品
20	杯A	15.0	3.3	7.3	9/12	底部へラ切り未調整	口縁部に歪み大
21	杯A	14.7	3.6	7.5	完存	底部へラ切り後ナデ	内面に火襷状痕
22	杯A	13.1	3.0	6.6	11/12	底部へラ切り後ナデ	ほぼ完形品 全体に歪み大
23	杯A	13.8	3.0	7.7	7/12	底部へラ切り後ナデ	全体に歪み大
24	杯A	13.8	3.1	8.0	4/12	底部へラ切り後ナデ	口縁部に歪み
25	杯A	13.9	3.3	6.7	11/12	底部へラ切り後ナデ	ほぼ完形品 口縁部に歪み
26	杯A	13.5	3.2	7.6	3/12	底部へラ切り後ナデ	内面に1条の沈線
27	杯A	12.6	3.7	6.5	5/12	底部へラ切り	
28	杯A	14.0	3.3	8.0	10/12	底部へラ切り後ナデ	口縁部の歪み大
29	杯A	14.2	3.5	6.2	完存	底部へラ切り後ナデ	
30	杯A	14.3	3.6	8.3	1/12	底部へラ切り後ナデ	底部完存
31	杯A	14.2	3.1	7.6	3/12	底部へラ切り後ナデ	
32	杯A	13.8	3.8	6.9	8/12	底部へラ切り未調整	底部完存 口縁部の歪み大
33	杯A	14.6	4.1	7.1	10/12	底部へラ切り後ナデ	内面に火襷状痕
34	杯A	14.0	3.8	7.3	9/12	底部へラ切り未調整	磨滅部分が多い
35	杯A	14.2	4.0	7.3	完存	底部へラ切り後ナデ	
36	杯A	13.8	3.8	5.4	3/12	底部へラ切り後ナデ	底部完存
37	杯A	15.0	4.0	7.1	3/12	底部へラ切り後ナデ	底部完存
38	杯A	13.6	2.6	5.9	完存	底部へラ切り後ナデ	
39	杯A	14.3	2.8	5.8	完存	底部へラ切り後ナデ	
40	杯A	13.5	2.8	7.7	12/12	底部へラ切り	底部に亀裂
41	杯A	14.0	3.2	7.4	4/12	底部へラ切り	
42	杯A	13.9	2.9	6.5	11/12	底部へラ切り後ナデ	ほぼ完形品 底部内面に亀裂
43	杯A	14.1	2.9	7.2	完存	底部へラ切り後ナデ	完形品 底部に亀裂
44	杯A	14.2	3.0	7.2	6/12	底部へラ切り後ナデ	底部完存
45	杯A	13.9	2.9	7.0	2/12	底部へラ切り	
46	杯A	14.1	3.2	7.7	6/12	底部へラ切り後ナデ	底部完存 内部に砂粒付着
47	杯A	14.3	2.7	8.0	12/12	底部へラ切り後ナデ	全体に歪み
48	杯A	13.7	2.9	6.2	11/12	底部へラ切り後ナデ	ほぼ完形品 全体に歪み
49	杯A	14.6	3.0	7.1	11/12	底部へラ切り	ほぼ完形品 口縁部の歪み大
50	杯A	13.0	3.1	7.7	7/12	底部へラ切り	口縁部に歪み大
51	杯A	14.3	3.2	7.3	完存	底部へラ切り	口縁部の歪み大



遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴 (整形・調整)	備 考 (焼成など)
		口径	器高	底径			
52	杯A	14.0	3.4	8.4	3/12	底部へラ切り後ナデ	外面に一条の沈線
53	杯A	14.2	3.0	8.2	3/12	底部へラ切り未調整	
54	杯A	14.8	3.0	9.6	9/12	底部へラ切り後ナデ	口縁部の歪み大
55	杯A	15.1	2.9	8.0	3/12	底部へラ切り後ナデ	口縁部に歪み大
56	杯A	13.5	2.4	9.5	6/12	底部へラ切り未調整	
57	杯A	13.7	3.0	10.0	11/12	底部へラ切り後指ナデ ほぼ完形品	全体に歪み大
58	杯A	14.1	3.0	9.7	完存	底部へラ切り	
59	杯A	14.0	3.0	8.7	4/12	底部へラ切り 底部完存	内面に土器片付着
60	杯A	13.8	3.2	9.7	3/12	底部へラ切り未調整	
61	杯A	15.9	3.1	11.6	2/12	底部へラ切り未調整	
62	杯A	14.2	3.0	7.0	6/12	底部へラ切り未調整	口縁部に歪み
63	杯A	14.6	3.4	6.4	完存	底部へラ切り後ナデ	口縁部の歪み大
64	杯A	15.0	3.3	6.5	11/12	底部へラ切り後ナデ ほぼ完形品	
65	杯A	13.9	3.3	9.9	9/12	底部へラ切り 底部完存	口縁部の歪み大
66	杯A	14.2	3.5	6.2	完存	底部へラ切り後ナデ 内面側面にへラ記号「×」	
67	杯A	14.7	4.2	7.5	9/12	底部へラ切り後ナデ 内面底部にへラ記号「一」	
68	杯A	14.0	3.6	7.2	11/12	底部へラ切り 内面底部にへラ記号「一」	全体に歪み大
69	杯A	13.9	4.1	7.8	10/12	底部へラ切り未調整 内面底部にへラ記号「一」	外面に火襷状痕 口縁部に歪み
70	杯B	—	0.9	7.7	4/12	底部外面に爪形痕	
71	椀A	15.5	4.4	9.3	7/12	へラ切り後高台貼り付け	
72	椀A	16.0	5.7	8.1	9/12	へラ切り後高台貼り付け	
73	椀A	15.2	5.9	7.3	8/12	へラ切り後高台貼り付け	口縁部の歪み大
74	椀B	13.3	3.2	8.7	2/12	底部へラ切り未調整	口縁部に歪み
75	椀B	13.0	3.3	8.7	11/12	底部へラ切り	内面に重焼き痕
76	椀B	14.2	4.5	7.3	5/12	底部へラ切り 底部完存	口縁部に歪み
77	椀B	14.8	5.1	8.0	6/12	底部へラ切り 底部完存	内外面に火襷状痕
78	椀B	15.1	4.8	7.0	2/12	底部へラ切り後ナデ	
79	椀B	15.5	4.0	7.2	3/12	底部へラ切り	全体に歪み
80	椀B	15.9	4.7	7.3	6/12	底部へラ切り後ナデ 底部完存	内面に砂粒が付着
81	椀B	—	3.1	8.5	12/12	底部へラ切り後ナデ 底部完存	全体に歪み
82	椀B	—	2.5	7.7	12/12	底部へラ切り 底部完存	内面に砂粒が付着
83	椀B	14.0	3.7	6.8	完存	底部へラ切り未調整	
84	椀B	13.8	4.2	6.3	完存	底部へラ切り	口縁部の歪み大
85	椀B	14.2	4.2	6.0	9/12	底部へラ切り	内面に灰被り

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴 (整形・調整)	備 考 (焼成など)
		口径	器高	底径			
86	椀B	14.4	4.0	6.5	完存	底部ヘラ切り	
87	椀B	14.2	4.1	6.9	10/12	底部ヘラ切り後ナデ	
88	椀B	14.3	3.9	6.1	11/12	底部ヘラ切り未調整	底部完存 焼成による亀裂
89	椀B	14.8	4.5	6.2	11/12	底部ヘラ切り	口縁部の歪み大
90	椀B	15.3	4.2	6.4	完存	底部ヘラ切り後ナデ	口縁部に亀裂
91	椀B	15.4	3.9	6.4	完存	底部ヘラ切り未調整	口縁部の歪み大
92	椀C	<u>18.1</u>	<u>6.3</u>	<u>7.5</u>	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け・1条沈線 底部完存	
93	椀C	<u>17.8</u>	7.5	<u>8.2</u>	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け・1条沈線	口縁部の歪み大
94	椀C	<u>17.7</u>	7.0	<u>8.6</u>	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け・1条沈線 底部外面に爪形痕	
95	片口壺	<u>12.8</u>	17.0	<u>11.2</u>	3/12	底部ヘラ切り後ナデ・外面回転ナデ	全体に歪み大
96	壺B	—	<u>21.0</u>	<u>10.2</u>	9/12	1条凸帯・胴部外面ヘラ削り	自然釉
97	壺B	<u>12.9</u>	27.4	<u>11.0</u>	1/12	1条凸帯・1条沈線・胴部外面ヘラ削り	全体に歪み大
98	壺B	—	—	—	9/12	2条凸帯・胴部外面裾ヘラ削り	全体に灰被り
99	壺B	—	—	<u>13.6</u>	7/12	2条凸帯・胴部外面裾ヘラ削り	
100	壺C	7.1	9.4	6.5	完存	底部ヘラ切り未調整・底部内面ナデ	底部に亀裂
101	甕	26.2	<u>16.2</u>	—	9/12	口縁部は平行叩きの後ナデ 体部外面は平行叩き・内面はナデ	自然釉
102	杯A	<u>13.8</u>	2.7	7.2	4/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存
103	杯A	14.5	2.8	7.1	9/12	底部ヘラ切り	底部完存 外面に窯壁片付着
104	杯A	<u>14.0</u>	2.8	7.6	2/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存 内面に窯壁片付着
105	杯A	<u>14.0</u>	2.9	7.9	4/12	底部ヘラ切り後ナデ	外面に火襷状痕
106	杯A	13.8	2.9	7.6	9/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存 内外面に火襷状痕
107	杯A	13.1	2.8	6.0	6/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存
108	杯A	<u>13.8</u>	3.2	<u>7.2</u>	5/12	底部ヘラ切り後ナデ	内面に灰被り
109	杯A	13.6	2.6	8.5	3/12	底部ヘラ切り未調整	
110	杯A	<u>14.9</u>	3.2	<u>8.9</u>	5/12	底部ヘラ切り未調整	内外面に火襷状痕
111	杯A	<u>14.7</u>	3.1	<u>8.4</u>	6/12	底部ヘラ切り後ナデ	
112	杯A	14.3	2.9	9.1	6/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存 全体に歪み大
113	杯A	<u>15.0</u>	3.6	<u>9.8</u>	2/12	底部ヘラ切り未調整	
114	杯A	14.5	3.5	7.7	7/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存 手面に灰被り
115	杯A	13.0	3.3	6.7	5/12	底部ヘラ切り後ナデ	口縁部歪み大
116	杯A	<u>14.0</u>	2.9	<u>8.4</u>	5/12	底部ヘラ切り後ナデ	
117	杯A	<u>13.8</u>	2.9	<u>7.4</u>	6/12	底部ヘラ切り未調整	底部完存 外面に砂粒付着
118	杯A	<u>14.3</u>	3.2	<u>7.7</u>	2/12	底部ヘラ切り未調整	底部完存
119	杯A	<u>14.0</u>	3.0	<u>7.9</u>	6/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存 口縁部に歪み

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴 (整形・調整)	備 考 (焼成など)
		口径	器高	底径			
120	杯A	14.0	3.4	8.1	3/12	底部ヘラ切り後ナデ	
121	杯A	14.0	3.1	7.4	3/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存
122	杯A	16.0	3.0	9.5	2/12	底部ヘラ切り未調整	内外面に窯壁付着
123	杯A	14.5	3.4	8.9	7/12	底部ヘラ切り未調整 内面底部にヘラ記号「×」	
124	杯A	14.6	3.1	9.0	2/12	底部ヘラ切り 内面に蓮弁をヘラ描き 外面に人物(仏?)をヘラ描き	
125	杯A	14.0	3.5	8.0	3/12	底部ヘラ切り未調整	底部完存 内面底部にヘラ記号「×」 口縁部の歪み大
126	椀A	16.1	4.6	7.7	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	口縁部の歪み大
127	椀A	15.4	5.3	7.8	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	内外面に火襷状痕
128	椀A	15.8	5.1	7.9	6/12	ヘラ切り後高台貼り付け	底部完存 口縁部に歪み
129	椀A	16.4	5.6	8.1	1/12	ヘラ切り後高台貼り付け	内面に重焼き痕
130	椀A	16.8	5.6	9.8	1/12	ヘラ切り後高台貼り付け	
131	椀B	13.8	3.7	7.2	6/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存
132	椀B	14.0	3.8	6.7	4/12	底部ヘラ切り	底部完存
133	椀B	13.9	3.8	6.9	8/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存 全体に歪み大
134	椀B	15.6	4.1	8.6	1/12	底部ヘラ切り	
135	椀B	16.0	4.2	8.2	4/12	底部ヘラ切り後ナデ	
136	椀B	17.1	4.0	8.5	1/12	底部ヘラ切り後ナデ	内面に砂粒付着
137	椀B	16.8	4.7	7.2	5/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存 全体に歪み大
138	椀B	15.9	4.8	7.5	1/12	底部ヘラ切り未調整	
139	椀B	16.4	4.7	8.4	2/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存 外面に重焼き痕
140	椀B	15.6	4.4	7.9	2/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存
141	椀B	15.5	4.5	8.0	2/12	底部ヘラ切り	内面に重焼き痕
142	椀B	16.6	4.6	8.1	2/12	底部ヘラ切り未調整	底部完存
143	椀B	13.4	11.4	6.3	3/12	底部ヘラ切り	底部完存 内外面に窯壁付着
144	椀B	13.2	4.3	7.2	9/12	底部ヘラ切り未調整?	底部完存
145	椀B	13.0	4.5	6.3	4/12	底部ヘラ切り未調整	内面に火襷状痕
146	椀B	14.6	5.2	7.1	1/12	底部ヘラ切り未調整	底部完存 外面に窯壁付着
147	椀B	14.3	4.8	7.6	6/12	底部ヘラ切り未調整	底部完存
148	椀B	15.1	5.2	8.2	8/12	底部ヘラ切り未調整	外面に窯壁付着
149	椀B	16.0	5.2	8.5	3/12	底部ヘラ切り	
150	椀B	14.2	4.6	7.1	6/12	底部ヘラ切り後ナデ	口縁部に歪み
151	椀B	15.0	4.6	7.1	4/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存 外面に窯壁片付着
152	椀B	15.0	5.1	7.4	2/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存
153	椀B	16.4	5.0	7.7	3/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴 (整形・調整)		備 考 (焼成など)
		口径	器高	底径				
154	椀B	15.6	4.8	7.8	6/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存	
155	椀B	14.7	4.6	7.3	1/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存	
156	椀B	16.8	4.7	8.0	3/12	底部ヘラ切り後ナデ		内面に灰被り
157	椀B	16.4	5.1	8.6	6/12	底部ヘラ切り後ナデ		口縁部に歪み
158	椀B	15.1	5.6	8.2	2/12	底部ヘラ切り未調整		
159	椀B	16.3	5.4	7.8	6/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存	内外面に重焼き痕
160	椀B	15.9	4.7	7.4	1/12	底部ヘラ切り後ナデ 外面側面にヘラ記号「一」		口縁部に歪み
161	椀B	15.6	5.7	8.3	1/12	底部ヘラ切り未調整 内面底部にヘラ記号「一」		内面に重焼き痕
162	椀B	12.5	3.4	8.5	3/12	底部ヘラ切り後ナデ		
163	椀C	19.2	5.8	8.6	10/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存	全体に歪み大
164	椀C	18.0	7.3	8.2	4/12	底部ヘラ切り後ナデ		全体に歪み大
165	椀C	19.0	6.4	8.0	1/12	底部ヘラ切り未調整		口縁部に歪み
166	椀C	18.3	6.9	8.1	6/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存	全体に歪み大
167	皿	13.2	3.0	6.8	4/12	底部ヘラ切り未調整	底部完存	全体に歪み大
168	壺	18.2	—	—	4/12			口縁部に歪み
169	壺B	12.7	—	—	6/12	体部に凹線がみられる		口縁部に歪み
170	壺	—	—	9.8	1/12	体部下半叩きの後ヘラ削り		
171	壺B	16.4	—	—	4/12			口縁部歪み大
172	壺B	17.9	—	—	4/12			全体に歪み大付着
173	鉢	16.4	—	—	3/12			
174	鉢	16.3	5.8	7.4	5/12	底部ヘラ切り		
175	甕	17.1	—	—	4/12	内面はタタキの後ナデ		
176	椀A	15.5	5.3	7.6	11/12	ヘラ切り後高台貼り付け	底部完存	
177	椀B	16.4	4.5	8.1	2/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存	口縁部の歪み大
178	椀B	16.4	5.0	7.8	9/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存	
179	椀B	15.3	5.1	7.4	9/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存	口縁部の歪み大
180	椀B	15.1	5.6	8.1	8/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存	口縁部の歪み大
181	椀B	15.8	5.0	7.3	4/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存	口縁部に歪み
182	椀B	14.7	4.8	7.3	2/12	底部ヘラ切り後ナデ		
183	椀B	15.8	5.0	7.9	2/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存	内面に重焼き痕
184	椀B	15.4	5.3	8.1	5/12	底部ヘラ切り未調整	底部完存	
185	椀C	18.8	6.5	8.2	完存	底部ヘラ切り後ナデ		口縁部に歪み
186	甕	—	—	22.0	5/12	体部下半分約1/5に回転ヘラ削り		
187	杯A	13.4	3.1	9.0	2/12	底部ヘラ切り後ナデ		
188	杯A	14.0	2.6	9.7	2/12			
189	杯A	13.7	2.7	7.4	5/12	底部ヘラ切り後ナデ	底部完存	口縁部に歪み

遺物 番号	器種	法量 (cm)			残 存 率	特 徴 (整形・調整)	備 考 (焼成など)
		口径	器高	底径			
190	杯A	13.6	3.0	7.1	2/12	底部ヘラ切り後ナデ 底部完存	
191	杯A	13.8	3.1	8.3	9/12	底部ヘラ切り後ナデ	
192	杯A	14.5	3.4	8.7	3/12	底部ヘラ切り後ナデ	口縁部に歪み
193	杯A	14.3	3.1	8.1	4/12	底部ヘラ切り後ナデ	
194	杯A	11.8	3.7	7.5	3/12	底部ヘラ切り未調整	
195	椀A	16.0	4.8	7.8	1/12	ヘラ切り後高台貼り付け	口縁部に歪み
196	椀B	13.3	4.3	7.0	7/12	底部ヘラ切り未調整 底部完存	口縁部に歪み
197	椀B	15.2	4.4	7.5	6/12	底部ヘラ切り後ナデ	内面に火襷状痕
198	椀B	15.2	4.7	7.4	3/12	底部ヘラ切り後ナデ 底部完存	口縁部に歪み
199	椀B	14.2	5.5	7.3	1/12		底部完存 口縁部の歪み大
200	椀B	16.0	5.3	7.8	3/12	底部ヘラ切り未調整	口縁部に歪み
201	椀B	17.4	5.8	8.3	5/12	底部ヘラ切り未調整	口縁部の歪み大
202	椀B	13.6	3.9	8.2	1/12		
203	椀B	14.2	3.6	9.4	5/12	底部ヘラ切り後ナデ 底部完存	口縁部に歪み
204	椀B	15.6	3.9	9.8	9/12	底部ヘラ切り未調整 底部完存	口縁部に歪み
205	椀C	18.1	6.4	8.4	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け・一条沈線 底部完存	口縁部に歪み
206	椀C	19.7	6.6	8.3	4/12	ヘラ切り後高台貼り付け	口縁部に歪み
207	椀C	17.4	5.9	8.7	2/12	ヘラ切り後高台貼り付け 底部外面にヘラ記号「レ」	口縁部の歪み大
208	椀C	17.0	6.1	7.8	9/12	底部ヘラ切り後ナデ 底部完存	口縁部の歪み大
209	椀C	18.1	5.5	—	3/12	一条沈線	
210	椀C	14.4	3.6	9.1	4/12	底部ヘラ切り後ナデ・一条沈線	
211	耳皿	5.5	1.4	4.4	11/12	底部ヘラ切り後ナデ 底部完存	
212	皿	15.0	2.7	11.0	3/12		
213	皿	14.5	2.3	10.3	2/12		
214	壺口縁	13.3	—	—	8/12		
215	壺B	—	—	—	2/12	一条凸帯・胴部外面回転ヘラ削り	
216	壺B	—	13.9	9.2	8/12	一条凸帯・胴部外面ヨコナデ	
217	壺	—	—	10.2	4/12	胴部外面下端平行タタキの後ナデ	
218	壺B	19.2	—	—	8/12	二条凸帯・胴部外面平行叩きの後ナデ	口縁部に歪み
219	壺C	14.5	—	—	5/12	二条凸帯・外面は平行叩きの後ナデ	口縁部に歪み
220	甕	17.9	—	—	3/12	内面に当て具痕・外面は平行叩き	口縁部の歪み大
221	甕	24.3	—	—	12/12	外面は平行叩き・内面はヨコナデ及びナデ	口縁部にやや歪み
222	甕口縁	37.3	—	—	3/12	口縁部外面に平行叩き	
223	硯	—	3.2	—	—	風字硯の一部	窯壁片付着

### 第3節 西谷池2号窯跡の調査

#### 1. 遺構の調査 (図版156~168, 挿図216~220)

##### 1) 概要

西谷池2号窯跡は、西谷池1号窯跡同様の半地下式の須恵器窯で、西谷池の西側にある南東向き斜面に位置している。1号窯跡程ではないが、地山を掘り込んだ壁の立ち上がり部分が若干残っている。天井部は欠損しており、焚口部下半分は山道により一部が切られている。1号窯跡と比べると2号窯跡は構築位置が低く、いわゆる灰原部分が池の水面下に当たっており、そのためか灰原の遺存状況は良くない。窯体から2m程度下方までしか遺物を採取しておらず、また灰層自体の厚さも薄く、分布範囲も狭い。

窯体は、焼成の度合いが悪く、あまり還元色をした部分を見とめなかった。床面は1面しか確認していない。壁面でも補修の痕跡は認められなかった。窯体内には、遺物が窯詰め状態が判る状態で遺存していた。全体として遺物の焼成度合いは悪く、また灰層を含めた窯全体からの遺物の出土量も多くないことなどから、この窯は1回ないしは2回といった程度しか使用されていないものと考えられる。

窯体の周囲には溝がめぐっているが、1号窯跡で見られたような地山を削りだしたテラス状の遺構は認められなかった。主軸の方位は1号窯跡とほぼ直交しており、N24°Eである。

##### 2) 窯体

###### 規模

焚口部まで含めた窯体の全長は、水平長で6.3m・斜面長で8.3mである。構造上での焚口部と燃焼部の境界は明確でない。

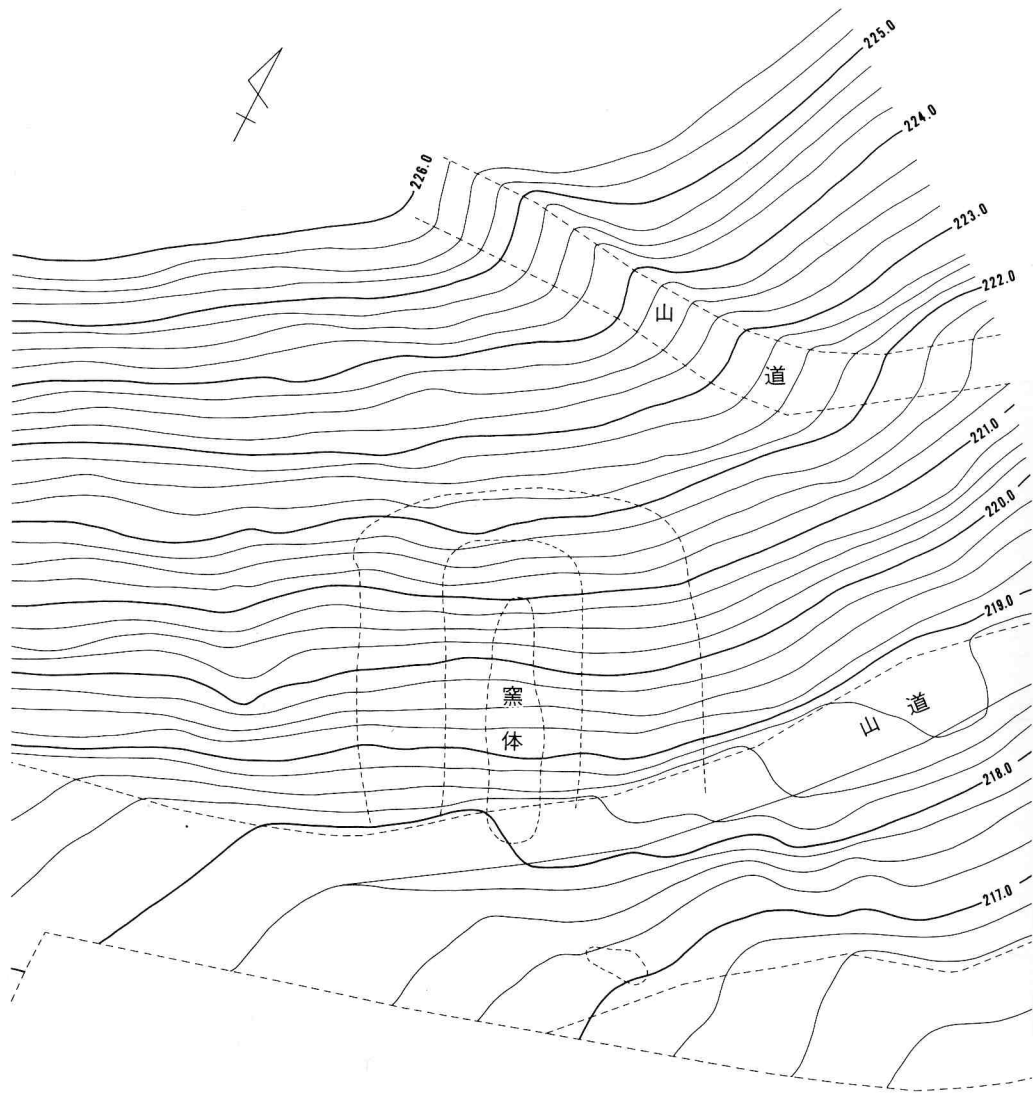
###### 焚口部・燃焼部

焚口部と燃焼部には明確な境界はみられないが、焼成部より下方では幅1.4m・長さは2.1m、床面の傾斜角は約20°を測る。現代の山道で切られており、壁の立ち上がりも残っていない。若干の炭の堆積がみられたのみである。また、焚口部から燃焼部にかけては、1号窯で見られたような、完形品に近い須恵器の杯・碗類は残っていなかった。

###### 焼成部・燃焼部

燃焼部と焼成部は構造上は明確には区別されていないが、窯体内の遺物出土状況と後述する土器列の性格を考慮すると、挿図372で遺物の出土している範囲が焼成部、その下方が燃焼部及び焚口部と考えられる。従って焼成部は、水平長で4.2m・斜面長で1.25m、床面の平均傾斜角度は31°26'34"を測る。

還元焼成による灰色あるいは淡青灰色に固く焼けた床面は部分的にしか見られず、焼成部上方では赤変した床面が認められるのみである。従って窯全体での焼成具合はあまり良くない。



挿図216 西谷池 2号窯跡 調査前地形測量図

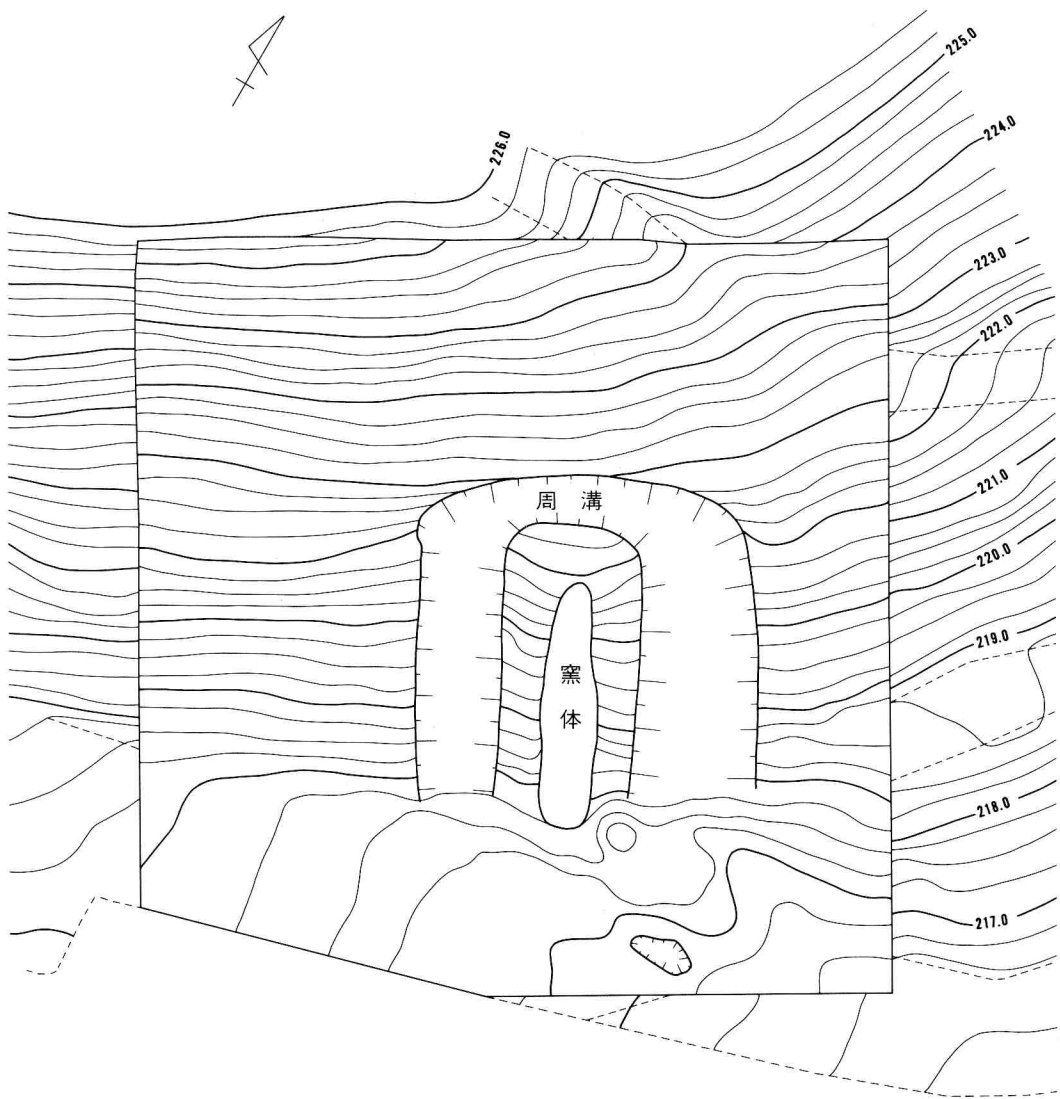


插图217 西谷池 2号窠跡 調査後地形測量図



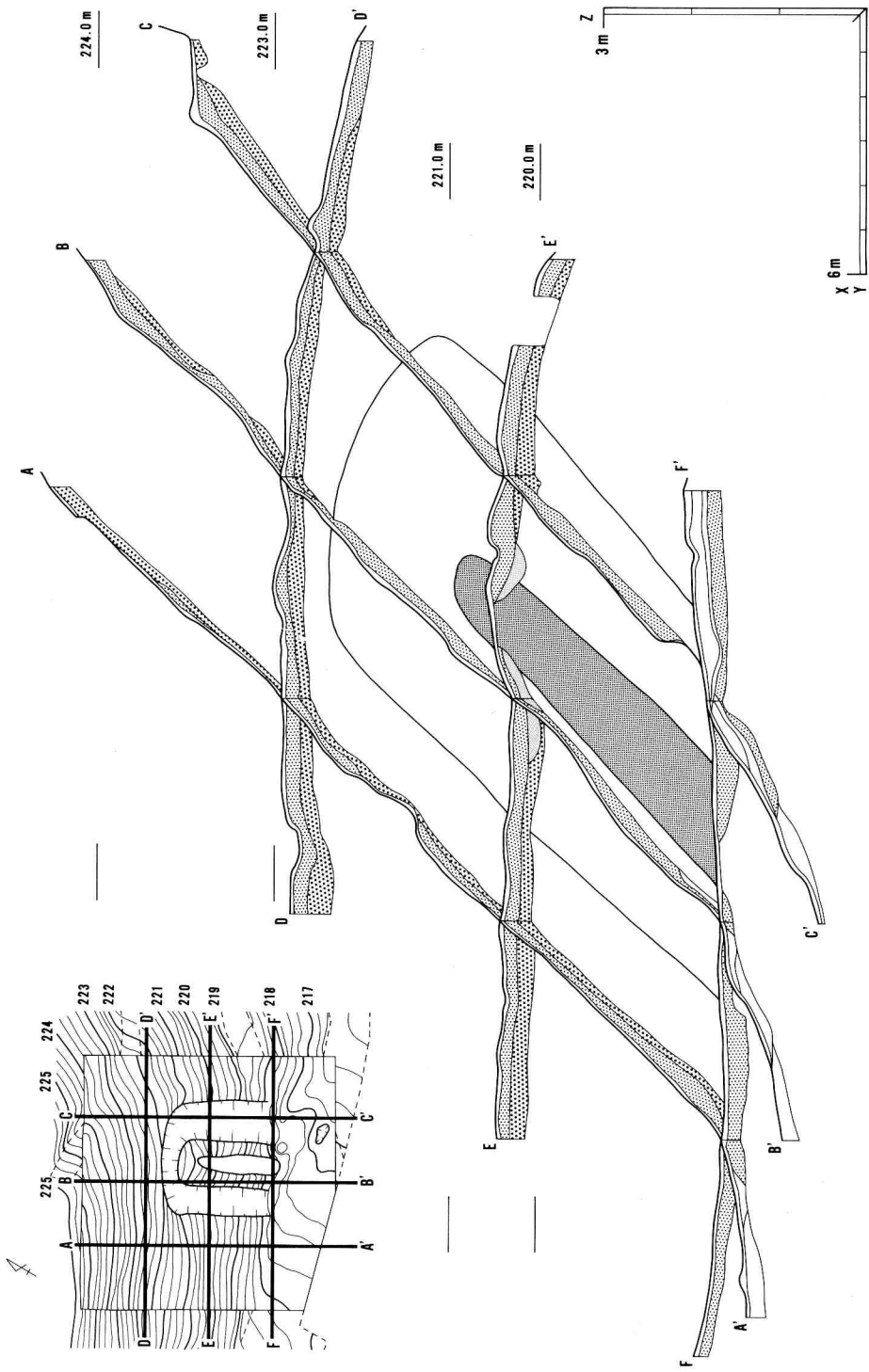


插图218 西谷池2号窠迹 窠体·周沟·灰原土层堆积状况图

床面・壁面での補修痕も全く認められなかった。また、1号窯跡のような床面の段状の構造は1箇所も認められなかった。

焼成部内部には、窯詰めの状態を示す土器が残されていた。

土器は、焼台として下に石や土器片を噛ましてその上面が水平になるようにしており、その上に製品を置き焼成している。特別に焼台として製作したものは見られず、焼き台とした土器片は、甕の破片や杯・椀の底部などが多い。杯・椀の底部についてはうつ伏せ状態にして使用しているものがほとんどである。

焼成部の下方では、挿図220に見られるように、椀を伏せた状態で10~20枚の積み重ねたものが7~8本ほど出土している。上半部が倒れたと思われるものがあり、元々は6本あったと想定される。これらは窯体の横断方向に1列に並べてあり、一見して窯体内に残されている他の遺物の出土状況と全く異なっている。

他の遺物では、うつ伏せ状態のものは焼き台として使用したものだけであり、製品と考えられるものは全て正位置で置かれている。重焼き状態で出土したものでも正位置で出土している。またこの1列の土器群は、焚口方向にあたる部分の器壁が強い火力のため弾けているものがほとんどである。重ねられた土器は10枚前後の単位で溶着しており、1枚1枚分離することはできない。一方、この土器群以外の土器については、重焼きしているものでも個々の土器の間に砂を挟んでおり、1枚1枚分離できる状態にしている。事実取り上げの際には、1点1点分離したものも多い。たとえ溶着しているものでも、2~3枚単位といった少量が溶着しているのみであり、前述の土器群のように多量のものが溶着していることはない。

また製品の出土状況から、焼成部内では製品は横一列に並べられて置かれていたものと考えられる。

#### 煙道部

焼成部の上端は窯壁が遺存せず、上方への立ち上がりは認められない。還元色はなく、赤色の焼土が見られるのみである。また1号窯跡で見られたような長円形の焼土は検出できず、煙道の位置については推測する資料がない。

#### 3) 周溝

窯体の左右及び上方を取り巻くように溝が掘られている。周溝内の埋土は炭を含まない黄褐色の土であり、遺物はあまり出土していない。1号窯跡で見られたようなテラス状に掘り窪められた平坦面は見られず、左右の周溝の端は焚口付近で開いて自然に終わっている。この周溝は、作業空間というよりも窯体に対する排水機能を重視したものと思われる。

#### 4) 灰原

窯体の構築位置が低く、前庭部が池の水面下に当たっており、灰原の分布は狭い。また、堆積している炭の厚さも非常に薄く、操業期間が短かったことを裏付けている。

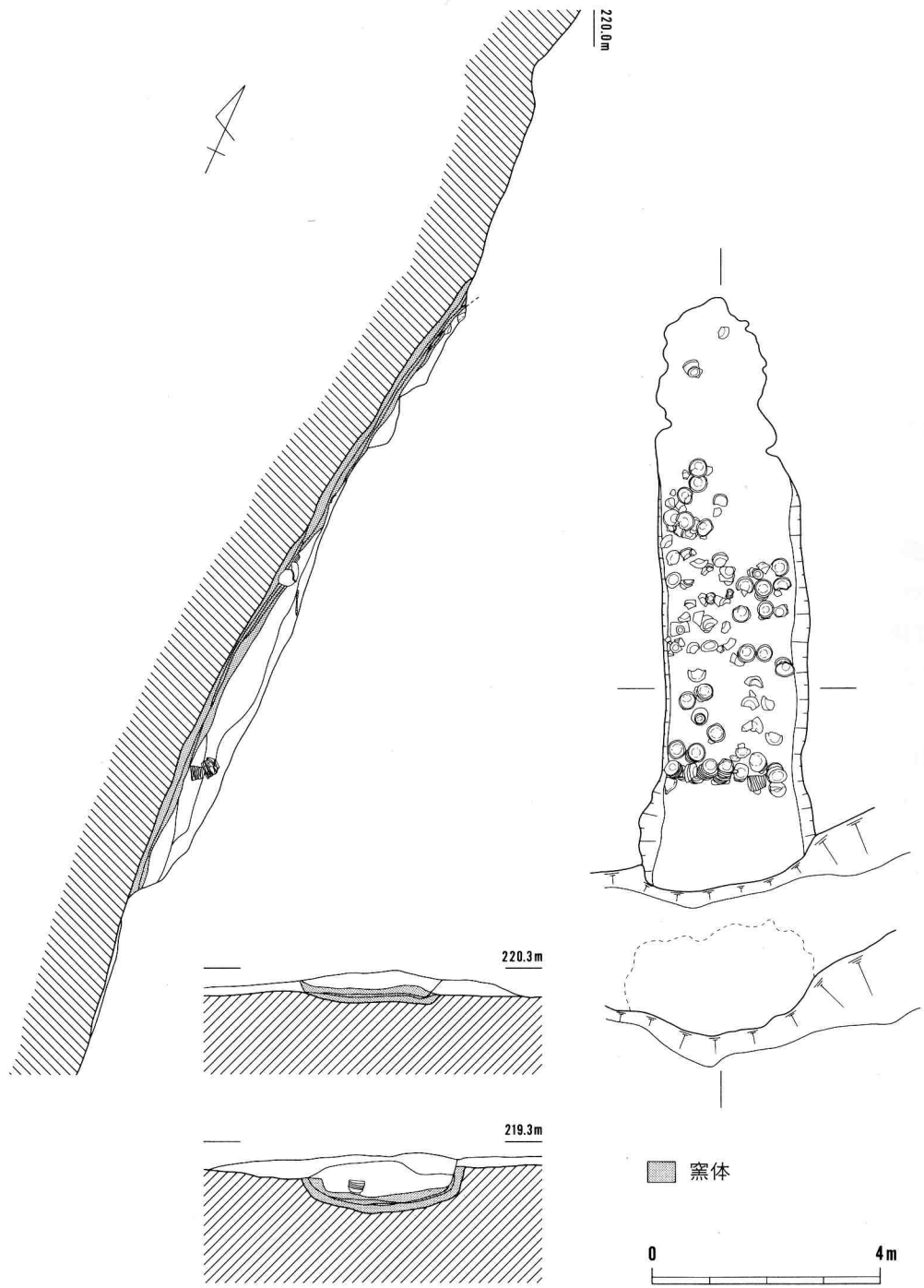


插图219 西谷池2号窠迹 窠体遺構図

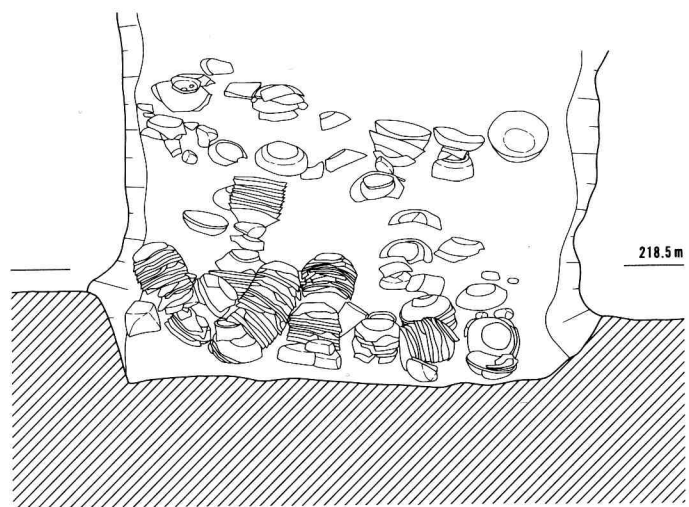
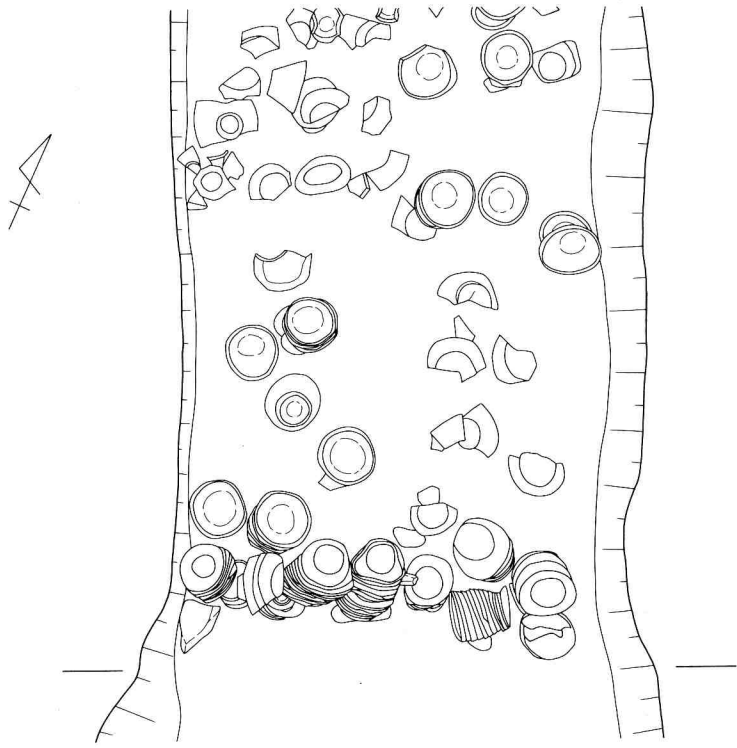


插图220 西谷池2号窯跡 焚口部遺物出土狀況

## 2. 遺物 (図版169~182, 挿図221~230)

### 1) 概要

西谷池2号窯跡は、灰原があまりなく操業期間が短かったと考えられる。一方窯体は最終の焼成中に崩れたものと思われ、窯体内には窯詰め状況を示す多くの遺物が残されていた。そのため、図化できた遺物も窯体内出土遺物の方が圧倒的に多い。整理前での出土総数はコンテナに約30箱である。

器種としては、杯・椀・耳皿・壺・甕があり、鉢は出土していない。個体数としては杯Aが最も多く、ついで椀Bが多い傾向は西谷池1号窯跡と同じである。杯・椀類に関しては、底部の切り離しは全てヘラで行っており、糸切りしたものはない。

実測に際しては、他の窯と同様に原則として残存率1/4以上で歪みの少ないものを対象としている。また窯体内の資料と接合した破片については、窯体内出土遺物として扱っている。土師器は出土していない。

### 2) 窯体内出土遺物

窯体内から出土した器種には、杯A・椀A・椀B・壺B・甕がある。西谷池2号窯は、焼成中に崩れたらしく、床面には多くの遺物が窯詰め位置を留めていた。そのため、床面出土の土器と窯体内埋土出土の土器を区別している。挿図221・222に掲載したものが床面出土の資料で、挿図223~225に掲載したものが窯体内埋土出土の資料である。また挿図226は床面から出土しているが重焼きの資料をまとめている。

窯体内(特に埋土)から出土した遺物については、窯体の中心で左右に2分割、上下には途中で2箇所横方向の畦を設けて3分割し、6区に分割して遺物を取り上げた。また床面出土の土器については、出土状況を記録し個別番号を付けてとりあげている。

#### a) 床面出土土器

杯A (挿図221 1~34, 挿図223 72~87)

床面に残っていた遺物の中では杯Aが圧倒的に多い。いずれも底部はヘラ切りされており、その後調整しているものと未調整のものがある。

1~9は底部が直線的なタイプ、10~21は底部から体部にかけて丸みを帯びたタイプである。西谷池1号窯と比べて、口縁部が直線的に開いていくものが少なく、体部に丸みがあるタイプの方が多く思われる。

22~34は、重焼きの資料である。重焼きの状態出土したが、土器と土器の間に砂を入れて焼成時の融着を防いでいたため、取り上げの時点で1枚1枚分離したものである。22~24が3枚セット、25~30が6枚セット、31・32と33・34がそれぞれ2枚のセットである。それぞれ杯Aの中でも比較的似たタイプがセットになっている。

72~87はヘラ記号があり、しかも重焼き状態で出土している資料である。72~77の6点は全

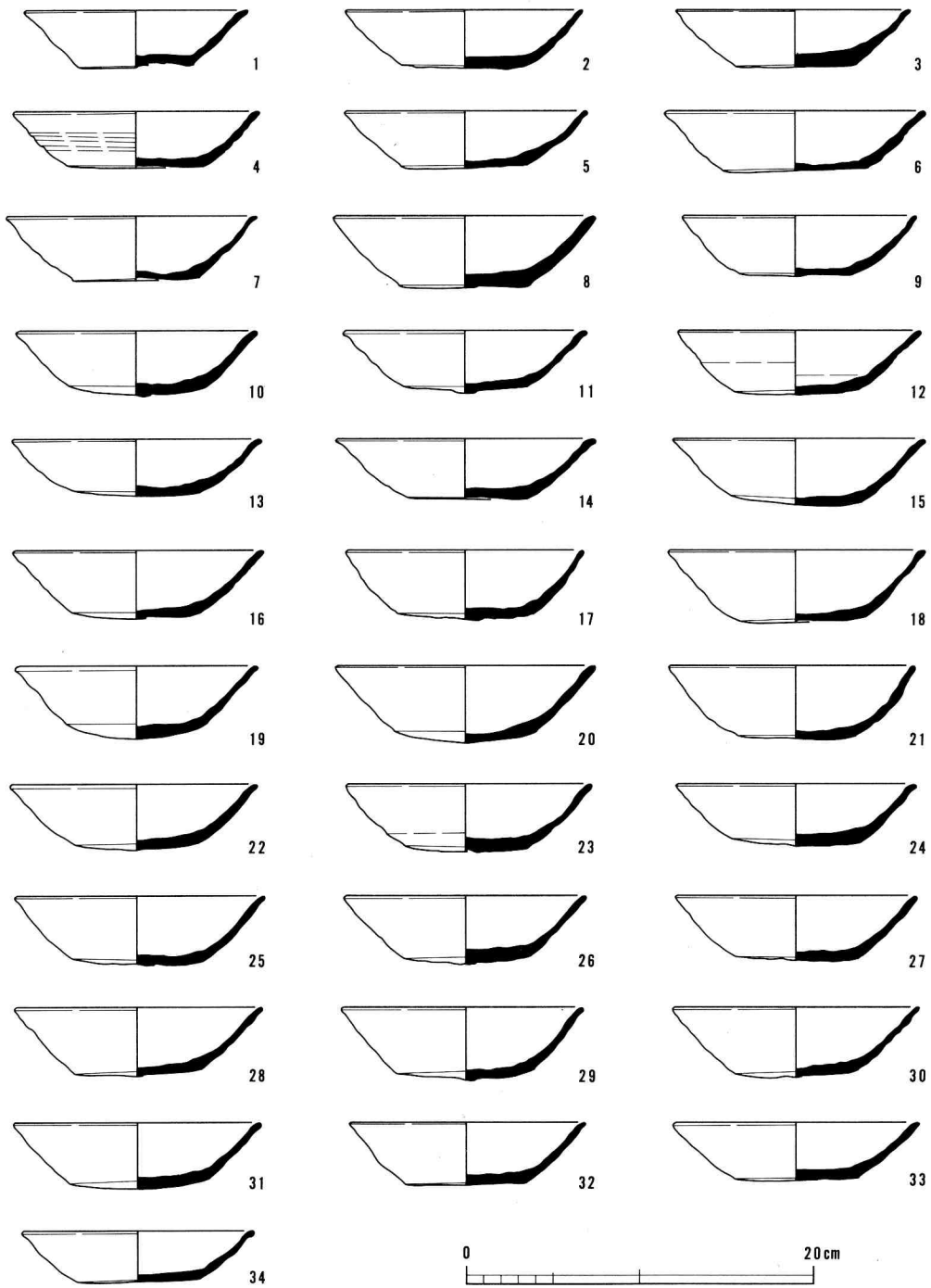


插图221 西谷池2号窠跡 窠体内床面出土須惠器(1)

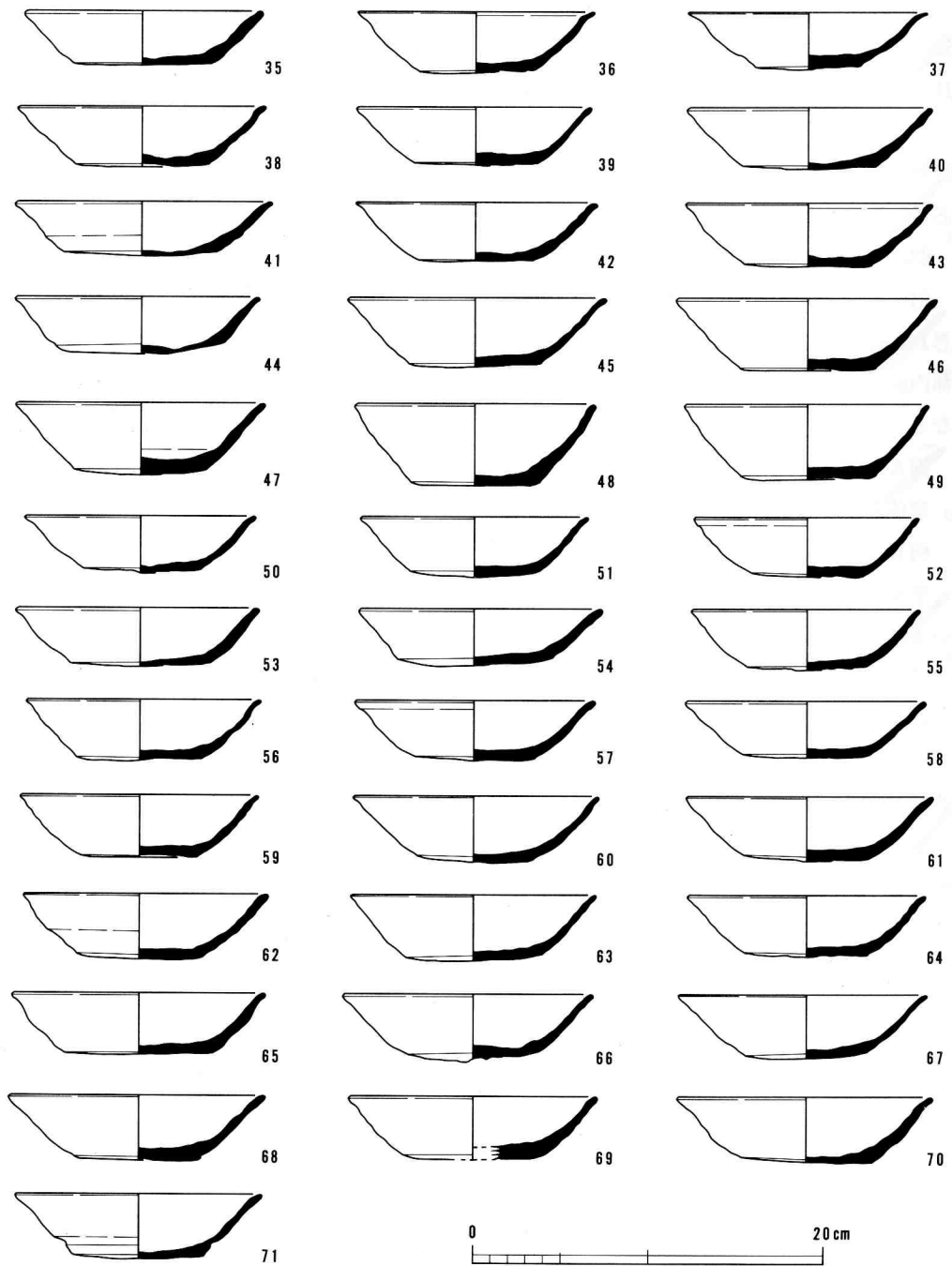


插图222 西谷池2号窯跡 窯体内床面出土須恵器(2)

て完形品でセットである。いずれも底部内面に「一」のヘラ記号が見られる。72は体部中央に強い回転ナデが施されており形状が異なるが、その他の5点は丸みを帯びた底部をしており、良く似た形をしている。調整も同じで、底部外面はヘラ切りナデ調整をしている。

78~82の5点もセットで、全て完形品である。82以外の4点には、底部内面に「一」のヘラ記号が彫られている。底部外面はヘラ切りされており、78~80がナデ調整、81・82が未調整である。82は他の4点と比べると口径がやや小さく、器高が低い。

83は1点のみの出土で、底部内面に「一」のヘラ記号がある。

84~87は重焼きの資料である。84は底部内面一杯にヘラ記号を描いている。文字のようにも思われるが、どのような文字であるかは判読できていない。85と86には「一」のヘラ記号が底部内面に見られる。87にはヘラ記号はない。87のみが他の3点と比べて器高が低く、形態が異なる。

椀A (挿図223 88・89)

窯体内床面からは2点だけの出土である。89は底部内面に「一」のヘラ記号がある。

椀B (挿図223 90~95)

平高台をもつ一群である。西谷池1号窯跡出土の椀Bのように明瞭に身込み部が窪められているタイプは少ない。94・95は内面に重焼きの痕が見られる。また、93~95は底部内面に「一」のヘラ記号がある。92は口径に対して器高が低いタイプである。

耳皿 (挿図224 120・121)

西谷池2号窯で出土した耳皿はこの2点だけで、両者とも完形品である。西谷池1号窯出土の耳皿同様、耳として折り返された口縁の端は、底部の上方に達しているが、120・121は口径に対して底径が大きいので、土器を俯瞰で見るとこれらの耳はほんの少し内側へ押し込まれただけといった感じに造られている。また、底部はヘラ切り未調整である。窯体内では正位置で置かれていた。

#### b) 窯体内埋土出土土器

杯A (挿図223 35~71, 挿図224 96~110)

床面出土土器と同様杯Aの比率は高い。

35~49は底部から口縁部にかけて直線的に開くタイプである。48・49などは口径・底径に比べて器高が高く、2号窯ではあまり出土していない椀に近い容量をもつ資料である。50~110は底部から体部にかけて丸みを帯びたタイプである。床面出土の土器と同様、口縁部が直線的に開いていくものが少なく、体部に丸みがあるタイプの方が多い。

椀A (挿図224 111~113)

3点ともタイプが異なる。111は口縁部が外反しながら上方に延びており、口径に対して器高が低い。112は底部から体部にかけて丸みがあり、底部も平坦でなく厚い。113は体部が直線的